兵庫県文化財調査報告　第122冊

国領遺跡（II）

（川畑・蓮町III地区の調査）

―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告XXI―

1993. 3

兵庫県教育委員会

調査区遠景（南から）

調査区遠景（北から）

例　　言

1．本書は、近畿自動車道舞鶴線（現・敦賀線）建設に伴って、発掘調査を行った兵庫県氷上郡春日町国領字川畑・蓮町に所在する国領遺跡の発掘調査報告書である。

2．国領遺跡発掘調査報告書は、国領川河川改修に伴う国領遺跡発掘調査報告書（兵庫県文化財調査報告書　第93冊）が平成３年に発刊されているため、前回の報告書を国領遺跡（Ⅰ）とし、本報告書を国領遺跡（Ⅱ）とする。

3．発掘調査は日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。

4．標高は、東京湾平均海水面（TP）を基準とした海抜高度で示す。また本書で使用した方位は磁北である。座標北は磁北からＮ７°30′Ｅ（昭和57年現在）である。

5．本書の編集は、吉識雅仁の指導のもとで村上泰樹が担当し、編集に際しては、中筋貴美子の援助を得た。

6．本書の執筆は、第３章第１節・第２節および第６章第１節を吉識が、その他を村上が担当した。また第５章については富山大学理学部地球科学教室　広岡公夫・岡田　宗両氏に御執筆いただいた。

7．自然科学的分析の依頼原稿のうち、広岡公夫・岡田　宗両氏の原稿については、昭和60年に既に原稿を頂いたが、整理作業・報告書作成の遅滞から公表が遅れる結果となった。報告書掲載に際しては、改めて両氏に掲載許可を得て本報告書に掲載した。また、本遺跡出土の金属滓・ガラス小玉の分析を依頼した大澤正己、肥塚隆保の両氏の原稿については、編集上の都合で、各氏の了解を得て一部掲載または割愛させていただいた。各執筆者の方々に深くお詫びするとともに、その責任はすべて編集者が負う。

8．発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々の御指導・協力を得た。（敬称略）
山中一郎（京都大学）、村川行弘（大阪経済法科大学）、山口卓也（関西大学考古学研究室）、青木哲哉（立命館大学地理学研究室）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、安田裕司（当時・氷上郡教育委員会）、芦田岩男（春日町公民館）、宮本長二郎（当時・奈良国立文化財研究所）

9．本書で使用した写真のうち、弥生土器は森　昭氏の撮影によるものである。

目　　次

第1章　調査に至る経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　第3節　遺跡名称の整理 …… 3
　第4節　整理作業の経過 …… 4

第2章　遺跡の環境 …… 5
　第1節　地理的環境 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 9

第3章　川畑地区の調査 …… 15
　第1節　弥生時代の遺構 …… 15
　第2節　弥生時代の遺物 …… 38
　第3節　中世の遺構 …… 64
　第4節　中世の遺物 …… 97

第4章　蓮町Ⅲ地区の調査 …… 127
　第1節　遺　　構 …… 127
　第2節　遺　　物 …… 146

第5章　自然科学的分析 …… 171
　第1節　国領遺跡の考古地磁気学的推定年代 …… 171

第6章　まとめ …… 177
　第1節　弥生時代の遺構と遺物 …… 177
　第2節　中世の川畑地区 …… 181

挿　図　目　次

第 1 図　調査区位置図 …… 2
第 2 図　国領遺跡周辺の地形分類図 …… 6
第 3 図　周辺の微地形等高線図 …… 7
第 4 図　川畑・蓮町Ⅲ地区の層序 …… 8
第 5 図　国領遺跡周辺の遺跡 …… 10
第 6 図　弥生時代遺構配置図 …… 13
第 7 図　竪穴住居 1 …… 16
第 8 図　竪穴住居 2 …… 17
第 9 図　竪穴住居 3 …… 19
第 10図　竪穴住居 3 遺物出土状態 …… 21
第 11図　竪穴住居 4 …… 22
第 12図　竪穴住居 5 …… 24
第 13図　竪穴住居 6 …… 25
第 14図　竪穴住居 7 …… 26
第 15図　竪穴住居 8 …… 27
第 16図　竪穴住居 9 …… 29
第 17図　竪穴住居10 …… 30
第 18図　竪穴住居11 …… 31
第 19図　竪穴住居12・13 …… 32
第 20図　竪穴住居15 …… 33
第 21図　竪穴住居16 …… 36
第 22図　竪穴住居17 …… 37
第 23図　弥生土器分類図 …… 41
第 24図　竪穴住居 1 出土土器 …… 42
第 25図　竪穴住居 2 出土土器(1) …… 43
第 26図　竪穴住居 2 出土土器(2) …… 44
第 27図　竪穴住居 3 出土土器(1) …… 46
第 28図　竪穴住居 3 出土土器(2) …… 47
第 29図　竪穴住居 3 出土土器(3) …… 48
第 30図　竪穴住居 3 出土土器(4) …… 49
第 31図　竪穴住居 4 出土土器 …… 51
第 32図　竪穴住居 7 出土土器(1) …… 52
第 33図　竪穴住居 7 出土土器(2) …… 53
第 34図　竪穴住居 8 出土土器 …… 54
第 35図　竪穴住居 9 出土土器 …… 54
第 36図　竪穴住居10出土土器 …… 55
第 37図　竪穴住居11出土土器 …… 56
第 38図　竪穴住居12出土土器 …… 56
第 39図　竪穴住居13出土土器 …… 57
第 40図　竪穴住居15出土土器 …… 57
第 41図　竪穴住居16出土土器 …… 58
第 42図　金属製品 …… 58
第 43図　石製品 …… 59
第 44図　ガラス製品 …… 61
第 45図　中世遺構配置図 …… 65
第 46図　掘立柱建物 1 …… 67
第 47図　掘立柱建物 4 …… 68
第 48図　掘立柱建物 5 …… 69
第 49図　掘立柱建物 6 …… 70
第 50図　掘立柱建物 7 …… 71
第 51図　掘立柱建物 8 …… 71
第 52図　掘立柱建物 9 …… 72
第 53図　掘立柱建物13 …… 74
第 54図　掘立柱建物14 …… 74
第 55図　掘立柱建物16 …… 75
第 56図　掘立柱建物18 …… 76
第 57図　掘立柱建物19 …… 77
第 58図　掘立柱建物20 …… 78
第 59図　掘立柱建物24 …… 79
第 60図　井戸 1 …… 81
第 61図　溝 1 …… 82
第 62図　溝 2 …… 83
第 63図　土壙 1・2 …… 84
第 64図　土壙 3・4 …… 86
第 65図　土壙 5 …… 87

第 66図　土壙６・７ …… 88
第 67図　土　壙　8 …… 89
第 68図　土　壙　9 …… 90
第 69図　土　壙　10 …… 91
第 70図　土壙11～14 …… 92
第 71図　土壙15・16 …… 93
第 72図　土壙17・18 …… 94
第 73図　土壙19・20 …… 95
第 74図　土　壙　21 …… 95
第 75図　土壙22・23 …… 95
第 76図　土　壙　24 …… 96
第 77図　掘立柱建物出土土器(1) …… 100
第 78図　掘立柱建物出土土器(2) …… 101
第 79図　掘立柱建物出土土器(3) …… 102
第 80図　掘立柱建物出土土器(4) …… 103
第 81図　掘立柱建物出土土器(5) …… 104
第 82図　掘立柱建物出土土器(6) …… 105
第 83図　井戸１出土土器(1) …… 110
第 84図　井戸１出土土器(2) …… 111
第 85図　溝・土壙出土土器 …… 112
第 86図　土壙出土土器(1) …… 113
第 87図　土壙出土土器(2) …… 114
第 88図　その他の柱穴出土土器 …… 115
第 89図　包含層出土土器 …… 116
第 90図　井　戸　材 …… 117
第 91図　井戸・その他出土木製品 …… 118
第 92図　金属製品(1) …… 120
第 93図　金属製品(2) …… 121
第 94図　石 製 品(1) …… 123
第 95図　石 製 品(2) …… 124
第 96図　石 製 品(3) …… 124
第 97図　蓮町Ⅲ地区遺構配置図 …… 125
第 98図　土壙１・２ …… 128
第 99図　土　壙　3 …… 129
第100図　土　壙　4 …… 130
第101図　埋桶１～６ …… 131
第102図　埋桶７・８ …… 132
第103図　埋桶９～11 …… 133
第104図　埋桶12～14 …… 134
第105図　埋桶15・16 …… 135
第106図　井戸１・２ …… 139
第107図　池 …… 140
第108図　炉　　1 …… 141
第109図　炉　　2 …… 142
第100図　土　壙　5 …… 143
第111図　土壙６～９ …… 144
第112図　土　壙　10 …… 144
第113図　土　壙　11 …… 145
第114図　土　壙　12 …… 145
第115図　埋　　甕 …… 145
第116図　土　壙　13 …… 146
第117図　中世遺構出土の土器 …… 147
第118図　近世Ⅰ期遺構出土土器(1) …… 150
第119図　近世Ⅰ期遺構出土土器(2) …… 151
第120図　近世Ⅰ期遺構出土土器(3) …… 152
第121図　近世Ⅰ期遺構出土土器(4) …… 153
第122図　近世Ⅱ期遺構出土土器(1) …… 156
第123図　近世Ⅱ期遺構出土土器(2) …… 157
第124図　近世Ⅱ期遺構出土土器(3) …… 158
第125図　近世Ⅱ期遺構
その他出土土器 …… 159
第126図　金 属 製 品 …… 162
第127図　銅　　銭 …… 163
第128図　石 製 品(1) …… 164
第129図　石 製 品(2) …… 165
第130図　石 製 品(3) …… 166
第131図　木 製 品(1) …… 167
第132図　木 製 品(2) …… 167
第133図　木 製 品(3) …… 168
第134図　木 製 品(4) …… 169
第135図　炉１試料採集位置 …… 172
第136図　蓮町Ⅲ地区炉１の磁化方向 … 173

第137図　畑覆土の磁化方向 …… 173
第138図　畑面の磁化方向 …… 173
第139図　地磁気永年変化曲線 …… 176
第140図　弥生時代遺構変遷図 …… 179
第141図　弥生土器変遷図 …… 180
第142図　川畑地区中世遺構変遷図案 … 185

表　目　次

表１．国領遺跡出土のカリガラス分析データー一覧 … 60
表２．ガラス小玉径厚分布 …… 62
表３．ガラス小玉重量グラフ …… 62
表４．ガラス小玉計測表 …… 63
表５．土師器皿分類表 …… 98
表６．瓦器分類表 …… 107
表７．須恵器椀分類表 …… 108
表８．蓮町Ⅲ地区炉１の磁化測定結果 175
表９．畑覆土の磁化測定結果 …… 175
表10．畑面の磁化測定結果 …… 175
表11．国領遺跡の考古地磁気測定結果 175
表12．中世土器組成表 …… 181
表13．掘立柱建物群の棟軸方位と規模・構造 …… 183
表14．掘立柱建物床面積一覧 …… 184

図　版　目　次

巻首図版
図版１　川畑地区遺構
　１）調査区中央部遺構検出状況
　２）調査区南部遺構検出状況
図版２　川畑地区遺構
　１）調査区北部遺構検出状況
　２）Ｍ－２～15区トレンチ遺構検出状況
図版３　川畑地区遺構
　１）竪穴住居１　東半
　２）竪穴住居１　西半
図版４　川畑地区遺構
　１）竪穴住居２
　２）ガラス小玉出土状況
　３）土器出土状況
図版５　川畑地区遺構
　１）竪穴住居３
　２）竪穴住居３土器出土状況
図版６　川畑地区遺構
　１）中央土壙
　２）第１土器群出土状況
　３）第２土器群出土状況
　４）第３土器群出土状況
　５）竪穴住居４
図版７　川畑地区遺構
　１）竪穴住居４炭化材検出状況
　２）中央土壙
　３）土壙検出状況
　４）土器出土状況
　５）柱穴内土器出土状況
図版８　川畑地区遺構
　１）竪穴住居５
　２）竪穴住居６
図版９　川畑地区遺構
　１）竪穴住居７
　２～５）土器出土状況
図版10　川畑地区遺構

1）竪穴住居８
2）竪穴住居９
図版11　川畑地区遺構
1）竪穴住居８中央土壙
2）竪穴住居９中央土壙
3・4）竪穴住居９土器出土状況
5）竪穴住居10
図版12　川畑地区遺構
1）竪穴住居10中央土壙
2）竪穴住居11土器出土状況
3・4）竪穴住居11土器出土状況
5）竪穴住居11
図版13　川畑地区遺構
1）竪穴住居12・13
2）中央土壙
3）土器出土状況
4）竪穴住居12土器出土状況
5）竪穴住居13土器出土状況
図版14　川畑地区遺構
1）竪穴住居１５
2）竪穴住居16
図版15　川畑地区遺構
1）竪穴住居15中央土壙
2）竪穴住居16中央土壙
3）竪穴住居16柱穴内土器出土状況
4）竪穴住居17土器出土状況
5）竪穴住居17
図版16　川畑地区遺構
1）掘立柱建物１～11
図版17　川畑地区遺構
1）建物１
2）建物２～４・６
3）建物５・６
4）建物７～９
5）建物７：Ｐ34，建物８：Ｐ14
6）建物９：Ｐ24
7）建物12
8）建物13～15
図版18　川畑地区遺構
1）掘立柱建物18～22・24・25
図版19　川畑地区遺構
1）建物13：Ｐ７
2）建物15：Ｐ４
3）建物17：Ｐ４
4）建物20～22
5）建物18～22
6）建物18：Ｐ18
7）建物18：Ｐ17
8）建物18：Ｐ34
図版20　川畑地区遺構
1）建物18：Ｐ37
2）建物19：Ｐ５
3）建物24～26
4）建物24
5）建物24：Ｐ７
6）建物25
7）建物25：Ｐ９
8）その他柱穴Ｐ920
図版21　川畑地区遺構
1～7）その他の柱穴土器出土状況
図版22　川畑地区遺構
1）井戸１
2）井戸枠
3）井戸枠西面縦板
4）井戸枠北東隅組み合わせ状況
5）井戸枠南西隅組み合わせ状況
図版23　川畑地区遺構
1）溝１
2）Ｅ－Ｅ'土層断面
3）Ｄ－Ｄ'土層断面
4）土壙１
5）土器出土状況
6）棺底土器出土状況
図版24　川畑地区遺構
1）土壙２
2）土壙３
図版25　川畑地区遺構
1）土壙４
2）土壙５
3）土壙６
4）土壙７
図版26　川畑地区遺構
1）土壙８
2）土壙９
3）土壙10
4）土器・小刀出土状況

5）土器・小刀出土状況
図版27　川畑地区遺構
1）土壙15　5）土壙24土器出土状況
2）土壙16　6）土器出土状況
3）土壙19　7）調査後
4）土壙23　8）黒色土器出土状況
図版28　川畑地区遺物(弥生土器)
図版29　川畑地区遺物(弥生土器)
図版30　川畑地区遺物(弥生土器)
図版31　川畑地区遺物(弥生土器)
図版32　川畑地区遺物(弥生土器)
図版33　川畑地区遺物(弥生土器)
図版34　川畑地区遺物(弥生土器)
図版35　川畑地区遺物(弥生土器)
図版36　川畑地区遺物(中世土器)
図版37　川畑地区遺物(中世土器)
図版38　川畑地区遺物(中世土器)
図版39　川畑地区遺物(中世土器)
図版40　川畑地区遺物(中世土器)
図版41　川畑地区遺物(中世土器)
図版42　川畑地区遺物(中世・近世土器)
図版43　川畑地区遺物(木製品・金属器)
図版44　川畑地区遺物(金属器)
図版45　川畑地区遺物(ガラス小玉・石製品)
図版46　蓮町Ⅲ地区遺構
1）調査区西半部全景
2）調査区東半部全景
図版47　蓮町Ⅲ地区遺構
1）土壙1　3）土壙3
2）土壙2
図版48　蓮町Ⅲ地区遺構
1）掘立柱建物2
2）掘立柱建物3
3）掘立柱建物5・6，柵2
4）井戸1
5）井戸1断面
図版49　蓮町Ⅲ地区遺構
1）埋桶8・9
2）埋桶11
3）埋桶10断割り断面
4）埋桶15断割り断面
図版50　蓮町Ⅲ地区遺構
1）炉2
2）炉2焚口
3）畝状遺構
図版51　蓮町Ⅲ地区遺構
1）井戸2
2）井戸2石積み状況
3）池
4）土壙5
5）土壙10・11
図版52　蓮町Ⅲ地区遺構(中世・近世Ⅰ期)
図版53　蓮町Ⅲ地区遺構(近世Ⅰ期)
図版54　蓮町Ⅲ地区遺構(近世Ⅰ・Ⅱ期)
図版55　蓮町Ⅲ地区遺構(近世Ⅱ期)
図版56　蓮町Ⅲ地区遺構(木製品)
図版57　蓮町Ⅲ地区遺構(木製品・金属器)
図版58　蓮町Ⅲ地区遺構(金属器・石製品)

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

国領遺跡は、兵庫県氷上郡春日町国領に所在し、国領集落の西・南側に位置する。国領集落の西側は多紀郡西紀町と境界を接する標高500ｍを越える譲葉山等の山が連なり、これらの山系から流出した土砂の堆積によって形成された扇状地上に遺跡は立地する。遺跡の北側には由良川の支流である竹田川が流れ、一段ないしは複数の段丘面を形成している。

国領遺跡は、昭和53年度に近畿自動車道舞鶴線建設工事に先立ち、兵庫県教育委員会が実施した分布調査によって発見され、国領散布地として周知された。この分布調査の結果、近畿自動車道舞鶴線路線予定地のうち、南側が国領川東側山裾部から、北側は国領集落までの約1.3㎞の区間に、弥生土器および中世土器の分布が確認された。

近畿自動車道舞鶴線建設計画が具体化した昭和58年度には、分布調査の成果をもとに国領散布地内の確認調査を実施した。

確認調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課　加古千恵子・平田博幸の両名が担当となり、昭和59年３月に実施された。

調査にあたり、遺物の散布が確認された1.3㎞の路線予定地内に２×２ｍ規模の坪を74箇所設定し、必要に応じて拡張する方法をとった。

確認調査の結果、国領川と路線予定地が交差する地点では、焼壁片を含む集石土坑が確認された。また、国領集落の南側では中世の柱穴・溝が確認された。

全面調査の便宜上、国領川と路線予定地が交差する地点を国領遺跡Ａ地区、国領集落の南側をＢ・Ｃ地区と命名し、今後の調査においてはこの名称をもちいることになった。

この確認調査の結果をもとに、国領遺跡の取扱いについて日本道路公団と協議した結果、昭和59・60年度の２箇年にわたって国領遺跡の全面調査を実施することなった。

第２節　調査の経過

１．昭和59年度の調査

本年の調査区はＡ地区北側（1,983㎡）、Ｂ・Ｃ地区はカルバートボックス建設予定地部分(723㎡)、および排水路建設予定地部分（184㎡）といった構造物建設地を中心に設定した。

調査は社会教育・文化財課・輔老拓治・村上泰樹両名が担当し、昭和59年６月18日から同年

第１図　調査区位置図

11月７日にかけてＡ地区北側・カルバートボックス建設予定地部分・排水路建設予定地部分の順で実施した。

調査の結果、Ａ地区北側では中世の掘建柱建物および木棺墓、近世の冶金工房跡と推定される遺構群および墓と推定される埋桶群が確認された。近世の冶金工房跡と推定される遺構群のうち、炉床部分について、広岡公夫氏（富山大学教授）に依頼し考古地磁気法による年代測定を実施した。

Ｂ・Ｃ地区では、中世の掘建柱建物群と新たに弥生時代後期の竪穴住居址が確認され、当地区が弥生時代と中世の複合遺跡であることが判明した。

２．昭和60年度の調査

本年度は社会教育・文化財課　吉識雅仁・村上泰樹の両名が調査を担当し、発掘作業は、株式会社　新井組が担当した。

本年度はＡ地区南側（1,470㎡）およびＢ地区（2,380㎡）、Ｃ地区（4,159㎡）の調査を実施した。調査はＡ地区から始め、Ｂ地区Ｃ地区と進めたが、Ｂ・Ｃ地区については遺跡の範囲に不明瞭な点があるため、まずトレンチによる調査を実施した。調査の結果、当初予想されていた範囲よりもさらに東・北に遺跡が広がることが判明した。しかしすでに道路建設工事が施工されており、調査区を拡張することは難しく、調査範囲については当初の予定通りとした。

調査は５月17日にＢ地区のトレンチ調査から開始し、５月22日にＡ地区に移り６月７日に終了、Ｂ地区は６月３日から７月31日、Ｃ地区は７月29日から９月30日で終了した。

なお、Ｃ地区については道路建設工事の都合上、西半と東半に分けて実施した。Ｂ・Ｃ地区についてはヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

以上２箇年にわたる調査の結果、Ａ地区では平安時代後期から鎌倉時代初頭の掘建柱建物・木棺墓、近世の埋桶群、炉・井戸・集石土坑・掘建柱建物・溝等で構成される治金工房跡が確認された。またＢ・Ｃ地区では弥生時代後期の竪穴住居跡17棟、平安時代後期から鎌倉時代の掘建柱建物跡26棟・木棺墓・土壙墓・土坑・井戸・溝を確認した。

第３節　遺跡名称の整理

国領遺跡発掘調査で便宜上使用したＡ・Ｂ・Ｃ地区の名称は、すでに「兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和59・60年度」で用いたが、今回の報告書作成にあたって次のように変更する。Ａ地区は位置的には、すでに刊行している「国領遺跡発掘調査報告書」蓮町Ⅰ地区と蓮町Ⅱ地区の中間に位置し、小字名も同じ蓮町であることから、国領遺跡蓮町Ⅲ地区と名称を改める。またＢ・Ｃ地区の名称は本来同一の遺跡でありながら、調査上の工程から便宜的に呼称したもので

あるため、A地区と同様小字名をとり、国領遺跡川畑地区と改める。以下、本書ではこれら名称を使用する。

第4節　整理作業の経過

国領遺跡から出土した遺物は、コンテナに換算して100箱出土した。この遺物の整理は、昭和60年から平成4年度にかけて実施した。途中昭和62年度から平成2年度は一時中断したが、平成3年より再び整理を開始した。

昭和60年度は、発掘調査作業と並行して現場事務所において水洗・ネーミング作業を実施した。続く昭和61年度は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、遺物の接合・復元作業、実測・拓本作業、出土遺物の写真撮影を実施した。しかし諸般の事情で、一時整理作業を中断することになった。その後、平成3年度より整理作業を開始した。平成3年度はトレース作業を実施した。この作業と並行して、出土した金属器（加古千恵子担当）・木製品（別府洋二担当）の保存処理を実施した。また分析鑑定では、遺跡より出土した金属滓の分析鑑定を大澤正己氏（新日本製鉄）、ガラス小玉の分析を肥塚隆保氏にお願いした。

平成4年度はレイアウト作業を経て、報告書を作成・発刊した。

以上の作業工程には、主に下記方々の協力を得た。

関根育代・中筋貴美子・長浜幸子・前田陽子・宮田麻子・吉井京子・吉田由起子・吉本佳恵
片岡喜久子・石田裕子

第２章　遺跡の環境

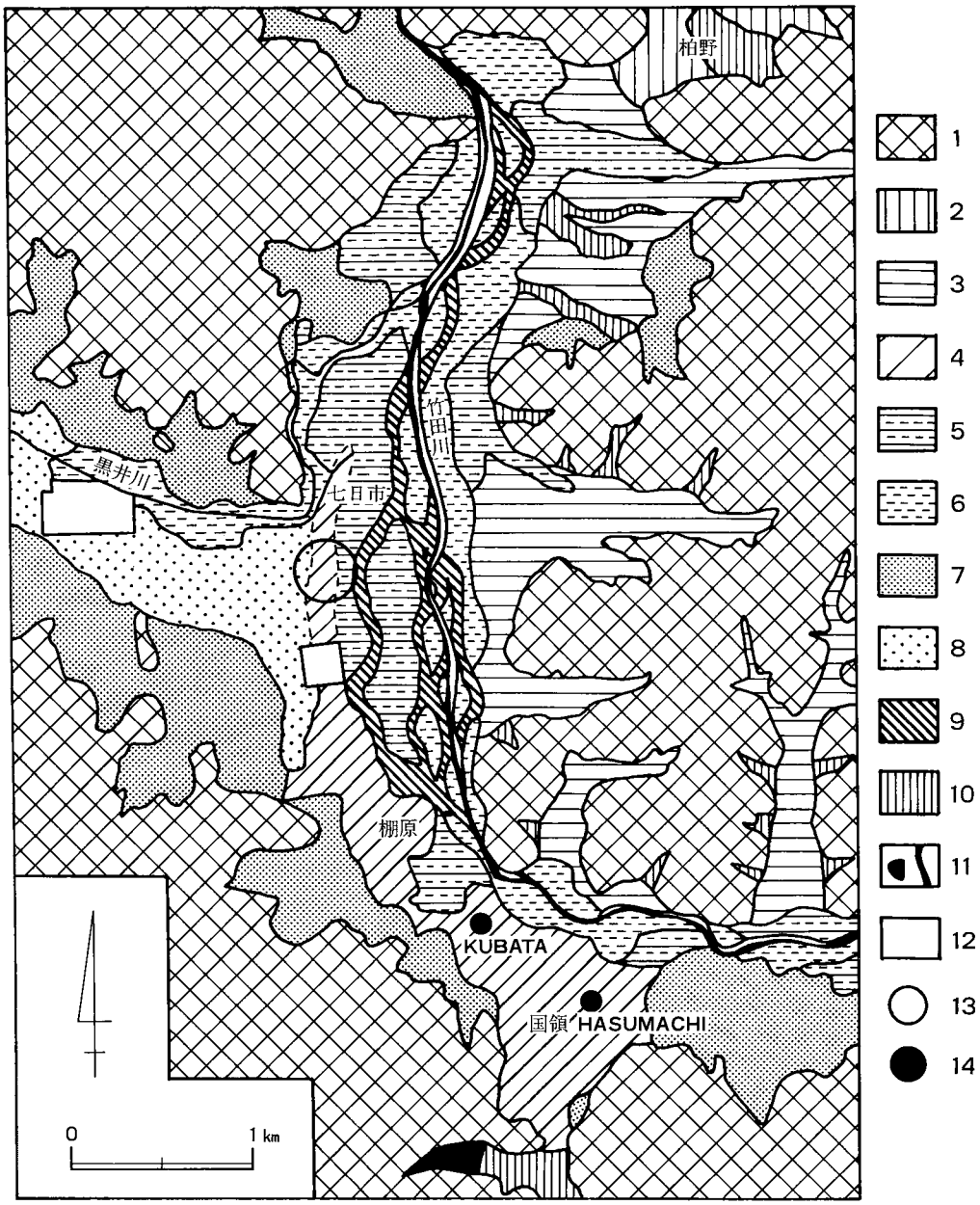
第１節　地理的環境

国領遺跡は、兵庫県氷上郡春日町国領に所在する。地形的には、日本海に注ぐ由良川の支流である竹田川の上流域の左岸に位置する。竹田川上流域は、周囲を標高500ｍ前後の山地が迫り、幅500ｍから800ｍ前後の狭小な谷中が形成されている。この谷中には、青木氏の地形分類によると５面の段丘（上位の段丘から段丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴと呼称）と現氾濫原、崖錐・土石流扇状地が認められる。国領遺跡は、この地形分類に従えば、下位段丘である段丘Ⅳ上に立地する。この段丘の分布は、遺跡のある国領地区から棚原地区を経て、旧石器・弥生・奈良～平安時代の複合遺跡である七日市遺跡まで達し、七日市遺跡の北側で段丘面下に埋没する。したがって、この七日市遺跡と国領遺跡は同一地形面上に立地することになる。国領遺跡の南側には標高620ｍの黒頭峰、標高541ｍの譲葉山等の山地がそびえ、この両峰の間には、竹田川の支流である一級河川国領川が流れる。この国領川を中心として、標高120ｍ付近から90ｍ付近にかけて広範囲に段丘が形成されている。国領遺跡は川畑地区と蓮町Ⅲ地区の２箇所を調査しており、国領地区は段丘Ⅳの北辺部分、すなわち源氾濫原との境界付近に立地している。また蓮町Ⅲ地区はこの段丘面の中央部に立地している。

１．国領遺跡周辺の微地形

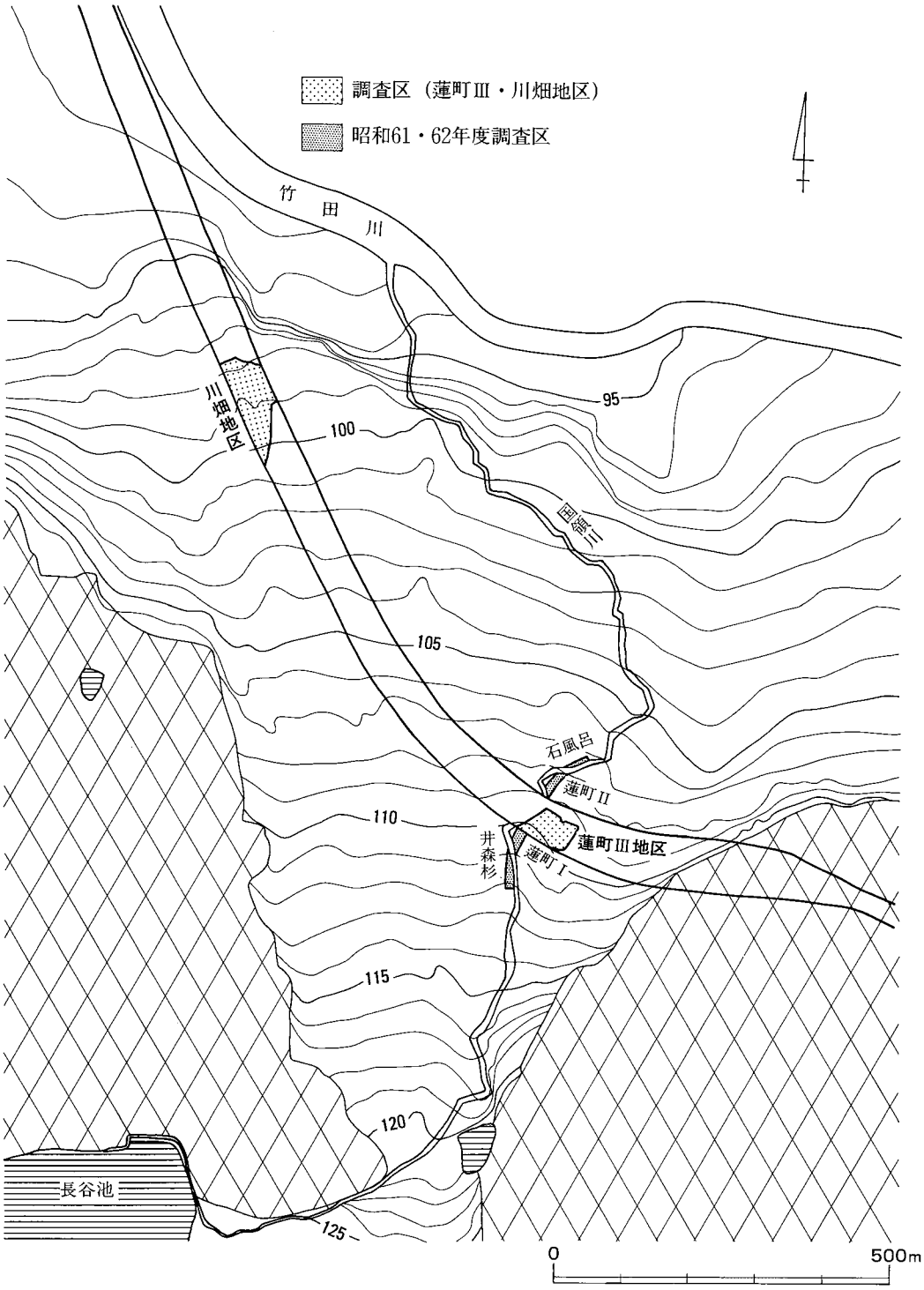
国領遺跡周辺の地形は微視的にみると、国領温泉のある標高120ｍ付近を頂部とした扇状地上に立地する。この扇状地は南から北へ向かって延び、北端は竹田川の浸食によって標高95ｍ付近で約４ｍの段差で段丘崖が形成されている。扇状地のほぼ中央には、天井川である国領川が北流し、竹田川と合流する。扇状地上には国領川沿いに発達した微高地と扇状地の北西端に発達した微高地が識別できる。国領川沿いには標高117ｍから107ｍ付近にかけて南北方向に延びる微高地が形成されている。これまでの調査で縄文時代草創期の石器工房址（井森杉地区）、中世の屋敷地（石風呂、蓮町Ⅰ・Ⅱ、井森杉地区）の遺構が発見されており、比較的安定した地形と理解できる。今回実施した蓮町Ⅲ地区は、この微高地上に立地し、新たに近世の遺構が発見された。

扇状地北西端には標高102ｍ付近から93ｍ付近にかけて大規模な微高地が発達している。川畑地区はこの微高地上に立地している。川畑地区からは弥生時代後期の集落跡、中世の屋敷群が発見された。調査の結果、これらの遺構群は北・東・西方向に延びることが明らかになった。微地形復元等高線図（第３図）をみると川畑地区の北・東・西側にはそれぞれ微高地が延びて



1．山地　2．段丘Ⅰ　3．段丘Ⅱ　4．段丘Ⅳ（境界線が破線の部分は埋没している）
5．段丘Ⅴ　6．現氾濫原　7．崖錐・土石流扇状地　8．扇状地
9．旧河道　10．開析谷　11．溜池・河川　12．人工改変地
13．七日市遺跡　14．国領遺跡

第2図　国領遺跡周辺の地形分類図（青木哲哉氏作成）



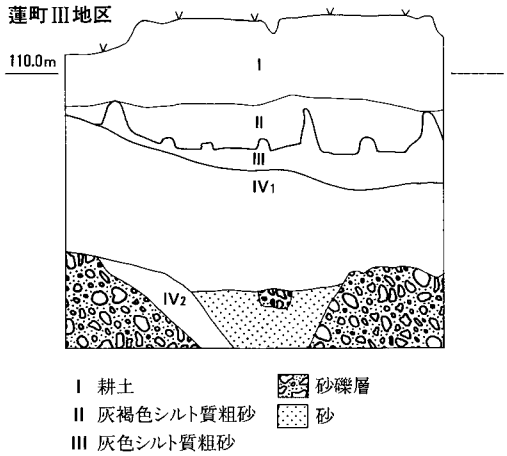
第３図　周辺の微地形等高線図

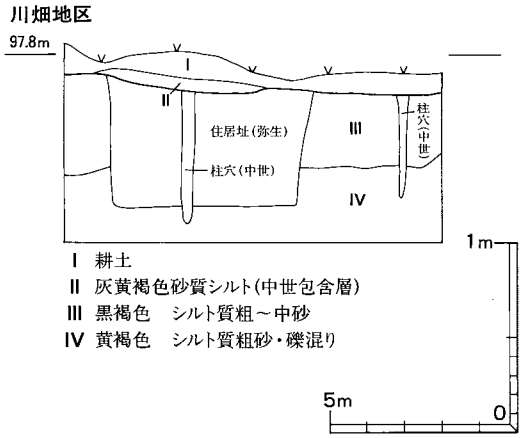
いることが判る。微高地の西端・東端はそれぞれ微凹地が南北方向にあり、北端は標高95m付近で旧竹田川の下位段丘によって、それぞれ地形的に限られている。周辺の発掘調査がなされていない現段階では、予測の域をでないが、川畑地区の遺構群の広がりは微高地全域に及ぶ可能性がある。

2．層　　序

川畑地区は、基本的にはⅠからⅣ層の堆積状況を呈する。中世・弥生時代の遺構は、調査区の中央部付近では、Ⅲ層上面より掘り込まれている。しかし高位の20ライン付近より南側には、ⅡおよびⅢ層の堆積はなく、Ⅳ層上面で両時代の遺構を確認している。

蓮町Ⅲ地区の土層堆積は、基本的には、Ⅰ～Ⅳ層の堆積状況を示す。調査区の南西側ではⅢ層上面で畝状遺構等の近世の遺構を、Ⅳ層上面で中世の遺構をそれぞれ確認した。しかし調査区の北東側は、後世の水田化により地形が改変され、ⅡおよびⅢ層の堆積はなく、Ⅰ層を除去した段階、$Ⅳ_1$層上面で、近世および中世の遺構を確認した。Ⅳ層より下には60～80cmの厚さで砂質シルトが堆積し、さらに下層には砂礫層が厚く堆積している。蓮町Ⅲ地区の北側に隣接する蓮町Ⅱ地区・石風呂地区の調査では、Ⅳ層の上に黒褐色シルトが堆積し、この面より中世の遺構が掘り込まれている。しかしこれらの地区の上位にあたる蓮町Ⅲ地区には、この堆積層は確認できなかった。





第４図　川畑・蓮町Ⅲ地区の層序

参考文献

青木哲哉　「地形の分布と遺跡の立地」『七日市遺跡（Ⅰ）―第１分冊―』　兵庫県教育委員会　1990

村上泰樹・久保弘幸・三原慎吾　『国領遺跡発掘調査報告書』　兵庫県教育委員会　1990

第２節　歴史的環境

国領遺跡の所在する春日町周辺の歴史的環境はすでに発刊されている『松ノ本古墳群』・『山垣遺跡』・『七日市遺跡（Ⅰ）』・『国領遺跡発掘調査報告書』の各発掘調査報告書に詳細に述べられている。ここでは、国領遺跡の時期、すなわち弥生時代と平安時代後期から鎌倉時代に説明の主眼をおき、その概要を述べる。

１．弥生時代

春日町内の弥生時代の遺跡は、銅鐸が発見された野々間遺跡をはじめ弥生時代前期から古墳時代前期の七日市遺跡が現在のところ知られている。また七日市遺跡の南辺と考えられている野村遺跡からは、銅剣形石剣が出土している。これら以外に、七日市遺跡の北側にある多田集落でも、弥生土器が採集されている。

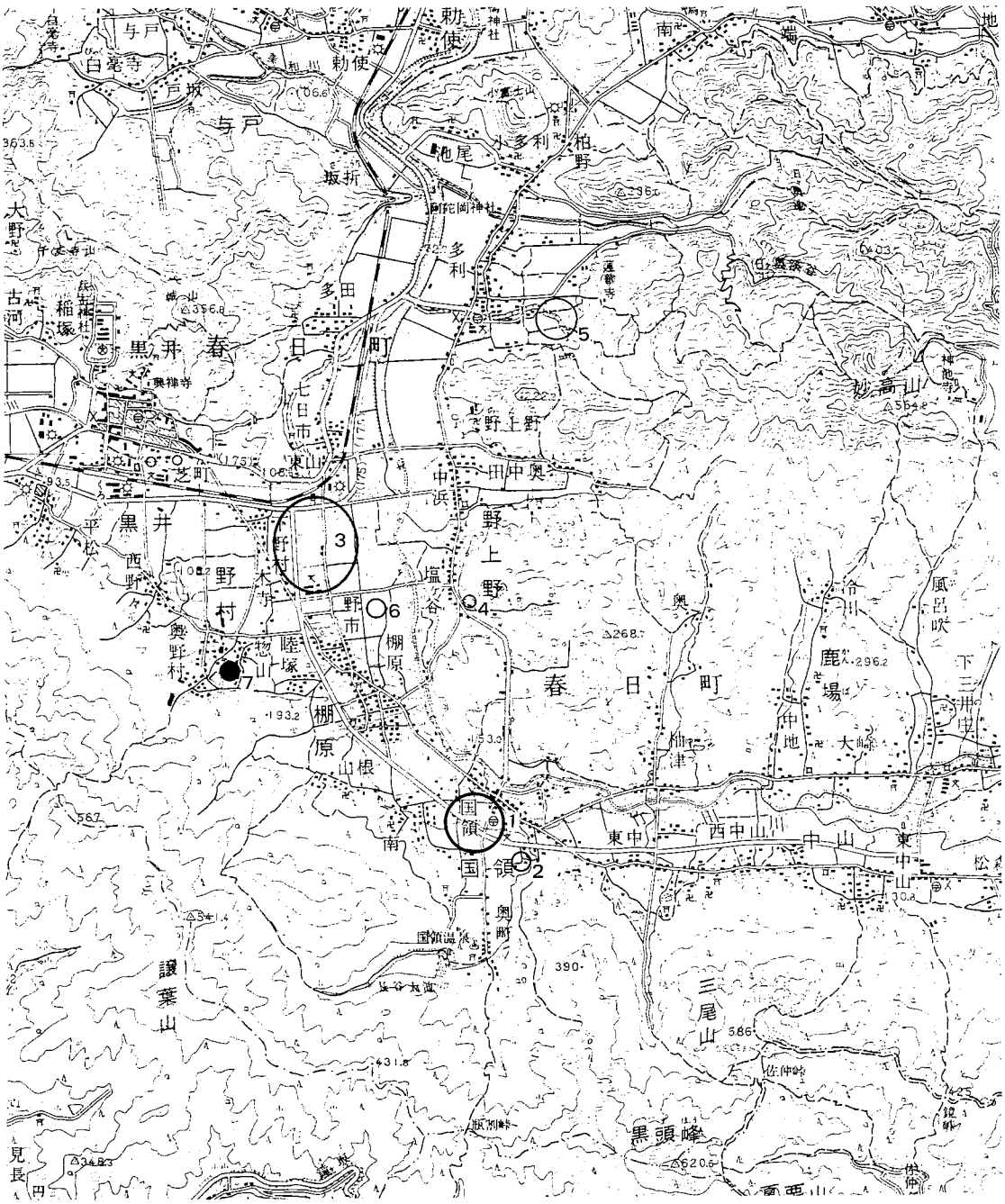
野々間遺跡からは銅鐸が２口出土している。ひとつは外縁付鈕紐２式４区袈裟襷文銅鐸、もうひとつは扁平付鈕式４区袈裟襷文銅鐸でいずれも小型の銅鐸である。

七日市遺跡は前記したように弥生時代前期から古墳時代前期にかけて存続した集落である。七日市遺跡は、大別してⅠ～Ⅱ期（弥生前期～中期初頭）、Ⅲ～Ⅳ期（中期中葉～末葉）、Ⅴ期（後期）、Ⅵ～Ⅶ期（古墳時代初頭～前期）の４期の時間幅で遺構の変遷が認められると想定されている。国領遺跡の弥生時代の遺構は、七日市遺跡のⅤ期に相当する。このⅤ期の特徴として、隅丸方形の住居址が主流を占め、木棺墓を中心とした墓と居住域が複合する点が指摘されている。国領遺跡では、隅丸方形住居址と円形住居址が混在するが、調査した範囲では、方形住居址が主流をなす点は明らかではない。また木棺墓と住居址が複合している状態は確認されていない。この現象を各々の遺跡の特徴とみるかは、今後の検討課題の一つである。

２．平安時代から鎌倉時代

丹波国は古代より天皇の即位にともなって行われる大嘗祭の儀礼に際し、新穀を捧げる悠紀（ゆき）ないしは主基（すき）国にたびたび指定され天皇家と密接な繋がりがあったと言われている。平安時代後期になると、主基として丹波国氷上郡の名が見られるようになる。12世紀代の文献では、康治元年（1142）・久寿二年（1155）・平治元年（1159）・治承四年（1181）・寿永元年（1182）に主基丹波国氷上郡の名が頻繁に見られ、大嘗祭の儀礼に使われる新穀を収穫する主基田を氷上郡が担当したことが知れる。

寛仁元年（1017）には山城・丹後・丹波・但馬・摂津をはじめ伊勢・近江・越前の国々に蝗害が発生し、なかでも丹波国の被害は甚大であったことが『小右記』に記されている。翌年には丹波国国守藤原頼任の非法を訴え氷上郡百姓が愁訴しており、治安三年には丹波国の凶党が



1．国領遺跡・川畑地区　2．国領遺跡・蓮町Ⅲ地区　3．七日市遺跡　4．野々間遺跡
5．多利遺跡群　6．山垣遺跡　7．春日神社

第５図　国領遺跡周辺の遺跡

丹波国守藤原資業の邸宅を襲撃する事件がおこっている。丹波国は国守の収奪が激しく、郡司郷司級の土豪百姓と対立し、国内の世情は芳しくなかったようである。

平安時代の春日町は、『角川日本地名辞典』によれば丹波国氷上郡十七郷のひとつである春日部（かすかべ）郷の郷域にあたり、その範囲は現在の市島町南部にまで及んでいたと言われている。郷の総社は、野村に所在する春日神社とされている。一般的に春日神社は、奈良県春日大社を根本社とする神社で、その成立は藤原氏と深く係わっている。根本社である春日大社は、藤原氏の氏神社として成立しているため、全国にある春日神社の創建は、国司として全国に来任した藤原氏の子孫が奉斎するばあいが多く、これ以外では藤原氏の氏寺である興福寺の寺領に祀られたと伝える春日神社もある。

考古資料としては、春日町棚原に所在する山垣遺跡より出土した木簡・墨書土器と同町棚原・七日市・野村に所在する七日市遺跡出土の墨書土器に「春部」の地名を見ることができる。少なくとも奈良時代には「春部」が当地の呼名であったことが知れる。

鎌倉時代以降は春日部郷は春日部荘に吸収され、その荘域は細見末雄氏の研究によると、大路（和田貝・野瀬・広瀬）・松森・中山・棚原・長谷（国領・奥・西町）・野村・大多利・多田・黒井の９ケ村を想定されている。これは現在の船城地区を除く春日町のほぼ全域に該当する。また領主は、上記した春日神社が、平安・鎌倉時代には総社であることから、藤原氏または興福寺と推定されている。しかし『角川日本地名辞典』によると新日吉社領の荘役に春日部荘の名があり（「葉黄記」宝治元年５月９日条）、春日部荘は新日吉社（いまひえのやしろ）領となっている。新日吉社は、後白河上皇によって永暦元年（1160）に比叡山王より日吉七社の神々を勧進して創立されている。後白河上皇は譲位後、御所法住寺殿を造営し、御所の守護神として新日吉社を創立している。上記の「葉黄記」宝治元年（1247）５月９日条によると春日部荘は、御所法住寺殿の修理・舗設を荘役として新日吉社より割当られている。

この後、春日部荘の名は文献には現れず、降って南北朝期には續群書類従百三十六巻　建武二年(1335)赤松系譜に「因関東竹下合戦忠節、丹波國春日部庄、播磨國伊川庄以下二十箇所拝領、行年十九歳而逝去、法名栖雲寺殿世貞」、建武３年（1336）９月12日　足利尊氏御教書に「赤松雅楽助貞範申丹波国春日部庄地頭職事、荻野一族□令違背度々下知…」等の文献に春日部庄の名がでてくる。これらの文献から、春日部庄は赤松貞範の所領となっていることがわかる。しかし、南北朝期以後は、春日部庄の支配地区のうち中山村が綾部市の安国寺領、多利村が京都宝鏡寺領、黒井村が相国寺勝定院領にそれぞれ分割され、その支配地が狭められていく。

以上が国領遺跡が所在する春日部庄の概要である。春日部庄について、とくに平安時代（春日部郷）の記録が欠落し、春日部庄の荘域および領主については推測の域をでていない。

次に春日部庄荘域内の遺跡を概観する。春日部庄北部に位置する多利集落には、多利遺跡群・多利・前田遺跡がある。とくに多利・前田遺跡からは大型の掘立柱建物址と多彩な副装品をも

つ土壙墓が発見されている。これら建物址群は３期に分かれ、おおよそ12世紀中葉から13世紀前半にかけて建物址が存続していたと想定されている。これらの建物址群は、13世紀第２四半期に屋敷墓を築いた後、消失してしまう現象が指摘されている。調査者はこの屋敷墓の被葬者と建物の廃棄の現象を、「非常に政治的な立場にある人物（地頭など）であり、この遺跡の次の主が「地頭」の職務を保持することができなかったためその政治性を失い、建物群を維持できなくなった…」と推定されている。また橘田正徳氏は、建物址群の主を郷規模の在地領主・在村地主（Ｃ型建物群）に比定している。

春日部庄南部に位置する国領集落には、国領遺跡井森杉地区・蓮町Ⅰ地区がある。この国領遺跡は、今回報告する蓮町Ⅲ地区の西側に隣接し、同一の遺跡である。井森杉地区からは、多利・前田遺跡と時期的に併存する建物址群が確認されている。建物址群は６棟確認され、12世紀前半から13世紀前葉にかけて、１棟ないしは２棟の単位で建て替えられている。建物址は一端途切れ、14世紀後半から15世紀にかけて再び建物群が建てられている。井森杉地区で確認された建物群は、多利・前田遺跡のそれよりも規模が小さく、建物址を比較したばあい、その主の階層性が窺える。

春日部庄内で現在報告されている平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺跡は以上の２例のみである。

参考文献

「兵庫県史　第１・２巻」　兵庫県　1974・1975
「兵庫県史　史料編　中世七」　兵庫県　1993
「七日市遺跡　第２分冊　（弥生・古墳時代遺跡の調査）・第３分冊（飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査）」　兵庫県教育委員会　1990・1991
「山垣遺跡」　兵庫県教育委員会　1990
「国領遺跡発掘調査報告書（蓮町・井森杉・石風呂地区の調査）」　兵庫県教育委員会　1991
「多利遺跡群発掘調査報告」　兵庫県教育委員会 1987
橘田正徳　『屋敷墓試論』「中近世土器の基礎研究Ⅶ」日本中世土器研究会　1991
白井永二・土岐昌訓編　「神社辞典」　東京堂出版　1979
高坂　好　「中世播磨と赤松氏」　臨川書店　1991
細見末男　「丹波の荘園」　名著出版　1980
竹内理三・「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　「角川日本地名大辞典　28兵庫県」　角川書店　1988

竪穴住居16
竪穴住居17
竪穴住居15
竪穴住居11
竪穴住居3
竪穴住居4
竪穴住居6
竪穴住居1
竪穴住居13
竪穴住居12
竪穴住居8
竪穴住居9
竪穴住居10
竪穴住居7
竪穴住居2
竪穴住居5
97.00
98.00
99.00
0
20m

第6図　弥生時代遺構配置図

第３章　川畑地区の調査

第１節　弥生時代の遺構

１．概　要

弥生時代の遺構としては竪穴住居址16棟が検出されている。これらの遺構の検出面は基本的には黒褐色シルト上面と礫層であるが、黒褐色シルト上面では遺構検出が困難であったことから、この層を除去し、下層の黄褐色シルト上面で行った。遺構の検出面はおおまかには南から北東隅にかけて緩く傾斜し、比高差は約1.3mを測る。または東西の両端が僅かに高く、調査区の中央は南北の浅い谷状となっている。

検出された遺構は竪穴住居址16棟のみで、他の遺構は見られない。住居址は平面形・規模・柱穴数から分類できる。平面形が円形を呈する住居址は11棟があり、規模が径10mを越す大型、径９ｍ～10ｍのやや規模の大きいもの、径７～９ｍで中規模のもの、径６ｍ以下で小型のものがある。平面形が隅丸方形を呈する住居址は５棟あり、規模一辺が7m弱のものと、一辺が４ｍ未満のものがみられる。

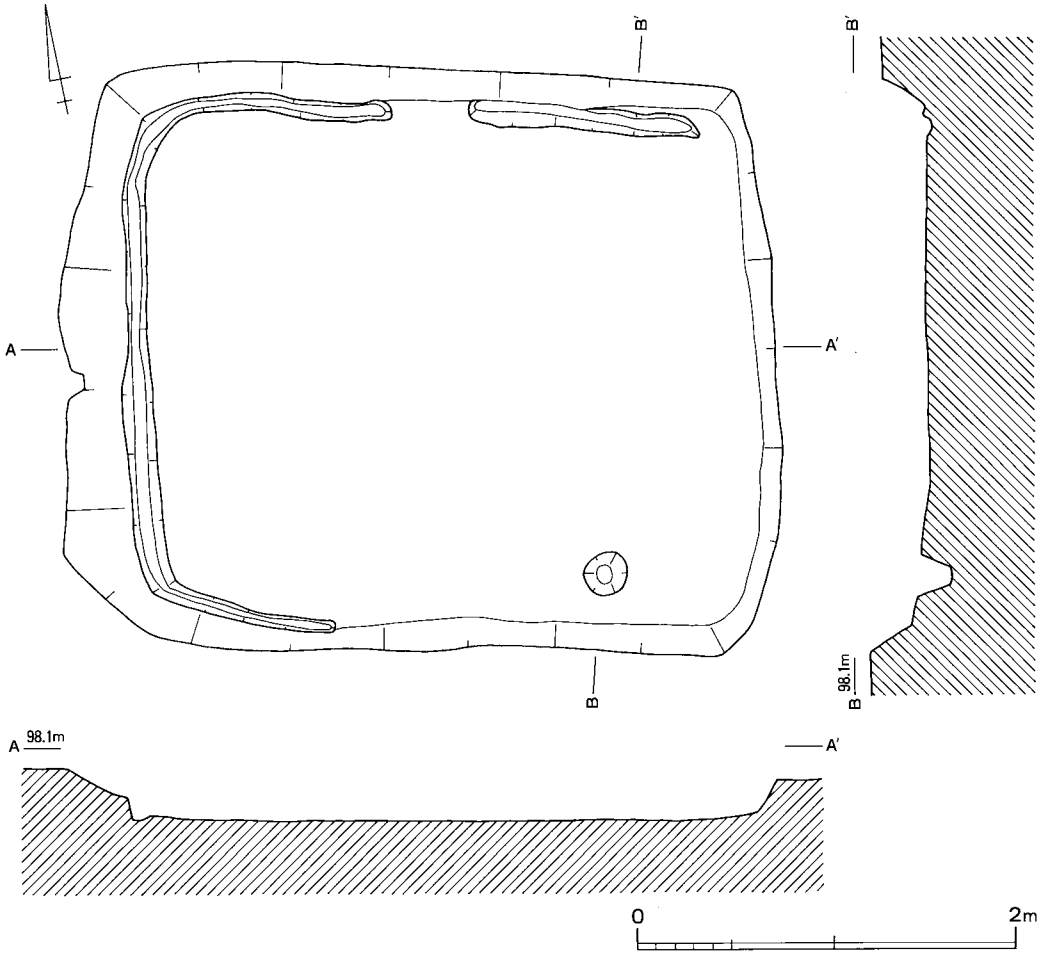
また住居址２と３の間には、当該時期の遺構が全く検出されない空間が存在していることから、住居址群を竪穴住居１・２・７～17の北群と、竪穴住居３～６の南群に分けることが可能であるが、各遺構の記述は、住居址番号順に進めていくことにする。

２．各遺構

竪穴住居１（第７図）

竪穴住居７を切って構築された住居址で、平面形は隅丸方形を呈する。住居址の規模は長辺約6.9ｍ・短辺約5.8ｍで、壁は最高約33cmまで遺存していた。西壁は傾斜が緩やかであることから、崩壊している可能性がある。北壁・西壁・南壁西半の下には、北壁下の中央付近では途切れる部分もあるが、幅15cm～30cm・深さ約５cmの壁溝が設けられいた。柱穴は南東隅付近で１本が検出された以外は検出できず、南東隅部の１本も本住居址に伴うものかどうかはっきりしない。

また床面上には炭化材と炭化物が多量に遺存しており、焼失住居の可能性が高い。ただ床面上からの出土遺物は皆無で、遺物は全て埋土からの出土である。したがってこの住居址の時期は明確ではないが、平面プラン・床面の炭化材の状況が竪穴住居４と類似しており、ほぼ同時期の第３段階と考えている。

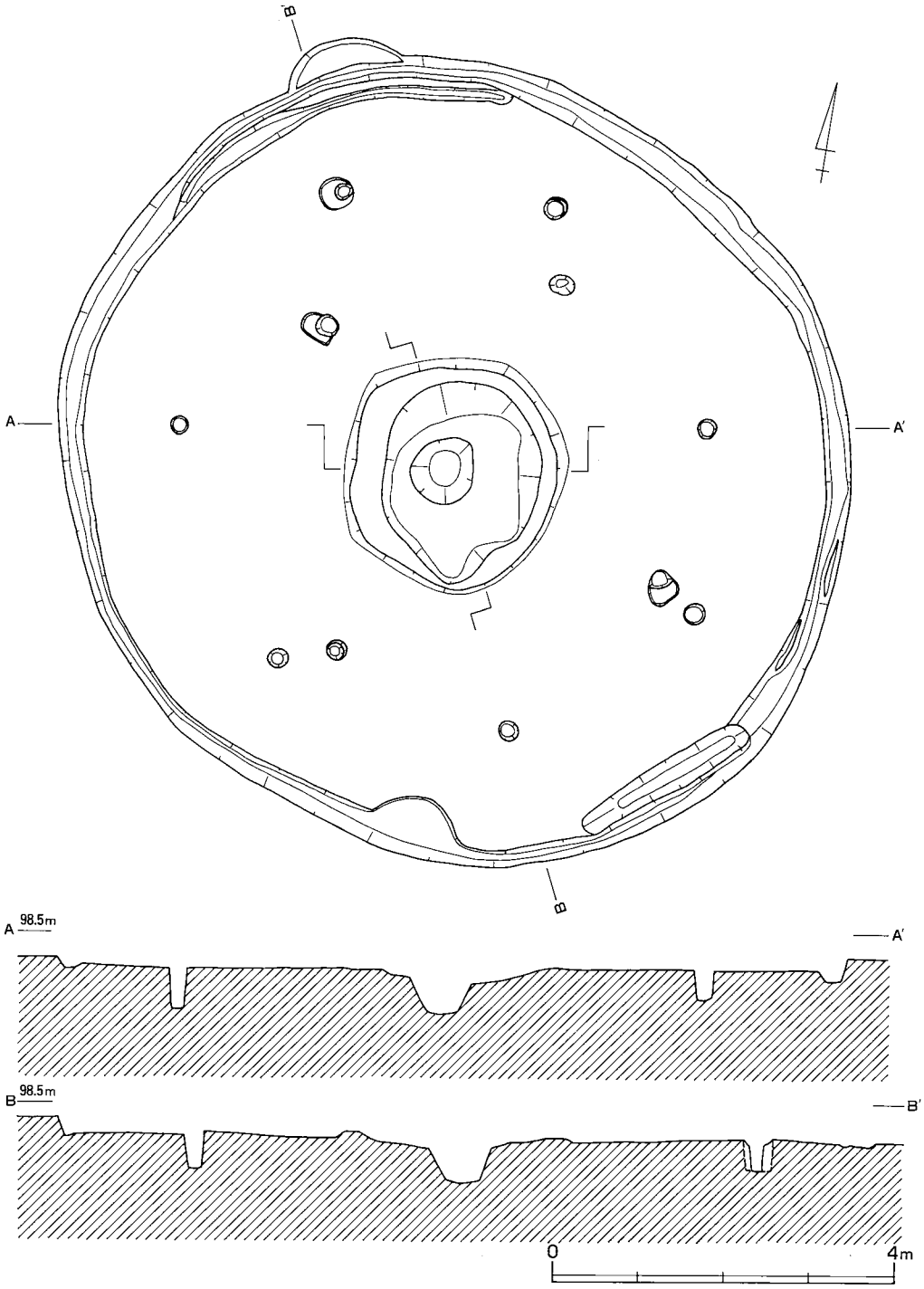


第７図　竪穴住居１

竪穴住居２（第８図）

竪穴住居７の南に隣接して検出された住居址で、平面形はやや楕円形ぎみの円形を呈する。住居址規模は長径9.6m・短径9.0mで、壁は最高約15cm遺存しているにすぎなかった。壁下には幅15～35cm・深さ５～15cmの壁溝が検出され、一部では２重になって検出されている。

床面は中央土壙に向かって僅かに傾斜している。柱穴は、平安時代以降のものが埋土上部から掘り込まれていることもあって明確ではないが、内側の中央土壙よりに４本、その外側に７本の計11本が検出されている。内側の４本は径約20～30cmで、南側が開いた台形状に配置され、南東側と北西側の柱穴には抜き取り痕が認められている。外側の７本は径23～38cm・深さ32～48cmで、内側の柱穴より南東側で約60cm、北西側で約1.2m拡張した形で配置されている。住居址の西半に配置された柱穴が深く、東半に配置された柱穴が浅くなっている。



第8図　竪穴住居2

中央土壙は不整形な南北に長い楕円形を呈し、２段に掘り込まれている。上段は長軸約2.35ｍ・短軸1.85ｍで、深さ５～18㎝下がった所から下段が掘り込まれている。下段は径約75㎝の不整形な円形を呈し、深さは約35㎝を測る。埋土はにぶい褐色・黒褐色のシルト・粗砂であり、埋土中に炭化物・焼土が少量含まれていた。中央土壙の肩部には、径2.45ｍ・高さ５㎝程度の低い土手が設けられていた。

遺物は壺・甕・高杯・鉢の土器類と砥石(1)・鉄斧(1)・ガラス小玉が出土している。土器類は完形で出土したものはなく、破片となった状態で、外側の柱穴と床面の間から出土している。ガラス小玉は欠けているものも含めて66個が出土している。玉の出土位置がすべて把握できたわけではないが、南半の床面上から単独で出土したもの６個、住居址南壁から約１ｍほど内によった径約１ｍ程の範囲の埋土上層から床面上までの位置、高低差約27㎝の範囲から群となって出土したもの23個がある。その他37個は正確な位置を把握できていないが、群付近の埋土から出土したものが多い。時期的には第１段階に属する。

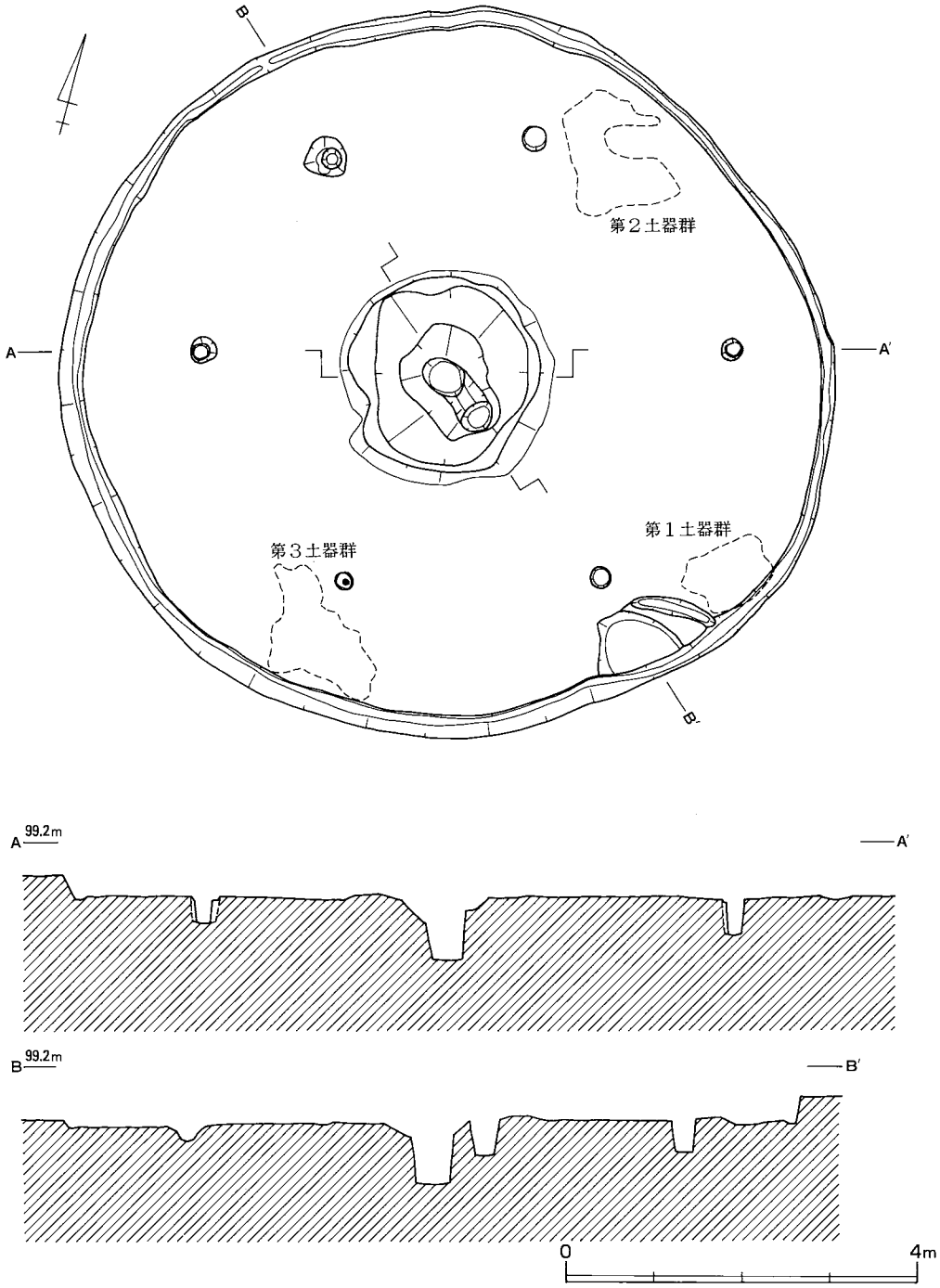
竪穴住居３（第９・10図）

南群に属する住居址で、竪穴住居４の北側で検出された円形の住居址である。住居址の平面形は東西がやや長い楕円形で、住居址規模は長軸約8.9ｍ・短軸8.3ｍを測る。壁は後世の削平によって北半側がほとんど失われ、南半の壁のみが遺存しており、最高約28㎝まで遺存していた。壁下には幅15～28㎝・深さ７㎝の壁溝が全周して設けられていた。

床面はほぼ平らで、中央土壙周囲の土堤の東西で、土堤上も含めて焼土化した部分がみとめられている。柱穴は６本が検出され、規模は径25～40㎝・深さ10～35㎝とばらつきがあり、北西側の柱穴には抜き取りと思われる痕跡が確認できた。

中央土壙は、上層から後世の柱穴が掘り込まれていたが、不整形な平面形を呈し、２段に掘られて、全体の深さは約65㎝を測る。上段はほぼ北西南東方向が長い方形を呈し、長辺約1.3ｍ・短辺1.0ｍで、15～30㎝下がったところから下段が掘り込まれている。下段は上段の中央からやや北によった位置に掘り込まれており、長軸約50㎝・短軸40㎝の楕円形で、深さは約50㎝を測る。埋土はにぶい褐色ないし灰褐色のシルト・粗砂で、下層には焼土を多く含む層が認められた。中央土壙の周囲には、土壙を全周して、径約2.5ｍ・上幅約20㎝・高さ約５㎝の低い土堤が設けられていた。この土堤と中央土壙の間の幅は一応ではなく、南東部では接近した状態で設けられている。また土堤と中央土壙の間は緩く土壙の中心に向かって傾斜していた。中央土壙上とこの土堤の内部は黒褐色のシルトが堆積し、灰・炭化物が含まれていた。

住居址南東部には壁溝に接して、長さ約60㎝・幅約90㎝・深さ10㎝の土壙が設けられており、土壙内から(26・31・50）の土器が出土している。住居址内からは土器類・砥石・ガラス小玉が出土している。砥石は中央土壙から出土したが、遺存状況が悪く、掲載していない。ガラス小玉は１個のみの出土であり、中央土壙の北東側の床面上から出土している。



第９図　竪穴住居３

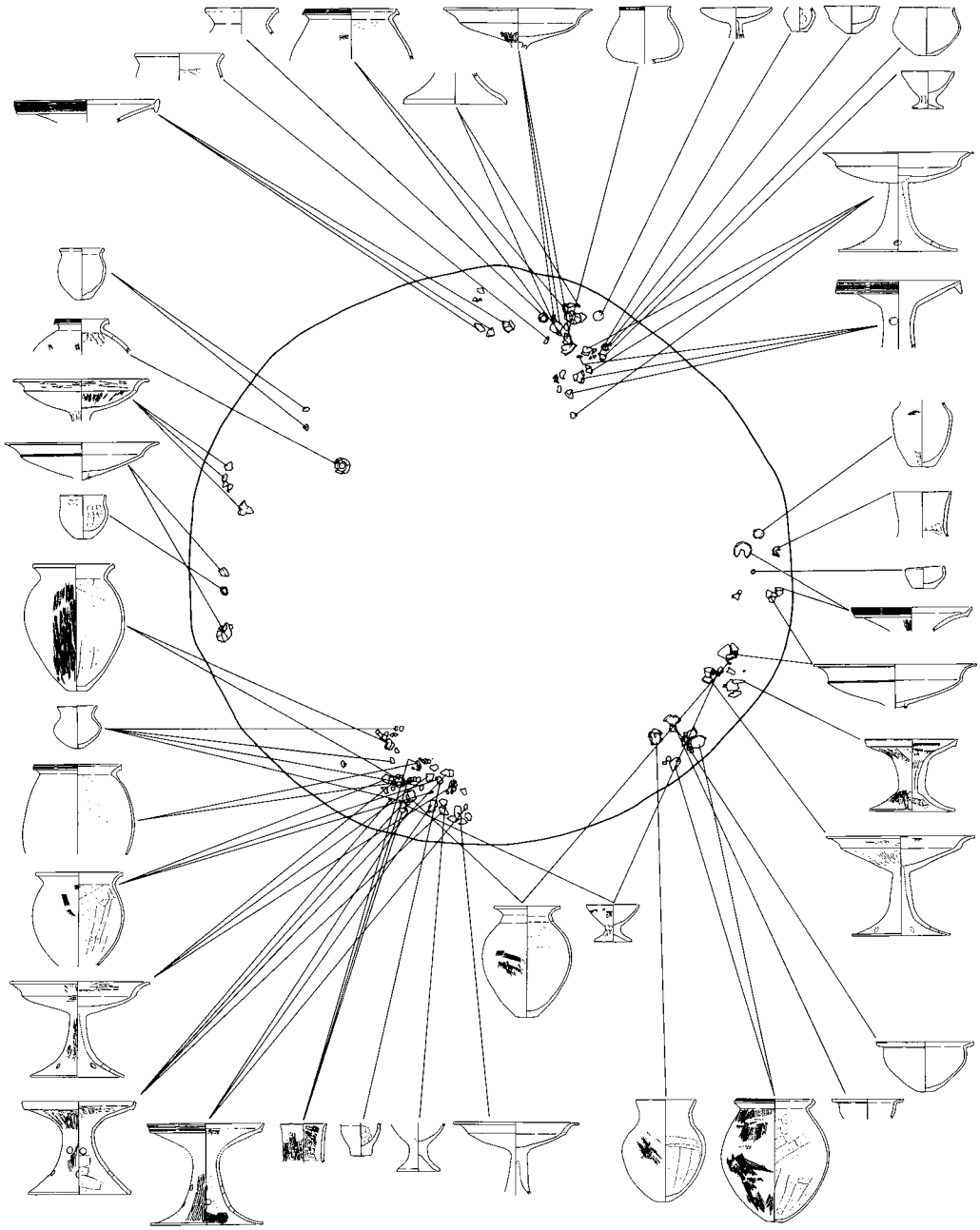
土器類は多量に出土しているが、①床面上から集中して出土したもの、②床面上から散在して出土したもの、③住居址内の遺構内から出土したものがある。

①には第１～３土器群がある。(57) のように完形に近い形で出土したものもあるが、各土器群とも破片が多い。また完形に近い形に復元できたものも、土器群内で離れた位置から出土したものが接合できることなどから、各土器群とも本来使用されていた位置を離れ、住居址廃絶後に投棄されたものであろう。ただ土器群相互に接合できたものは、第２・３土器群間での２個体（23・55）がある。これは住居址南側から廃棄された第２・３土器群が非常に近接した場所で使用された土器群であることを示唆するものであろう。住居址の北側から廃棄された第１土器群は他の土器群や、②・③の状態で出土した土器類と接合できるものは無かった。

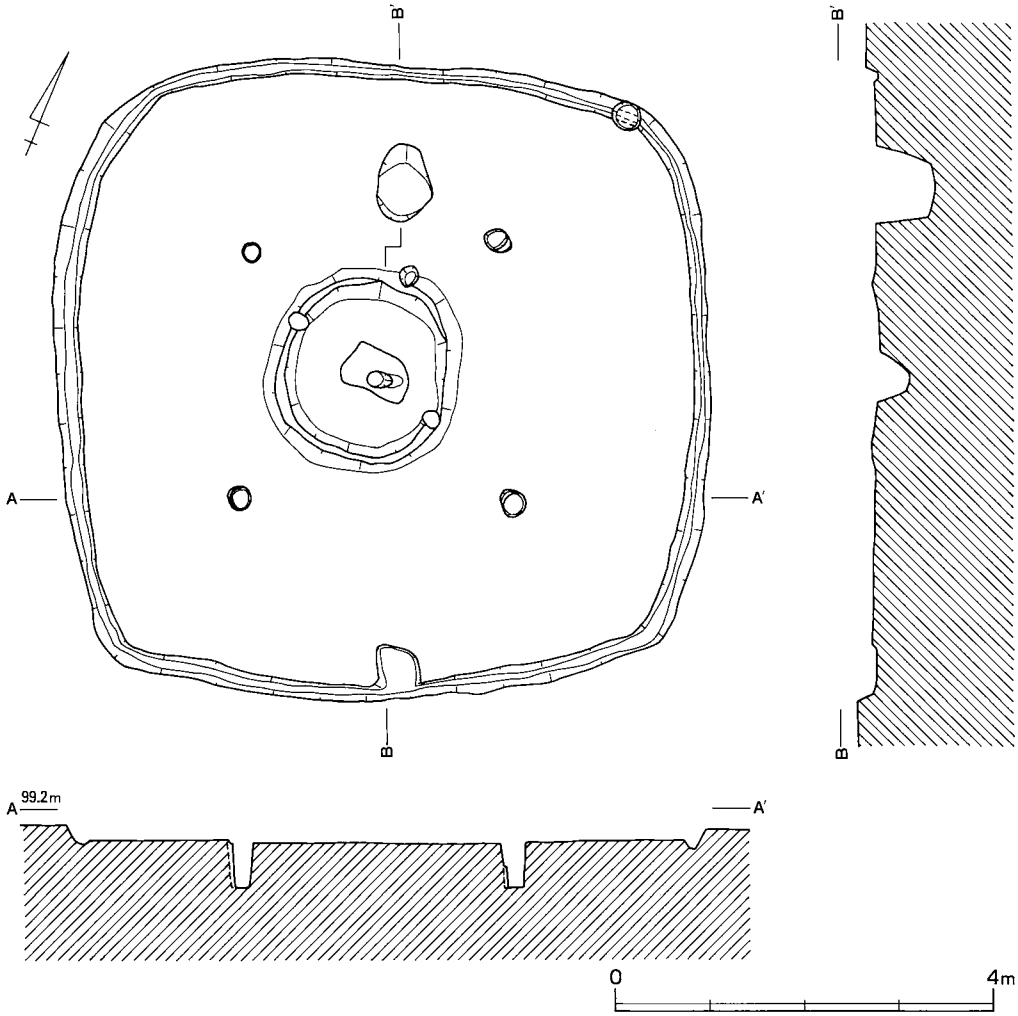
各土器群とも器種構成では、壺・甕・高杯・鉢・器台と一応揃っているが、第３土器群は出土点数が少なかったこともあって、壺・甕・鉢類は図化できなかった。ただ細かく見ると土器群間に器種・個体数に差異がある。器種・個体数は図化できなかったものを含めると当然異なってくる可能性が高いが、参考までに挙げると、第１土器群は壺２個体・甕１個体・高杯４個体・鉢４個体・器台４個体・ミニチュア土器１個体があり、器種では壺Ｂ・甕B_1・甕D_2・高杯A_2・高杯Ｂ・鉢Ｂ・鉢C_2・鉢D_1・器台A_1で構成される。第２・３土器群は接合資料があることから一括すると、壺３個体・甕３個体・高杯３個体・鉢３個体・器台３個体・ミニチュア土器１個体があり、器種では壺Ｂ・Ｄ・甕B_2・甕D_2・高杯A_1・鉢C_1・器台Ｂ・器台Ｃで構成される。

②の状態で出土した土器は、西壁際から出土したものと、東壁際で出土したものがある。西壁際からは壺Ａ・小型の甕D_2・高杯A_1・高杯A_2・鉢D_1それぞれ１個体づつ出土している。これらは第１・２土器群とは距離的に離れていることから、土器群とは明確に区別することができる。東壁際から出土したものには壺Ｄ・高杯A_2・器台Ｂ・小型甕の体部・ミニチュア土器の鉢があるが、第３土器群の下から出土したものと接合できるものがあるなど、第３土器群に含められる可能性もある。この②の状態で出土したものは小型の甕・鉢を除くと破片のみで、完形に復元できるものはなく、逆転した状態で出土するものがあるなど、住居址外側からの流れ込んだ土器である可能性が高い。

③の状態で出土したものは、住居址南東壁際の土壙から出土した壺$E_2$１個体（26）・甕$A_1$１個体（31）・鉢A_2個体（50・51）があり、(51) の鉢以外は完形に復元できている。第３土器群と近接しているが、相互の間には接合資料はなく、土壙埋没後に第３土器群が廃棄されたようである。このように①・②の状態で出土した土器は住居址に伴う可能性は低く、住居址に伴う土器は③の状態で出土した４個体であろう。時期的には第２段階に属する。



第10図　竪穴住居３遺物出土状態



第11図　竪穴住居４

竪穴住居４（第11図）

南群に属する住居址で、竪穴住居３の南に隣接して検出された隅丸方形の住居址である。住居址規模は南北約6.95ｍ・東西約6.75ｍで、壁は最高約33cmまで確認できた。壁下には幅16～38cm・深さ約10cmの壁溝が壁下を全周して設けられていた。

床面はほぼ平らで、中央土壙周囲の土堤上から東にかけてと、土堤上から北側にかけて焼土化した部分が認められている。柱穴は壁溝から1.7～2.0ｍの中央によった位置で、４本が検出され、規模は径20～30cm・深さ40～50cmであった。

中央土壙は、不整形な平面形を呈し、２段に掘られて、全体の深さは約70cmを測る。上段はほぼ東西に長い方形を呈し、長辺約70cm・短辺40cmで、約30cm下がったところから下段が掘り込まれている。下段は上段の中央からやや東によった位置に掘り込まれており、長軸約28cm・

短軸約18cmの楕円形で、深さは約40cmを測る。東側の壁のみ傾斜が緩くなっていた。埋土は炭化物を含む黒褐色のシルト・砂で、下層には炭化材を含む層が認められた。中央土壙の周囲には、土壙を全周して、径約1.9m・上幅約10cmで、高さは最高約7cmの低い土堤が設けられていた。この土堤と中央土壙の間の幅は一応ではなく、西側が広く、東側が狭くなっていた。また土堤と中央土壙の間は、土壙の中心に向かって緩く傾斜していた。

この中央土壙と北壁間の中央床面上には、南北に長い楕円形の土壙が設けられていた。土壙は長さ約80cm・幅約60cm・深さ60cmで、南・北壁の傾斜は緩く、東・西壁が急に掘られている。埋土は黒褐色・褐色のシルト・粗砂であり、埋土中には炭化物が含まれていた。

また床面上からは多量の炭化材・炭化物が検出されている。炭化材は、床面から約10cm浮いた状態で、放射状に検出され、床面中央では炭化物層となっており、炭化材といった状態では検出されていない。炭化材の上下からは部分的に焼土が検出された他、東壁から南壁にかけての壁際では、炭化材と同じレベルで、黄灰褐色の粘土が検出されている。これらの土は屋根材の可能性もある。

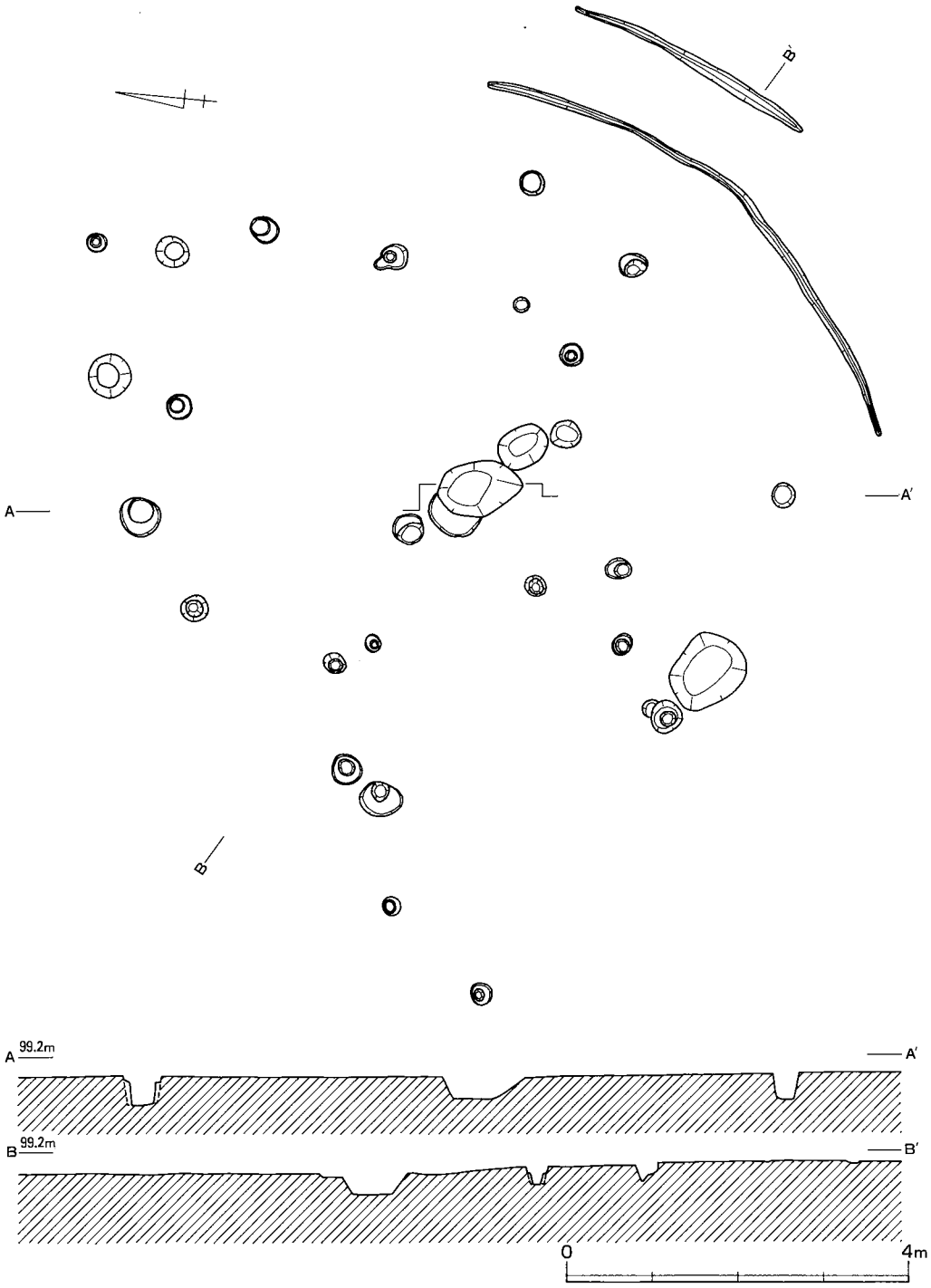
出土した遺物は土器類のみである。壺B・甕B_2・甕C・高杯A・鉢C_2・器台Bが出土している。破片が多く、逆転した状態で出土したものもあることから、元の位置を離れたものであり、住居址に直接伴う土器類とは考え難い。時期的には第3段階であろう。

竪穴住居5（第12図）

南群に属する住居址で、住居址4の南に隣接して検出された円形の住居址である。後世の削平によって壁は全て失われ、壁溝の一部と中央土壙・柱穴が検出された。検出できた壁溝、中央土壙の状態から2基が切り合っていたことが類推されるが、その前後関係は不明である。仮に東側の住居址を竪穴住居5－A、西側の住居址を竪穴住居5－Bとして記述する。

竪穴住居5－Aの壁溝は幅約10cm・深さ約4cmで、弧状に長さ約3.1mが検出されている。中央土壙は東西に2基検出されているが、この住居址が竪穴住居5－Bとは東にずれていることから、長軸約60cm・短軸約45cm・深さ約26cmの東側の中央土壙がこの住居址に付随するものと思われる。埋土は黒褐色シルト・砂であり、上層には炭化物と焼土が含まれていた。中央土壙の周辺には後世のものも含め多数の柱穴が検出されており、住居址に伴うであろう柱穴を明確にすることはできないが、5本がこの住居址に伴うものであろう。規模は径約25～40cm・深さ約15～25cmを測る。ただこの5本の配置では南端の柱間が広すぎることから、そこに消失した柱穴があったとして1～2本を想定とすると、住居址の柱は6～7本となる。この柱穴の配置からみるとこの住居址は竪穴住居5－Bを東に拡張したものと考えられ、柱穴と壁溝までの距離等を手がかりに住居址規模を復元すると約11.5mとなり、大型の住居址となる。

竪穴住居5－Bの壁溝は幅約10cm・深さ約3cmで、弧状に長さ約6.3mが検出されおり、住居址の平面形は円形と想定される。中央土壙は西側のものと想定するが、形状は南北に長い楕



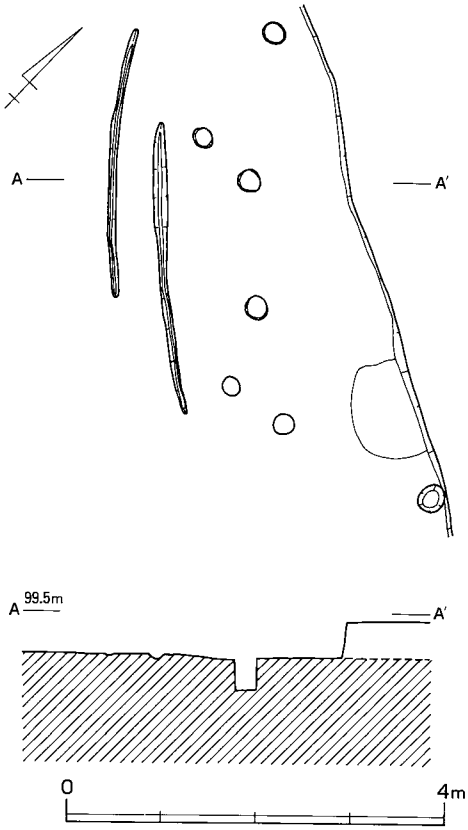
第12図　竪穴住居５

円形で、長軸約100㎝・短軸約65㎝・深さ約25㎝を測る。竪穴住居5－Aと同様に柱穴は明確にし難いが、5－Aに伴う柱穴の内側の7本が想定され、柱穴は径約25～40㎝・深さ約20～30㎝である。柱穴と壁溝までの距離等を手がかりに住居址規模を復元すると、この住居址の規模は径約9.5m前後となる。

両住居址から出土した遺物は少量である上、いずれも小片である。したがって住居址の時期を明確にはし難いが、円形の住居址であることから一応第1・第2段階としておく。

竪穴住居6（第13図）

竪穴住居4の南側で、調査区の東壁にかかって検出された住居址である。後世の削平を大きく受けて壁は消失し、弧状の壁溝2本と柱穴が検出されたにすぎない。西側の壁溝は幅約8㎝・深さ約5㎝、東側の壁溝は幅約10㎝・深さ約5㎝である。2本の壁溝の内側では柱穴が7本検出されたが、住居址に伴う柱穴を明確に抽出することは困難である。



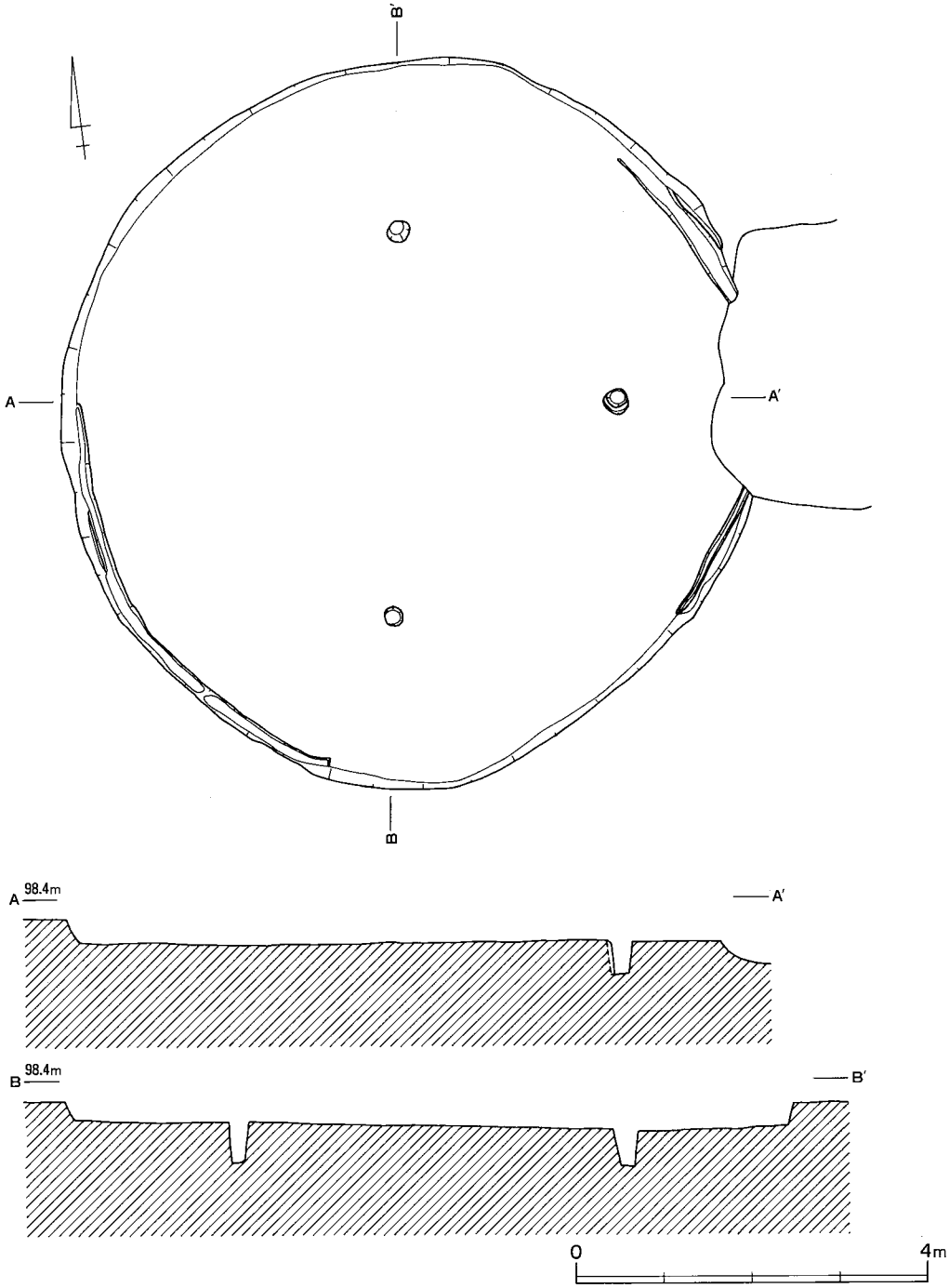
第13図　竪穴住居6

竪穴住居7（第14図）

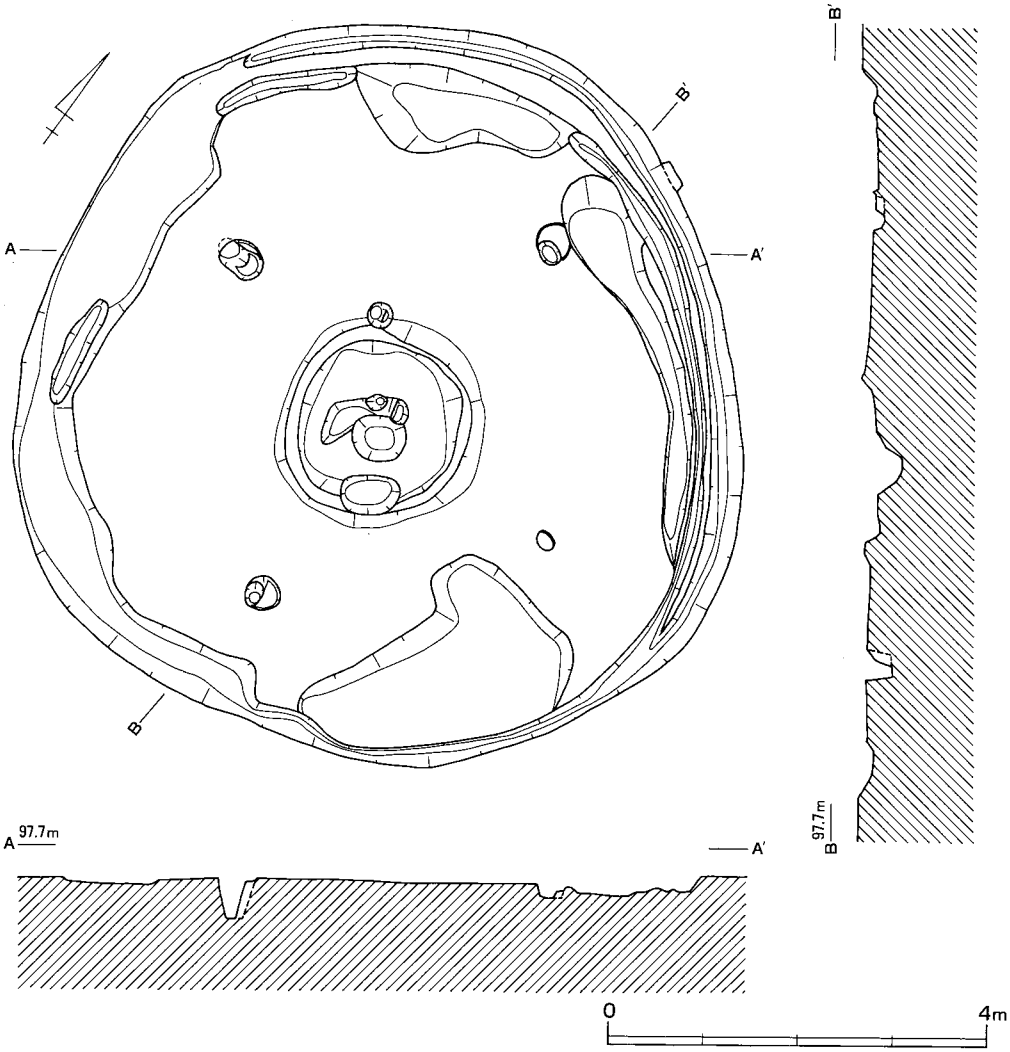
北群に属する住居址で、竪穴住居2の北側で、竪穴住居1に切られて検出された住居址である。平面形はやや南北に長い楕円形ぎみの円形で、長軸約8.3m・短軸8.0mの規模である。壁は最高約20㎝まで遺存し、東・西側の壁下には幅約15㎝・深さ約5㎝の壁溝が設けられていた。

柱穴は3本が検出された。その配置からみて4本柱と考えられるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。検出された柱穴は径約20～25㎝・深さ約40～48㎝である。中央土壙は後世の土壙によって失われていた。

出土した遺物には土器類の他、砥石（2）がある。土器類としては壺C・壺D・甕B_2・甕D_3・鉢A・鉢B_2・鉢C_1・鉢D_2・鉢E・器台・甕底体部が出土しており、（76・77・86）の壺鉢類は住居址南壁際、（79・80）の甕類は竪穴住居1に切られた東壁際の両側、（83）の鉢は住居址北壁際から出土している。その他（82）の甕底体部片が床面の南西部から出土している。砥石は西壁際から出土している。時期的には第2段階である。



第14図　竪穴住居 7



第15図　竪穴住居８

竪穴住居８（第15図）

北群に属する住居址で、竪穴住居９の南に隣接して検出された住居址である。平面形はいびつではあるが円形で、住居址規模は南北7.8m・東西7.5mを測り、壁は最高15cm遺存していた。壁下には壁溝が設けられていたが、壁溝は北半部では二重となり、内側の壁溝と外側の壁溝の間は最高約30cmを測る。外側の壁溝は幅約10cm・深さ５cm、内側の壁溝は幅約20cm・深さ５cmである。これらの壁溝は西壁下では一部を除けば２本として検出できず、幅約70cmの１本の溝として検出されている。こうした壁溝の状態から北側に住居址を拡張したと思われるが、建て替えに伴う柱穴は検出されず、建て替えも小規模なもので、柱をそのまま利用して外側に

30cm程度拡張したようである。

床面は、他の住居址に比べると凹凸が目立ち、南西部から北東部にかけて僅かに傾斜している。ただ床面が黄褐色シルトと、その凹みに堆積した黒褐色シルトに設けられていたため、壁際を中心に掘りすぎた部分もある。柱穴は4本が検出され、大きさは径15～38cm・深さ10～40cmであり、北東隅の柱穴が浅くなっている。

中央土壙は平行した2基の土壙を土堤で囲んだものである。中央の土壙は東西が長い楕円形の平面プランで、長軸約60cm・短軸50cm・深さ28cmを測る。内部の埋土には炭化物が少量含まれていた。中央の土壙と平行した、南東側の土壙は長軸約60cm・短軸約40cm・深さ約40cmである。この2基の土壙を囲む土堤は、径約2.60～2.95mの円形に中央の土壙を中心として設けられており、南東側の土壙付近では、土壙の南肩上に設けられている。土堤の規模は下端の幅35cm、高さは7cmまで遺存していた。土堤に利用された土は暗褐色・黄褐色シルトであり、炭化物・焼土を含む部分があることから、修復されたようである。ただ中央の土壙と土堤の間は一応の幅で無く、北側が広く、南側が狭くなっている。また土堤と土壙の間は北側で凹凸が見られたが、それ以外はほぼ平坦であった。

この他、床面上には炭化物・焼土が多く見られ、一部炭化材として検出されている。ただ住居が焼失した際にでる炭化物としては量的に少ない。

遺物は床面に遺存したものは無く、すべて埋土からの出土である。また出土した遺物は少なく、鉢A2個体・高杯脚部・鉢底部がある程度である。したがって時期的にはっきりしないが、一応第2段階としておく。

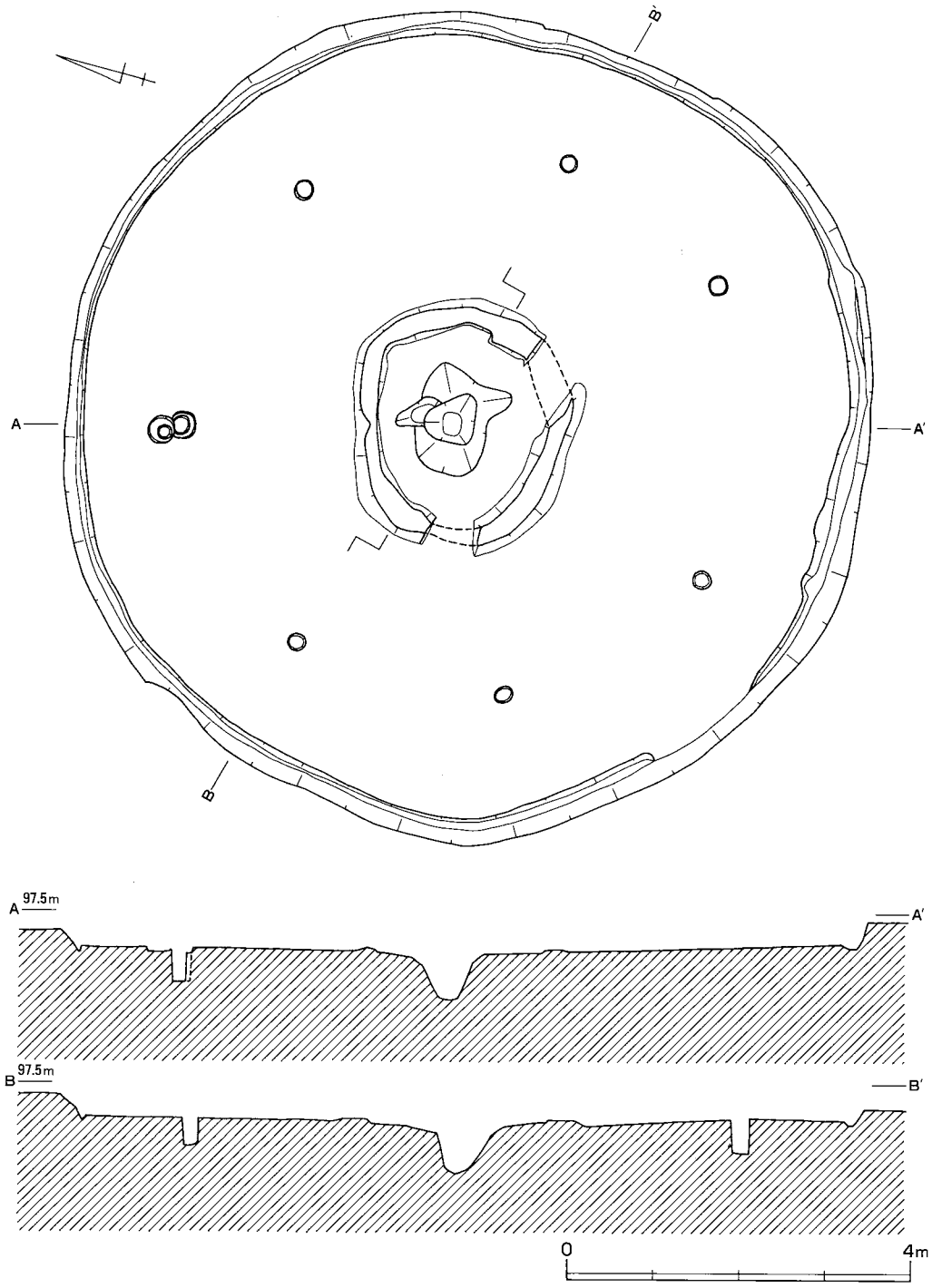
竪穴住居9（第16図）

北群に属し、竪穴住居8に隣接して検出された、円形プランの住居址である。住居址規模は南北9.8m・東西9.4mで、壁は最高約25cmまで遺存していた。東壁下の約1.3m間を除く、壁下には壁溝が設けられている。壁溝は幅約15cm・深さ約6cmであった。

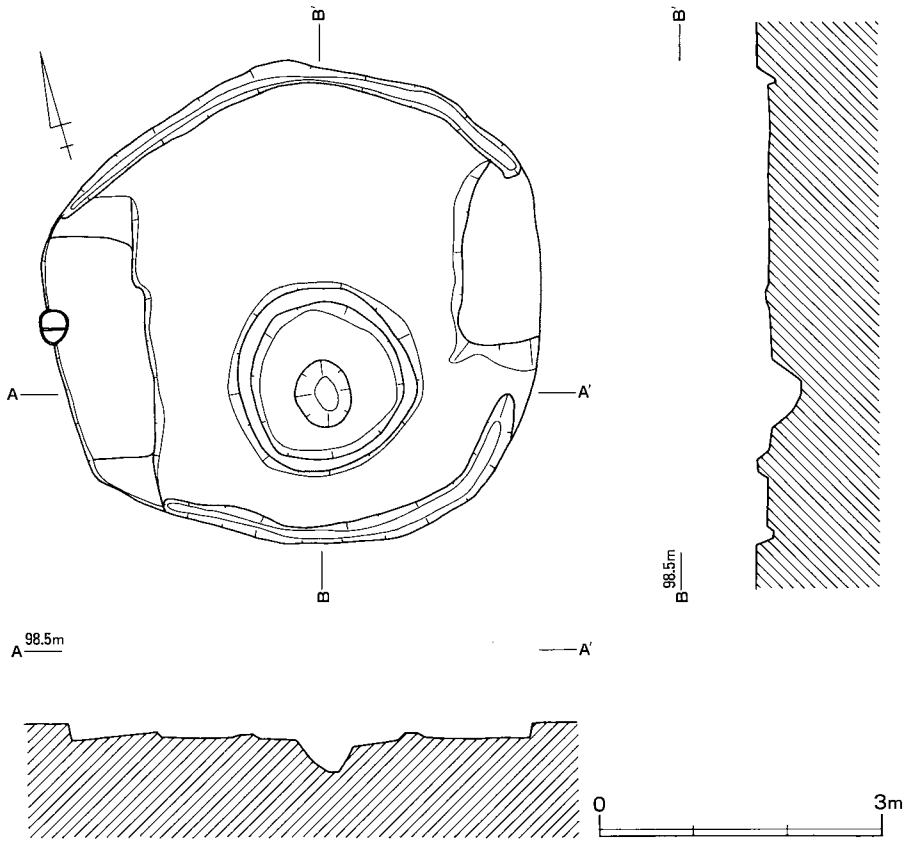
床面は中央土壙に向かって僅かに傾斜し、7本の柱穴が検出されている。柱穴は径約20～30cm、深さ約30～40cmで、1本から径約20cmの柱痕が検出されている。

中央土壙は不整形であるが、ほぼ北西－南東方向の長い楕円径で、2段に掘られて、全体の深さは約55cmを測る。上段は長軸約135cm・短軸82cmで、約10cm下がったところから、下段が掘り込まれている。下段は不整形な方形で、一辺約50cm・深さ約45cmを測る。埋土は褐灰色・灰褐色のシルト・粗砂で、含まれている炭化物は少量であった。中央土壙の周囲には下端幅約40cm・高さ約5cmの土堤が、長軸約2.95m ・短軸約2.60m の楕円形に設けられていた。土壙と土堤の間は中央の土壙に向かって、緩やかに傾斜していた。

遺物は土器類とガラス小玉が出土している。土器類には壺E・甕A_1・甕D_1・高杯B・壺体部・高杯脚部・台付鉢脚部がある。ただ多くが壁溝上から出土しており、住居址に伴うもので



第16図　竪穴住居９



第17図　竪穴住居10

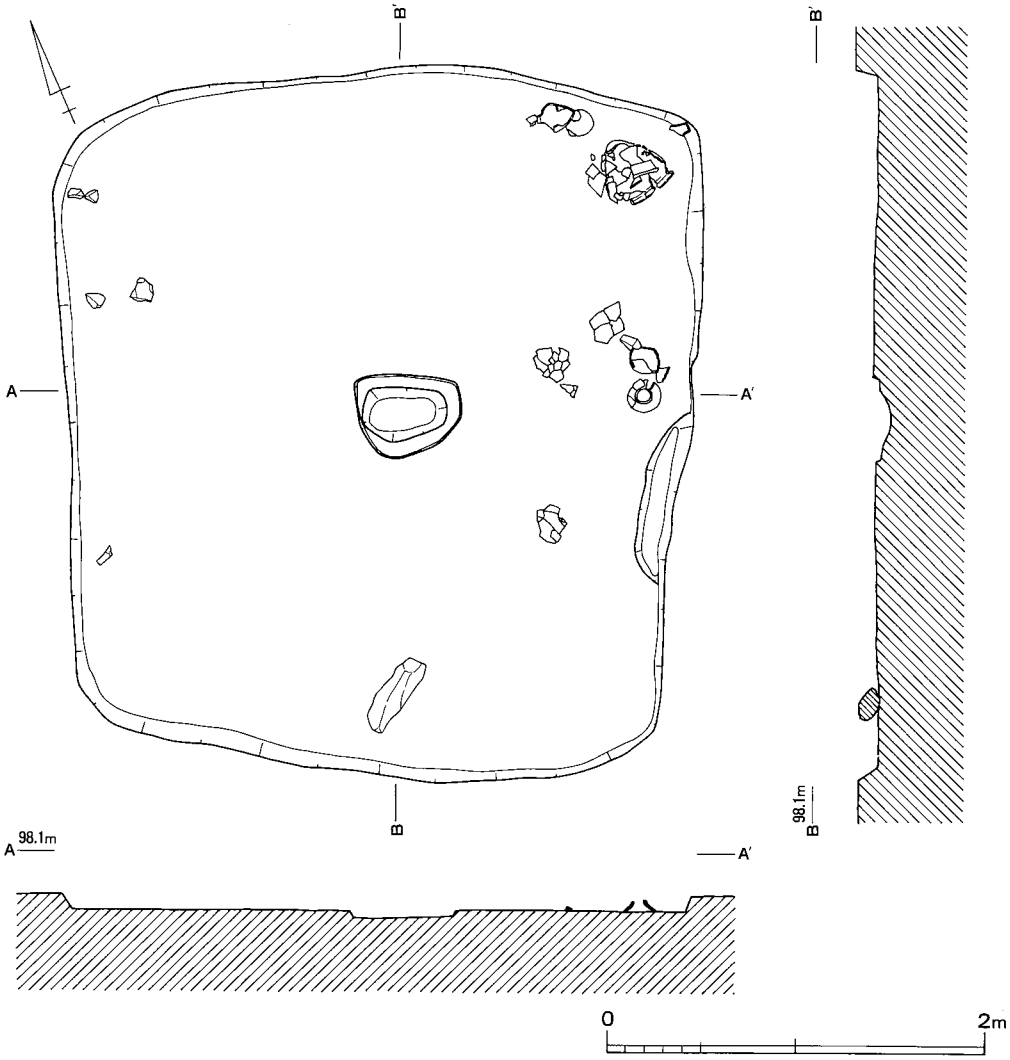
はなく、外側から流入したものである。ガラス小玉は住居址南東部の床面上から出土している。こうした遺物の出土状況から、土器類の示す時期が必ずしも住居址の時期を具現するものではないが、一応住居址の時期を土器類の示す第１段階と考えておく。

竪穴住居10（第17図）

北群に属し、竪穴住居７・８・15の中間付近で検出された円形プランの住居址である。住居址の平面形は東西に長い楕円形で、規模が長軸約5.4m・短軸約5.1mを測る。今回検出された円形住居址では最も小型の住居址である。壁は最高約15cmまで遺存していた。

床面はかなり礫を含んだ黄褐色シルト層上となっており、東・西の壁際に高床部が設けられていた。西側高床部は幅約95cm・高さ約５cmで、長さ約3.5mまで確認されている。高床部の内側はほぼ直線となっている。高床部の南北側は壁に向かって傾斜し高床部上の平坦面は長さ約2.35mである。東壁際の高床部は幅約80cm・高さ約５cmで、上部の平坦面は長さ約1.7mである。

柱穴は確認できず、中央土壙は床面中央から南によった位置に設けられている。土壙の平面



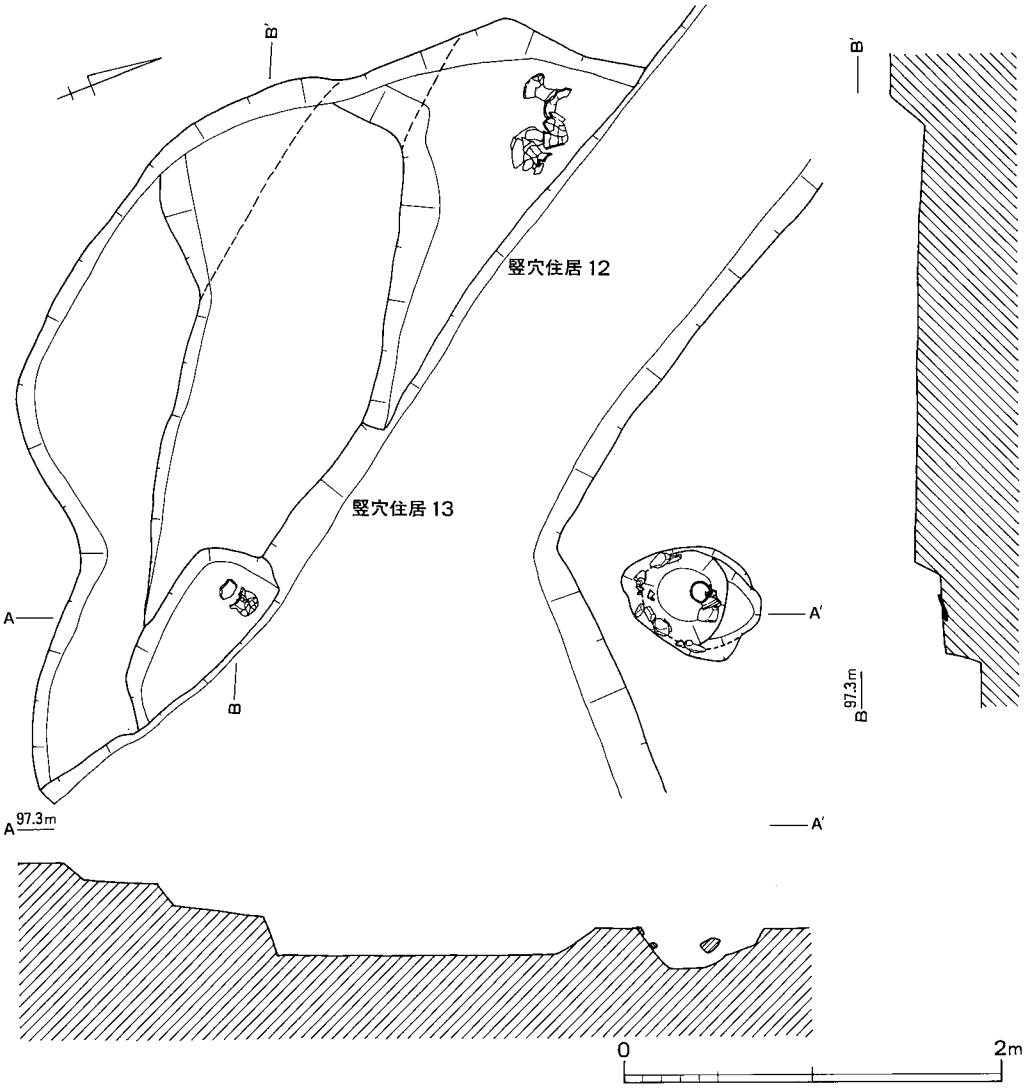
第18図　竪穴住居11

形は楕円形で、長軸約70cm・短軸約60cm・深さ約35cmである。埋土は炭化物を少量含む黒褐色の粗砂であった。中央土壙の周囲には幅30cm・高さ５cmの土堤が径約2.05mの円形に設けられている。土壙と土堤の間は平坦で、北側が広く南側が狭くなっていた。

遺物は土器類が出土している。出土した土器類には鉢Ａ・高杯Ａの他、鉢底部がある。(104)の鉢は中央土壙に落ち込んだ状態で出土している。時期的には第１段階である。

竪穴住居11（第18図）

北群に属し、竪穴住居15に近接して検出された、隅丸方形の住居址である。住居址の平面形は南北にヤヤ長い方形で、長辺約3.75m・短辺約3.35mの規模である。壁は最高15cmまで遺存

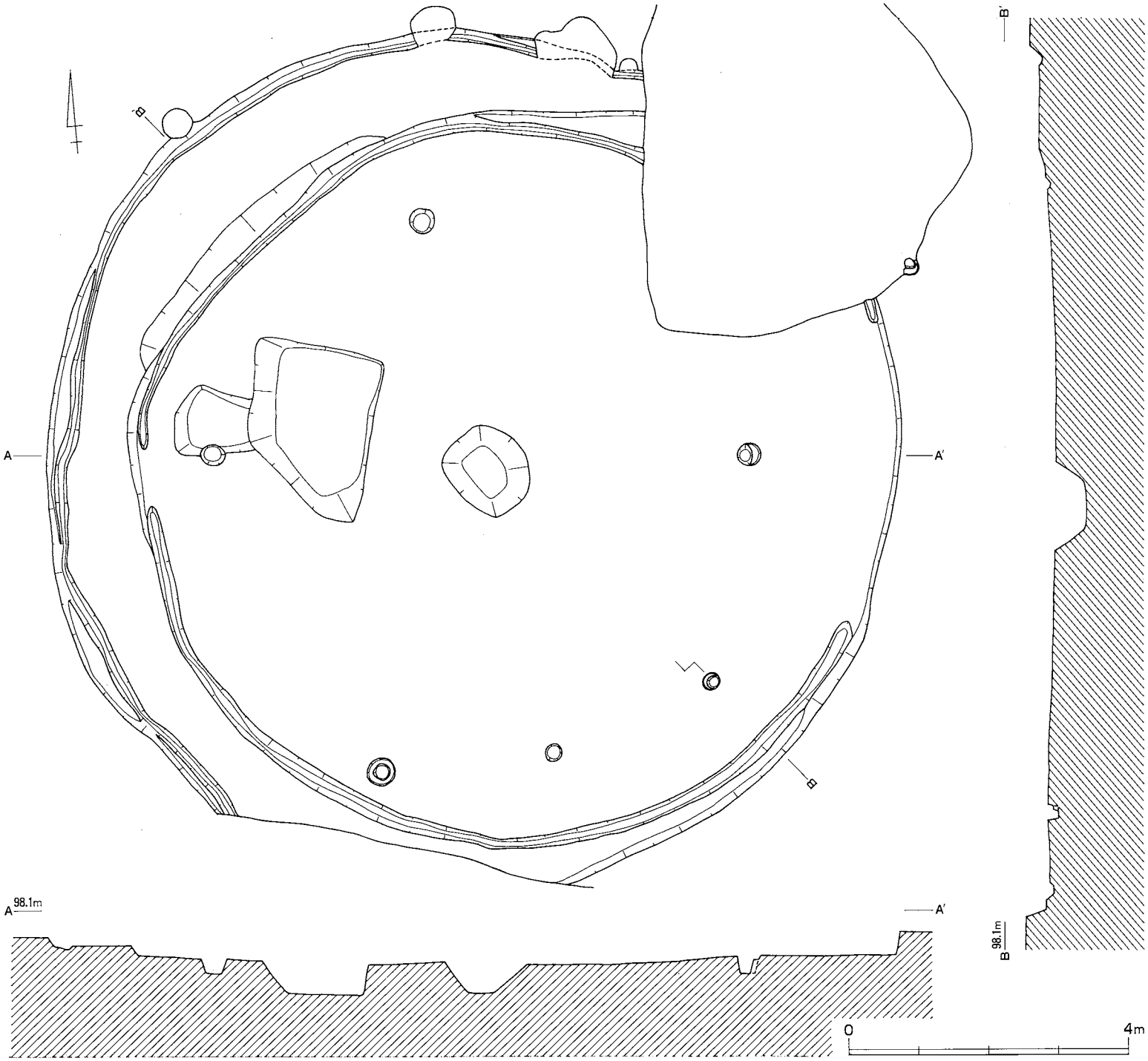


第19図　竪穴住居12・13

し、壁溝は設けられていない。

床面はほぼ平らで、土器類の他、南壁際中央には石材が遺存していた。柱穴は検出されていない。中央土壙は床面のほぼ中央に設けられており、平面形は東西に長い歪な楕円形を呈している。長軸約55cm・短軸約40cm・深さ約７cmの浅いものである。褐灰色シルトで、炭化物と土器辺を含んでいた。また床面から浮いた状態で、多くはないが炭化材と焼土が認められており、他の方形住居と同様に焼失住居である可能性が高い。

出土した遺物には土器類の他、砥石がある。土器類は甕B_2・手焙形土器の他、鉢等の底部



第20図　竪穴住居15

辺があり、穿孔土器の底部も見られる。土器類の内北東隅の壁際に（109）の甕と（110）の手焙形土器が置かれ、東壁際の中央付近には壺類等の土器が遺存していた。

竪穴住居12（第19図）

竪穴住居12は調査区の北端付近で、竪穴住居13と切り合った状態で検出された住居址である。後世の削平を大きく受けており、南コーナー部分のみが検出されている。そのため、平面形もはっきりしないが隅丸方形で、壁は東西約2.0mまで、南北が約1.2mまで確認でき、壁は最高約35cmまで遺存していた。コーナー部分に（114・115）の甕と器台が遺存していた。

竪穴住居13（第19図）

竪穴住居12と切り合った状態で検出された住居址である。後世の削平を大きく受けており、南コーナー部分から南壁際のみが検出されている。平面形は隅丸方形で、壁は東西約3.1mまで、南北が約2.4mまで確認でき、壁は最高約6cm遺存していたに過ぎない。検出できた南壁の東端には東西1.1m以上・南北0.5m以上・深さ約13cmの土壙が設けられ、内部から（116）の壺が出土している。

中央土壙は南壁から約3m離れて設けられている。2段に掘り込まれており、全体の深さは約23cmである。上段に平面形は北西－南東方向に長い、長軸75cm・短軸57cmの楕円形で、約10cm下がったところから、下段が掘り込まれている。下段は径約45cmの円形で、深さは約13cmである。内部の埋土は褐灰色シルトで、炭化物が少量含まれていた。また内部には礫が多く落ち込み、それとともに（117）の鉢が出土している。時期は第3段階である。

竪穴住居15（第20図）

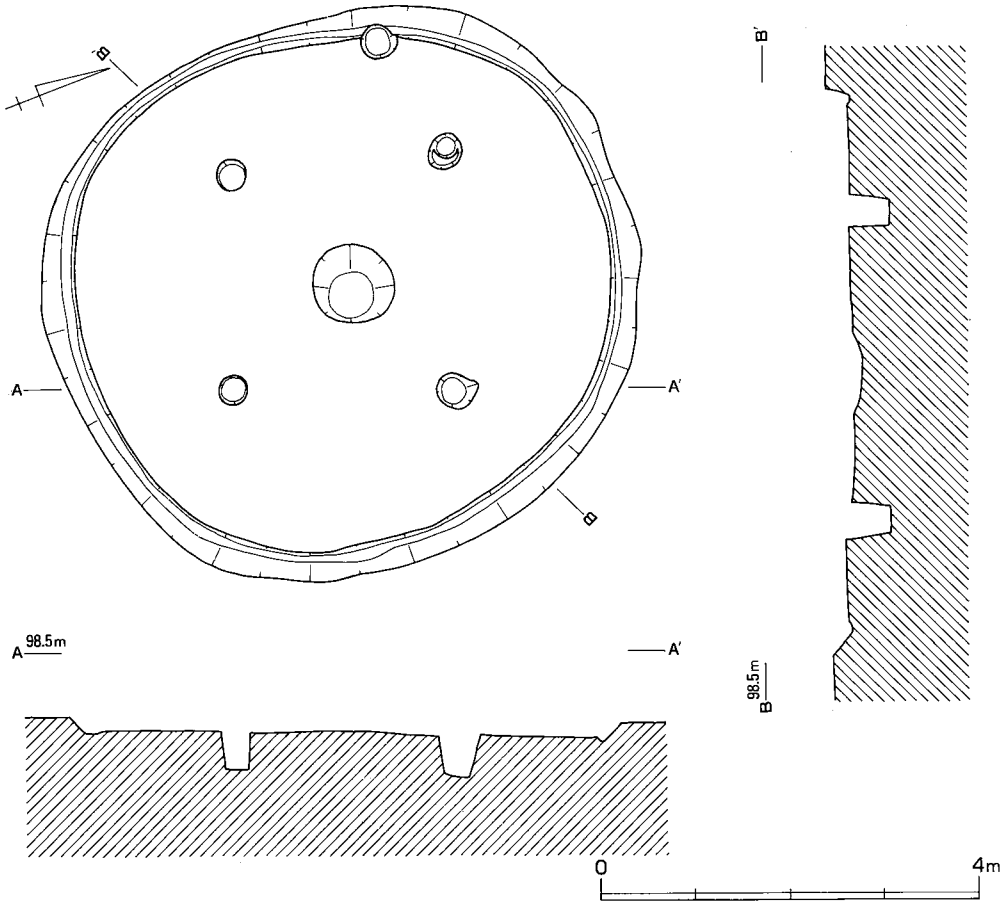
北群のほぼ中央に位置する円形の住居址である。北東部は極めて近い時期の攪乱によって消失し、南端部は上水道管が埋設されていたため、調査ができなかった。

東壁を除く壁下では壁溝が2重に検出され、建て替えあるいは2棟の住居址の切り合いが考えられる。内側の住居址を竪穴住居15－A、外側の住居址を竪穴住居15－Bとして記述する。

竪穴住居15－Aは径約13.7mの規模であり、東壁で最高約30cmまで遺存していた。東壁下と西壁下の一部を除く壁下には幅約15～28cm深さ8cmの壁溝が設けられている。床面は攪乱穴の他、西壁側も攪乱によって乱されている部分が認められている。

柱穴は6本が検出されたが、住居址に伴う柱穴は5本であろう。柱穴の大きさは径約25～40cmであるが、いずれも浅く深さ約3～10cmである。柱穴5本の配置は北東部で7m、南東部で8mと広く、検出した柱穴の深さが浅いことや攪乱壙の存在等から、北東部、南東部とも柱穴があったと想定される。したがって住居址に伴う柱穴は7本前後であったものと考えられる。

中央土壙は北西－南東に長い長方形プランであり、長辺約125cm・短辺約110cm・深さ約45cmを測る。埋土は少量の炭化物・焼土を含む灰褐色・黒褐色のシルト・粗砂であり、埋土の観察では掘り直しの形跡が窺えた。掘り直し後の土壙は長辺約105cm・短辺約35cmと一回り小さ



第21図　竪穴住居16

くなり、深さは約45cmで変化はない。

竪穴住居15－Ｂは径15.2ｍの極めて大型の住居であり、床面は竪穴住居15－Ａより15cm高くなっている。壁溝は幅約15cm・深さ約７cmであり、壁は最高約10cm遺存していた。この住居址に伴う柱穴は検出できていない。また中央土壙も検出されなかったが、竪穴住居15－Ａの中央土壙で窺えた掘り直し後の土壙がこの住居址に伴う可能性が高い。

竪穴住居15－Ｂに伴う柱穴が検出されなかったが、こうした中央土壙の様相や、さらに東壁を共有することなどからみて、床面に高低差はあるが、竪穴住居15－Ａ・Ｂの関係は建て替えであると考えられる。

遺物は壺Ｇ・高杯A_1・鉢B_1・台付鉢脚部等の土器類の他、擦り石・ガラス小玉１個出土している。ガラス小玉は内側の床面からの出土である。土器類の内、(118・120) は中央土壙の埋土上層から、(119) は竪穴住居15－Ａの床面直上から、(121) は住居址埋土からの出土であ

る。建て替えが行われていることから、当然時期差が考えられ、明確では無く、一応住居址の時期を第１・２段階としておく。

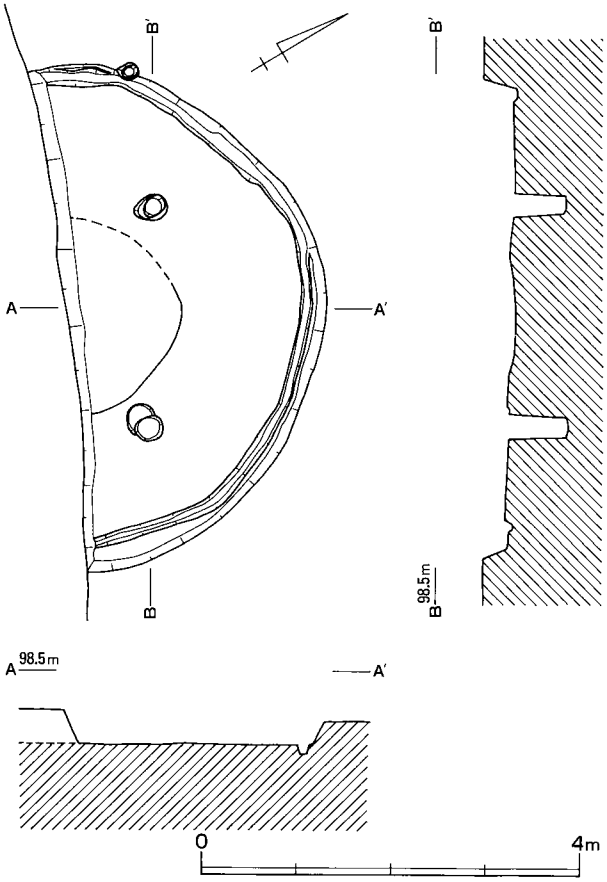
竪穴住居16（第21図）

北群に属し、竪穴住居15の東側で検出された小型の円形住居址である。住居址規模は、南北6.3m・東西5.9mであり、壁は最高約23cm遺存していた。壁下を全周して壁溝が設けられ、壁溝は幅約15cm・深さ約３～５cmの浅いものである。

床面は中央土壙の東側がやや低くなっていたが、他は平坦であった。柱穴は中央土壙を中心に方形に配置された４本が検出され、径は約30～40cm、深さは約30～40cmを測っている。

中央土壙はやや不整形な円形で、長軸45cm・短軸40cm・深さ約20cmを測る。内部には灰褐色のシルトが２層堆積しており、上層には炭化物が多量に含まれていた。

出土した遺物には壺Ａ２個体があるが、その内の（123）は南東隅の柱穴内に、落ち込んだ状態で出土している。



第22図　竪穴住居17

竪穴住居17

北群に属し、竪穴住居15の南側で北半部のみが検出された円形住居址である。住居規模や住居址の構造は竪穴住居16に類似している。住居址規模は東西が約5.4mで、南北は約2.25m検出されたが、平面形から見て東西もほぼ南北と同様の規模であったものと思われる。壁は最高約25cm遺存しており、検出できた部分の壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅約15cm・深さ約８cmであった。床面は壁溝から柱穴付近まではほぼ平坦であったが、柱穴付近から住居址の中央にむけて緩やかに傾斜していた。柱穴は２本が検出されたが、配置からみて検出できなかった部分にも２本が想定され、住居址にともなう柱穴は４本になるものと思われる。検出された柱穴の径は約25cm、深さは約55cmを測っている。時期的には第１ないし第２段階と考えられる。

第２節　弥生時代の遺物

１．概要

土器・石器・金属製品・ガラス製品がある。しかし土器以外の出土量は僅かで、石器４点、金属製品２点、ガラス製品は76点である。土器は竪穴住居址内と包含層から出土しているが、ここでは住居址内から出土したものだけを掲載している。他の製品は住居址内のみから出土しており、ここに掲載したものがほぼ全てである。

２．土器

竪穴住居址から出土した124 個体を掲載している。壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器・器台形土器・蓋形土器・手焙り形土器・ミニチュア土器があり、構成比率は壺形土器が17％、甕形土器が21％、高杯形土器が17％、鉢形土器が23％、器台形土器が８％、ミニチュア土器が５％、手焙り形土器・蓋形土器はともに１個体のみとなっている。壺形土器・甕形土器の占める割合が低く、鉢形土器・器台形土器の占める割合が高くなっている。

Ａ．分類

壺形土器

広口壺・二重口縁壺・長頸壺・直口壺・無頸壺・台付壺・小型壺の計19個体が出土しているが、出土量は少なく、完形で出土したものが少ない。そのため、分類は口頸部の形状によっている。

壺Ａ　いわゆる広口壺の内、口縁部が頸部から外反して開くもので、機内地方ではほぼ弥生時代の全期間を通じて見られるものである。口頸部の形態によってさらに細分することが可能であるが、出土個体数が少ないため、細分はしていない。

壺Ｂ　体部から口縁部が屈曲して単純に開くもので、広口壺の一種であるが、甕との区別がつきにくいものである。

壺Ｃ　いわゆる二重口縁壺である。屈曲後の立ち上がりは短く、外面には擬凹線文を施す。底部は突出した平底である。

壺Ｄ　いわゆる長頸壺である。全容を知り得るものは少ないが、頸部は比較的短く、体部長を越すものはないようである。

壺Ｅ　いわゆる直口壺である。口頸部の太さと長さの関係から、壺Ｄとは区別した。口縁部の形状から細分できる。

Ｅ$_1$ 口縁頸部が外上方に開き、端部が単純に丸く納まるもの。

E₂ 頸部から外反した後、内彎して立ち上がる口縁部がつくもの。

壺F　いわゆる無頸壺で、中位が強く張った体部から直立する短い口縁部がつく。

壺G　いわゆる台付壺である。中位が強く張った偏平な体部に、「ハ」の字状の脚が付く。

壺H　小型の壺で、体部から外反して開く口縁部をもつ。

甕形土器

25個体が出土しており、土器全体の約21％を占める。比較的完形に近いものもあり、全体の形状を知り得るものある。口縁部・体部の形状から以下に分類した。

甕A　体部から屈曲して開く口縁部をもつ甕で、体部の中位が強く張り、口縁部が内傾した面をもつもの。口縁部の形状によって3種に細分した。

A₁ 口縁端部を下方に拡張したもの。端面に擬凹線文を施す。

A₂ 口縁端部を上下に拡張したもの。端面に擬凹線文を施すものが多い。

A₃ 口縁部を上方に拡張したもの。端面に擬凹線文を施す。

甕B　体部から屈曲して開く口縁部をもつ甕で、体部は中位上が張って倒卵形に近く、口縁部は直立した面をもつもの。口縁部の形状から3種に細分した。

B₁ 口縁端部を上下に拡張したもの。端面に擬凹線文を施す。

B₂ 口縁部端部を上方に拡張したもの。口縁部は二重口縁状となるが、上方への拡張が小さいものと大きいものがある。端面に擬凹線文を施す。

甕C　体部から外反して開く口縁部を外上方に拡張したもの。頸部はのびて、直立ぎみとなり、口縁部は屈曲後外反して開く。

甕D　体部から屈曲して開く口縁部をもつ甕で、口縁端部を拡張しないものである。3種に細分できる。

D₁ 外反する口縁部が短いもの。端部は面をもつ。

D₂ 口縁部が外上方に伸びるもので、端部は肥厚して面をもつ。

D₃ 口縁部が直線的に外上方に伸びるもの。口縁部は中程で肥厚し、端部は波状となる。

高杯形土器

甕形土器についで多く、22個体の出土があり、土器総量の約18％を占める。杯部との形状から2種に分類した。

高杯A　口縁部が屈曲して開くものである。杯部・口縁部・脚部の形状から2種に細分した。

A₁ 口縁部が外反して開くもの。

A₂ 口縁部が上方に立ち上がった後、屈曲して外上方にひらくもの。

高杯B　小型で、杯部が浅い皿状となるものである。口縁部は杯部から屈曲して短く立ち上が

る。杯部の形状から２種に細分した。

鉢形土器

出土した土器の中では最も多く見られる器種で、なおかつバラェティーに富み、地域性が観取できるものである。体部と口縁部の形状から５種に分類した。

鉢Ａ　体部から屈曲して開く口縁部をもつものである。

鉢Ｂ　体部がそのまま伸びて口縁部となる小型の鉢である。体部と底部の形状から、２種に細分した。

Ｂ$_1$ 体部が直線的に伸び、底部は平底となるもの。

Ｂ$_2$ 底部が上げ底となるもので、体部が斜め上方に内彎気味に開くもの。

鉢Ｃ　体部に短い脚状の台をつけた、いわゆる台付き鉢で、体部の形状から２種に細分した。

Ｃ$_1$ 体部が横上方に開くもので、鉢部は口径に対し器高が低くなる。

Ｃ$_2$ 体部が斜め上方に開くもので、鉢部は口径に対し器高が高くなる。

鉢Ｄ　張った体部に、直立する短い口縁部が付くもので、２種に細分した。

Ｄ$_1$ 体部が張り、把手の付かないもの。

Ｄ$_3$ 中位が張った体部に把手が付くもの。

鉢Ｅ　偏平な体部から屈曲して口縁部が開き、口縁部はさらに屈曲して立ち上がるもので口縁端部は短く外反する。いわゆる近江系の土器で、口縁端部外面と体部の肩部を加飾する。

器台形土器

比較的完形のものが多く、出土量の８％を占め、この種の土器としては多くを占める。受部と脚部の形態から３種に細分した。

器台Ａ　脚柱部が直立して円筒状となり、受部は脚柱部から屈曲して開くものである。口縁端部の形状から２種に細分した。

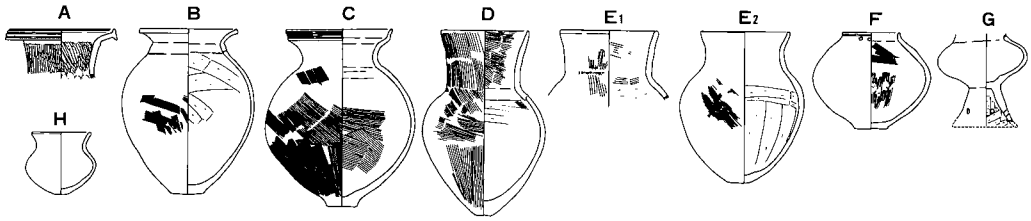
Ａ$_1$ 口縁端部を短く上方に拡張したもの。

Ａ$_2$ 口縁端部を下方に拡張したもの。

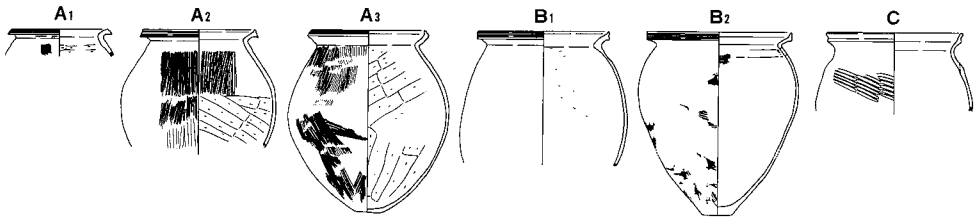
器台Ｂ　脚柱部が「ハ」の字状に開き、受部が脚柱部から外反して開くものである。口縁端部が内彎気味に拡張されほぼ直立するものと、口縁端部が斜め上方に拡張されたものがある。

器台Ｃ　脚柱部が上方に開き、逆「ハ」の字状となるもので、受部は内彎し、口縁端部下が僅かに下方に拡張される。

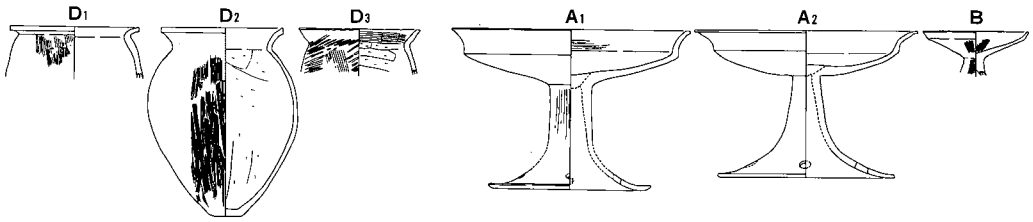
壺形土器



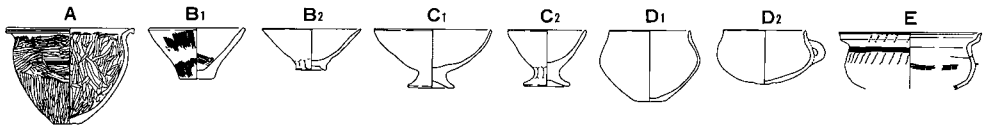
甕形土器



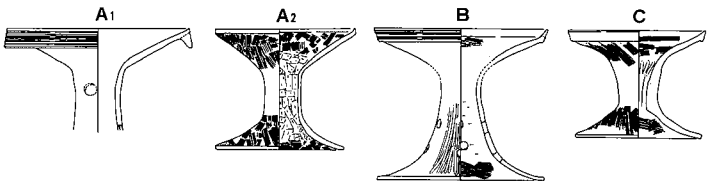
高杯形土器



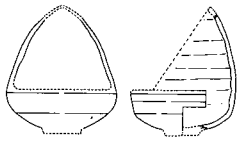
鉢形土器



器台形土器



手焙り土器



第23図　弥生土器分類図

B．出土土器

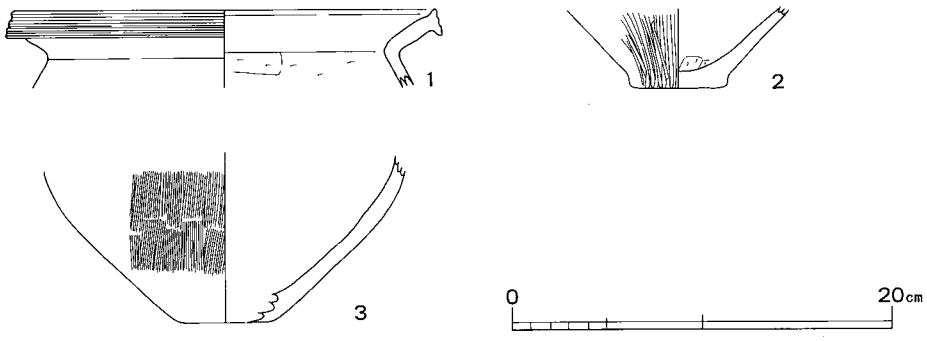
竪穴住居１出土土器（第24図）

甕の口縁部片と壺の底部が出土している。（１）は甕A_2で、口縁部は上下に拡張され、端面には３条の擬凹線文が施される。体部内面は頸部付近まで篦削りされる。口径約22.4cm。（２）は壺の底部片である。外面は篦磨き、内面は篦削りである。（３）は底部から体部の中位付近にかけての破片で、体部外面は刷毛、内面はナデ調整である。

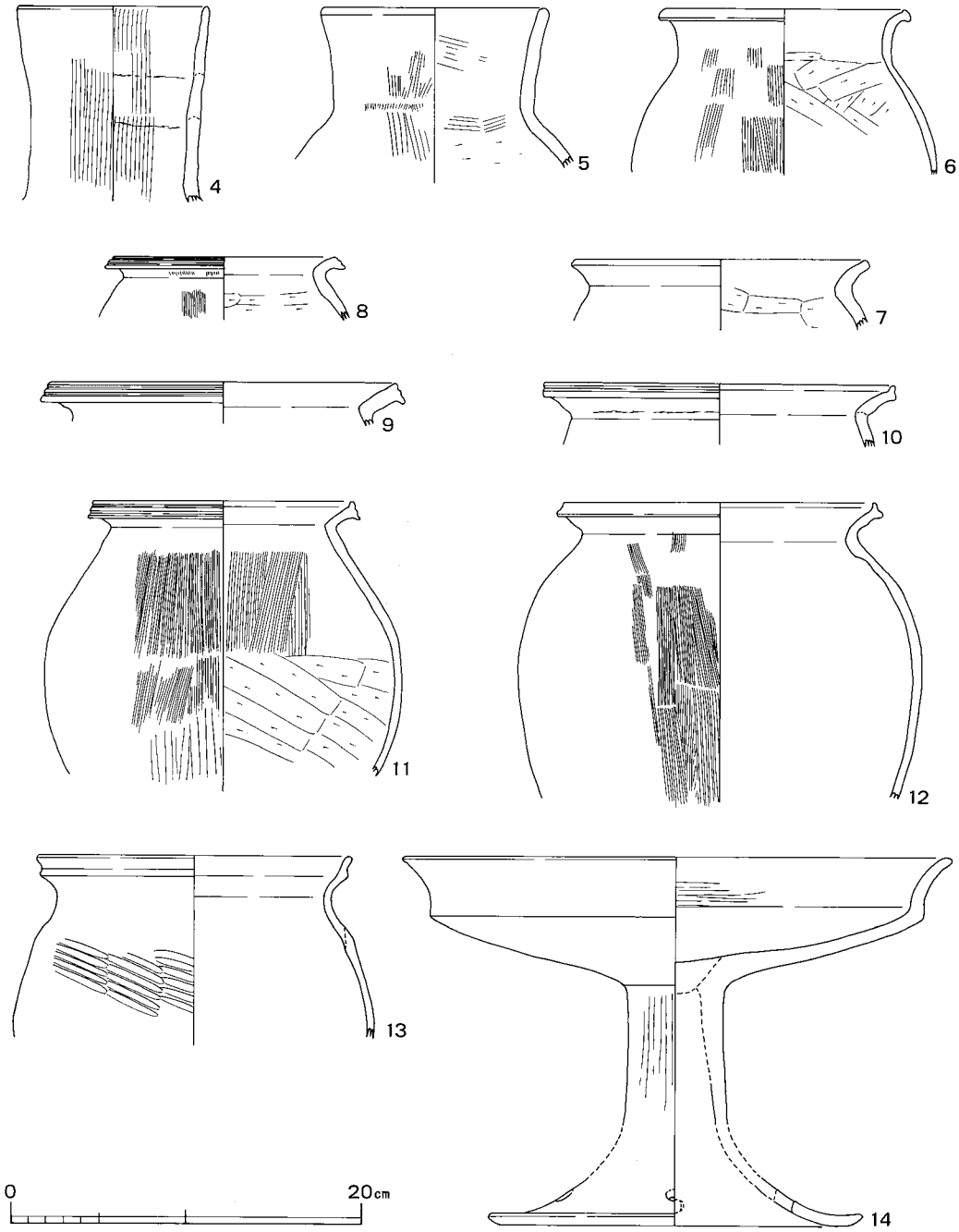
竪穴住居２出土土器（第25・26図）

壺・甕・高杯・鉢があり、器台は見当たらない。壺類には壺B_2・D_2・E_1が見られ、（４）はいわゆる長頸壺の口縁部で、壺D_2である。内外面を刷毛調整しているが、内面には粘土紐の接合痕が残る。口径10.6cm。（５）は壺E_1で、口縁部の内外面と体部外面は刷毛調整、体部内面は頸部付近まで篦削りする。口径12.5cm。（６）は壺B_2で、直立する短い頸部から口縁部が短く外反する。口縁端部は上下に肥厚する。体部外面は刷毛調整で、内面は頸部付近まで篦削りしている。

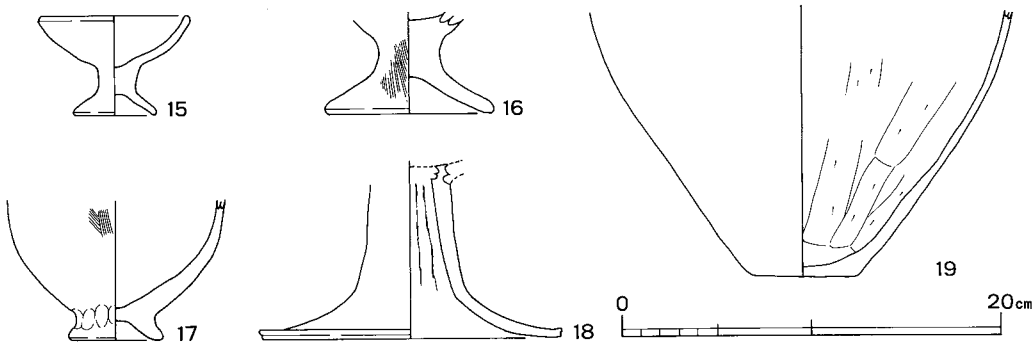
甕類には甕A_1・A_2・B_1・C・D_1がある。（８・９）は甕A_1で、口縁端部が下方に短く拡張され、端面には擬凹線文が施される。(8) は体部外面が刷毛調整、内面が頸部下まで篦削りである。（８）は口径が約7.0cmの小型の器形である。（９）は口径19.6cm。(11・12) は甕A_2である。ただ体部の形状が (11) と (12) とでは異なることから、別に分類した方がよいのかもしれない。(11) は体部の中位が張り、上下に拡張された口縁部の端面には擬凹線文が施される。体部の外面は中位より上が刷毛調整、中位以下は篦削り、内面は中位より上が刷毛調整で、中位以下は篦削りである。(12) は体部の肩が張り、最大径は体部中位の上にある。口縁部は中程が肥厚し、口縁端部は上下に拡張され、端面は凹線状となるが擬凹線文は施されない。体部外面は刷毛調整、内面は篦削りであるが、単位は不明。(10) は甕B_1で、口縁端部は



第24図　竪穴住居１出土土器



第25図　竪穴住居２出土土器（1）



第26図　竪穴住居２出土土器（2）

短く上方に拡張され、端面には擬凹線文が施される。(13) は甕Ｃで、頸部は伸びて、直立ぎみとなる。口縁部は屈曲後、外上方に拡張される。拡張のための貼り付け位置が擬口縁部の内側となっているため、屈曲部は突出気味となり、拡張された端面は凹面状に中央が窪む。外面には左上がりの叩き目が残り、内面はナデ調整である。（７）は甕Ｄ$_1$で、内面は篦削りである。

(14) は杯部が屈曲する高杯Ａで、口縁部の外反度は少ない。脚柱部は円筒状で、脚裾部は大きく開き、裾端部には面をもつ。口縁部内面と脚柱部外面に篦磨きの痕跡が残る。(18) も高杯Ａ類の脚部であるが、脚柱部が中空であることからみて、Ａ$_1$かＡ$_2$の脚部であろう。

鉢類には鉢Ｂ$_2$・Ｃ$_1$がある。(15) は鉢Ｃ$_1$に分類されるが、口径7.0cm・器高5.3cmと極めて小型であり、ミニチュア土器としてもよい器形である。(16) は鉢Ｃ$_1$の台部片で外面を刷毛調整している。(17) は口縁部を欠くが、底部が上げ底となった鉢Ｂ$_2$である。体部外面に刷毛目が僅かに残り、底部の周囲には指押さえの痕跡が残る。

(19) は甕の体部から底部にかけての破片で、内面は篦削りされている。

竪穴住居３出土土器（第27～30図）

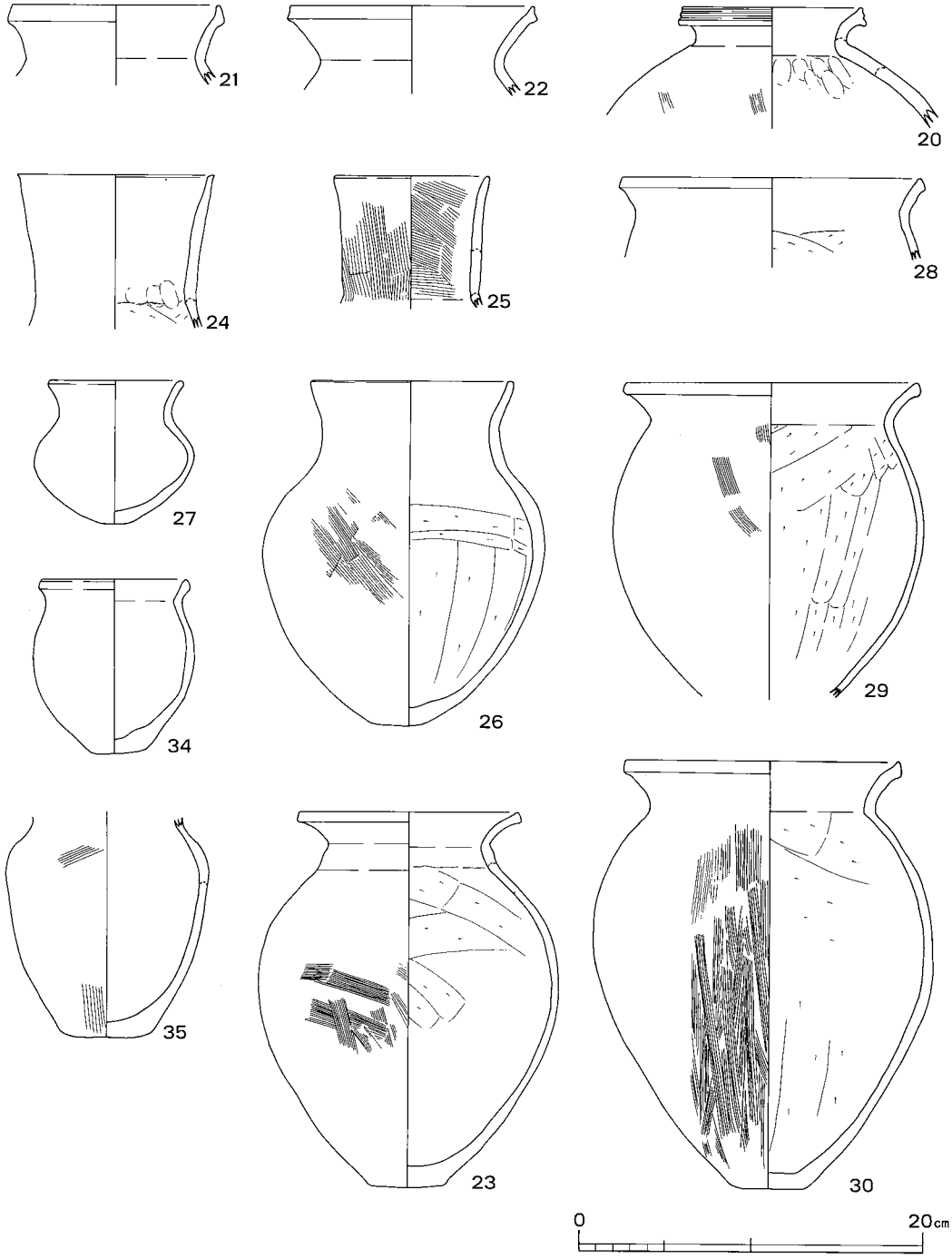
壺・甕・高杯・鉢・器台・ミニチュア土器が揃って出土している。壺類には壺Ａ$_2$・Ｂ$_1$・Ｂ$_2$・Ｂ$_3$・Ｄ$_1$・Ｄ$_2$・Ｅ$_2$・Ｈがある。(20) は短い頸部から口縁部が外反して開く壺Ａ$_2$で、拡張された端面は擬凹線文で加飾される。体部の外面に刷毛目の痕跡が残り、頸部内面には指押さえの痕跡が残る。体部の内面は篦削りである。(21) は外上方に伸びる頸部から口縁部が外反し、口縁端部が上方に拡張された壺Ｂ$_3$である。(22) は頸部が直線的に外上方に開いて口縁部となり、端部が上下に拡張された壺Ｂ$_2$である。(23) は壺Ｂ$_1$で、内傾する頸部から口縁部が外反して開く。口縁端部は、僅かに肥厚して面をもつ。体部の外面には刷毛目が残り、体部内面は篦削りである。(24・25) は壺Ｄで、(24) は口縁端部に面を持つ壺Ｄ$_1$、(25) は口縁端部が丸く納まる壺Ｄ$_2$である。(24) は頸部内面に指押さえの痕跡が残り、体部内面は篦削りである。(25) は内外面とも刷毛調整である。(26) は壺Ｅ$_2$で、頸部は内傾し、口縁部は頸部から一旦外反して開いた後、内彎する。口縁端部は僅かに面をもつ。体部外面には刷毛目が残

り、体部内面は最大径部以下を篦削りする。口径11.3cm・器高20cm。(27) は小型の壺Hで、偏平な体部に、単純に開く口縁部が付く。底部は小さな平底である。口径7.6cm・器高8.4cm。

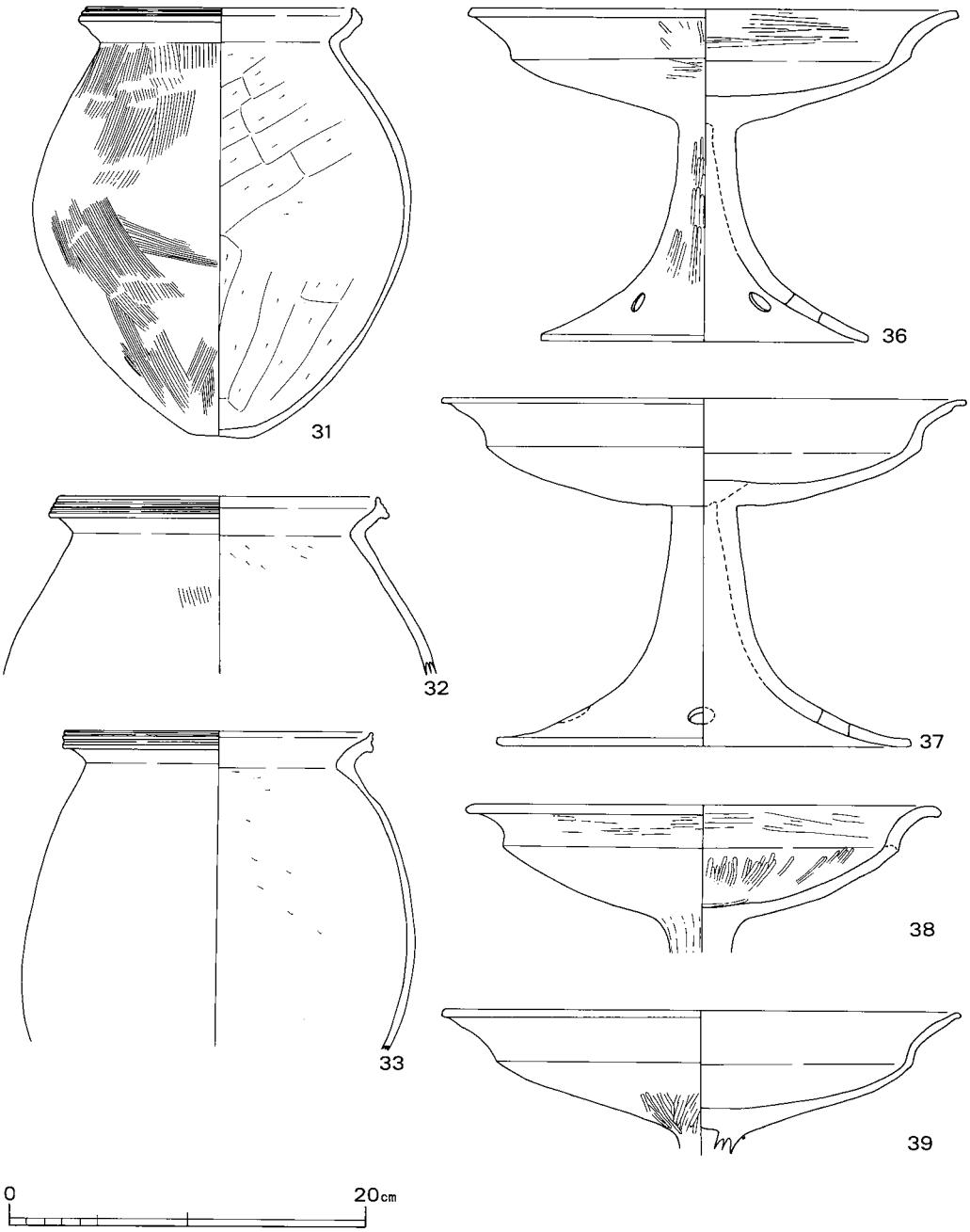
(28)～(35)は甕で、甕A_2・A_3・B_1・D_1・D_2が出土している。(28～30) は甕Dで (29) は甕D_1、(28・30) は甕D_2である。3個体とも口縁端部に面をもつ。(28) の外面の調整は不明であるが、(29・30) は体部外面を刷毛調整する。(30) は底部の外面まで刷毛調整される。体部内面は3個体とも篦削りであるが、(28) は篦削りが頸部の下で止まり、(29・30) は頸部まで篦削りする。(30) は口径15.9cm・器高24.9cm。(31・32) は口縁端部に内傾する面を持つ甕Aで、(31) は甕A_3、(32) は甕A_2である。(31) は体部の中位が張り、口縁部は内彎ぎみに開き、拡張された端面には擬凹線文が施される。体部の外面は刷毛調整で、内面は頸部まで篦削りである。口径14.9cm・器高24.2cm。(32) は甕A_2で、体部は肩部が張らず、斜め下方に直線的に下がる。拡張された口縁端面には擬凹線文が施される。体部の外面は刷毛調整の痕跡が残り、内面は頸部まで篦削りされる。(33) は甕B_1で、上方の拡張は摘み上げられる程度である。口縁端面には擬凹線文が施され、内面の篦削りは頸部にまで及ぶ。(34・35) は小型の甕である。(34) は甕D_2に分類され、口径8.3cm・器高10.2cmである。(35) は外面の一部に刷毛目が残る。

高杯類には杯部と口縁部の境が屈曲するA_1・A_2類、小型で杯部が皿状となるB類がある。(36・41～43) は高杯A_1で、(36・42) の杯部はやや内彎ぎみとなり、(41・43) の杯部は直線的に開く。口縁部は大きく外反し、端部は面をもつ。全容の知り得る(36・43) の脚部は中空で細い脚柱部から裾部は大きく外反して開き、(36) の裾端部は丸く納まり、(43) の裾端部は上反りぎみとなって面をもつ。(41) は杯部と口縁部の境の屈曲部に擬凹線文が施される。(36・43) は外面と杯部内面は篦磨き。(37～40) は高杯A_2で、杯部は内彎し、口縁部は中程で屈曲して開く。口縁部端部下に擬凹線文が施される。全容の知り得る (37) の脚部はA_1同様、脚柱部は中空で細く、裾部は大きく外反して開き、裾端部には面をもつ。(38・39) の杯部は内外面とも篦磨きされている。杯部が皿状となる高杯B類は (44・45) の2個体が出土しており、(44) は内彎ぎみに横上方向に開く杯部が内彎して口縁部となる。口縁端部は尖りぎみに丸く納まる。脚部は脚裾部を欠くが、脚柱部は細く中空である。口径13.6cm。(45) は杯部は横方向に開いた後、内彎しながら伸び、屈曲して口縁部となる。口縁端部は尖りぎみとなるが丸い。器壁は薄く、口径17.0cm。(46) は脚部から杯部にかけての破片で、脚部が比較的長いことから高杯に含めたが、鉢D_2類の台部の可能性もある。

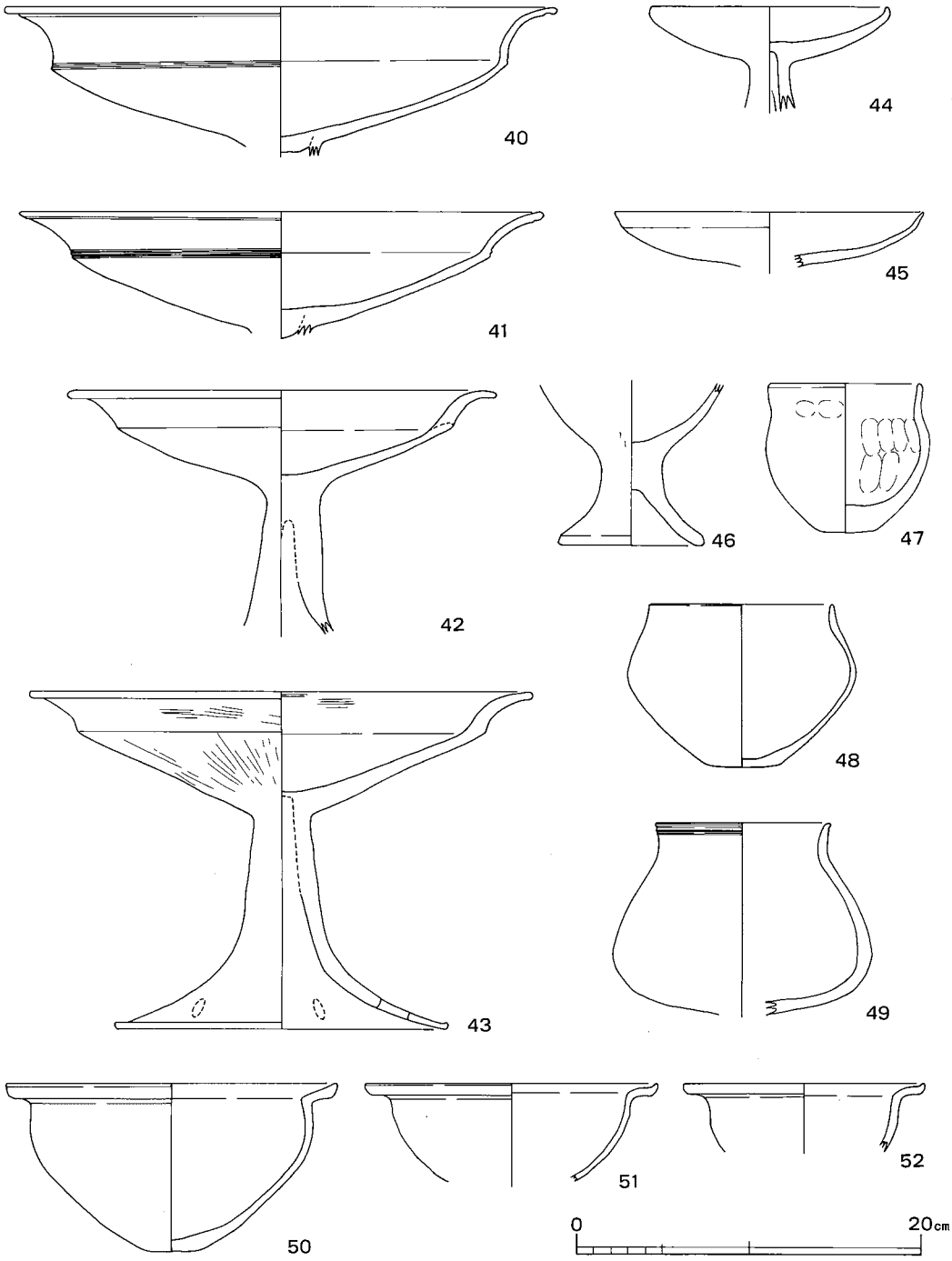
鉢類には鉢A・B・C_1・C_2・D_1がある。(50～52) は体部から口縁部が屈曲して開く鉢Aで、(50) は口縁端部が僅かに肥厚する。(51・52) は口縁部が水平に開き、口縁端部は上方に拡張される。口径に大小があるが極似した器形である。(53) は鉢Bとしたが、体部が屈曲が見られる。底部は小さな平底で、口縁部は体部から外反して開く。口径10.6cm・器高5.5cmの



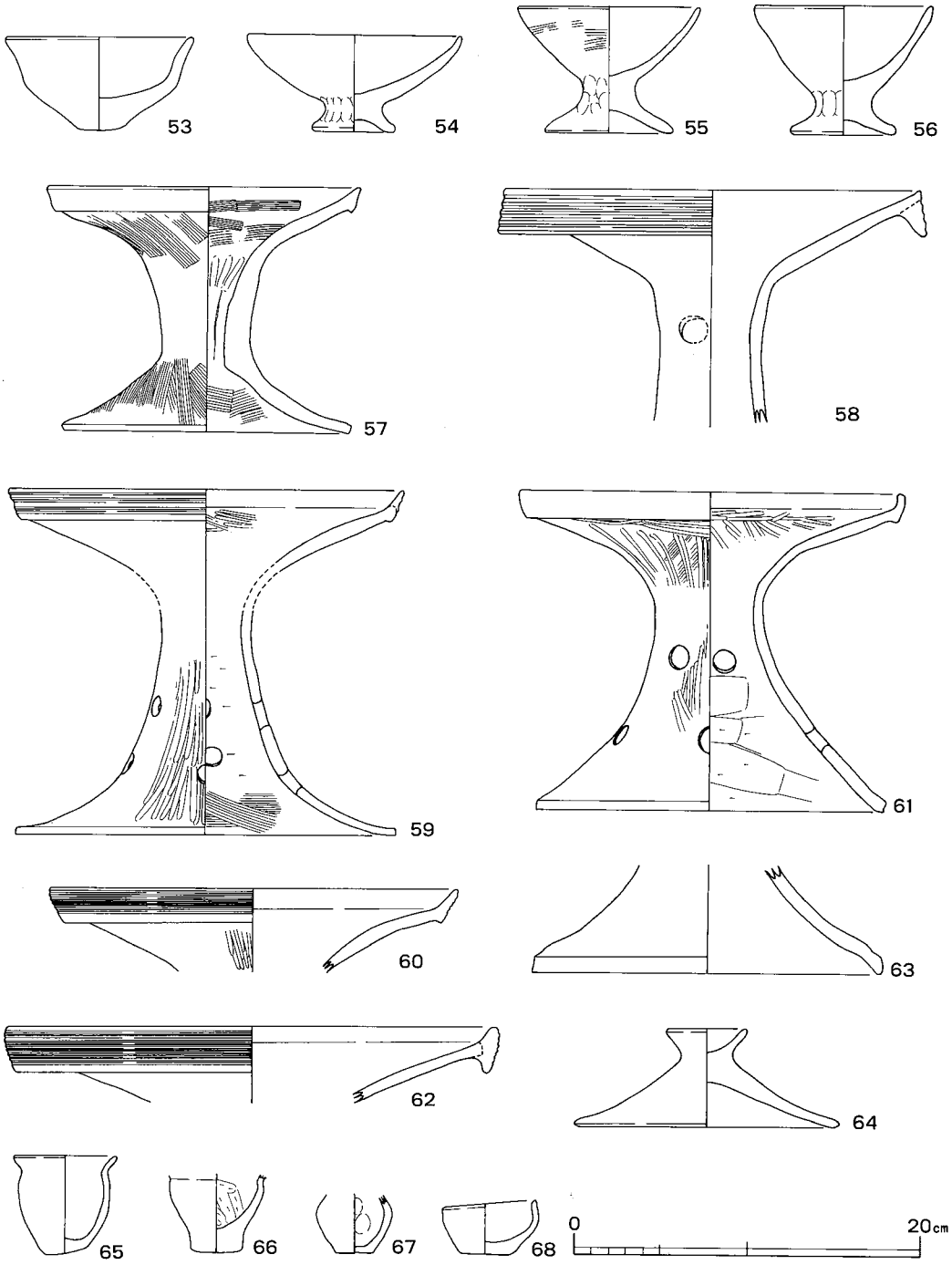
第27図　竪穴住居３出土土器（１）



第28図　竪穴住居３出土土器（２）



第29図　竪穴住居３出土土器（３）



第30図　竪穴住居３出土土器（４）

小型鉢である。(54) は鉢C$_1$で、横上方に内彎しながら伸びる浅い鉢部に、「ハ」の字状に開く低い台が付く。(55・56) は鉢C$_2$で、体部は内彎ぎみに斜め上方に開き、口縁部も僅かに内彎する。(56) は鉢部の中央付近が窪み、体部と口縁部の区別が比較的明瞭である。台部は低く、裾部は「ハ」の字状に開く。台部の外面には指ナデ痕が残る。(47～49) は体部にほぼ直立した短い口縁部がつく鉢D$_1$である。ただ3個体とも体部の形状は異なり、別個に分類される可能性もある。(47) は小型の器形で、口縁部は内彎ぎみとなり、体部は中位上が張る。頸部と体部内面に指頭圧痕が残る。(48) は中位上が強く張って偏平な体部に直立する短い口縁が付く器形で、底部は平底である。(49) は下位が強く張った下膨れの体部に僅かに外反する短い口縁が付く。口縁端部下には擬凹線文が施される。

器台類にはA$_1$・B・C類がある。(58) はA$_1$で、脚筒部が直立して円筒状となり、受部は脚部から屈曲して直線的に開く。口縁端部は僅かに内彎して下方に拡張され、拡張された面には擬凹線文が施される。(59～61) は脚筒部が下方に開きながら伸び、裾部が「ハ」の字状に大きく開く器台B類である。(59・60) は受部が外反ぎみに開き、口縁部は斜め上方に拡張され、そこに擬凹線文が施される。(61) は口縁端部が内彎ぎみに直立して拡張され、端面は無文である。(59・61) の脚部には2段8個の円形透孔が見られる。3個体とも外面の調整は箆磨きで、内面の調整は (59) が脚筒部は箆削り、裾部は刷毛調整、(61) は脚筒部から裾部まで箆削りである。(63) は「ハ」は状に開く脚裾部の破片で、裾端部は踏ん張るように内彎する。器台B類の脚片であろう。(57) は筒部が上方に開く器台Cで、受部は内彎しながら伸びそのまま口縁部となる。口縁端部は下方に拡張されて面をもつが、無文である。脚裾部は筒部から屈曲して開き、裾端部は面をもつ。受部と脚裾部は内外面とも刷毛調整で、筒部内面にはしぼり痕が残る。

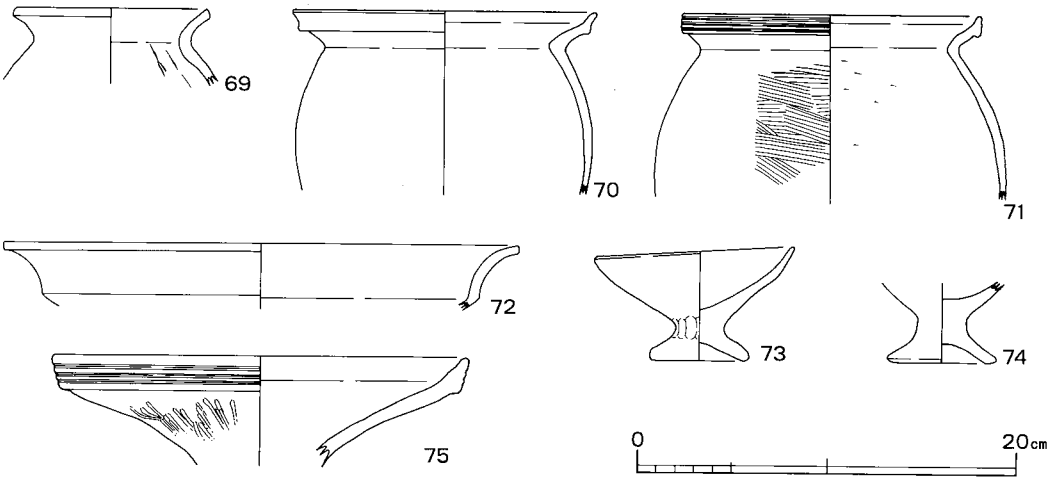
蓋形土器 (64) は1個体のみの出土である。笠部は内彎ぎみに下方に伸び、口縁部は僅かに外反して開く。つまみの頂部は凹む。口径14.7㎝、器高5.7㎝。

ミニチュア土器は4個体があり、(66) は口縁部を欠くが、(65・66) はともに甕形の、(67) も口縁部を欠くが壺形の、(68) は鉢形のミニチュア土器である。(66) の内面が箆削り調整される以外はすべてナデ調整で、(67) の内面には指押さえの痕跡が残る。

竪穴住居4出土土器 (第31図)

壺B・甕B・甕C$_2$・高杯A$_1$・鉢C$_2$・器台Bが出土している。(69) は口縁部が体部から外反して開く壺Bで、口縁端部には面をもつ。頸部から体部内面に指押さえの痕跡が残る。

(71) は甕Bで、丸みをおびた体部に、屈曲して開く口縁部がつき、口縁端部は小さく上下に拡張されて、端面には擬凹線文が施される。体部の外面は刷毛調整、内面は頸部まで箆削りである。(70) は甕C$_2$で、(71) 同様体部は丸みをおび、口縁部は体部から屈曲して開く。口縁端部は斜め上方に拡張されるが、端面は無文である。



第31図　竪穴住居４出土土器

(73・74) は鉢C_2で、(73) は体部が直線的開いた後、屈曲して口縁部となる。脚台は低い。

(74) は鉢部を欠いた、脚台部の破片であるが、脚柱部がやや伸びた形態である。

(75) は器台Ｂの受部で、受部は横上方に開き、内彎して口縁部となる。口縁部は端部下が下方に拡張され、端面には擬凹線文が施される。外面は篦磨き、内面の調整は不明である。

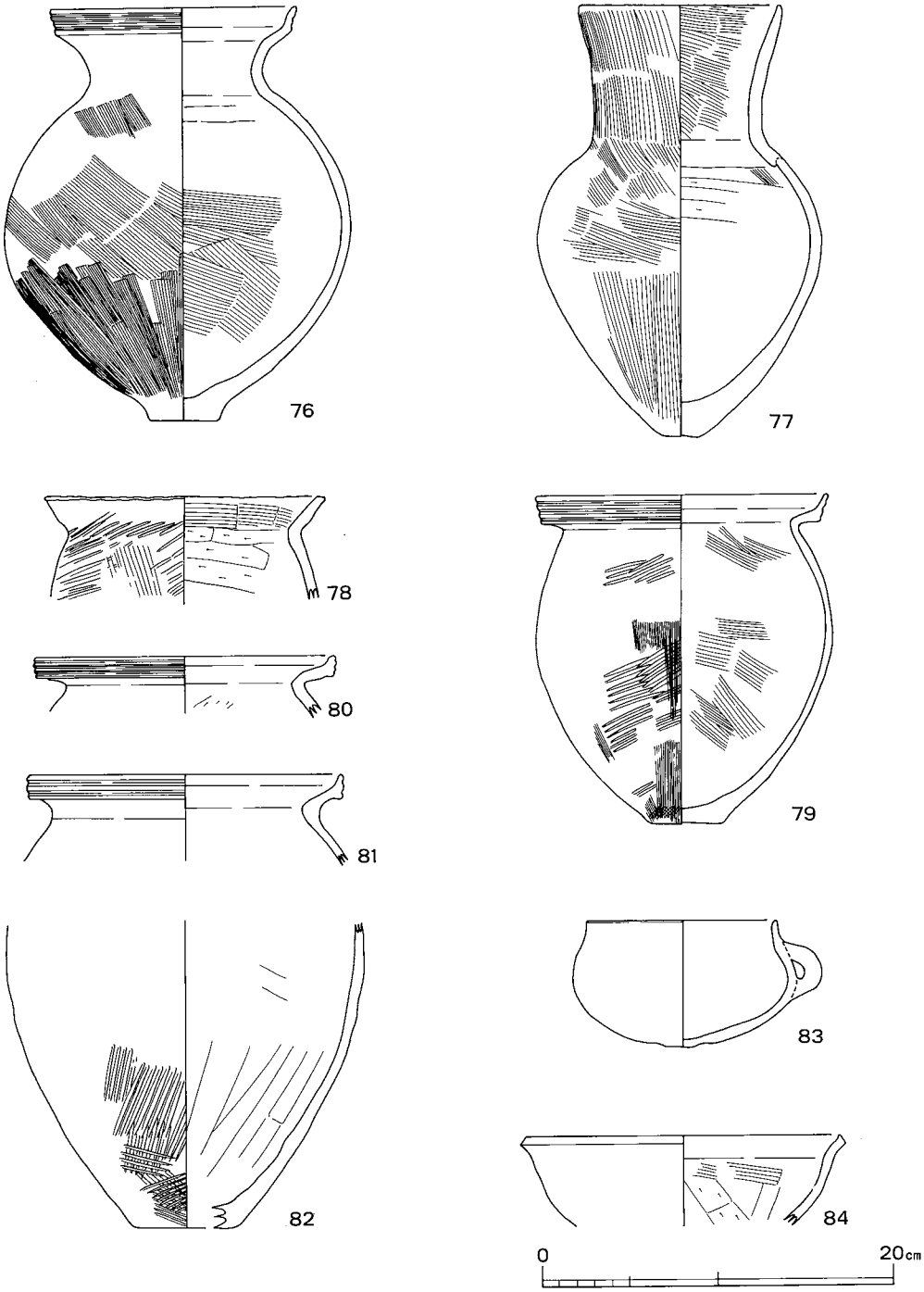
竪穴住居７出土土器（第32・33図）

壺Ｃ・壺Ｄ・甕B_2・甕D3 ・鉢Ａ・鉢B_2・鉢C_1・鉢D_2・鉢Ｅ・器台・ミニチュア土器が出土している。

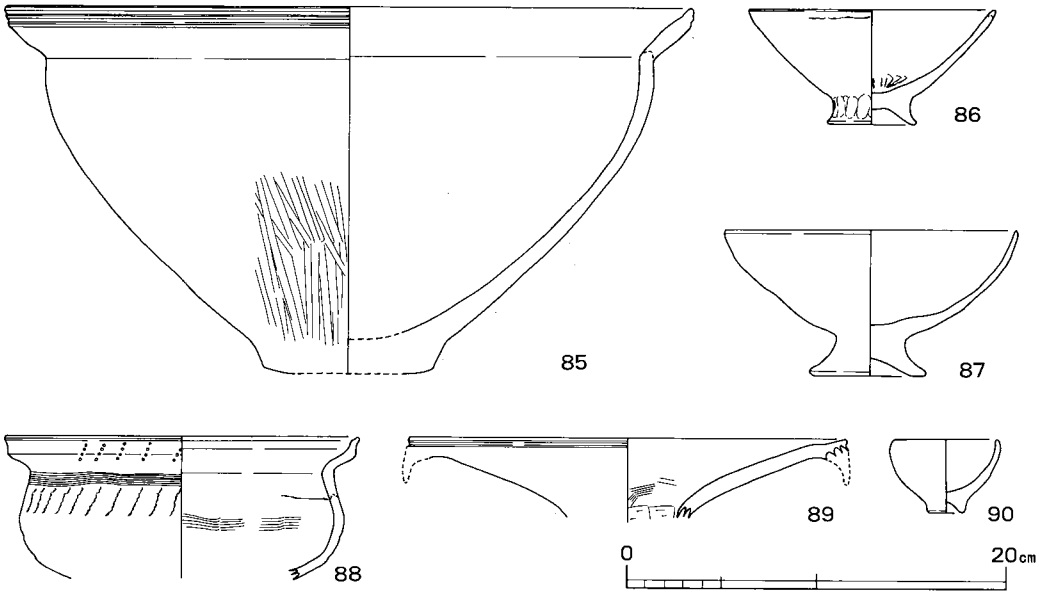
(76) は壺Ｃで、体部は丸みをおびて球形に近く、頸部は外反して外上方に開く。口縁部は頸部から屈曲して開いた後、再度屈曲して斜め上方に立ち上がり、口縁端面には擬凹線文が施される。底部は突出した平底である。調整は体部の内外面が刷毛調整で口縁部の内外面は篦磨きである。(77) は壺Ｄで、体部は中位上が張り、底部は小さな平底である。頸部は外上方に開きぎみに直立して伸び、そのまま口縁部となる。口縁部は僅かに内彎し、端部は丸く納められる。頸部内面から体部外面まで刷毛調整で、体部内面は篦削りである。

(79～81) は口縁端部を上方に拡張した甕B_2で、口縁部の拡張は (80) は摘み上げる程度で小さいが、(81)ではやや伸びて大きくなり、(79) は大きく拡張されている。３個体とも拡張された口縁端面に擬凹線文が施される。調整は (79) の体部が内外面とも刷毛調整で、(80) の体部内面は、篦削りである。(82) は甕の底部から体部にかけての破片で、外面には叩き目が残る。内面は篦削りである。

(84・85) は鉢Ａで、(84) は体部から口縁部が外反して開き、口縁端部は小さく上方につまみ上げられる。(85) は体部から屈曲して口縁部が開き、斜め上方に伸びる。口縁端部には擬凹線文が施される。調整は (85) の外面が篦磨き、(84) の体部中位から下の内面は篦削り、



第32図　竪穴住居７出土土器（１）



第33図　竪穴住居７出土土器（２）

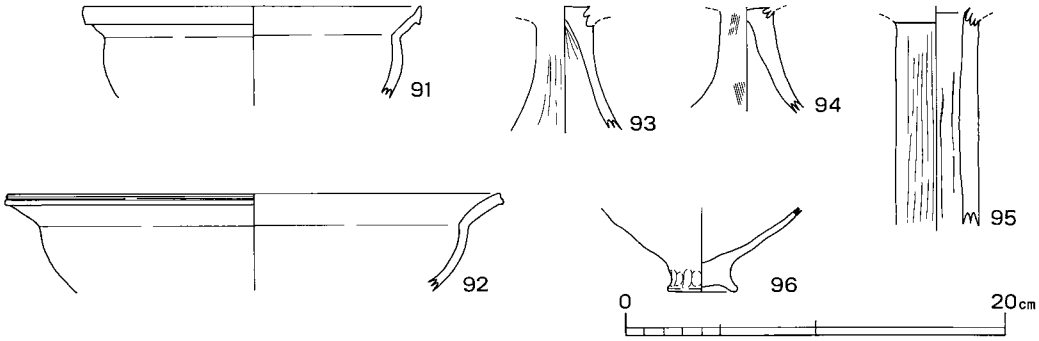
頸部下の内面は刷毛調整である。(86) は鉢Ｂ₂で、底部は小さな上げ底となる。底部の周囲には指押さえの痕跡が残る。(87) は鉢Ｃ₁で、体部は内彎しながら伸び、脚台は低い。(88) は鉢Ｅである。体部は偏平で、口縁部は屈曲して斜め上方に立ち上がり、端部は短く外反する。所謂受口状口縁を呈するものである。体部中位よりやや下がった位置に突帯の剥離した痕跡が見られ、口縁端部外面に列点文、頸部下に直線文、体部上半に列点文が施されている。施文具は径２～３㎜の孔をもつ、植物の茎等を利用した「櫛状工具」によるものと思われる。体部外面は篦磨き、内面の一部に刷毛調整の痕跡が残る。施文方法の点で一部異なる点もあるが、近江系の土器であろう。

(89) は器台の受部片であるが、脚部を欠く。受部は斜め上方に伸びた後外反して、水平方向に内彎しながら開く。口縁端部は下方に拡張されていたようであるが、拡張部分は欠く。口縁端部には擬凹線文が施されている。筒部上端の内面は篦削りで、受部内面の下端は篦磨きである。

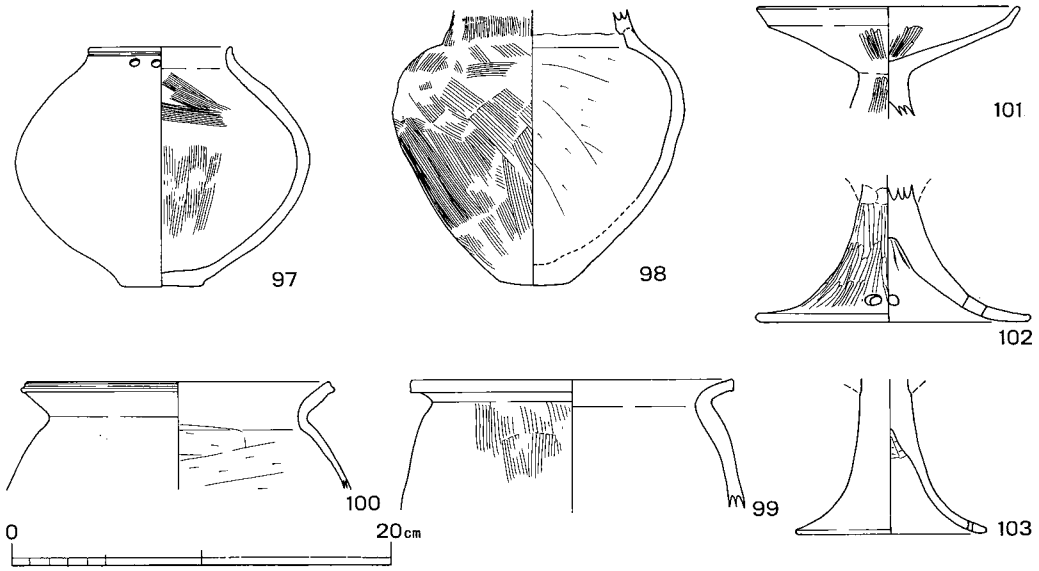
(90) は鉢形土器のミニチュアで、体部は内彎し、底部は小さな上げ底となる。ナデ調整。

竪穴住居８出土土器（第34図）

鉢Ａ・鉢Ｂ₂・高杯脚部片が出土している。(90・91) は鉢Ａで、(90) は口縁部が斜め上方へ直線的に伸び、端部は上下に拡張される。(91) は口縁部が外反して開き、端部は僅かに下方に拡張されて、口縁部の外面には擬凹線文が施される。外面に篦磨きの痕跡が残る。(96) は口縁部を欠くが、底部が上げ底となる鉢Ｂ₂の底部から体部の破片である。底部周囲の外面



第34図　竪穴住居８出土土器

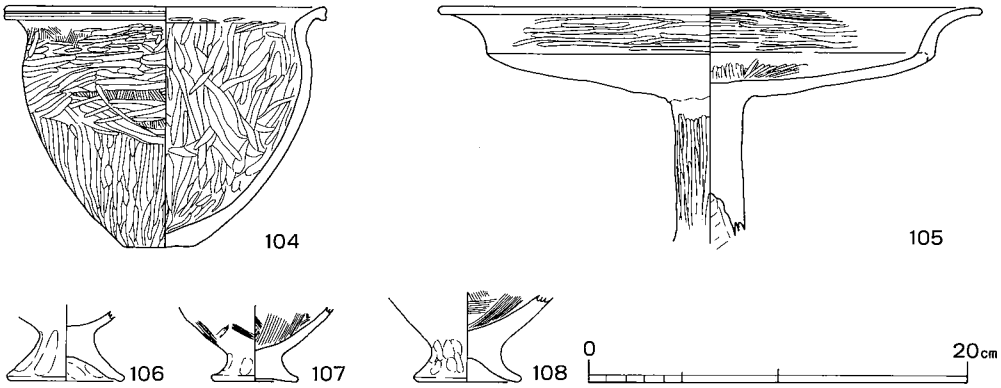


第35図　竪穴住居９出土土器

には指押さえの痕跡が残る。(93～95) は高杯の脚部片で、(93・94) は脚柱部が短く、高杯Ｂの脚であろう。(95) は長い円筒の脚柱部で、今回の調査では全容を知り得るものは出土していないが、丹後地方で多く見られる形態のものであろう。(93・95) の外面は篦磨きである。

竪穴住居９出土土器（第35図）

壺Ｅ・甕A_1・甕D_1・高杯Ｂ・壺体部・高杯脚部が出土している。(97) は体部は中位が張って球形に近く、底部は突出して比較的大きく、しっかりとした平底である。口縁部は体部から直立して短く立ち上がり、端部は丸く納められる。口縁部外面には擬凹線文が施され、２個１対の孔が設けられている。外面は篦磨き、内面は刷毛調整。(98) は口頸部を欠くが、壺の体部



第36図　竪穴住居10出土土器

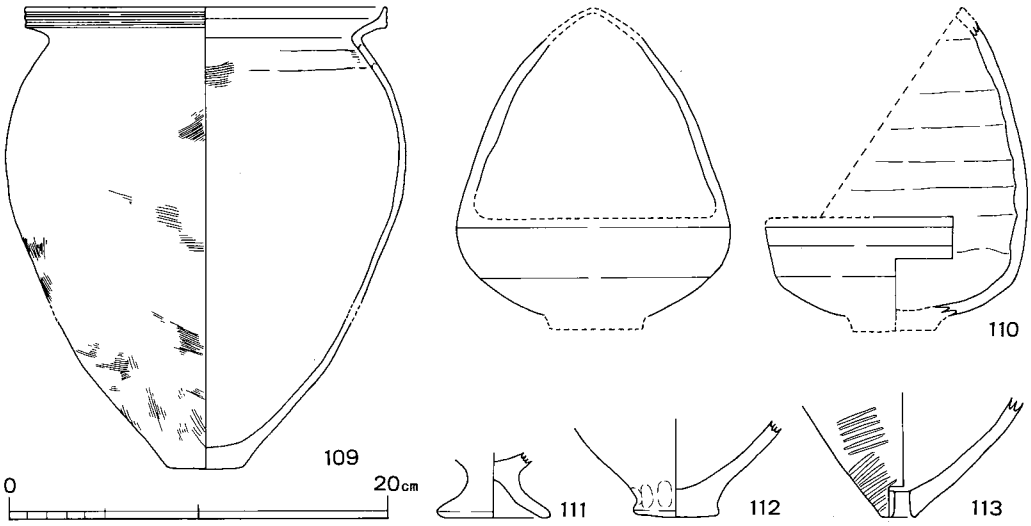
から底部にかけての破片である。外面は刷毛調整、内面は篦削りで、外面には煤が付着している。(100) は甕A₁で、体部から外反して開く口縁部の端部を下方に小さく拡張し、端部には擬凹線文を施している。外面の調整は不明だが、内面は篦削り。(99) は甕D₁で口縁部は体部から外反して開き、端部には面をもつ。外面は刷毛調整、内面はナデ。(101) は高杯Bで、杯部は横上方に直線に伸び、口縁部は体部から屈曲して外上方に短く開き、端部は丸い。調整は内外面とも篦磨き。(102・103) は高杯の脚部で、ともに脚柱部は中実で、裾部は外反して開く。(102) は短く「ハ」の字状に開く脚柱部から、裾部が大きく外反して開き、裾端部は丸い。裾部には4ケ所に透かし孔が穿たれている。外面は篦磨き、内面はナデ、脚柱部内面には絞り痕が残る。形状から高杯Bの脚と思われる。(103) は中実の脚柱部から裾部が緩やかに外反して開き、裾端部は丸い。裾端部付近に穿孔が1ケ所認められる。脚柱部の内面に篦削りが残る以外、調整は不明である。台付鉢等の脚台であろう。

竪穴住居10出土土器（第36図）

鉢A・高杯A₁・鉢Cの底部片が出土している。(104) は鉢Aで、体部は深く、底部は平底である。口縁部は外反して開き、口縁端部は下方に拡張されて、擬凹線文が施される。調整は内外面とも篦磨き。(105) は高杯A₁であるが、杯部は浅く、内彎して、横方向に開く。口縁部はいったん立ち上がった後、大きく外反して開き、口縁端部は丸くおさめられる。脚裾部を欠くが、脚柱部は細く中実で、裾部側から篦状工具によって抉られている。調整は杯部の内外面と脚柱部外面が篦磨きである。(106～107) は鉢Cの底部片である。体部を欠いており、分類上ははっきりしないが、鉢C₁の底部と思われる。台部の外面には指押さえの痕跡が残る。(106・107) の内面は刷毛調整、(107) の外面にも一部刷毛目が残る。

竪穴住居11出土土器（第37図）

甕B₂・手焙り形土器の他、鉢Cの底部・壺底部・有孔鉢の底部が出土している。(109) は甕B₂で、体部は中位の上が張り、口縁部は体部から屈曲して外反しながら斜め上方に開く。



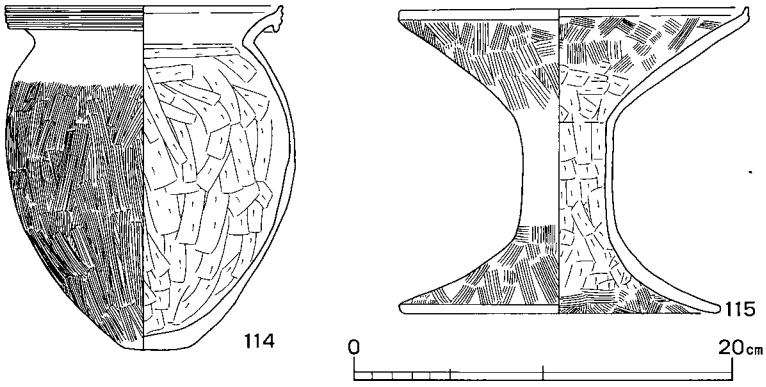
第37図　竪穴住居11出土土器

口縁端部は上方に拡張され、外面には擬凹線文が施される。調整は外面が刷毛調整、内面はナデ調整。(110) は手焙り形土器で、底部と天井部を欠く。砲弾形の体部に蔽部が開口したもので、底部は平底であったものと思われる。蔽部は一方に開口し、体部と蔽部の高さの比率は３：２となっている。調整は不明であるが、内面に粘土紐の接合痕が明瞭に残る。(111～113) は底部片で、(111) は鉢Ｃの脚台部片、(112) は壺の底部片で、底部の周囲に指押さえの痕跡が残る。(113) は有孔鉢の底部片で、外面に叩き目が残る。

竪穴住居12出土土器（第38図）

甕Ｂ$_1$・器台Ａ$_2$が出土している。(114) は甕Ｂ$_1$で、体部は中位のやや上が張るが丸みをおび、口縁部は体部から屈曲して外反しながら開く。底部はやや中央が膨れ、丸みをもつ。口縁端部は上下に拡張され、外面には擬凹線文が施される。調整は体部の外面が刷毛、体部上端付近から口縁部内面がナデ、体部の内面は箆削りである。

(115) は器台Ａ$_2$で、筒部は直立し、受部は筒部から外反して、斜め上方には直線的に伸び、口縁端部は上方に小さく拡

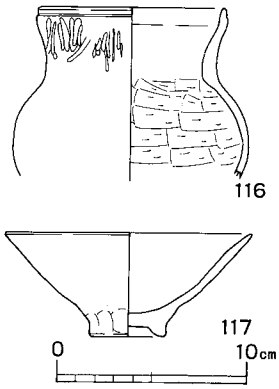


第38図　竪穴住居12出土土器

張される。口縁端部外面には擬凹線文の痕跡が残る。脚裾部は筒部から外反して開き、端部は丸く納められる。調整は受部と脚裾部の内外面は刷毛、筒部の内面は篦削りである。

竪穴住居13出土土器（第39図）

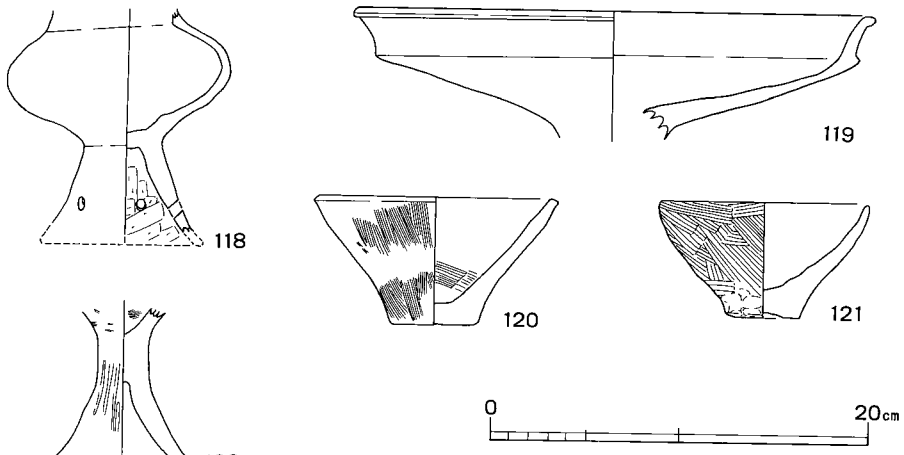
壺E$_2$・鉢B$_2$が出土している。(116) は壺E$_2$で、体部下半を欠くが、体部は球形で、頸部は外上方に外反ぎみに立ち、口縁部頸部から屈曲して直立する。口縁部外面には擬凹線文が施される。調整は口頸部の外面が篦磨き、体部の内面が篦削りである。(117) は鉢B$_2$で、体部はやや内彎し、口縁部は体部から僅かに外反して開く。口縁端部は薄く尖りぎみとなるが、丸く納められる。底部は上げ底となり、底部の周囲には指押さえの痕跡が残る。



第39図　竪穴住居13出土土器

竪穴住居15出土土器（第40図）

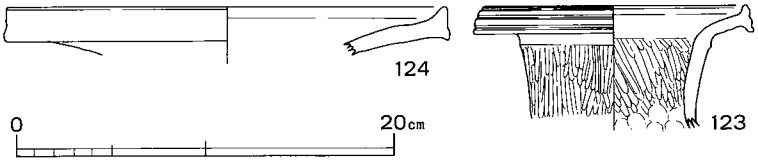
壺G・高杯A$_1$・鉢B$_1$・脚台が出土している。(118) は口頸部を欠くが、偏平な体部に「ハ」の字状の脚台が付く壺G、外面には篦磨きの痕跡が残る。脚台の内面は篦削り。(119) は高杯A$_1$であるが、口縁部の外反度は小さい。杯部は直線的に伸び、屈曲部は外側に短く突出する。口縁部は外上方に伸び、端部は短く外側に突出する。内外面に僅かに篦磨きの痕跡が残る。(120・121) は鉢B$_1$で、(120) は突出した底部から体部が直線手的に伸び、口縁端部には面をもつ。内外面とも刷毛調整。(121) は突出した底部から体部が内彎しながら伸び、口縁端部は丸く納められる。体部外面は刷毛、内面はナデ調整で、底部外面の周囲に指押さえの痕跡が残る。(122) は細く中実の脚柱部から裾部が「ハ」の字状に開き、裾端部は面をもつ。外面は篦磨き、底部内面は刷毛、脚部内面はナデ調整。



第40図　竪穴住居15出土土器

竪穴住居16出土土器（第41図）

壺Ａ２個体が出土している。(123) は頸部が外上方に開き、口縁部は頸部から外反して横上方に開く。口縁端部は上下に拡張されて面をもち、外面には擬凹線文が施される。頸部の内外面は篦磨きを施す。(124) は壺Ａの口縁部片で、口縁端部は上下に拡張され面をもつが、無文である。

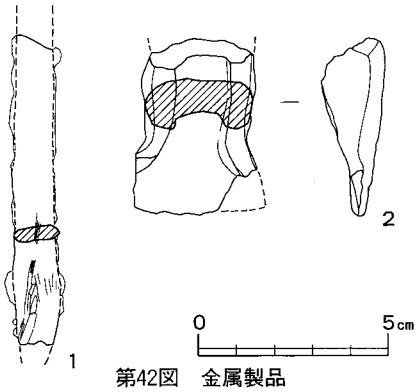


第41図　竪穴住居16出土土器

３．金属製品

鉄製品２点が出土している。いずれも竪穴住居址の埋土から出土したものであるが、遺跡が11世紀以降の遺構と重なっていることもあって、時期的には必ずしも明確ではないものである。

刃子　（１）は鉄製の刀子で、刃部の大部分と茎部の先端側を欠く。残存長約8.2cmで、刃部残存長約1.6cm・幅約1.4cm、茎部残存長約5.6cm・幅約1.1cm。刃部から茎部にかけて木質の痕跡が見られる。竪穴住居１出土。



第42図　金属製品

鉄斧　（２）は袋状鉄斧である。厚さ３mmの鉄板を折り曲げた鍛造品で、刃部の右隅と袋基部の両隅を欠くが、全長約4.8cmである。袋穂部は計測長約3.1cmで、基部での幅は2.8cmを測り、袋基部から刃部に向けて窄まる形となって、先端部は幅約2.7cmを測る。袋穂部の断面は隅丸方形を呈し、木質の痕跡が遺存してる。刃部は計測長約1.7cm、刃基部での幅約3.1cmで、肩部は明瞭である。刃部先端は錆化のため遺存状況は悪い。竪穴住居２出土。

４．石製品

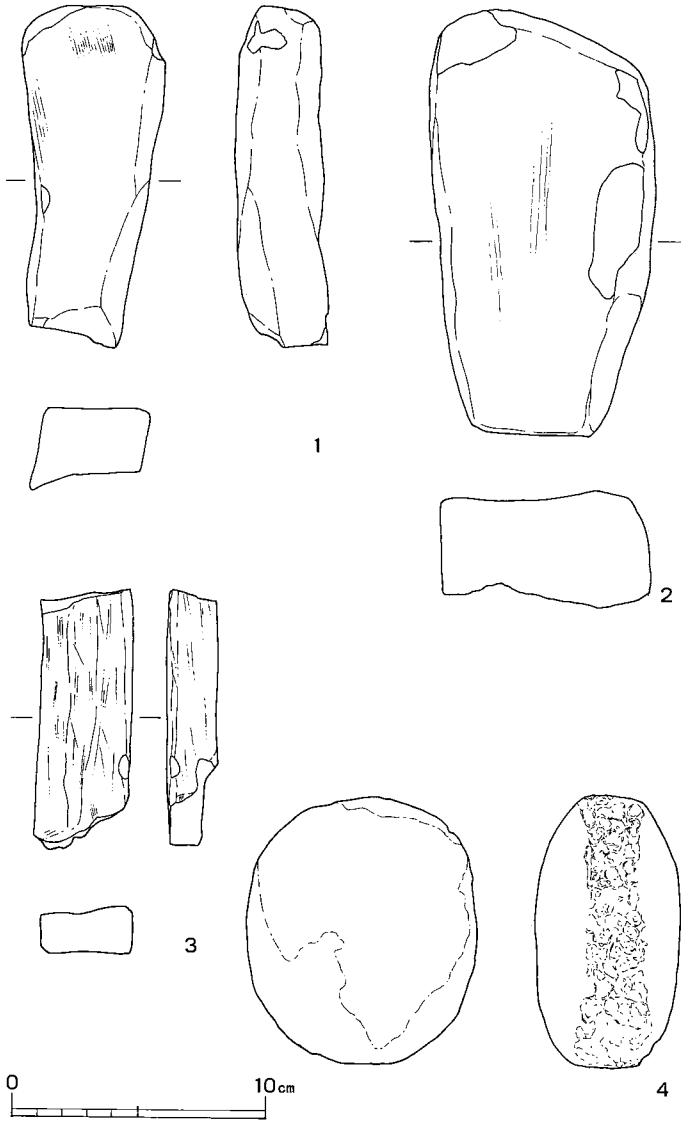
砥石３点と擦り石１点を掲載したが、他に竪穴住居３の中央土壙からも砥石が出土している。（１～３）は砥石である。（１）は両小口面を除く、４面が機能面で、表面には擦痕が観察でき、裏面には浅い半円形状の条痕が観察できる。全長約13.6cm・最大幅約5.7cm・厚さ約3.4cm。竪穴住居２出土。

（２）は大型の砥石で、裏面は欠けているためはっきりしないが、裏面を除く３面が機能面である。表面は中央が浅く皿状に窪み、擦痕が観察できる。全長約19.5cm・最大幅約13.3cm・厚さ約6.2cm。竪穴住居７出土。

（３）は両小口を欠くが、全長約10.2cm・最大幅約3.6cm・厚さ約1.9cmの砥石である。両小

口を除く4面が機能面で、表面には浅い溝状の条痕が観察できる。裏面は使用のため中央が皿状に浅く窪み、多数の擦痕が観察できる。両側面にも多数の擦痕が残る。竪穴住居11出土。

（4）は表裏面を擦り石として、小口面を敲き石として利用したものである。全長約10.8cm・最大幅約9.1cm・厚さ約5.6cm。竪穴住居15出土。



第43図　石製品

5．ガラス製品

ガラス小玉が74個が出土している。（1～66）は竪穴住居2出土、（67～69・71～73）は竪穴住居9出土、（70）は竪穴住居3出土、（74）は竪穴住居15出土である。色調は4種に大別でき、コバルトブルー3個・淡青色30個・青色26個・青緑色15個となっているが、淡青色と青色は微妙な変化である。コバルトブルーの玉は径が3～4㎜、重量も0.02～0.07gと小型で軽いものである。重量では最軽量0.02g、最重量0.31gであるが、59個が0.03g～0.09gであり、1.0gを越すものは12個、0.02gのものは3個となっている。

径は最小2.2㎜（5）から最大6.4㎜（3）であるが、2.8㎜～5㎜までの間に64個が集中している。とくに径2.8㎜～3.3㎜前後に16個、3.8㎜～4.0㎜前後28個が存在している。その他3.5㎜前後、4.5㎜前後、5.0㎜前後、6.0㎜前後にも少数ではあるがまとまって存在している。厚さは最小2㎜から最大6㎜となっており、4㎜以下のものが64個と多く、それを越すものは10個となっている。径ほどの規則制は見られないが、それでも2㎜前後、3㎜前後、4㎜前後に

まとまる傾向があり、その他５㎜前後、６㎜前後にも少数が存在している。

玉の径と厚さの関係で見れば、径2.8㎜～5.0㎜・厚さ2.0㎜～4.0㎜に60個が分布し、その範囲をはみ出すものは14個あるにすぎない。また径と厚さの関係では径に対し厚さが薄く径厚指数が77以下のもの48個（小玉Ⅰ類）と、厚さが厚く径厚指数がそれ以上のもの26個（小玉Ⅱ類）がある。小玉Ⅰ類は径厚指数が67前後である。径が3.0㎜～4.0㎜・厚2.0㎜～3.6㎜の小型のものと、径が6.0㎜・厚さ2.6㎜～4.0㎜の大型のものが存在している。また少数ではあるが径厚指数が43前後の薄い１群が存在しており、別個に分類できる可能性がある。小玉Ⅱ類の26個はほぼ径と厚さが等しい径厚指数100前後を中心に分布し、小玉Ⅰ類と同様、径2.8㎜～4.㎜・厚さ3.0㎜～4.5㎜の小型のものと、径5.0㎜～6.4㎜・厚さ4.5㎜～6.0㎜の大型のものが存在している。

実体顕微鏡による観察では玉Ⅰ・Ⅱ類の玉内部は球形の気泡が連続的に縦方向に伸びるものと、気泡そのものが縦方向に伸びたものがある。また表面観察では表面に見える気泡孔の周囲に微細なガラス片の付着が観察された。これは玉Ⅰ・Ⅱ類ともにみられたが、特に玉Ⅰ類の二次的な処理が行われたものに多く見られる傾向がある。

なお奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に実施して頂いた分析結果は、弥生時代に多く見られるカリガラスであった。

表１　国領遺跡出土のカリガラス　　※（――）は検出限界以下を示す。（重量：％）

試料番号	ガラスの色	SiO_2	Al_2O_3	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	TiO_2	Fe_2O_3	CuO	MnO	Co	Pb
小玉027	淡緑透明	74.6	3.1	0.8	15.89	0.95	0.96	0.13	0.75	1.978	0.036	――	0.502
小玉052	淡緑透明	75.1	3.3	2.0	13.74	1.29	0.82	0.07	0.89	1.822	0.011	――	0.492
小玉066	緑透明	72.6	2.9	3.2	14.39	1.39	0.88	0.14	1.03	2.474	0.019	――	0.547
小玉026	淡青色透明	77.0	3.2	1.9	12.63	1.52	0.66	0.19	0.82	1.424	0.019	――	0.264
小玉031	淡青色透明	74.2	3.0	1.9	16.36	0.71	0.79	0.18	0.86	1.428	0.010	――	0.266
小玉002	青紺半透明	73.8	3.1	1.9	16.22	0.86	1.34	0.16	1.25	0.015	1.290	0.061	――
小玉001	紺紫半透明	72.6	3.0	1.6	16.81	0.63	1.24	0.15	1.75	0.025	2.106	0.083	――
小玉003	紺紫半透明	73.5	3.1	2.1	15.18	0.92	1.19	0.13	2.10	0.020	1.647	0.094	――

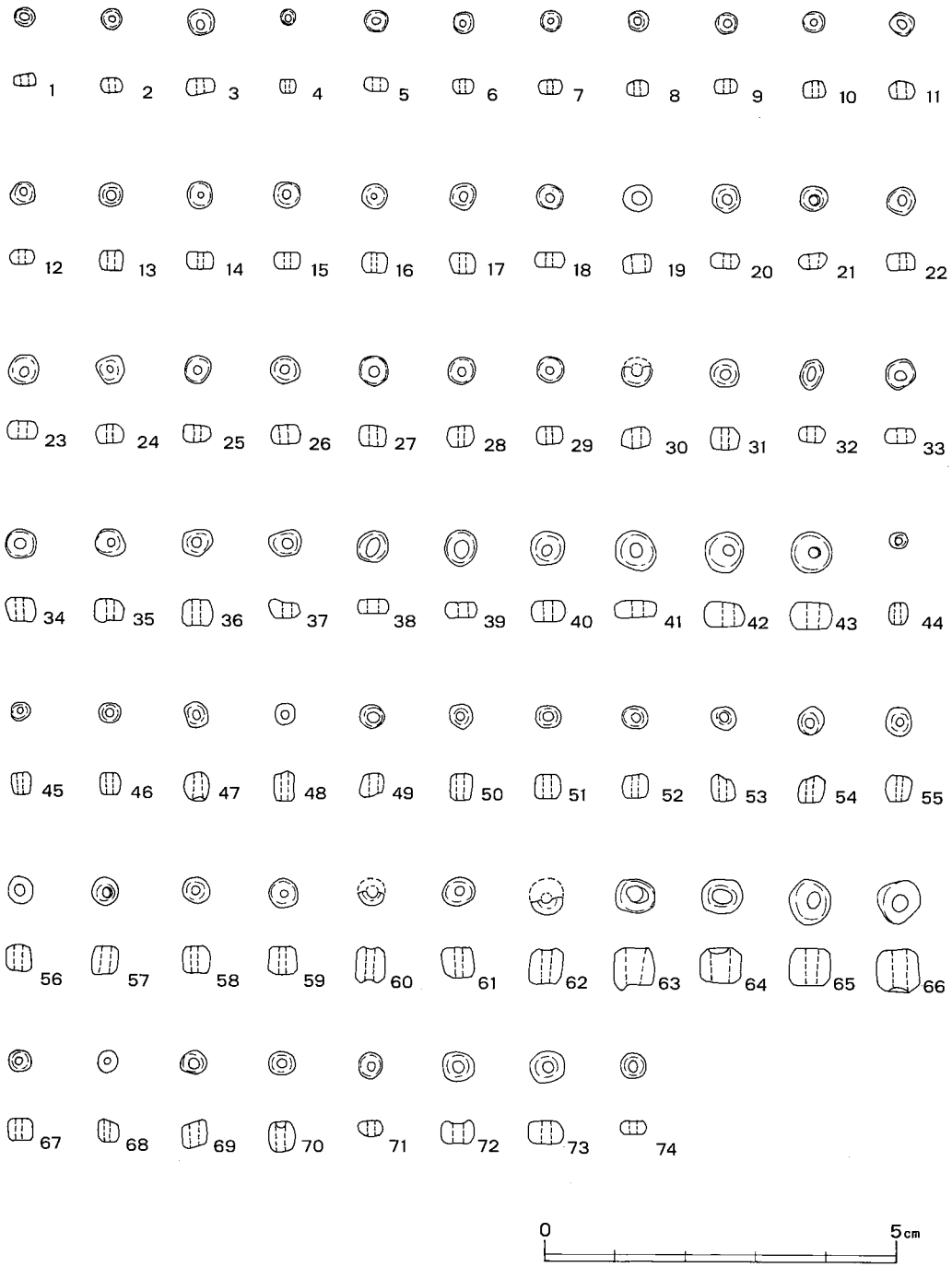
註

ガラス小玉の分析にあたっては、遺物を変色させる心配のない微小領域ED蛍光X線分析装置を使用し、74点の小玉のうち色調の異なる８点を選び実施した。分析における測定条件は下の通りである。

X線管：Mo　X線管電圧：20～40Kvp　X線管電流：４～0.3mA　検出器：SSD　Si（Li）

計数時間：500～100sec　コリメーター：１㎜　条件：真空中

なお定量計算にはEP法により、標準試料としてアルカリガラスおよび鉛ガラス標準試料12種類を用い、ガラス表面の風化層を除去した後に測定を行っている。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
0
5cm

第44図　ガラス製品

表２．ガラス小玉径厚分布

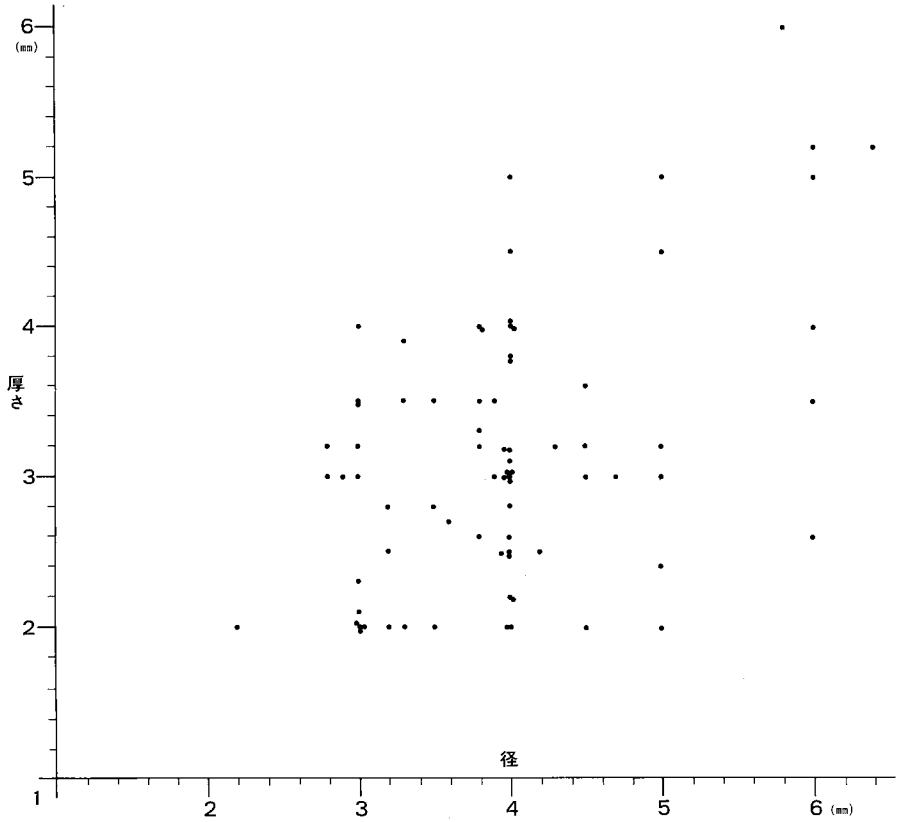


表３．ガラス小玉重量グラフ

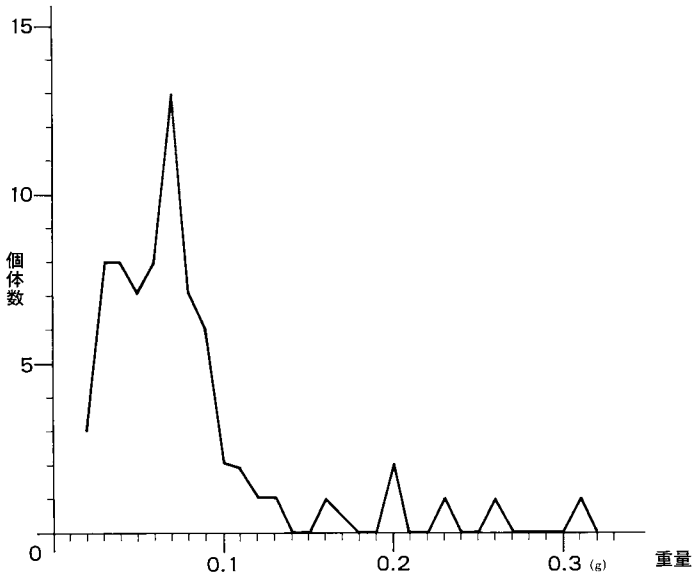


表４．ガラス小玉計測表

番号	色　調	径（㎜）	厚さ(㎜)	孔径㎜	重量ｇ	番号	色　調	径（㎜）	厚さ(㎜)	孔径㎜	重量ｇ
1	ゴバルトブルー	3.00	1.5～2.0	1.2	0.02	38	青緑	5.00	2.00	2.50	0.06
2	ゴバルトブルー	3.00	2.10	1.0	0.03	39	水色	4.3～5.0	2.40	2.60	0.06
3	ゴバルトブルー	4.00	2.5～3.0	1.0	0.07	40	水色	5.00	3.00	1.50	0.11
4	青	2.20	2.00	1.0	0.02	41	青緑	5.2～6.0	2.60	1.80	0.13
5	水色	3.00	2.00	1.15	0.03	42	水色	5.5～6.0	3.50	1.50	0.16
6	水色	3.00	2.00	0.90	0.04	43	水色	6.00	4.00	2.00	0.2
7	水色	3.00	2.00	1.00	0.03	44	青	2.2～2.8	3.00	1.20	0.02
8	水色	3.00	2.30	1.00	0.03	45	青	2.80	.3.20	0.90	0.04
9	水色	3.20	2.00	1.00	0.03	46	青	2.90	3.00	1.20	0.03
10	水色	3.20	2.50	1.20	0.03	47	青	.3.0～3.5	4.00	0.80	0.07
11	青	3.20	2.80	1.75	0.04	48	青	3.00	4.00	1.00	0.07
12	青	3.50	2.00	1.10	0.04	49	青	3.20	3.0～3.5	1.80	0.05
13	水色	3.50	2.80	1.50	0.05	50	青緑	3.30	2.90	1.10	0.07
14	青緑	3.60	2.70	0.80	0.06	51	青	3.2～3.5	3.50	1.20	0.06
15	水色	3.90	2.60	1.30	0.06	52	淡緑	4.00	3.20	1.20	0.08
16	青緑	3.80	3.20	0.90	0.06	53	水色	3.80	4.00	1.20	0.07
17	水色	3.90	3.00	1.10	0.07	54	青	3.8～4.0	3.2～3.8	1.20	0.07
18	水色	4.00	2.00	1.20	0.04	55	青	3.8～4.0	3.80	1.00	0.09
19	青	4.00	3.00	1.75	0.05	56	青	4.00	4.00	1.50	0.08
20	青緑	4.00	2.20	1.20	0.05	57	青緑	4.00	4.00	1.20	0.09
21	水色	4.00	2.20	1.80	0.04	58	青	4.00	4.00	1.20	0.10
22	水色	4.00	2.50	1.20	0.07	59	青	4.00	4.50	1.20	0.11
23	水色	4.00	2.50	1.30	0.08	60	青緑	(4.00)	5.00	(1.5)	0.05以
24	青緑	4.00	2.60	0.80	0.09	61	水色	5.00	4.50	1.00	0.12
25	青	3.8～4.0	2.3～2.8	1.20	0.06	62	水色	(5.00)	5.00	(1.8)	0.08以
26	青	4.00	3.00	1.50	0.07	63	青	4.8～5.8	6.00	2.75	0.23
27	淡緑	4.00	3.10	1.60	0.08	64	青緑	5.0～6.0	5.00	2.65	0.20
28	青緑	4.00	3.00	1.00	0.07	65	青	6.00	5.20	1.80	0.26
29	水色	4.00	3.00	1.00	0.06	66	緑	6.00	6.20	2.20	0.31
30	青緑	(4.00)	3.20	1.20	0.07以	67	水色	.3.00	3.00	1.00	0.05
31	青	4.00	3.20	1.30	0.08	68	水色	2.8～3.0	3.0～3.5	1.00	0.04
32	青緑	3.2～4.2	2.2～2.5	2.05	0.05	69	水色	3.80	3.50	1.50	0.05
33	青	4.50	2.00	1.75	0.07	70	青	3.2～3.8	4.00	1.15	0.09
34	青	4.50	3.50	1.80	0.08	71	水色	3.5～4.0	2.50	1.00	0.04
35	青緑	4.50	3.20	1.00	0.08	72	青	4.00	3.20	1.80	0.09
36	青	4.50	4.00	1.50	0.09	73	青	4.5～5.0	3.20	1.80	0.10
37	水色	4.0～4.7	2.2～3.0	2.0	0.07	74	水色	3.30	2.00	1.00	0.03

第３節　中世の遺構

１．概　要

中世の遺構は、平安時代後期から鎌倉時代前半に比定される掘立柱建物跡、縦板組井戸、土壙（木棺墓・土壙墓・土坑）、溝が確認された。その内訳は、掘立柱建物址26棟、土壙24基（木棺墓８基・土壙墓４基・土坑14基）、溝２条である。これらの遺構は、調査区のほぼ全域に広がるが、北は東西に走る溝１によって限られる。以下各々の遺構について概要を述べる。

２．掘立柱建物群

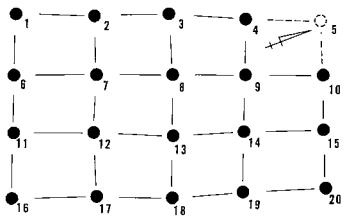
調査の結果、柱穴と判断したピットは約1,500個を数える。これらのピットから復元できた掘立柱建物は26棟である。

26棟の掘立柱建物の内、大型の建物は、５×６間・４×７間・４×６間・４×４間の規模をもつ。量的には26棟のうち４棟が該当する。中型の建物は３×３間、３×４間の規模のをもち、26棟の内８棟が該当する。小型の建物は、２×３間、２×４間の規模をもち。この建物は26棟のうち11棟が該当し、掘立柱建物のなかで量的に最も多い。これらの掘立柱建物以外に、１×３間の最も小型の建物が２棟確認された。

各建物の棟軸方位は、南北方向を示す建物と、東西方向を示す建物に大別される。量的には南北方向に棟軸をもつ建物が多い。

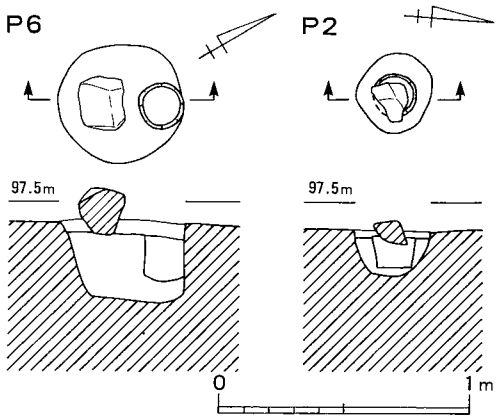
掘立柱建物は調査区のほぼ全域に分布し、大型の建物を中心にその周囲を中型および小型の建物が並ぶ傾向が看取れる。

掘立柱建物１（第46図）



調査区の北端、Ｅ～Ｇ－３～６区に位置する。身舎内の東半部には土壙２～４が位置するが、建物址柱穴との切り合いはない。建物の南西側には土壙１が近接する。身舎の北側には東西方向に走る溝１があり、溝の走る方向と建物址梁行の方向がほぼ同一方向を示す。建物は後世の攪乱によって消滅したと考えられる北西隅の柱穴（Ｐ５）を含めると20穴の柱穴で構成される。建物の規模は南北方向12.42ｍ（４間）、東西方向7.56ｍ（３間）を測り南北方向に長い小型の建物である。柱間は東西方向が2.82～3.34ｍと幅をもつ。南北方向は2.13～2.60ｍと東西方向と同じく幅をもつ。建物址中央のＰ６～10柱筋とＰ11～15柱筋間の柱間が短い傾向が看取れる。柱穴掘方の形状は円形・楕円形を呈し、円形を呈する柱穴が多い。規模は平均で32×28㎝を測り、確認した柱痕は平均で径14㎝を測る。

第45図　中世遺構配置図

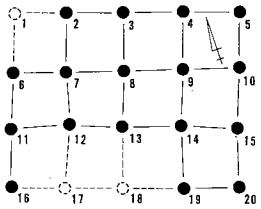


第46図　掘立柱建物１

南北方向を棟軸とした方位はN21°Eである。P10掘方内およびP２柱痕内より河原石が出土している。遺物はP17柱痕内より瓦器椀(129)、P13埋土内より土師器小皿(128)、P14柱痕内より土師器小皿（125）・須恵器椀（130)、P３埋土内より土師器小皿（127)、P４埋土内より土師器小皿（126）がそれぞれ出土している。

掘立柱建物２

調査区北西側、C～E－８～10区に位置する。掘立柱建物３・４と身舎が重なるが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。建物は竪穴住居10の埋土と識別できず未確認の柱穴（P17・18）と構成の攪乱によって消滅したと考えられる柱穴（P１）を含めると20穴の柱穴で構成されていると考えられる。建物址の規模は、東西方向9.10m（４間)、南北方向6.86m（３間）を測り、東西方向に長い中型の建物である。柱間は東西方向が2.22～2.32m、南北方向が2.18～2.35mとほぼ均一である。柱穴掘方の形状は円形・楕円形を呈し、規模は平均で40×33cmを測る。確認した柱痕は平均で径16cmを測る。

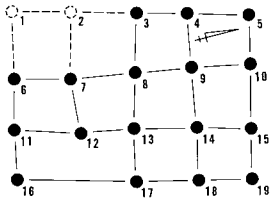


東西方向を棟軸とした方位はN72°Wである。

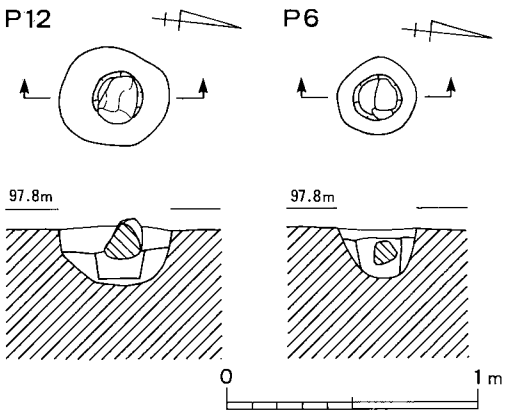
遺物は，P14柱痕内より瓦器椀（134)、P15柱痕内より土師器小皿（133)、P６柱痕内より土師器小皿（132)、P３柱痕内より土師器小皿（131）がそれぞれ出土している。

掘立柱建物３

調査区の北西側、C～E－９・10区に位置する。掘立柱建物２・４と身舎が重なり、掘立柱建物４と本建物址の柱穴（P６・７・11～13・18・17）が切り合っており、掘立柱建物４よりも古いことが判明した。また身舎内の北辺を「L」字状に屈曲する溝２と柱穴（P10・13・19）が重複し、溝２より古いことが判明した。



建物址は竪穴住居10埋土と識別できず未確認の柱穴（P１・２）を含めると19穴の柱穴で構成され、東西方向P16とP17間の柱穴を欠く構造と推察される。建物の規模は南北方向が9.24m（４間)、東西方向が6.54m（３間）を測り、南北方向に長い中型の建物である。柱間は南北方向が2.12～2.64mと幅をもつ。東西方向も同様に1.96～2.52mと幅をもつが、P11～15柱筋とP６～10柱筋間の柱間が長い傾向か認められる。柱穴掘方の形状は楕円形・円形を呈し、規模は平均で34×30cmを測る。確認できた柱痕は平均で径17cmを測る。南北方向を棟軸とした



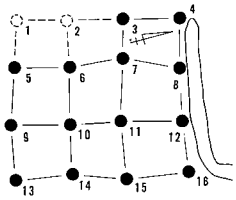
第47図　掘立柱建物４

方位はN16°Eである。

遺物は、P18柱痕内より土師器大皿（135）が出土している。

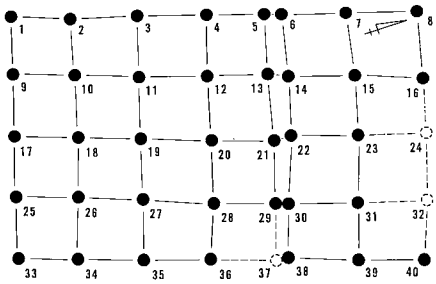
掘立柱建物４（第47図）

調査区の北西側、C～E－９・10区に位置する。掘立柱建物２・３と身舎が重なる。掘立柱建物３とは柱穴（P７・８・９～12・16・15）が重複し、掘立柱建物３より新しいことが判明した。また建物址の北側梁行きに沿う形で溝２が近接している。建物は竪穴住居10埋土と識別できず未確認の柱穴（P１・２）を含めると16穴の柱穴で構成されていたと推定される。建物址の規模は、南北方向6.76m（３間）、東西方向6.10m（３間）を測り、ほぼ正方形の中型の建物である。柱間は南北方向が1.80～2.52mと幅をもち、P３・７・11・15柱筋とP２・６・10・14柱筋の間が２m前後と短い傾向にある。東西方向は1.68～2.50mとやはり幅をもちP５～８柱筋とP９～12柱筋の間が長い傾向が認められる。柱穴掘方の形状は、円形・楕円形を呈するが、円形の掘方が多い。規模は平均で34×31cmを測る。確認できた柱痕は平均で径17cmを測る。南北方向を棟軸とした方位はN15°Eである。P14は柱を抜き取った様相を呈し、P４・６・12柱痕内からは河原石が出土している。

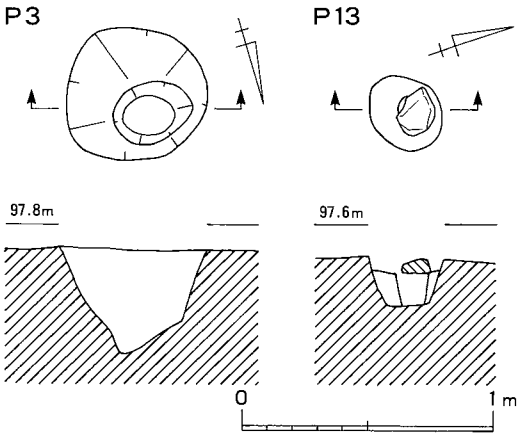


遺物は、P10柱痕内からは土師器小皿（136）、P16掘方内より土師器小皿（137～139）が出土している。

掘立柱建物５（第48図）



調査区の北半部中央、E～H－６～10区に位置し、身舎の南半と東側で掘立柱建物６・７と重なり合っている。柱穴間に切り合いはなく、両建物との新旧関係は不明である。建物を構成する柱穴のうちP５・６、P13・14、P21・22、P29・30、P37・38の各柱穴間は、70～90cmと柱間が極めて短く、別の建物の可能性も指摘できる。しかし桁行・梁行が同一方向を示す建物が近接して併存する、あるいは時期差をもって建てられた可能性より、単一の建物が改修され拡張ないしは縮小された可能性を考え、ここでは同一の建物として報告する。同一の建物であるとすれば建物址は後世の攪乱によって消失した柱穴（P24・32・37）を含めると40穴の柱穴で構成されていると考えられる。建物の規模は南北方向15.94m（６間）、東西方向9.58m

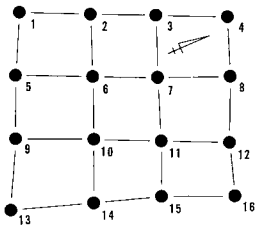


第48図　掘立柱建物５

（４間）と南北方向に長い大型の建物である。柱間は南北方向が2.30～2.90mと若干幅をもち、Ｐ６・14・22・30・38柱筋より北側の柱間は、2.8m前後であるのに対し、南側の柱間は2.45m前後と短い傾向がある。東西方向の柱間は2.24～2.64mと若干幅をもつが、総じて2.4m前後の柱間が多い。柱穴掘方の形状は円形・楕円形が多く、僅かに隅丸方形がある。規模は、平均で40×34cmを測る。確認できた柱痕は平均で径17cmを測る。Ｐ３・12・25の柱穴は柱が抜き取られた状況を呈し、Ｐ13・17は柱痕内より河原石が出土している。南北方向を棟軸とした方位はN19°Ｅである。

遺物はＰ１柱痕内より須恵器椀（149）、Ｐ３柱痕内より土師器杯（146）、Ｐ６柱痕内より土師器杯（145）・小皿（143）、Ｐ11柱痕内より須恵器小皿（148）、Ｐ13柱痕内より土師器小皿（142）、Ｐ20埋土内より土師器大皿（144）、Ｐ30掘方より瓦器椀（147）、Ｐ40柱痕内より土師器小皿(141）がそれぞれ出土した。

掘立柱建物６（第49図）



調査区の北半部中央、Ｅ～Ｇ－８～10区に位置する。掘立柱建物５・７と身舎が重なり合うが柱穴の重複はなく、各建物址の新旧関係は不明である。建物の規模は、南北方向8.98m（３間）、東西方向7.84m（３間）を測り南北方向に多少長い建物である。

柱間は南北方向が2.62～3.18mと幅をもち、中央部Ｐ３・７・11・15柱筋とＰ２・６・10・14柱筋間の柱間が短い。東西方向は2.21～2.80mと南北方向と同様幅をもつが、2.45m前後の柱間が多い。柱穴掘方の形状は楕円形・円形を呈する掘方が多く、１例のみ隅丸方形がある。規模は平均で34×31cmを測る。確認できた柱痕は、平均で径17cmを測る。

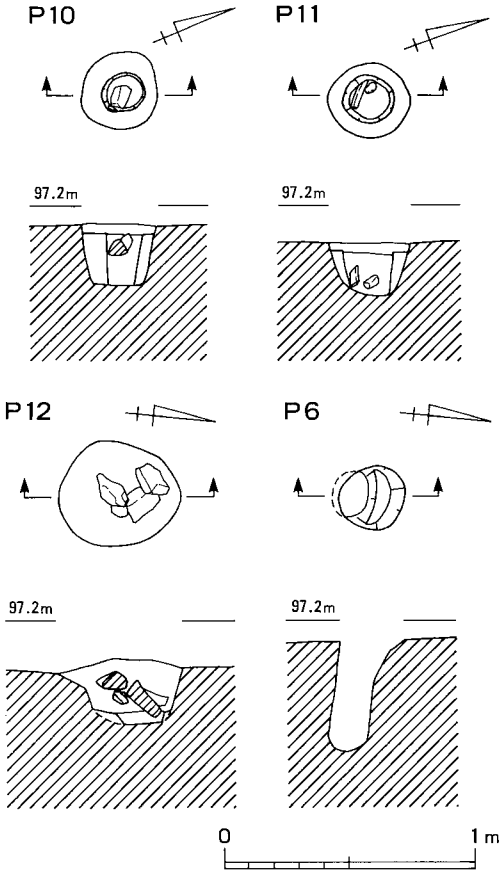
Ｐ10・11柱痕内より河原石が出土し、Ｐ６・12は柱を抜き取っており、とくにＰ12は柱を抜き取った後、河原石が投棄された状態で出土している。

南北方向を棟軸とした方位はN24°Ｅである。

遺物は、Ｐ16掘方内より鉄釘（17）、Ｐ11柱痕内より黒色土器椀（150）、Ｐ３掘方内より須恵器小皿（151）がそれぞれ出土している。

掘立柱建物７（第50図）

調査区の北半部、Ｇ～Ｊ－７～10区に位置する。身舎が掘立柱建物８・９とほぼ重なる形で

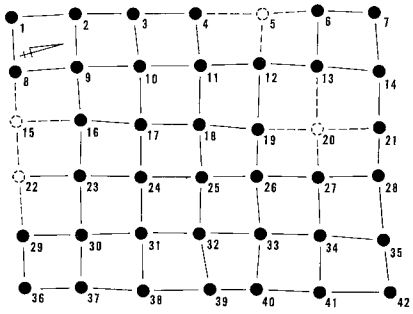


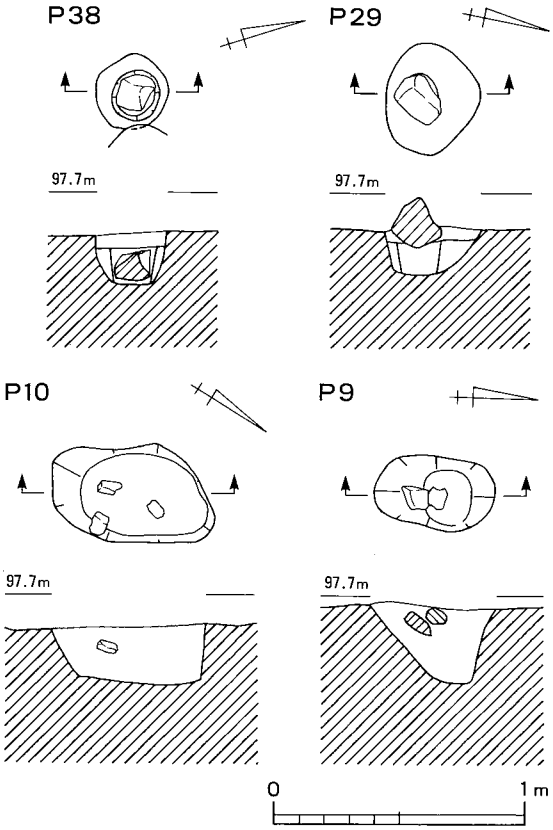
第49図　掘立柱建物６

重複するほか、建物址の西辺と北辺で掘立柱建物６・10と部分的に身舎が重なり合っている。身舎が重なった建物址のうち、掘立柱建物８とは本建物址柱穴（Ｐ11・13・14・26～28）が重複しており、本建物址が新しい事が判明した。また、掘立柱建物址以外に土壙23と柱穴が重複しており、本建物址は土壙23より古いことが明らかとなった。建物址は後世の攪乱によって消滅したと考えられる柱穴（Ｐ５・15・20・22）を含めると42穴の柱穴によって構成されていたと考えられる。規模は南北方向14.63ｍ（６間）、東西方向10.78ｍ（４間）を測り南北方向に長い大型の建物である。柱間は南北方向が1.90～2.82ｍと幅があるが 2.3～2.4ｍ前後の柱間が多い。東西方向は1.81～2.66ｍと幅をもち均一ではない。柱穴掘方の形状は、楕円形・円形を呈し、円形の掘方が多い。掘方の規模は平均で40×34㎝を測る。確認した柱痕は平均で径19㎝を測る。南北方向を棟軸とした方位はＮ16°Ｅである。

Ｐ11・16・17・25・27・29・36～38は柱痕内から河原石が出土している他、Ｐ９・10・34・40は柱が抜き取られた様相を呈している。

遺物はＰ９掘方内からは土師器小皿（156・159）・瓦器小皿（170）・鉄釘（11・12）、Ｐ10掘方内より須恵器椀（174）、Ｐ11埋土内より土師器小皿（158）・須恵器小皿（172）、Ｐ12掘方内より土師器小皿（165）・柱痕内より鉄釘（11）、Ｐ13柱痕内より土師器小皿（163）、掘方内より土師器小皿（154・157・161）、Ｐ17埋土内より土師器小皿（162）が、これ以外にＰ19柱痕内より土師器小皿(164）が出土している。Ｐ25埋土内より土師器大皿（167）、土師器小皿（152・153・155）、瓦器小皿(168)、須恵器小皿（173）が重なった状態で出土している他不明鉄製品（25）が出土している。Ｐ28掘方内より瓦器小皿(169)、Ｐ31柱痕内より土師器小皿(166)、Ｐ37柱痕内より瓦器椀（171）が出土してる。



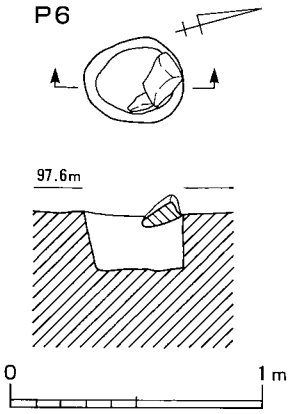


第50図　掘立柱建物７

掘立柱建物８（第51図）

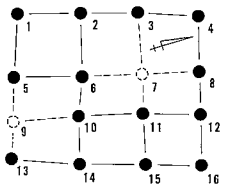
調査区の北半部、Ｈ・Ｉ－７～９区に位置する。身舎は掘立柱建物７・９・10と重なり合い、このうち掘立柱建物７・９と本建物址柱穴（Ｐ１～６・10・11）が重複し、掘立柱建物７より古く、掘立柱建物９より新しいことが判明した。

本建物址は、攪乱によって消滅したと考える柱穴（Ｐ７・９）を含めると16穴で構成されている。建物の規模は、南北方向平均7.58ｍ（３間）、東西方向6.04ｍ（３間）を測り、南北方向に多少長い小型の建物である。柱間は南北方向が2.20～2.78ｍと幅があり、Ｐ４・８・12・16柱筋とＰ３・７・11・15柱筋間の柱間は2.3ｍ前後と短い傾向が看取れる。東西方向は1.56～2.70ｍと幅をもち、Ｐ９～12柱筋とＰ５～８柱筋間の柱間が短い。柱穴掘方の形状は、楕円形・円形を呈し、楕円形の掘方が多い。規模は平均で37×34㎝を測る。確認した柱痕は平均で径17㎝を測る。南北方向を棟軸とした方位はＮ16°Ｅである。Ｐ６掘方内より河原石が出土した。



第51図　掘立柱建物８

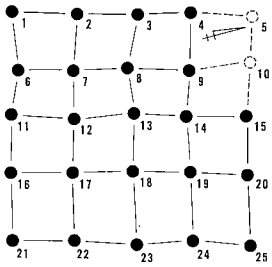
遺物は、Ｐ12柱痕内より土師器小皿（179）、Ｐ３柱痕内より土師器小皿（175～178・180・182）と瓦器椀底部片（183）が重ねられた状態で出土し同時性の高い一群の土器である。またＰ２埋土内から土師器小皿（181）と瓦器椀（184）が出土したが、Ｐ２は掘立柱建物９のＰ４を切っており、これらの土器は出土位置が微妙で、掘立柱建物９に帰属する可能性がある。



掘立柱建物９（第52図）

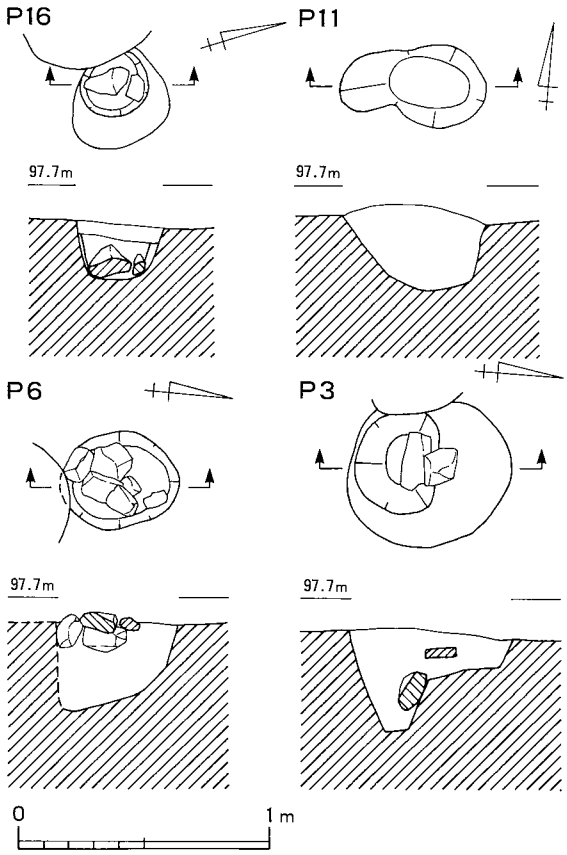
調査区の北半部、Ｇ～Ｊ－７～10区に位置する。身舎は掘立柱建物址７・８とほぼ重なっている。この掘立柱建物７・８とは柱穴

（Ｐ３・９・８・14・18・20）が重複しており本建物址が掘立柱建物７・８より古いことが判明した。本建物址は、後世の攪乱のため消滅したと考えられる柱穴（Ｐ５・10）を含めると25穴の柱穴で構成されている。建物址の規模は、東西方向9.68ｍ（４間）、南北方向9.42ｍ（４間）を測りほぼ正方形の中型の建物である。柱間は東西方向は2.22～2.96ｍと幅をもち均一ではない。南北方向は、2.20～2.66ｍと多少幅をもつが、総じて2.4ｍ前後の柱間が多い。柱穴掘方の形状は円形・楕円形を呈し、楕円形が多い。掘方の規模は、平均で39×33㎝を測る。確認できた柱痕は、平均で径17㎝を測る。南北方向を棟軸とした方位はＮ15°30′Ｅである。



Ｐ16は柱痕内底面およびＰ６掘方内上層より河原石が出土している。Ｐ６からは河原石に混って砥石（７）が出土している。またＰ１・３・11は柱が抜き取られた様相を呈する。

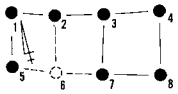
遺物はＰ２埋土内より土師器小皿（187）、Ｐ３埋土内より須恵器小皿（188）が出土している。Ｐ18柱痕内より土師器小皿（185）、瓦器小皿（186）・椀（189）が重ねられた状態で出土している。



第52図　掘立柱建物９

掘立柱建物10

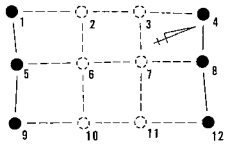
調査区の北半部、Ｈ・Ｉ－７・８区に位置する。身舎が掘立柱建物７・８の北辺と重なるが、柱穴の切り合いはない。掘立柱建物９とは幅70㎝の間隔をおいて並列している。建物址の規模は、東西方向6.10ｍ（３間）、南北方向2.46ｍ（１間）を測り、東西方向に細長い小型の建物址である。柱穴は後世の攪乱によって消滅したと考えられるＰ６を含めると８穴の柱穴で構成されている。柱間は東西方向が1.82～2.32ｍと多少幅をもち、Ｐ３・７とＰ４・８間が2.3ｍ前後と長い。南北方向は、2.10～2.46ｍとほぼ均一である。柱穴掘方の形状は円形と楕円形を呈し、規模は平均で32×29㎝を測る。確認した柱痕は平均で径14㎝を測る。東西方向を棟軸とした方位はＮ73°Ｗである。



遺物は柱穴柱痕・掘方内より土師器小皿の細片が出土したが、いずれも細片のため図化できる土器はなかった。

掘立柱建物11

調査区の北半部、Ｊ・Ｋ－６～８区に位置する。建物身舎の中央部が後世の攪乱によって破壊され、建物址の全容は明らかでない。建物址南辺には掘立柱建物７～10が近接する。柱穴は、後世の攪乱によって消滅したと考えられるＰ２・３・６・７・10を含め、12穴の柱穴で構成されていたと理解している。



建物址の規模は南北方向7.5m（３間）、東西方向4.3m（２間）の南北方向に長い小型の建物と推定している。柱間は東西方向が1.85～2.45mと若干幅をもち、Ｐ５～８柱筋とＰ１～４柱筋間の柱間が短い。東西方向の柱間は不明である。

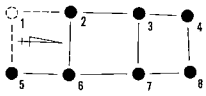
柱穴掘方は楕円形・円形を呈し、円形が多い。掘方の規模は平均で37×31cmを測る。確認できた柱痕の規模は、平均で径17cmを測る。

南北方向を棟軸とした方位はN21°Eである。

遺物は柱痕内より土師器細片が出土したが、図化できる土器はなかった。

掘立柱建物12

調査区の東端、Ｍ・Ｎ－14・15区に位置する。身舎の東半部は、調査区外に延び、建物址の規模は不明である。現存する柱穴は、後世の溝掘削によって消滅したＰ１を含めると８穴で構成されている。



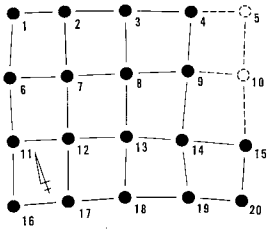
建物址の規模は、東西方向2.52m以上（１間以上）、南北方向16.97m（３間）を測る。柱間は南北方向が2.0～2.74mを測る。柱穴掘方の形状は楕円形・円形を呈し、規模は平均で26×23cmを測る。柱痕は平均で径11cmを測る。

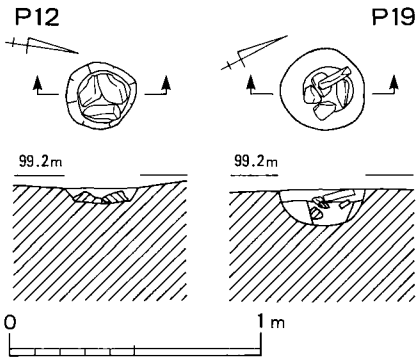
東西方向を棟軸とした方位はほぼ真東を向く。

遺物は出土しなかった。

掘立柱建物13（第53図）

調査区の中央、Ｇ～Ｉ－15～18区に位置する。本建物址の身舎は掘立柱建物14～16と重なるが、これらの建物址と柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。身舎の東辺部には土壙８があり、この土壙８を本建物址Ｐ14が切っている。本建物址は北東隅に柱穴（Ｐ５）の存在を推定すれば、20穴の柱穴で構成されていたと考えられる。建物の規模は東西方向が9.06m（４間）、南北方向7.64m（３間）を測り、東西方向に長い中型の建物である。柱間は東西方向が2.06～2.56mと幅がある。南北方向は、2.10～2.78mと幅をもつ。柱穴掘方の形状は楕円形・隅丸方形を呈するものがあるが、楕円形の掘方がほとんどである。規模は平均で34×30cmを測る。確認し





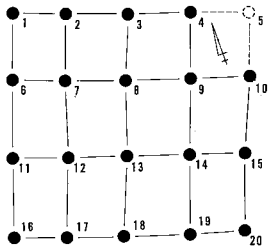
第53図　掘立柱建物13

た柱痕は平均で14cmを測る。東西方向を棟軸とした方位はN71°Wである。P12掘方底面には扁平な河原石が平らな面を上にして3個置かれた状態で出土している。このような河原石の出土状況は、本建物址では一例だけで、礎板と確定するには問題がある。これ以外にP7・14・19柱痕内上面より河原石が出土している。

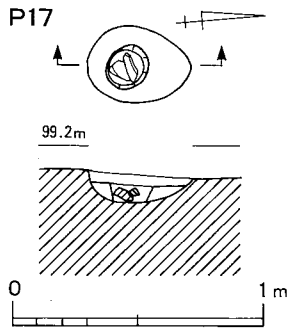
遺物はP12掘方内より土師器皿底部破片（190）が出土している。

掘立柱建物14（第54図）

調査区の中央部、F～I－15～18区に位置する。本建物址の身舎が掘立柱建物13・15とほぼ重なり、掘立柱建物16とは身舎南辺で部分的に重なる。これらの建物址と柱穴の重複はなく新旧関係は不明である。本建物址身舎内北東隅には土壙8が位置する。本建物址は未確認の柱穴（P5）を含めると20穴の柱穴で構成されていると考えられる。建物址の規模は東西方向9.21m（4間）、南北方向8.90m（3間）を測り、ほぼ正方形の建物址である。柱間は東西方向が1.98～2.66mと幅をもち、不均一である。、南北方向は2.50～3.26mとやはり幅をもつが身舎の南半部の柱間が3mを超え長い。柱穴掘方は楕円形・円形・隅丸方形を呈する。規模は平均で35×32cmを測る。確認した柱痕は平均で径15cmを測る。P13・17柱痕内より河原石が出土している。東西方向を棟軸とした方位はN72°Wである。



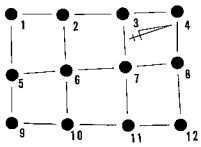
遺物は、P3埋土内より丹波焼小壺（196）、P13柱痕内より瓦器小皿（191）、P14埋土内より瓦器椀（194）、P15柱穴内より須恵器椀（195）、P19柱痕内より土師器皿（192）と瓦器椀（193）が重ねて埋置された状態で出土した。



第54図　掘立柱建物14

掘立柱建物15

調査区の中央部、F～H－16・17区に位置する。本建物址の身舎は掘立柱建物址13・14・16の身舎と重なり合うが、各建物址間の柱穴の重複はなく、新旧関係は不明である。本建物址は12穴の柱穴で構成されている。建物址の規模は、南北方向平均6.79m（3間）、東西方向平均4.52m（2間）と南北方向に長い小型の建物址である。柱間は南北方向が2.14～2.40mと多少幅をもち、中央部のP3・7・11柱筋とP2・6・10柱筋間が2.4m前後と長い。東西方

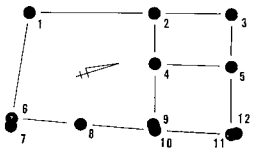


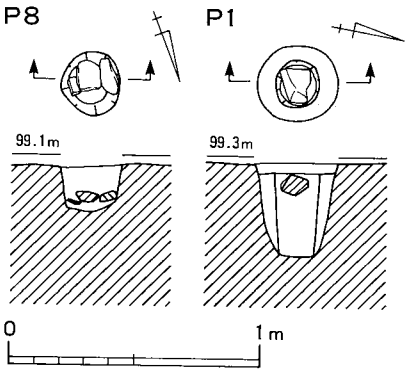
向は2.14～2.38mと多少幅をもつ。柱穴掘方は楕円形・円形を呈し、規模は平均で28×25cmを測る。確認できた柱痕は平均で径14cmである。南北方向を棟軸とした方位はN18°30′Eである。

遺物はP7柱痕内より土師器皿（197）が出土している。P9掘方内より瓦器椀（198・199～201）が重ねて埋置された状態で出土した。

掘立柱建物16（第56図）

調査区の中央部、F～H－17～19区に位置する。本建物址身舎の北側で、掘立柱建物14・15と身舎が重なりあうが、柱穴の切り合いがなく新旧関係は不明である。本建物址は本来は9穴の柱穴で構成されている。建物址東側の柱穴が重複しており、この重複を本建物の部分的改修の痕跡と捉え、本建物址に帰属する柱穴は12穴と判断した。本建物址の規模は南北方向8.77m（3間）、東西方向4.58m（2間）を測り、南北方向に長い小型の建物址である。南北方向柱筋のP1とP2の間、および東西方向のP6・7とP1の間に柱穴がなく、建物址の南半部分は2×2間の無柱の空間をもつ構造である。柱間は南北方向が2.70～3.04mと幅をもち、建物址北半部の柱間が3mを超え長い。東西方向は2.02～2.64mと幅をもち、建物址西半分の各柱間が2m前後と東半分の柱間に比べて短い傾向がある。柱穴掘方は楕円形・円形・隅丸方形を呈し、規模は平均で30×29cmを測る。確認できた柱痕は平均で径13cmを測る。南北方向を棟軸とした方位はN21°Eである。P1柱痕内上面より河原石が出土し、P8掘方内底面より河原石が出土している。遺物はP3柱痕内より瓦器椀（202）が出土している。

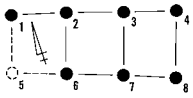




第55図　掘立柱建物16

掘立柱建物17

調査区の中央部西寄り、D・E－15・16区に位置する。本建物址の南側約2.7mの所には掘立柱建物18が近接する。掘立柱建物18東西方向柱筋と本建物址南北方向柱筋とはほぼ平行している。本建物址は竪穴住居1の埋土と識別できず未確認の柱穴（P5）を含めると8穴で構成されている。建物址の規模は東西方向6.66m（3間）、南北方向2.80m（1間）を測り、東西方向に細長い小型の建物址である。柱間は東西方向が2.06～2.28m、南北方向が2.50～2.84mとほぼ均一である。

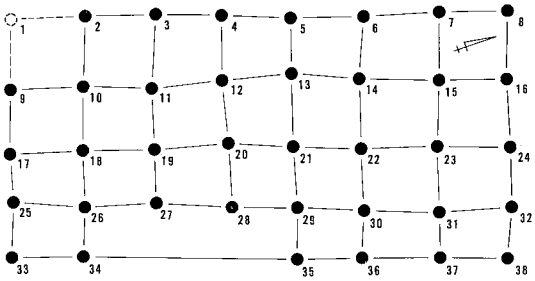


柱穴掘方は円形・楕円形を呈し、規模は平均で27×25cmを測る。確認した柱痕は平均で径14cmを測る。東西方向を棟軸とした方位はN70°Wである。

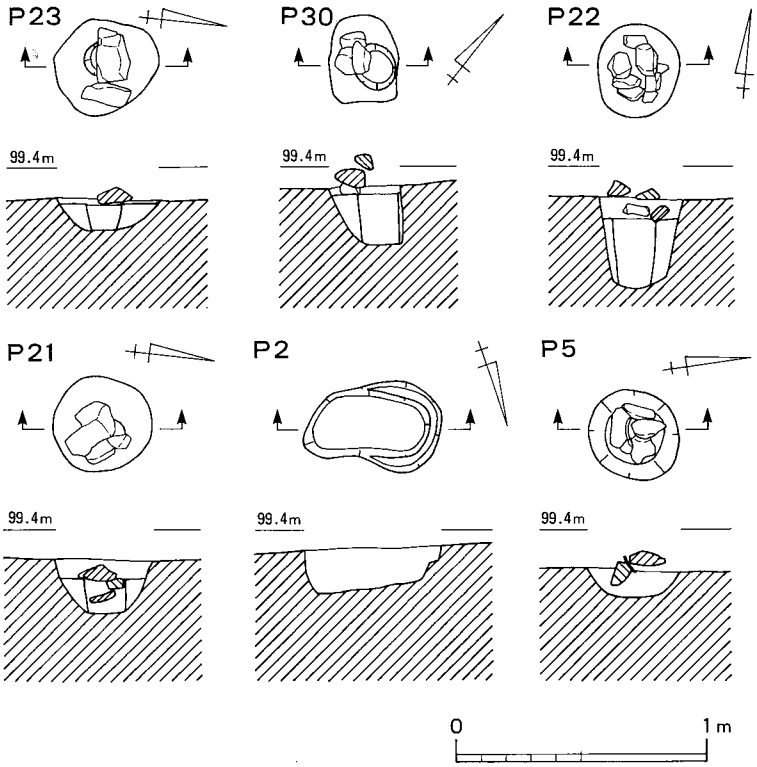
遺物はP3掘方内より土師器皿（203）・瓦器椀（204）が出土している。

掘立柱建物18（第56図）

調査区中央部西寄り、B～E－16～20区に位置する。本建物址の南側には、掘立柱建物20・21、東側は掘立柱建物13～16・19・22、北側は掘立柱建物址17の各建物址が、本建物址を取り囲むように配置されている。本建物址は、南北方向柱筋のP４とP５の間の柱穴をもたず、調査区外の１穴（P１）を含めると38穴の柱穴で構成されている。



本建物址の規模は、南北方向が19.33m（７間）、東西方向10.14m（４間）を測り、南北方向に長い大型の建物址である。柱間は南北方向が2.36～3.22mと幅をもち均一ではない。東西方向の柱間も南北方向と同様に1.80～3.18mと幅をもち、本建物址西半部分の柱間が長い傾向が認められる。柱穴掘方の形状は円形・楕円形・隅丸方形を呈し、規模は平均で36×31cmを測る。確認した柱痕は平均で径16cmを測る。



第56図　掘立柱建物18

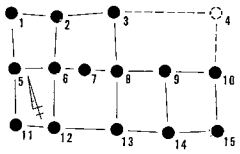
南北方向を棟軸とした方位は、N19°Eである。

P19・21～23・30は柱痕内上面より河原石が出土している。またP５・13・14・36は掘方内より河原石が出土している。P２・10は柱が抜き取られた様相を呈す。

遺物は、P４掘方内より土師器杯片（211）が出土している他、P７埋土内より土師器小皿（210）、P８埋土内より土師器小皿（205・208・209）、土師器大皿（212・213・215）

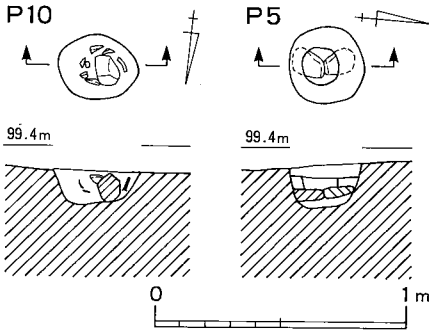
が重ねて埋置された状態で出土している。P17柱痕内より土師器小皿（207）、P18埋土内より土師器小皿（206）、P29埋土内より土師器皿（214）、P30掘方内より瓦器椀片（216）が出土している。

掘立柱建物址19（第57図）



調査区の中央部、E～G－19・20区に位置する。本建物址の南辺で掘立柱建物22の身舎が一部重なる他、北側では掘立柱建物16が近接する。本建物址は北東隅柱（P４）を後世の攪乱によって破壊され遺存状況は不良である。またP３と４間に柱穴は確認できず、本建物址は北東隅柱（P４）を含めると15穴の柱穴で構成されると考えられる。

本建物址の規模は東西方向が8.09m（４間）、南北方向4.55m（２間）と東西方向に長い小型の建物址である。柱間は東西方向が1.55～2.52mと幅をもち、P２・６・12とP３・８・13間の間隔が長い。南北方向は2.0～2.5mと幅があるが、2.35m前後の柱間が多い。柱穴掘方は楕円形・円形・隅丸方形を呈するが円形の掘方が多い。規模は平均で35×32cmを測る。確認した柱痕は平均で径15cmを測る。東西方向を棟軸とした方位はN71°Wである。

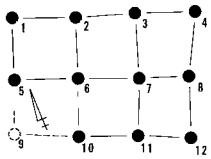


第57図　掘立柱建物19

P５柱穴内底面より２個の扁平な河原石を用いた礎板が出土した。

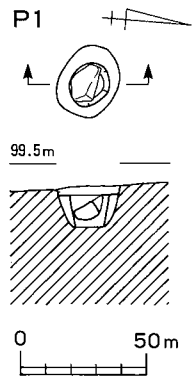
遺物は、P10埋土中より河原石とともに、瓦器椀（217・220）・土鍋（221・222）が出土したほかP15柱痕内より瓦器椀（218・219）が出土した。

掘立柱建物20（第58図）



調査区の南半部西寄り、B・C－21・22区に位置する。建物址の西端は調査区外に延び、建物址の全容は不明瞭である。建物址北側約４mの所には掘立柱建物18が位置する。東側は掘立柱建物21が近接し、両建物址の柱穴が一部重複している。本建物址の柱穴（P４）が掘立柱建物21の柱穴に切られており、本建物址が掘立柱建物21より古いことが判明した。

本建物址に帰属する柱穴は調査区内では11穴確認した。建物址の規模は、東西方向が7.35m以上（３間以上）、南北方向が5.12mを測り、東西に長い小型の建物址と考えられる。柱間は東西方向が1.98～2.60mと幅をもち均一ではない。南北方向は2.29～2.62mと多少幅をもち建物址の南半分の柱間が長い傾向がある。柱穴掘方は楕円形・円形を呈し、楕円形が多い。規模は平均で27×24cmを測る。確認した柱痕は平均14cmを測る。東西方向を棟軸とした方位はN68°30′Wである。P１は柱痕内より河原石が出土し、P11は柱を抜き取った様相を呈する。



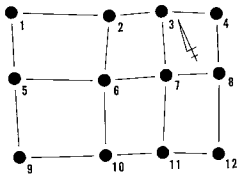
第58図　掘立柱建物20

遺物は柱穴内より土師器・瓦器の細片が出土したが、図化できる土器はなかった。

掘立柱建物21

調査区の南半部西寄り、C～E－21～23区に位置する。本建物址の北側には掘立柱建物22が位置し、本建物址東側３列の南北方向柱筋と掘立柱建物22の南北方向柱筋とはほぼ同一線上にある。西側には掘立柱建物20が近接し、本建物址の柱穴（Ｐ１）と重複している。本建物址の柱穴は掘立柱建物20の柱穴（Ｐ４）を切っており、本建物址が新しいことが判明した。

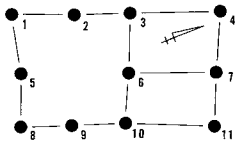
本建物址は12穴の柱穴で構成されている。建物址の規模は東西方向が8.14m（３間）、南北方向がで5.70m（２間）を測り、東西方向に長い小型の建物である。柱間は東西方向が2.10～3.90mと幅があり、建物址西半部の柱間が３mを超え長い、南北方向もまた2.36～3.26mと幅があり、建物址南半の柱間が３mを超え長い。柱穴掘方は円形・楕円形・隅丸方形を呈し、円形の掘方が多い。規模は平均32×29cmを測り、確認した柱痕は平均径15cmを測る。東西方向を棟軸とした方位はN67°Wである。



遺物は出土しなかった。

掘立柱建物址22

調査区の南半部、D～F－20・21区に位置する。本建物址南側には掘立柱建物21が位置し、本建物址の南北方向柱筋と掘立柱建物21の東側３列の南北方向柱筋とはほぼ同一線上にある。また本建物址の北辺と掘立柱建物19の南辺と身舎が一部重なっている。



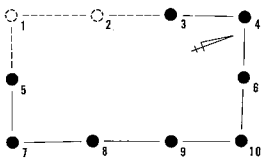
本建物址は南北方向Ｐ５とＰ６の間に柱を持たず、建物址の南半部が無柱の空間を持つ構造である。また後世の攪乱によって、建物址北西隅の柱穴（Ｐ１）が消滅しており、この柱穴を含めると本建物址は11穴の柱穴で構成されている。

建物址の規模は、南北方向が8.28m（３間）、南北方向が4.59m（２間）を測り、南北に長い小型の建物である。柱間は南北方向が2.0～3.58mと幅をもち、建物址南半部の柱間は3.5mを超え長い。東西方向は2.12～2.47mと多少幅をもち、建物址西半部の柱間が長い傾向が看取れる。

柱穴掘方は円形・楕円形を呈し円形が多い。規模は平均で33×30cmを測り、確認した柱痕は平均で径16cmを測る。南北方向を棟軸とした方位はN21°Eである。

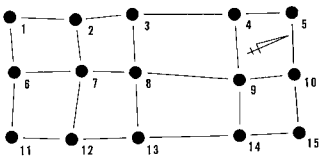
遺物はＰ６柱痕内より瓦器椀片（223）が出土した。

掘立柱建物23

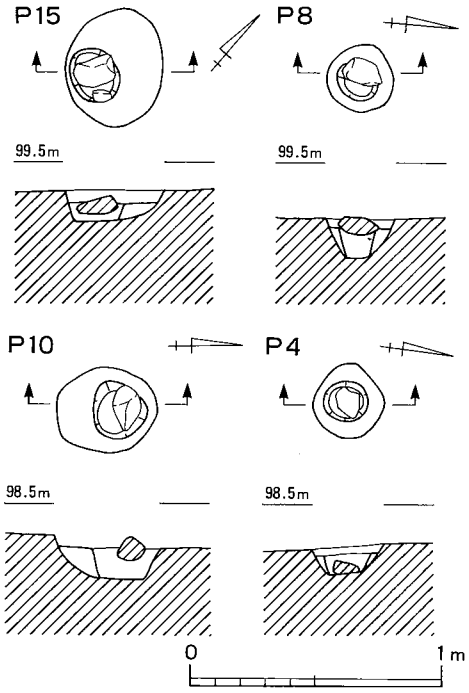


調査区の南半部西寄り、C・D－23～25区に位置する。本建物址の北側４ｍの所には掘立柱建物20・21が隣接する。建物址の西端は調査区外に延び、建物址の全容は不明瞭である。本建物址は身舎内に柱穴を持たない構造と考えられ、調査区外に２穴の柱穴（Ｐ１・２）を想定し、これらの柱穴を含めると10穴の柱穴で構成されていると考えられる。本建物址の規模は、南北方向9.18ｍ（３間）、東西方向5.02ｍ（２間）を測り、南北方向に長い小型の建物である。柱間と南北方向が2.80～3.24ｍと多少幅がある。東西方向は2.50～2.58ｍとほぼ均一である。柱穴掘方の形状は円形・楕円形を呈し、円形が多い。規模は平均で29×26㎝を測り、確認した柱痕は平均で径13㎝を測る。南北方向を棟軸とした方位はN15°Ｅである。遺物は、柱穴内より土師器細片が出土したが、図化可能な土器はなかった。

掘立柱建物24（第59回）



調査区の中央部東より、Ｉ～Ｋ－19～21区に位置する。本建物址の南側には掘立柱建物25が桁行を同方向にもち隣接する。本建物址は15穴の柱穴で構成されている。しかしＰ14・８・４柱筋とＰ13・８・３柱筋間が４ｍと他の柱間に比べて２倍近く長い。この柱間付近は、調査年度が異なり、調査時にはすでに片側の工事が終了しており、あるいはその工事によって両柱列間の柱穴が消滅した可能性がある。したがって今回の報告では２×３間の規模として報告しているが、２×４間の建物址の可能性があることを断っておく。



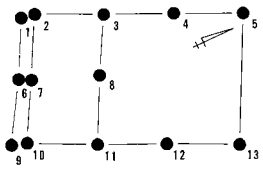
第59図　掘立柱建物24

建物址の規模は、南北方向が11.40ｍ（４間）、東西方向が4.86ｍ（２間）を測り、南北方向に長い建物址である。柱間は南北方向が2.22～2.71ｍと多少幅をもつ。東西方向は2.10～2.57ｍで南北方向柱間と同様多少幅をもつ。

柱穴掘方は、円形・楕円形・隅丸方形を呈し、楕円形を呈する掘方が多い。規模は平均で33×30㎝を測り、確認した柱穴は平均で径17㎝を測る。南北方向を棟軸とした方位はN23°30′Ｅである。Ｐ１・４・８・10・13・15柱痕内より河原石が出土している。

遺物は、Ｐ７埋土内より瓦器椀（224～225）が重ねて埋置された状態で出土した。

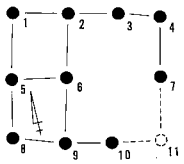
掘立柱建物25



調査区の南半部東寄り、Ｈ～Ｊ－21～24区に位置する。本建物址の北側には掘立柱建物24が桁行を同方向にもち隣接する。南側は掘立柱建物26が近接する。本建物址は東西方向Ｐ５とＰ13、Ｐ４とＰ12の間にそれぞれ柱穴を欠き、身舎の南面には、庇をもつ構造である。建物址は庇部分の柱穴を含め13穴の柱穴で構成されている。建物址の規模は、南北方向が平均で8.58ｍ（３間）、東西方向が平均で5.23ｍ（２間）を測り、南北方向に長い小型の建物址である。柱間は南北方向が2.75～2.94ｍと多少幅をもつ。東西方向は2.58～2.68ｍとほぼ均一である。柱穴掘方は楕円形・円形を呈し、円形の掘方が多い。規模は平均で30×27㎝を測り、確認した柱穴は平均で径15㎝を測る。南北方向を棟軸とした方位はN24°Ｅである。Ｐ12掘方内より河原石が出土している。

遺物はＰ５掘方内より須恵器杯（228）・甕（229）、Ｐ13柱痕内より土師器皿（227）が出土している。

掘立柱建物26



調査区の南半部東寄り、Ｇ～Ｉ－23～25区に位置する。本建物址の北側には掘立柱建物25が近接する。本建物址は、南北方向Ｐ６とＰ７の間に柱穴をもたず、身舎の東半部に無柱の空間をもつ構造である。建物址は、後世の攪乱によって消滅したと考えられる、建物址南東隅の柱穴（Ｐ11）を含めると11穴の柱穴で構成されている。建物址の規模は、南北方向が6.06ｍ（３間）、東西方向は5.02ｍ（２間）を測り、東西方向に長い小型の建物である。柱間は南北方向が1.78～2.26ｍと幅をもち、建物址の西側Ｐ２・６・９列とＰ１・５・８列の柱間が２ｍを超え長い。東西方向は2.42～2.74ｍと多少幅をもつ。柱穴掘方は円形・楕円形・隅丸方形を呈する。規模は平均で24×23㎝を測り、確認した柱痕は平均で径11㎝を測る。

東西方向を棟軸とした方位はN78°Ｗである。

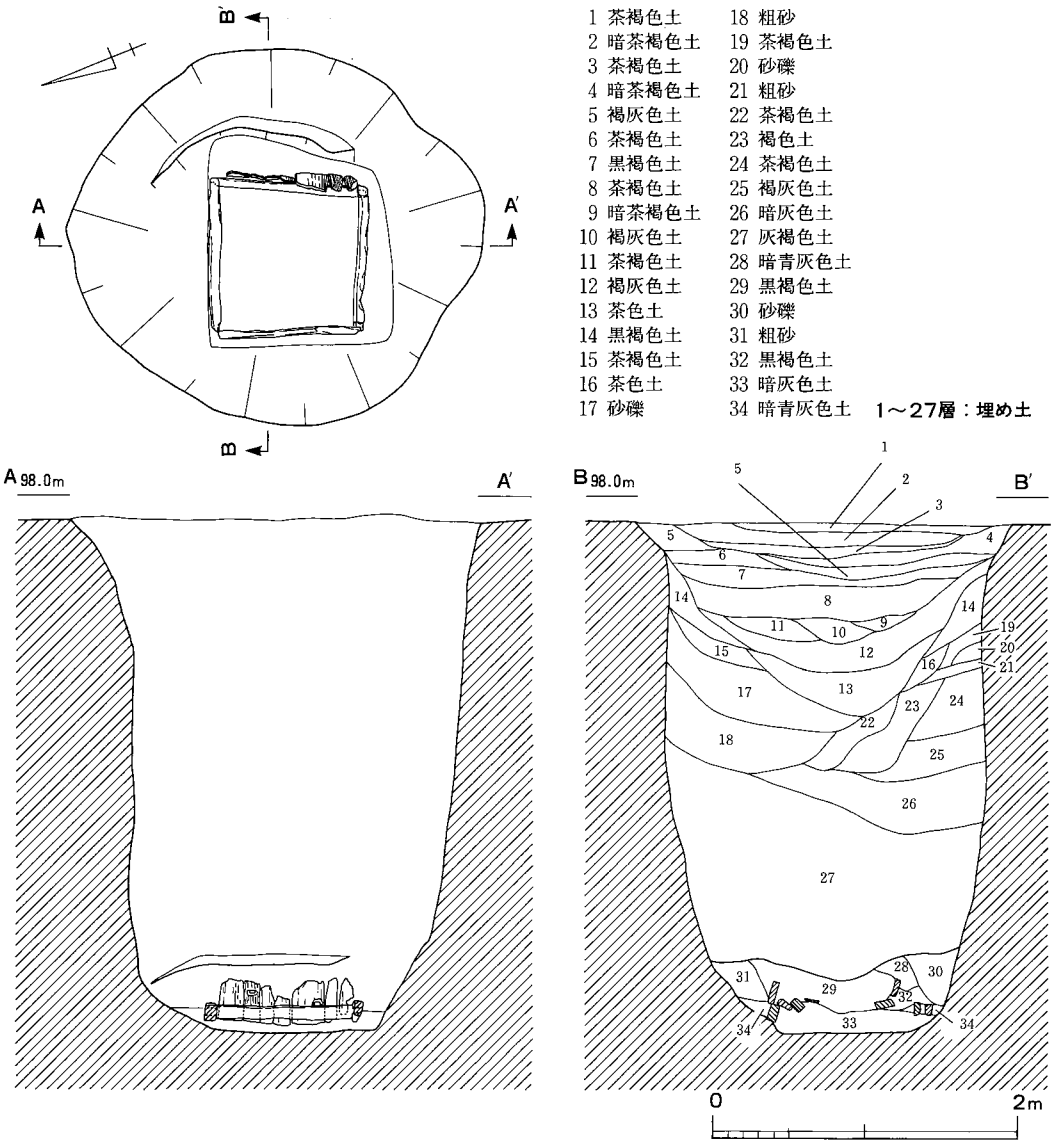
遺物はＰ１埋土内より須恵器壺（230）・丹波焼小鉢（231）、Ｐ５埋土内より須恵器椀(232・土鍋（233）が出土している。

３．井　戸

井戸は、今回調査した範囲では、１基のみ確認した。井戸の遺存状況は不良で、井戸内底面に井戸枠と井側部材が僅かに残っていた。

井戸１（第60図）

調査区の中央、Ｇ・Ｈ－12区に位置する。井戸の南側約11ｍの所に掘立柱建物13～16、北側



第60図　井　戸1

約10mの所に掘立柱建物５～９がそれぞれ位置し、井戸は両建物址群の中間に位置する。井戸掘方は、2.73×2.49mの規模で、南北方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で3.30mを測る。掘方底面は、1.2×1.4mの規模で、北東隅が膨らんだ隅丸方形を呈する。掘方底面中央には、最下位の井戸枠と縦板組の井側が残っていた。井戸枠は１辺１m前後の規模で、幅10cm前後・厚さ７cm前後の４本の角材を井籠組に組んでいる。南辺の木枠材（４）は両端に枘が刻まれ、東辺（２）・西辺（３）の木枠材南端部にえぐられた枘穴と組み合わせる

目違いで組まれ、北辺の木枠材（1）・東辺・西辺木枠材北端部は片側に枘が刻まれた相欠き枘で組み合わせ固定している。井戸枠東辺には、幅10～23cm、厚さ4cmの縦板材が7枚並び、井側は縦板組横桟どめないしは縦板組無支持井戸と考えられる。井戸内の埋土は、礫混じりの褐色土が厚く堆積し、この層の下層には腐食物を含んだ灰色系のシルトが僅かに堆積している。井戸上層に堆積した褐色系の土は井戸が人為的に埋められた層と理解でき、井戸本来の埋土は28～34層の灰色系のシルト層と推察される。

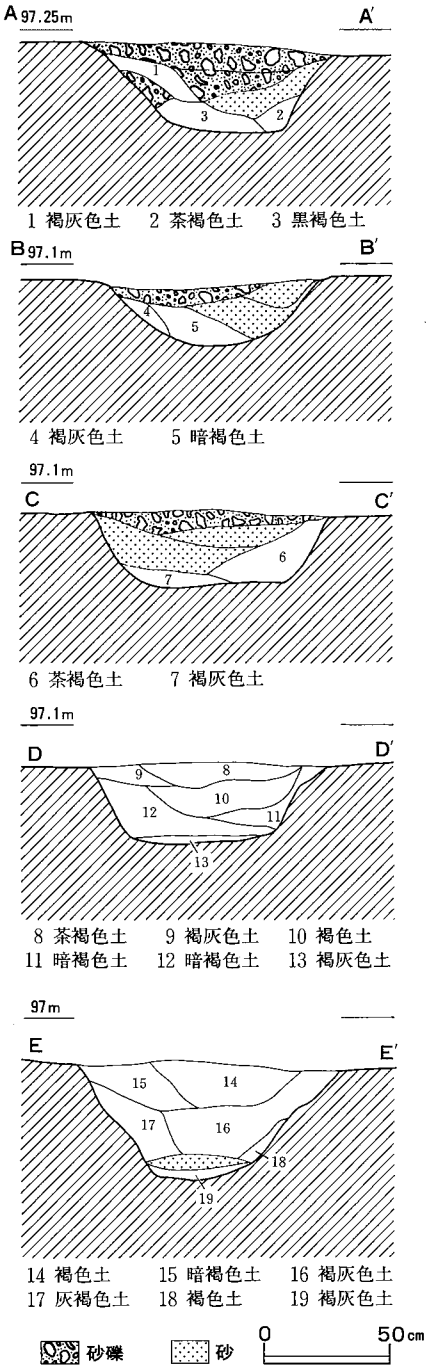
遺物は、埋土上層（褐色系）より土師器小皿(234～236)・大皿（240～250)、瓦器小皿（251～256)、瓦器椀（257・259～261・263)、須恵器甕（264・265）が出土した。また埋土下層の井戸枠内より土師器小皿（237・238)、瓦器椀（258・262)、須恵器鉢（266）が出土した他、井戸枠内より、砥石（6）・石斧（8）の石製品、板材（5)、曲物底板（6)、箸状木製品（8）の木製品が出土した。

4．溝

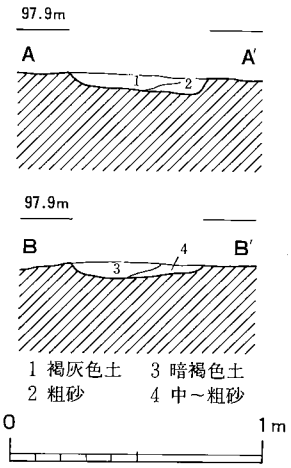
溝は調査区北端と、調査区北半部西寄りで各1条確認した。調査区の北端を東西方向にはしる溝1は、溝より以北には遺構が存在しないところから、屋敷地を区切る性格を持つ溝と考えられる。また、調査区の北半部西寄りに位置し、「L」字状に屈曲する溝2は、掘立柱建物址3の梁行と平行にはしっており、この建物址を区切る性格か、「雨落ち溝」的性格をもつ溝と推察される。

溝　1（第61図）

調査区の北端に位置し、調査区を西から東方向に横切る溝である。上端幅0.55～1.10mを測り、東に行くに従い幅が広くなっている。確認面からの深さは、0.8～1.6mを測り、東に行くに従い深くなる傾向がある。溝の断面形は逆台形を呈する。溝底の西端と東端とでは、比高



第61図　溝1



第62図　溝２

差が1.35mあり、西端の高度が高い。溝のはしる方位は、N72°Wである。

溝の埋土は、２層に大別できる。溝の西端からGラインまでは、上層に砂礫層が堆積し、下層は、中砂～粗砂混じりシルトが堆積している。Gラインから東側は、上層の砂礫層はなくなり、中砂～粗砂混じりシルトが厚く堆積する。

遺物は、上層砂礫層より土師器小皿（267）が出土した。

溝　２（第62図）

調査区の北半部西寄り、D・E－８・９区に位置する。溝はいったん西から東に向かってはしった後向きを北に変え、「L」字状に屈曲する。東西方向にはしる溝の南側には、掘立柱建物３が約30cmの距離で近接し、溝のはしる方向と、掘立柱建物３の梁行方向は一致する。溝の幅は50～60cmとほぼ均一で、深さは15～25cmを測り、溝北端部が深い。溝の断面形は、浅い鍋底状を呈する。

遺物は埋土中より土師器大皿（268・269）、瓦器椀（270）が出土した。

５．土壙群

土壙は、調査区内より26基確認した。土壙は、木棺墓６基（土壙１・５～９）、土壙墓１基（土壙10）、土壙墓もしくは木棺墓の可能性をもつ土壙３基（土壙２・４・16）、廃棄の性格をもつ土壙７基（土壙３・15・18～21・24）、底面に炭をもつ円形の小型土壙３基（土壙17・22・23）およびその他の土壙５基（土壙11～14・18）の６つに大別できる。これらの土壙の分布は、北は３ラインから南は26ラインの間、東はKラインに限られた範囲に点在している。

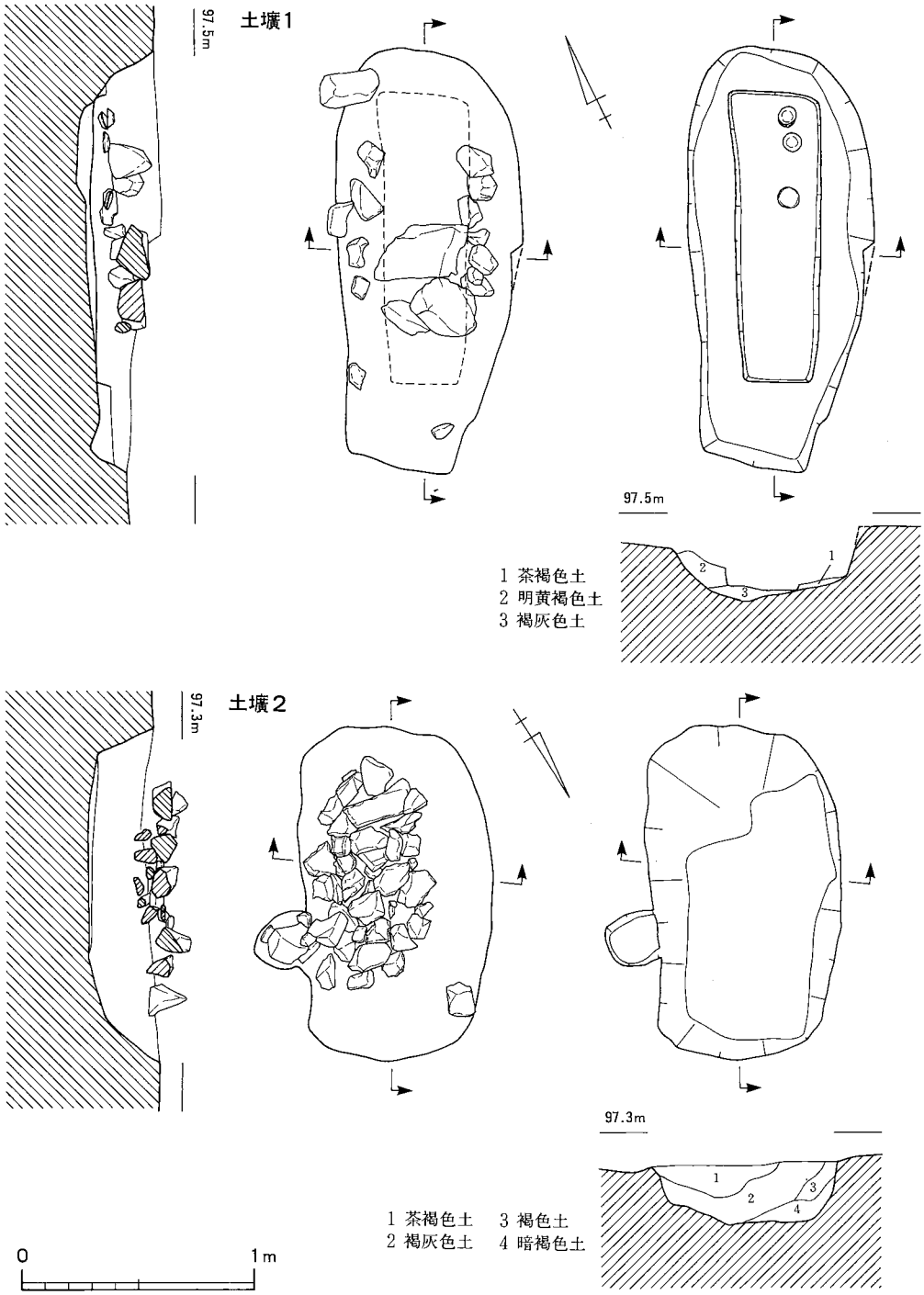
土壙１（第63図）

調査区の北西端、B・C－３区に位置する木棺墓である。土壙は墓壙および棺内に、10×20cm前後の河原石が投げ込まれた状況で確認され、遺存状況は悪い。とくに棺内に投棄された河原石は40×30cm大と大型の石で、火を受け赤化している。墓壙は、南半部が窄まった楕円形を呈し、規模は長軸1.80m、短軸0.8m、深さ33cmを測る。木棺は全長が1.25m、北側小口幅39cm、南側小口幅28cmを測り、北側小口が広い。また棺底の北端と南端では、３cmの比高差で北側が高い。木棺の主軸方位はN22°30′Eである。

遺物は棺北東隅、棺底より土師器小皿（271～273）、墓壙内より土師器大皿（275）・小皿（274）がそれぞれ出土した。

土壙２（第63図）

調査区の北東隅、I－４区に位置する。土壙の北辺は柱穴を切って掘られている。土壙内上


土壙1
97.5m
97.5m
1 茶褐色土
2 明黄褐色土
3 褐灰色土
土壙2
97.3m
97.3m
1 茶褐色土
2 褐灰色土
3 褐色土
4 暗褐色土
0
1m

第63図　土壙1・2

層は25×15cm大の河原石が投棄されており、投棄された河原石の中には火を受け赤化した石も含まれている。土壙は南北方向に長い隅丸方形を呈し、長軸1.44m・短軸0.82m・深さ30cmを測る。土壙の主軸方位はN33°Eである。遺物は、出土しなかった。

土壙3（第64図）

調査区北半部、I－8区に位置する。土壙は掘立柱建物7・9北東隅身舎と重なり、土壙の南辺は掘立柱建物7のP12および掘立柱建物9のP9をそれぞれ切って掘削されている。土壙内には15×10cm大の河原石に混じって30×25cm大の大型の河原石が投棄された状態で出土している。投棄された石のなかには火を受け赤化した石も混入している。土壙は東西方向に長い楕円形を呈し、長軸1.25m・短軸0.75m・深さ25cmを測る。土壙の主軸方位はN84°Wである。土層は上下2層に分かれ、下層は多量の炭片および焼土を含む。

遺物は河原石に混じって土師器小皿（276）・瓦器椀（277）の土器が出土した他、砥石（5）が出土した。

土壙4（第64図）

調査区の北半、E・F－8・9に位置する。土壙は掘立柱建物址5の南西隅身舎内と重なる。土壙の主軸は、掘立柱建物5の桁行方向とほぼ同一方向を示す。土壙内上層には20×10cm大の河原石が出土し、出土した河原石はすべて火を受け赤化している。土壙は、南半部が多少狭まり気味の南北方向に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸1.68m、短軸0.68mを測り、深さは最深部で10cmと浅い。土壙の主軸方位はN20°30′Eである。

土壙底面には2cmの厚さで炭層が堆積し、また河原石が火を受けていることを考慮すると、土壙内で火を使用した可能性がある。また平面形態・規模が土壙10（土壙墓）と似ており、土壙墓の可能性が高い。

遺物は出土しなかった。

土壙5（第65図）

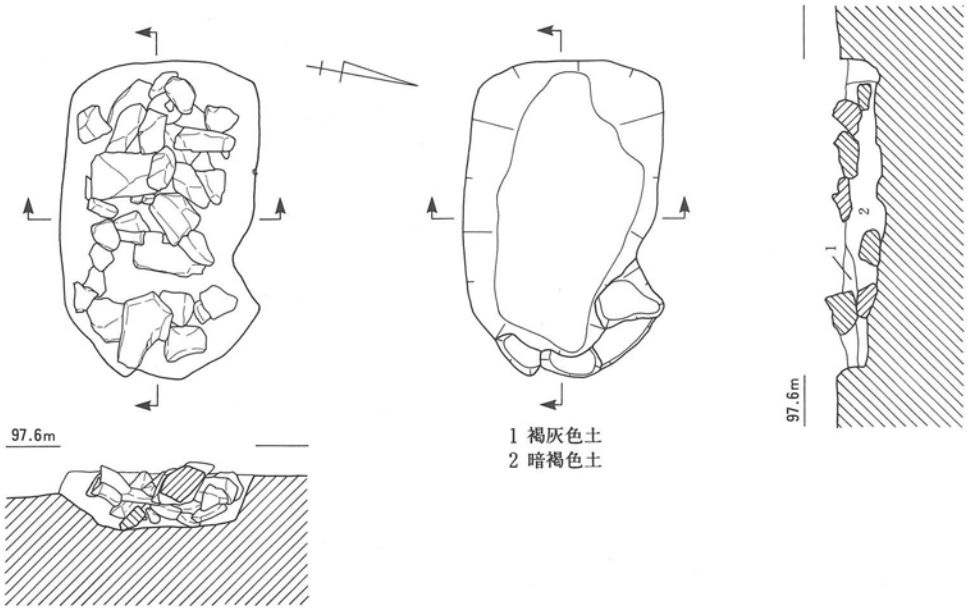
調査区の中央部西寄り、E・F－12・13区に位置する木棺墓である。南側は掘立柱建物17・18、北側は掘立柱建物3～6が位置し、土壙は両建物址群のほぼ中間に位置する。土壙の墓壙および棺内には20×15cm大の河原石が投げ込まれ、木棺の上部は破壊されていた。木棺は平面では確認できず、土層断面の観察によって木棺の存在を知り得た。墓壙は中央部が括れた楕円形を呈し、東西方向に長い。規模は長軸2.20m・短軸0.85m・深さ10cmを測る。木棺は墓壙中央より南寄りに埋置され、全長1.67m、中央部幅38cmを測る。棺底の西端と東端では2cmの比高差をもち東端が高い。木棺の主軸方位は、N73°Wである。

遺物は棺底中央部より土師器大皿(278）が出土している。

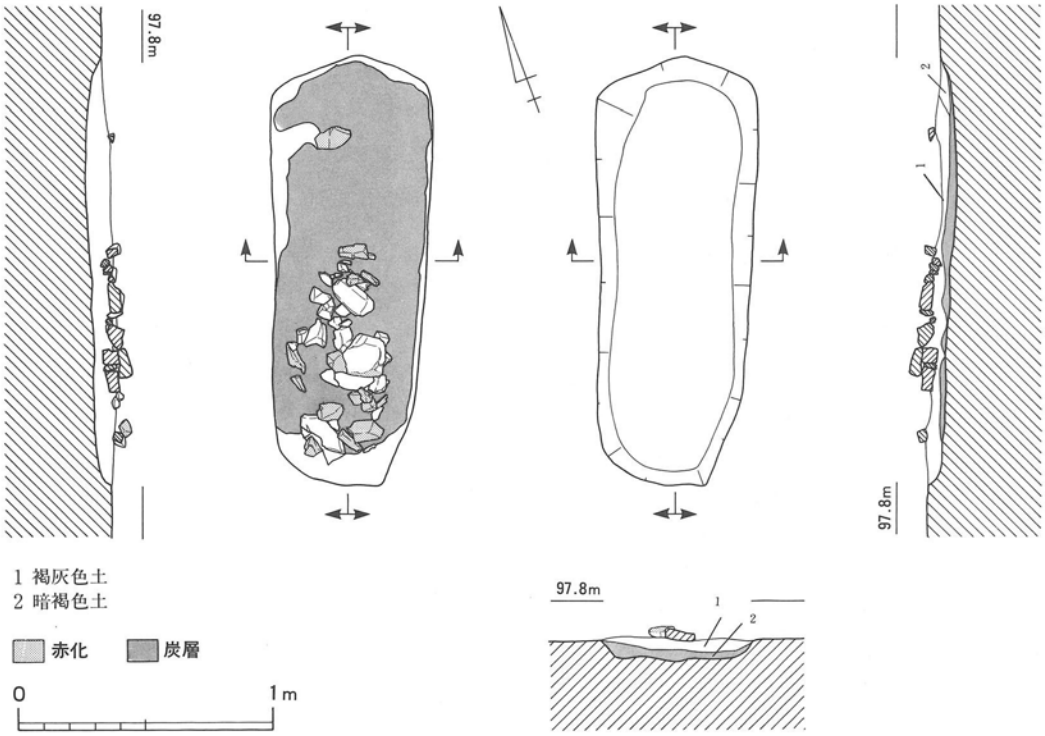
土壙6（第66図）

調査区の中央部西端、C－15区に位置する木棺墓である。土壙の北側には、掘立柱建物17・

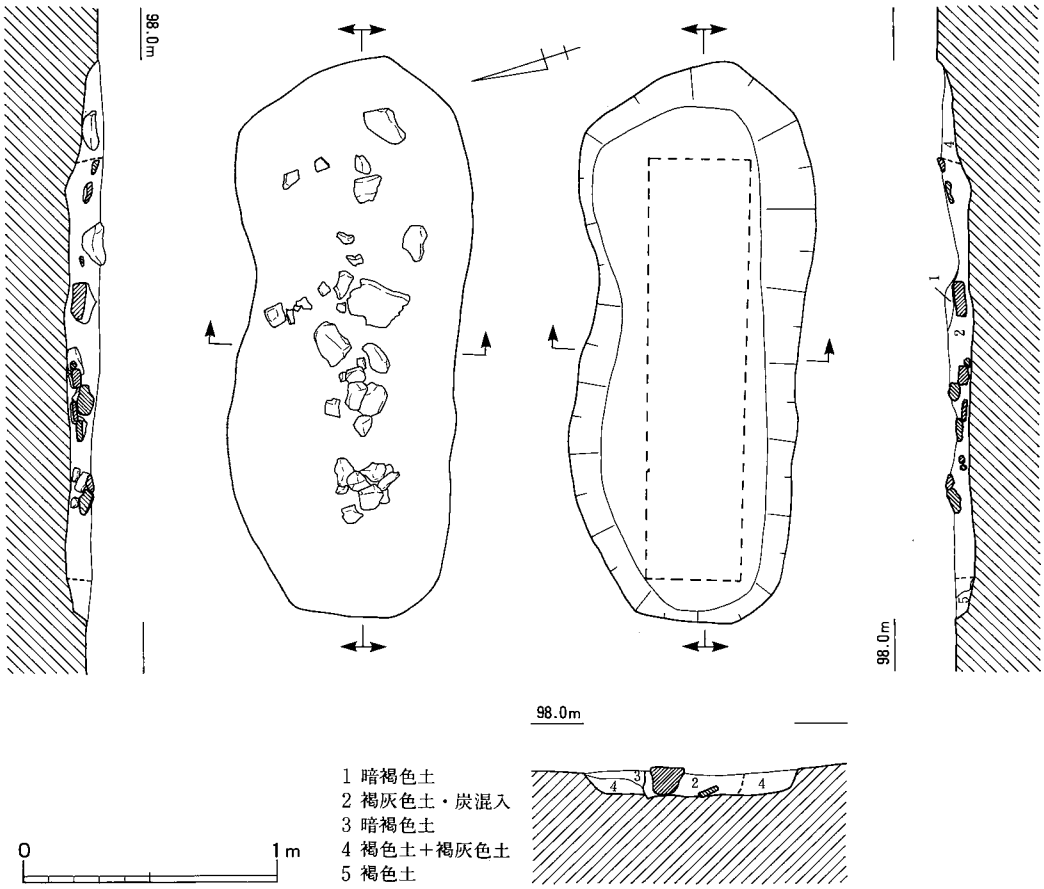
土壙3



土壙4



第64図　土壙3・4



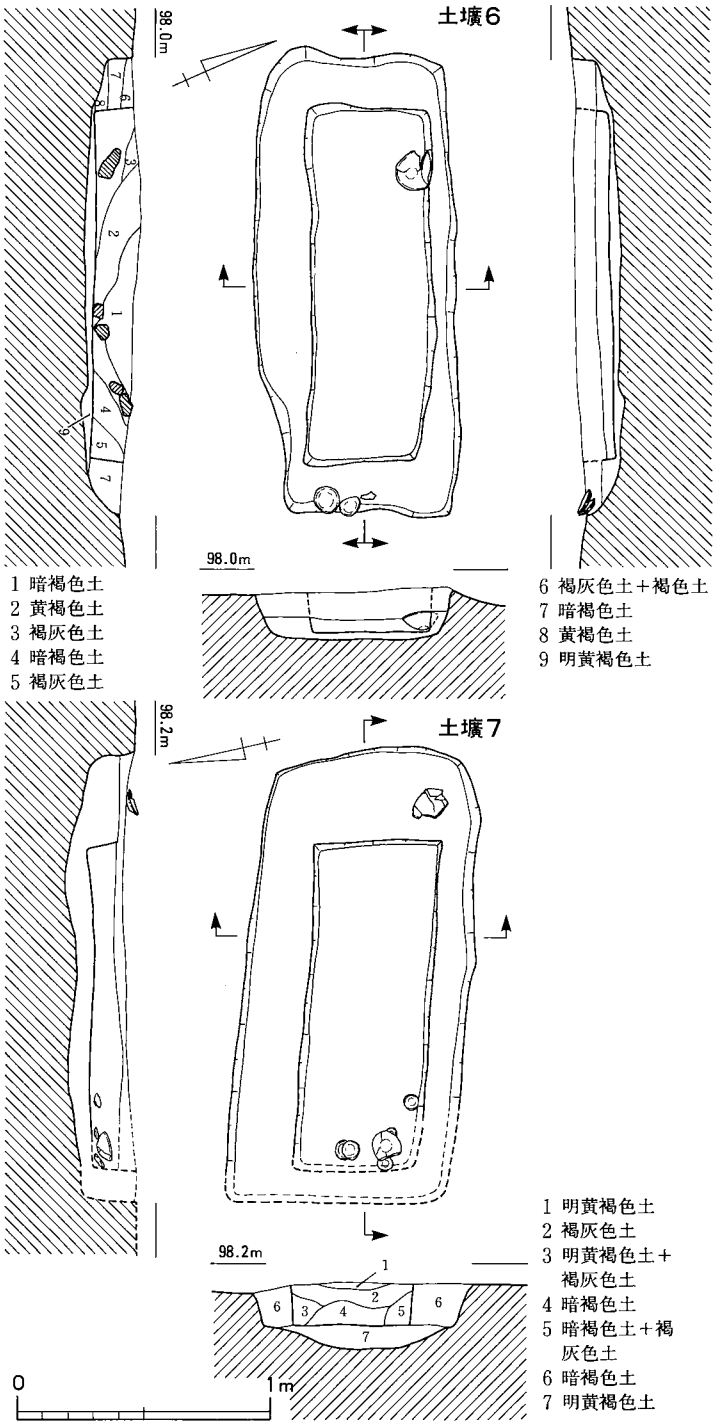
第65図　土壙５

18・土壙７が隣接する。木棺墓である土壙７とは、木棺の主軸方向がほぼ同一方向を示す。墓壙は南東隅が括れ、東西方向に長い歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.80m・短軸0.79m・深さ20cmを測る。木棺は墓壙内北寄りに埋置され、規模は、全長1.4m、西側小口幅47cm、東側小口幅43cmを測る。棺底の西端と東端では４cmの比高差で西端が高い。木棺の主軸方位は、N66°30′Wである。

遺物は、東側墓壙内より、完形の土師器小皿（281・282）と土師器小皿の破片（279・280）が出土した他、棺底北西隅付近より、土師器小皿（283・284）、須恵器椀（285）が出土した。

土壙７（第66図）

調査区の中央部西端、C・D－15区に位置する木棺墓である。土壙の東側には掘立柱建物17・18が近接し、西側には木棺の主軸方位をほぼ同方向にもつ土壙６が隣接する。墓壙は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.80m、短軸0.72m、深さ25cmを測る。木棺は、墓壙内南西寄りに埋置され、全長1.32m、西小口幅49cm、東小口幅46cmを測る。棺底の西端と東端では３cmの比高差で東端が高い。木棺の主軸方位は、N67°30′Wである。



第66図　土壙６・７

遺物は、墓壙北西隅より土師器大皿（290）が出土した他、棺底南西隅、東小口付近より土師器小皿（286～289）が出土した。

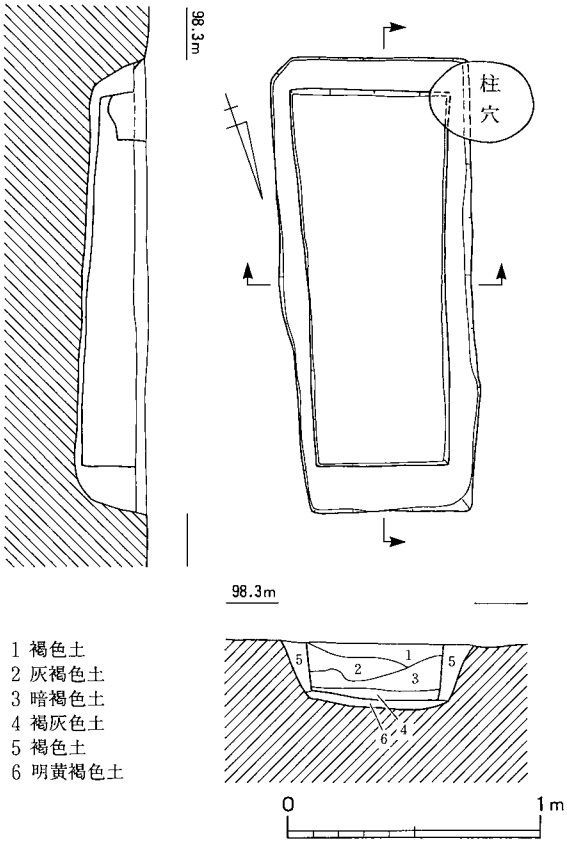
土壙８（第67図）

調査区の中央部、Ｈ－16・17区に位置する木棺墓である。土壙は、掘立柱建物14の北東隅身舎内と重なり、また土壙の南西隅は掘立柱建物13の柱穴（Ｐ14）に切られている。墓壙は南北方向に長い長方形を呈し、規模は、長軸1.79ｍ・短軸0.75ｍ・深さ25㎝を測る。木棺は、墓壙のほぼ中央に埋置され、全長1.49ｍ・南小口幅55㎝・北小口幅47㎝を測る。棺底の南端と北端では４㎝の比高差で南端が高い。木棺の主軸方位は、N19°30′Eである。

副装品は無かった。

土壙９（第68図）

調査区の中央部東寄り、Ｊ－17・18区に位置する。土壙の南側約７ｍの所に掘立柱建物24があり、西側約８ｍの所には掘立柱建物13～15の建物址群が位置する。墓壙の南辺は溝状の落ち込みによって部分的に破壊を受けているが、土壙の遺存状況は比較的良好で



第67図　土壙８

ある。墓壙は、北東隅が多少膨らんだ東西方向に長い歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.73m・短軸0.68m・深さ45cmを測る。木棺は、墓壙内南辺に接して埋置され、木棺の規模は、全長1.25m・東小口幅52cm・西小口幅50cmを測る。棺底の東端と西端では３cmの比高差で東端が高い。木棺の主軸方位は、N72°Wである。

副装品はなかった。

土壙10（第69図）

調査区の中央部東寄り、Ｉ－20区に位置する土壙墓である。土壙の東側には掘立柱建物24が近接する。土壙の東端は、攪乱により部分的に破壊を受けている。墓壙は東半部が窄まった。東西方向に長い歪な楕円形を呈する。規模は長軸が1.68m、短軸が0.65mを測り、壙底までの深さは15cmを測る。壙底には厚さ５cmの貼り土を施し、床面を平坦にしている。壙底の東端と西端では３cmの比高差で西端が高い。土壙の主軸方位はN70°Wである。

遺物は、土壙内東端の壙底直上より瓦器椀（291）、中央部東寄り壙底直上より鋏を南方向に向けた状態で小刀（５）が出土している。

土壙11（第70図）

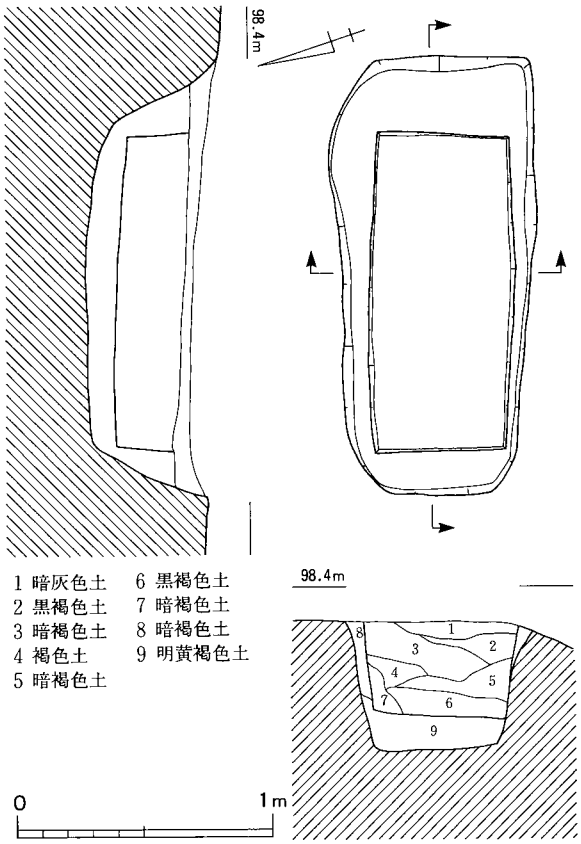
調査区の北西隅、Ｅ－５区に位置する。土壙の東には掘立柱建物１が近接している。土壙は東西方向に多少長い歪な円形を呈し、規模は長軸0.9m・短軸0.86mを測り、深さは最深部で34cmを測る。断面形は深い皿状を呈する。

土壙内埋土は１層で粗砂が主体の砂層である。

遺物は、土師器・須恵器の細片が出土したが、図化できる土器はなかった。

土壙12（第70図）

調査区の北端、Ｆ－５区に位置する。土壙の北側１mの所には土壙13が、南側3.5mの所には土壙14が近接する。また掘立柱建物１の身舎内に位置するが、建物址の柱穴と重複していない。土壙は、南北方向に長い楕円形を呈し、規模は、長軸1.42m・短軸1.15mを測り、深さは



第68図　土壙９

最深部で20cmと浅い。断面の形状は浅い皿状を呈する。土層は礫・粗砂混じりのシルトが主体で、最下層は炭片を多量に混入している。

遺物は、土師器・瓦器・須恵器の細片が多量に出土したが図化できる土器はなかった。

土壙13（第70図）

調査区の北端、Ｆ・Ｇ－４・５区に位置する。土壙の南側１ｍの所には土壙12が近接し、また掘立柱建物１の身舎内と重なるが建物址の柱穴と重復していない。土壙は多少東西方向に長い円形を呈し、規模は長軸0.91ｍ・短軸0.81ｍを測り、深さは最深部で18cmと浅い。断面形の形状は浅い皿状を呈する。埋土は礫混じりのシルトが主体で、下層は多量の炭片が混入している。

遺物は、土師器小皿の細片が出土したが、図化できなかった。

土壙14（第70図）

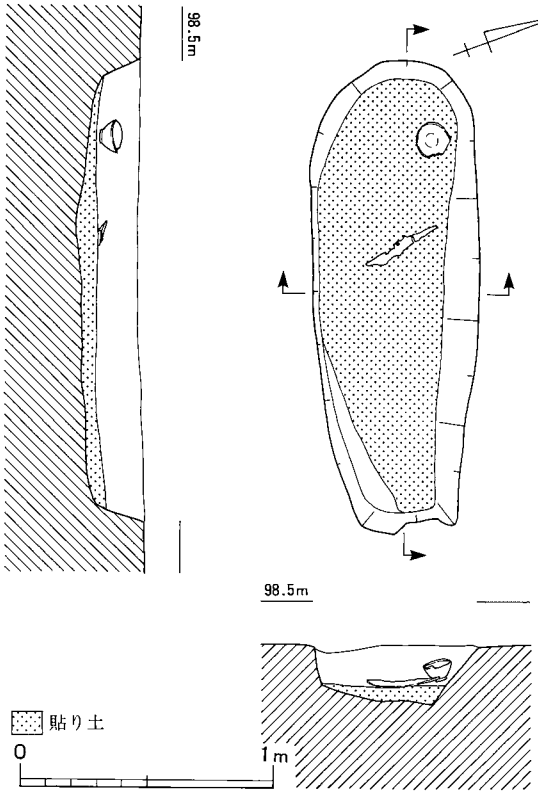
調査区の北半部、Ｆ－６区に位置する。土壙の北側約3.5mの所には土壙12が近接する。また掘立柱建物１の身舎内南東隅と重なるが建物址柱穴と重複していない。また土壙の北西隅で建物址に伴わない柱穴に切られている。土壙は歪な円形を呈し、規模は長軸1.44ｍ・短軸1.34ｍを測り、深さは最深部で13cmと浅い。

埋土は礫混じりの砂層が主体で、下層には多量の炭が混入する。

遺物は出土しなかった。

土壙15（第71図）

調査区の北半部、Ｅ・Ｆ－７・８区に位置する。土壙の南側には掘立柱建物２が隣接し、東側には、掘立柱建物５・６が近接する。また土壙の東端は柱穴に切られている。土壙は、東西方向に長い歪な楕円形を呈し、規模は、長軸1.57ｍ・短軸1.42ｍを測り、深さは最深部で23cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。土壙内上層には15×５cm～27×17cm大の河原石が確認され、この河原石のなかには火を受け赤化した石が多い。埋土は礫混じりの砂層が主体で、炭片



第69図　土壙10

を多く含む。

遺物は、土師器の細片が出土したが、図化できる土器はなかった。

土壙16（第71図）

調査区の北半部、G－6・7区に位置する。土壙の位置は、掘立柱建物5の北西隅の身舎内と重なる。東側には、土壙17が近接している。

土壙は、南北方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.17m・短軸0.62mを測り、深さは最深部で25cmを測る。断面の形状は鍋底状を呈する。土壙内上層中より15×10cm大の多量の河原石が確認され、河原石の中には火を受け赤化した石が多い。埋土は、礫混じりのシルトが主体で、炭片を多く含む。

遺物は、埋土上層の河原石に混じって土師器小皿（292～295・297・298）、瓦器椀（299）、土錘（300）、須恵器小皿（300）、土鍋（296）が出土している他、鉄釘（16）、鉄製坩堝（9）が出土している。

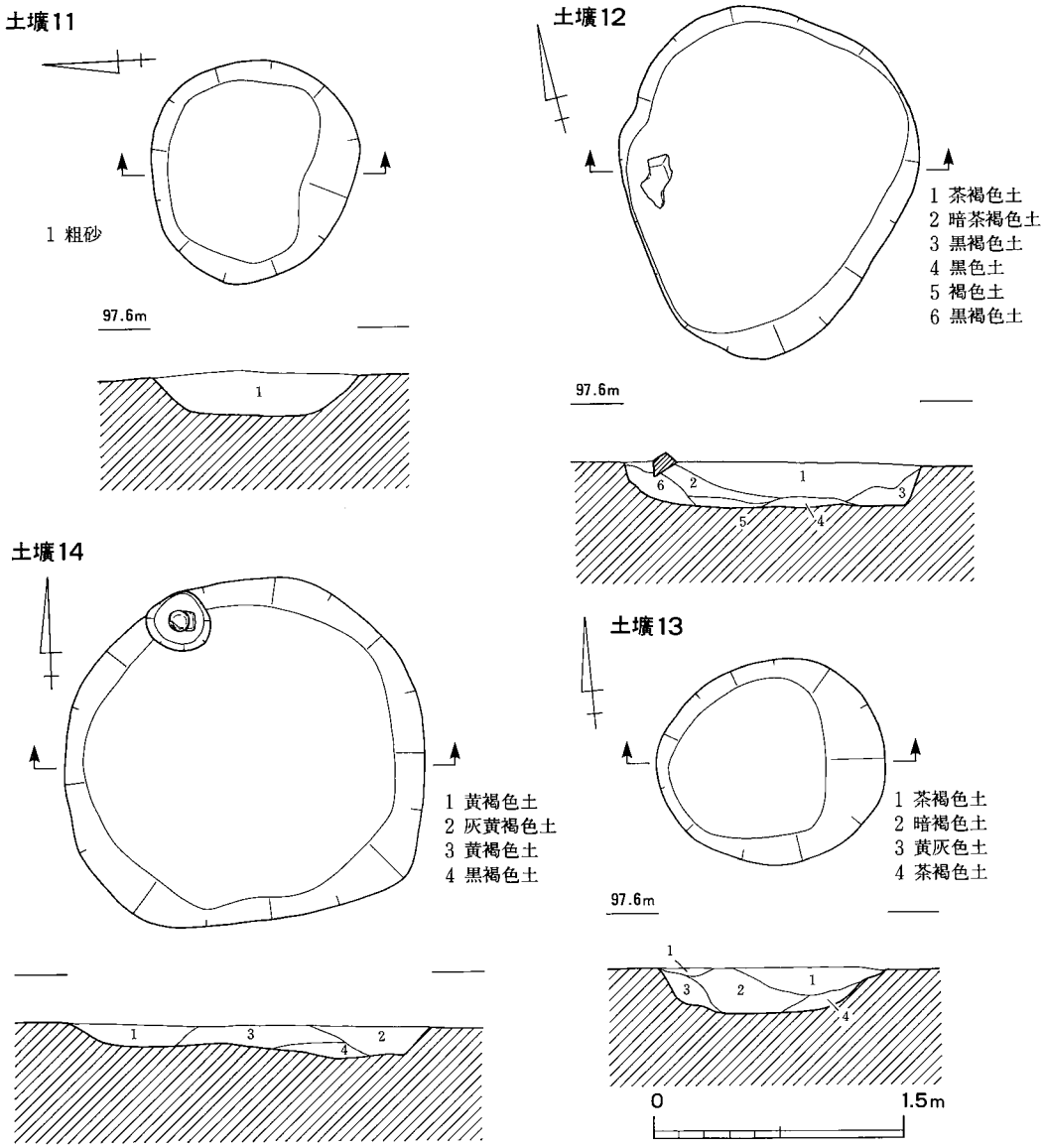
土壙17（第72図）

調査区の北半部、G－8区に位置する。土壙は掘立柱建物5の東側身舎内、および掘立柱建物7の西側身舎内とそれぞれ重なり、南側には、掘立柱建物6、東側には掘立柱建物8・9が近接する。土壙は、北側に直線的な辺をもつ歪な円形を呈し、規模は、長軸1.48m・短軸1.43mを測り、深さは最深部で20cmである。断面の形状は、皿状を呈する。土壙埋土は、砂混じりシルトが主体で、炭片を含む。埋土上層には30×20cm大の扁平な河原石が確認され、いずれも火を受け赤化している。

遺物は、土壙埋土中より土師器小皿（303）が出土した。

土壙18（第72図）

調査区の北半部、G－6区に位置する。土壙は、掘立柱建物5の北西隅身舎内に位置し、西側には土壙16が近接する。土壙はほぼ円形を呈し、規模は長軸0.74m・短軸0.68mを測り、深さは最深部で15cmである。断面の形状は浅い丸底状を呈する。土壙底面の中央部から南側立ち



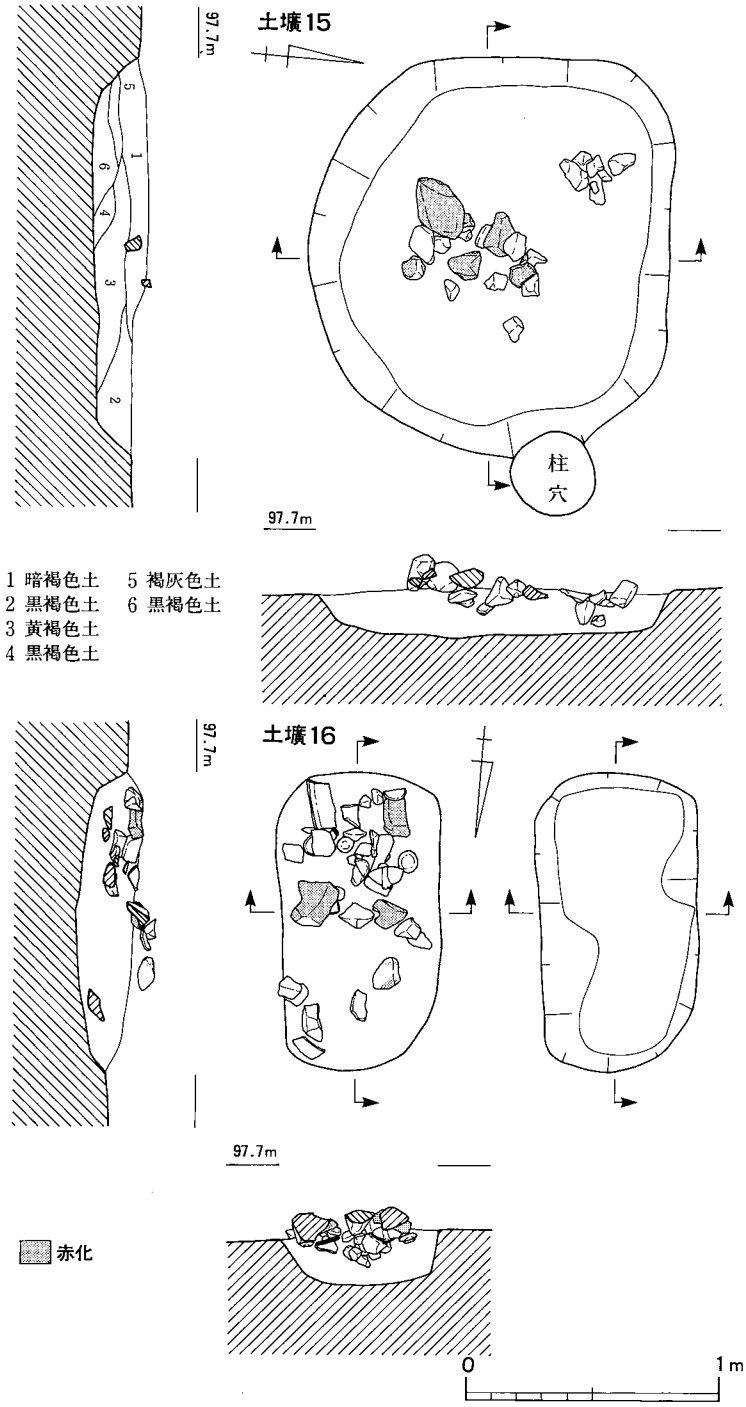
第70図　土壙11～14

上がり部分にかけて、焼土が確認された。土壙埋土は礫を含んだ砂混じりシルトが主体で、上層にも焼土層を確認した。

遺物は、土壙埋土中より土師器小皿（302）が出土した。

土壙19（第73図）

調査区の中央部、E・F－18区に位置する。土壙の東側３ｍの所には掘立柱建物16・19が、西側に約４ｍの所には掘立柱建物18があり、土壙は両建物址のほぼ中間に位置する。土壙は多



第71図　土壙15・16

少南北方向に長い円形を呈し、規模は、長軸0.85m・短軸0.81mを測り、深さは最深部で12cmである。断面の形状は皿状を呈する。土壙内には15×5cm大の河原石を多量に含む。

遺物は、埋土中より瓦器椀の底部破片（304）が出土した。

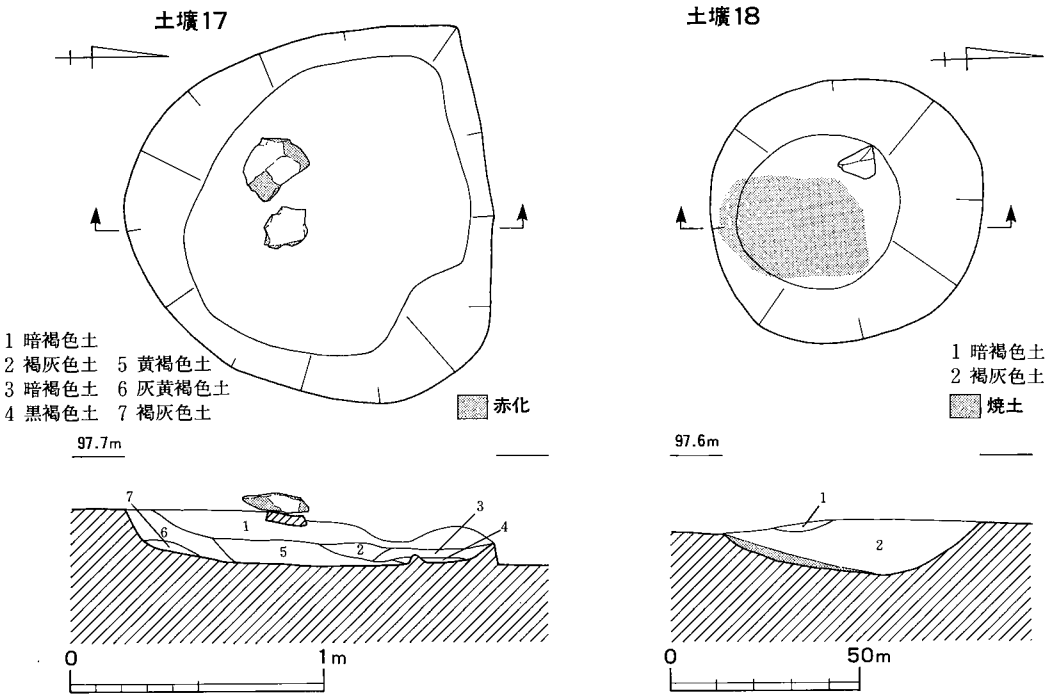
土壙20（第73図）

調査区の中央部、F－19区に位置する。土壙の北側1.5mの所に掘立柱建物16が、南側50cmの所には、掘立柱建物19が近接する。土壙はほぼ円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.45mを測り、深さは最深部で10cmと浅い。断面形の形状は、皿状を呈する。

土壙内には土器が投棄された状況で出土し、完形になる土器はなく、すべて破片である。

出土した土器は土師器小皿（305・306）・大皿（307）、瓦器椀（308）、常滑焼系甕破片（309）が出土した。

また、これらの土器に混って鉄製の坩堝（9）が1点、埋中より出土した。



第71図　土壙17・18

土壙21（第74図）

調査区の中央部、E・F－19区に位置する。土壙は掘立柱建物19の北西隅身舎と部分的に重なる他、南側1.5mのところには土壙22・23が近接する。

土壙内には柱穴が3穴確認され、土壙はこれらの柱穴を切って、掘削されている。

土壙は南東隅が狭まった歪な楕円形を呈し、規模は、長軸2.45m・短軸1.90mを測り、深さは最深部で10cmと浅い。断面の形状は浅い皿状を呈する。

土壙内には20×5cm大の河原石が多量に出土し、出土した河原石のなかには火を受け赤化した石も混じっている。

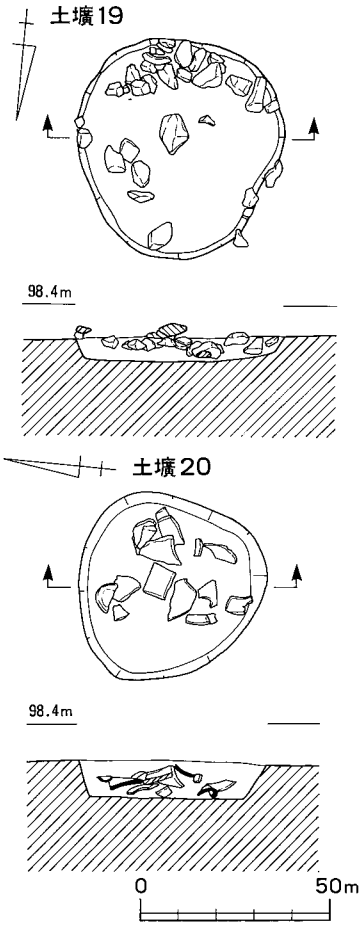
遺物は、河原石に混じって土師器小皿（310）、瓦器椀（311）、土鍋（312）が出土した。

土壙22（第75図）

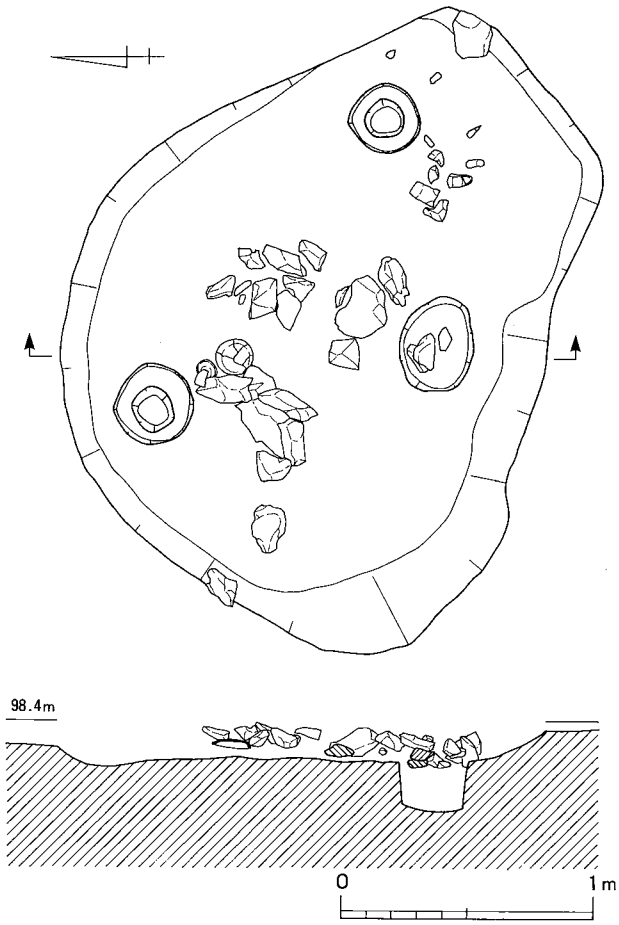
調査区の中央部、F－19区に位置する。土壙は掘立柱建物19の西側身舎内と重なる他、北側約1.5mのところに土壙21が、東側30cmのところには土壙22がそれぞれ近接する。

土壙は円形を呈し、規模は、長軸0.65m・短軸0.61mを測り、深さは最深部で35cmである。断面の形状は丸底状を呈する。土壙底面中央部には炭層が確認された。

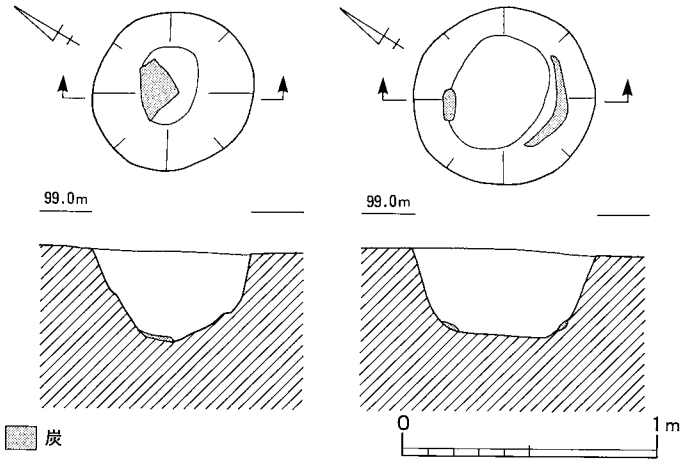
遺物は出土しなかった。



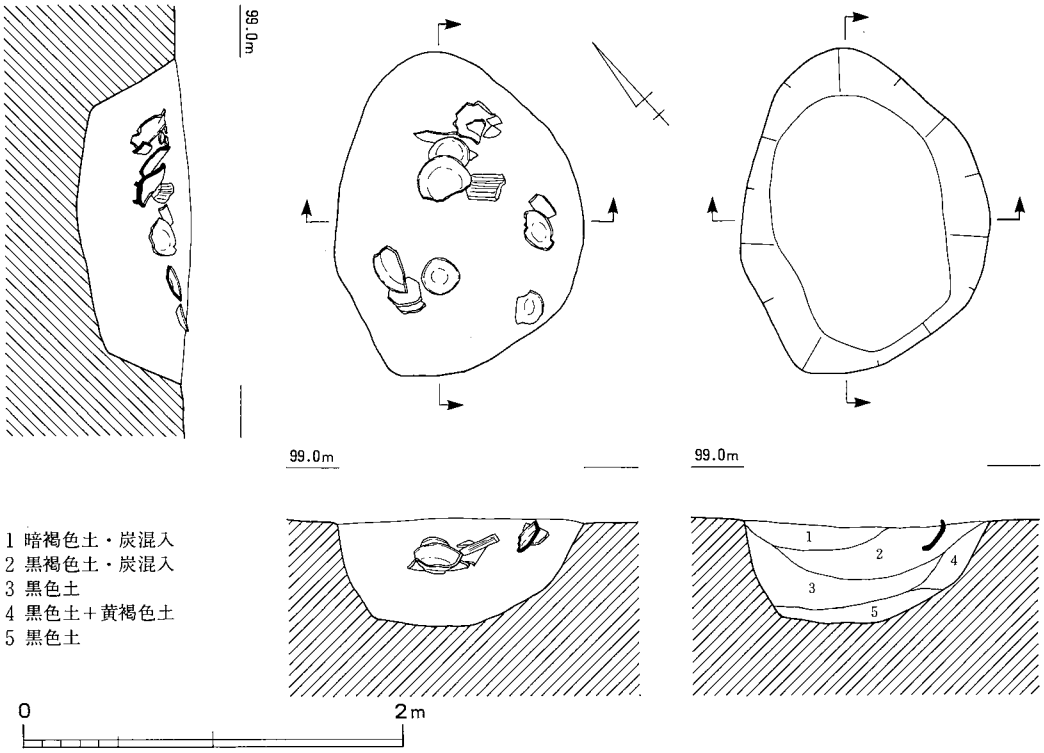
第73図　土壙19・20



第74図　土壙21



第75図　土壙22・23



第76図　土壙24

土壙23（第75図）

調査区の中央部、F－19・20区に位置する。土壙は、掘立柱建物19の西側身舎内と重なる他、北側約1.5mのところに土壙21が、西側30cmのところには土壙22が近接する。土壙は多少北西方向に長い円形を呈する。規模は長軸0.71m・短軸0.65mを測り、深さは最深部で30cmである。断面の形状は、深い鍋底状を呈する。土壙底面の南北両端には炭層が確認された。

遺物は出土しなかった。

土壙24

調査区の南端、B－27区に位置する。土壙の北側約8mのところに掘立柱建物23が隣接している。土壙は、南北方向に長い歪な楕円形を呈し、規模は、長軸0.82m、短軸0.65mを測る。深さは最深部で26cmである。断面の形状は深い鍋底状を呈する。土壙埋土は5層に分けられ、下層の3～5層は粗砂が主体の砂層である。上層の1・2層は粗砂混じりシルトで、炭片を含み、とくに2層は炭片を多量に含む。

遺物は、土師器小皿（313～315）・杯（316）・土鍋（317）、黒色土器椀（318～322）、須恵器椀（323）が第2層中よりまとまって出土した。

第４節　中世の遺物

当調査区から出土した遺物は、コンテナバットに換算して70箱を数える。種類は土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・中国製磁器・国産陶器・木製品・石器・金属器等がある。出土量は土器が最も多く、かつ多彩な土器が出土している。器種は、土師器が皿・杯・鍋・羽釜、黒色土器が椀、瓦器が皿・椀、須恵器が皿・椀・鉢・壺・甕、国産陶器が丹波焼小壺・小鉢、常滑焼系甕、中国製磁器が白磁・青磁の皿・椀・壺がある。出土した遺物のなかで特筆すべきものとして、巡方・台形様石器・石斧・燧石等の石製品をはじめ、金属器では、鉄製の燧鎌・坩堝がある。この項で取り扱う遺物は、主として平安時代後期の遺物であるが、石製品については、台形様石器・石斧・巡方等の旧石器時代・縄文時代・奈良時代と考えられる石製品もあわせて報告することを予めお断りする。

遺物の報告にあたっては、遺構出土の遺物を主として掲載した。金属器・木製品・石製品は図化可能なものはすべて掲載したが、土器については図化可能な土器のうち約26％を掲載する結果になった。掲載できなかった土器については、第６章で若干触れる。

１．土　器

土師器

土師器は、大皿・小皿・杯・鍋・羽釜がある。量的には皿類が最も多い。

土師器皿は、出土した土器のなかでも、もっとも量が多く、かつ多彩な器形をもつ。皿はその大きさから大皿と小皿とに大別した。また技法的特徴から手づくね成形の皿（Ａ類）、底部の切り離しに回転糸切り手法をもちいた粘土紐巻き上げ成形の皿（Ｂ類）とに分け、器形・整形技法・法量からさらにいくつかに細分した。

大　皿

口径12～17㎝、器高２～４㎝の大きさの皿で、Ａ類とＢ類の皿がある。

Ａ類

器形・整形技法・法量によってⅠ～Ⅲ類に大別した。

Ⅰ類：浅い丸底の体部から口縁部が内彎気味に立ち上がる皿である。体部外面はユビオサエ、口縁部はヨコナデ整形を施す。口径13.8㎝・器高2.3㎝を測る。

Ⅱ類：浅い丸底の体部から口縁部が直線的に外傾して立ち上がる皿である。外面体部ユビオサエの後ナデ整形、内面体部不定方向のナデ整形。口縁部内外面ヨコナデ整形。口径15.5～16㎝・器高３㎝前後を測る。

Ⅲ類：深い丸底の底部から口縁部が短く外反して立ち上がる皿である。外面体部ユビオサエの後ナデ整形、口縁部と体部の境付近にユビオサエ整形の痕跡が顕著に残る。内

面体部不定方向のナデ整形を施すが、ユビオサエ整形の痕跡が顕著に残る。口縁部内外面ヨコナデ整形。法量から２つに細分した。

１類：口径14.5～16.5cm・器高2.3～4.7cmの大型のⅢ

２類：口径12～13cm・器高2.5～３cmの中型のⅢ

B類

器形・整形・法量によってⅠ・Ⅱ類に大別した。

Ⅰ類：口縁部が内彎気味に外方に開くⅢ。体部から口縁部回転ナデ整形。口径13.5～14.6cm・器高1.9～3.4cm。

Ⅱ類：口縁部が大きく外反して開くⅢ。内外面回転ナデ整形であるが、回転ナデ後体部外面に横位のナデ整形を施すⅢもある。口径14～16.3cm・器高2.6～3.8cmを測る。

表５．土師器Ⅲ分類表

器種	分類	報告番号					器種	分類	報告番号				
	A							B					
大	Ⅰ	197					大	Ⅰ	167	250	307		
	Ⅱ	278	248					Ⅱ	144	145	191	211	
	Ⅲ							1	135	192	214	215	227
Ⅲ	1	242	243	244	245	246	Ⅲ		290				
	2	247	268	269	341			2	203	212	213		
	Ⅳ	275						Ⅰ	125	132	282	187	210
	Ⅰ	133	155	176	177	234		Ⅱ					
		236	237	276	306	327		1	128	313	314	315	
	Ⅱ	126	141	160	162	178		2	182	208	209	272	279
小		179	180				小		280	281	286	287	288
	Ⅲ	142	154	156	157	175			289	295	329	330	
		185	238	274				Ⅲ	292	293	294	303	
	Ⅳ	126	127	139	143	161		Ⅳ	137	140	273	310	338
		284	302	326	328				339				
Ⅲ	Ⅴ	138	158	159	206	235	Ⅲ	Ⅴ	131	136	162	163	164
		267	305						165	166	181	207	267
	Ⅵ	152	153	205	283	324			271				
		325	337										

小　皿

口径７～10cm・器高１～3.5cmを測る皿である。A類・B類の皿がある。

A類

器形・整形技法によってⅠ～Ⅵ類に大別した。

Ⅰ類：浅い丸底の体部から口縁部が内彎気味に短く立ち上がる皿である。外面体部ユビオサエないしはユビオサエの後ナデ整形。内面体部上位から外面口縁部にかけてヨコナデ整形。内面体部はナデ整形。口径7.6～8.7cm・器高1.1～2.3cmを測る。

Ⅱ類：浅い丸底の体部から口縁部が大きく外方に開く皿である。外面体部ユビオサエないしはユビオサエ整形の後ナデ整形。内面体部上位～外面口縁部にかけてヨコナデ整形。内面体部はナデ整形。口径5.7～6.4cm・器高1.3～2.7cmを測る。

Ⅲ類：深い丸底の体部から口縁部は短く直立する。外面体部ユビオサエ整形、内面体部上位から外面口縁部にかけてヨコナデ整形。内面体部は、未整形ないしはナデ整形。口径8.3～9.4cm・器高1.4～1.88cmを測る。

Ⅳ類：平底気味の体部から口縁部は外反し、端部が垂直に立ち上がり端部外面に面をもつ皿。外面体部ユビオサエ整形、内面体部上位から外面口縁部にかけてヨコナデ整形。外面口縁部は２段のヨコナデ整形。内面体部下位はナデ整形。口径8.0～9.6cm・器高1.3～2.0cmを測る。

Ⅴ類：平底状ないしは浅い丸底の体部から口縁部が短く外反する皿。外面体部ユビオサエ整形、内面体部上位から外面口縁部にかけてヨコナデ整形。内面体部下位はナデ整形。口径7.4～9.5cm・器高1.5cm前後を測る。

Ⅵ類：丸底の体部から口縁部が内彎して立ち上がる皿。外面体部ユビオサエ整形の後ナデ整形、内面体部上位から口縁部ヨコナデ整形。口縁部外面のヨコナデ整形が２段の皿と１段の皿がある。内面体部下位はナデ整形。口径8.0～9.6cm・器高1.1～2.0cmを測る。

B類

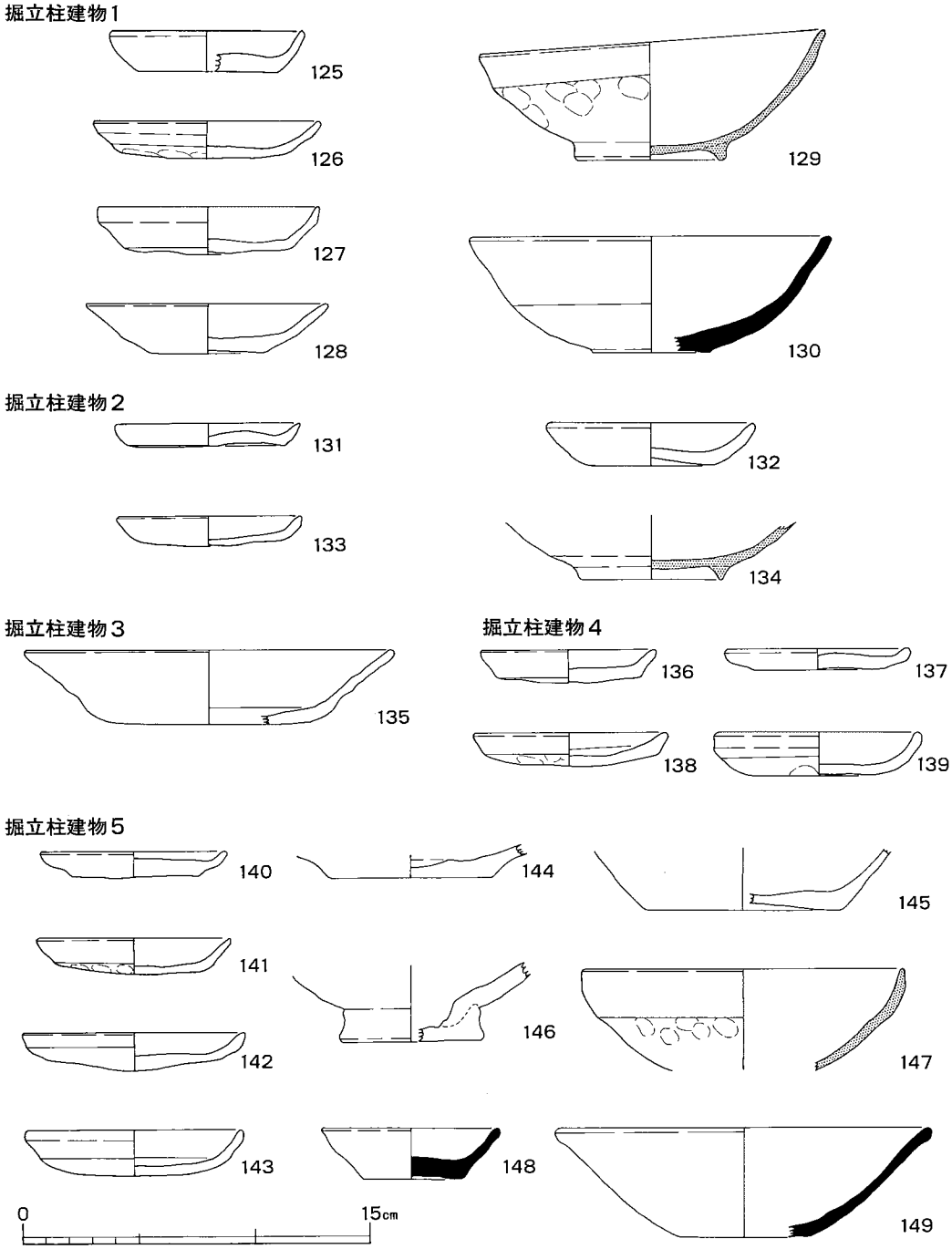
器形・整形技法によってⅠ～Ⅴ類に大別した。Ⅱ類の皿は法量でさらに２つに細分した。

Ⅰ類：口縁部が外傾して立ち上がる皿である。内外面とも回転ナデ整形。口径7.8～9.0cm・器高１～1.8cmを測る。

Ⅱ類：口縁部が外反する皿である。内面体部上位から外面口縁部にかけて回転ナデ整形。内面体部中央ナデ整形。

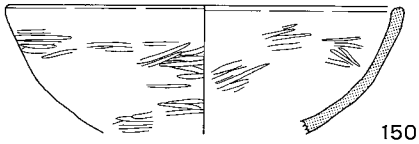
口径 7.5～8cm・器高１～1.7cmの皿（１類）と口径10cm・器高2.3～3.6cmの皿（２類）に細分した。

Ⅲ類：口縁部が外方に大きく開く皿。内面体部上位から外面口縁部にかけて回転ナデ整形、

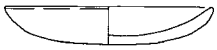


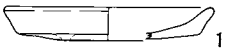
第77図　掘立柱建物出土土器（1）

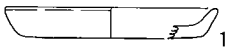
掘立柱建物6

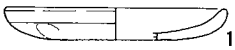


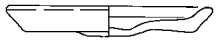
掘立柱建物7

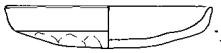


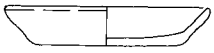


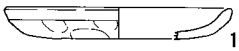


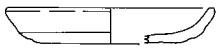


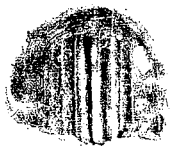


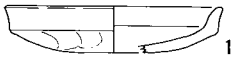


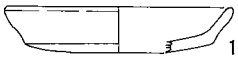


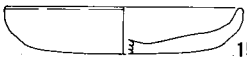


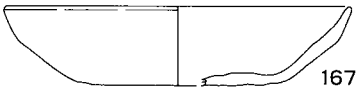


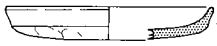


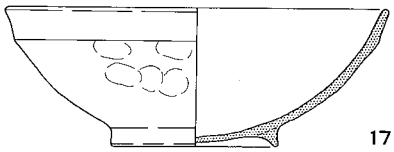


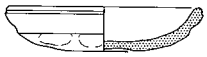


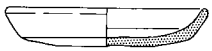


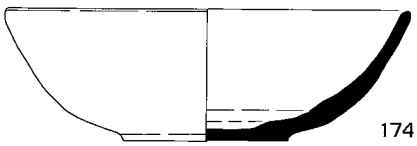


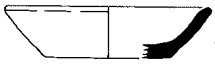




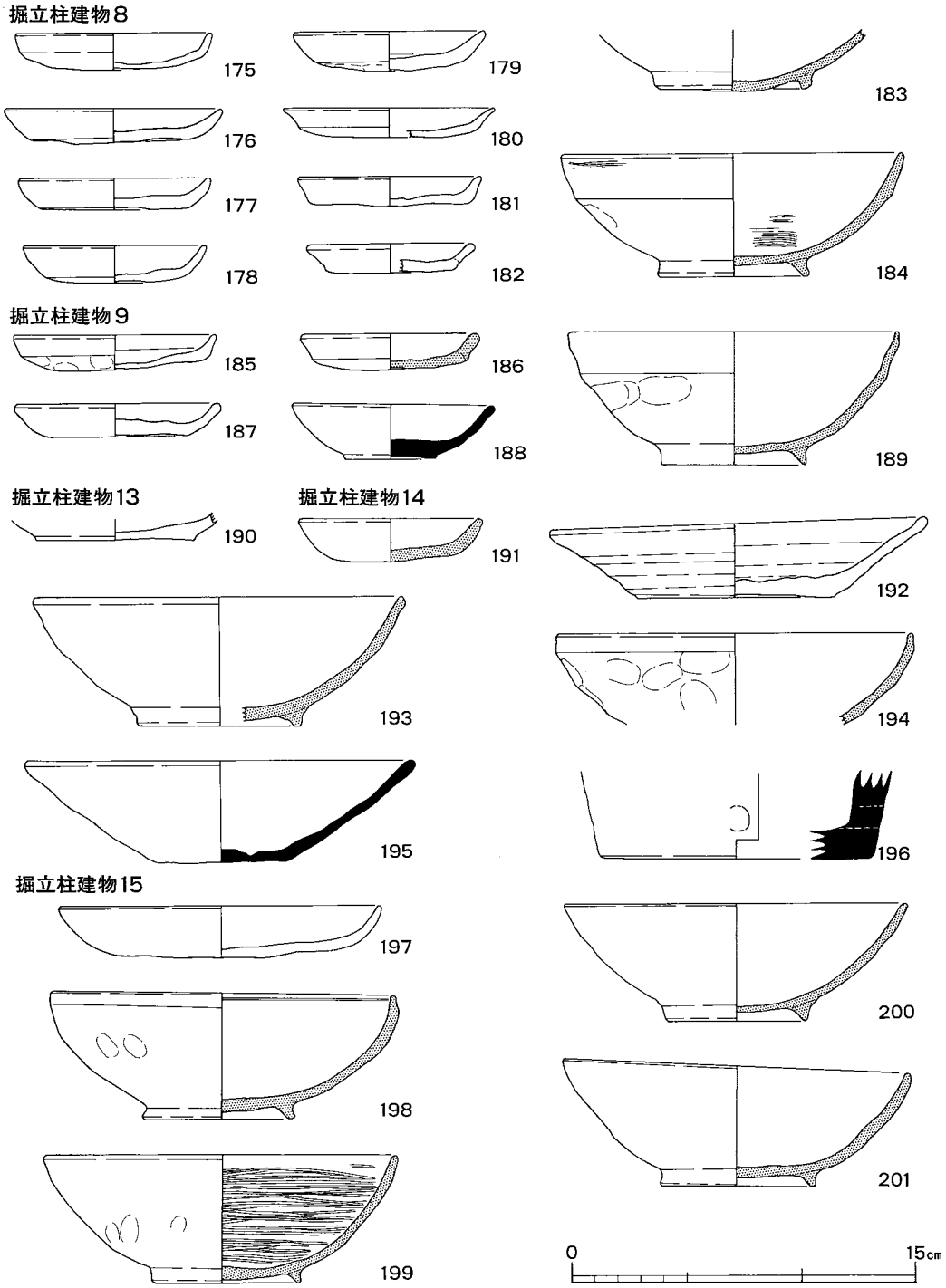




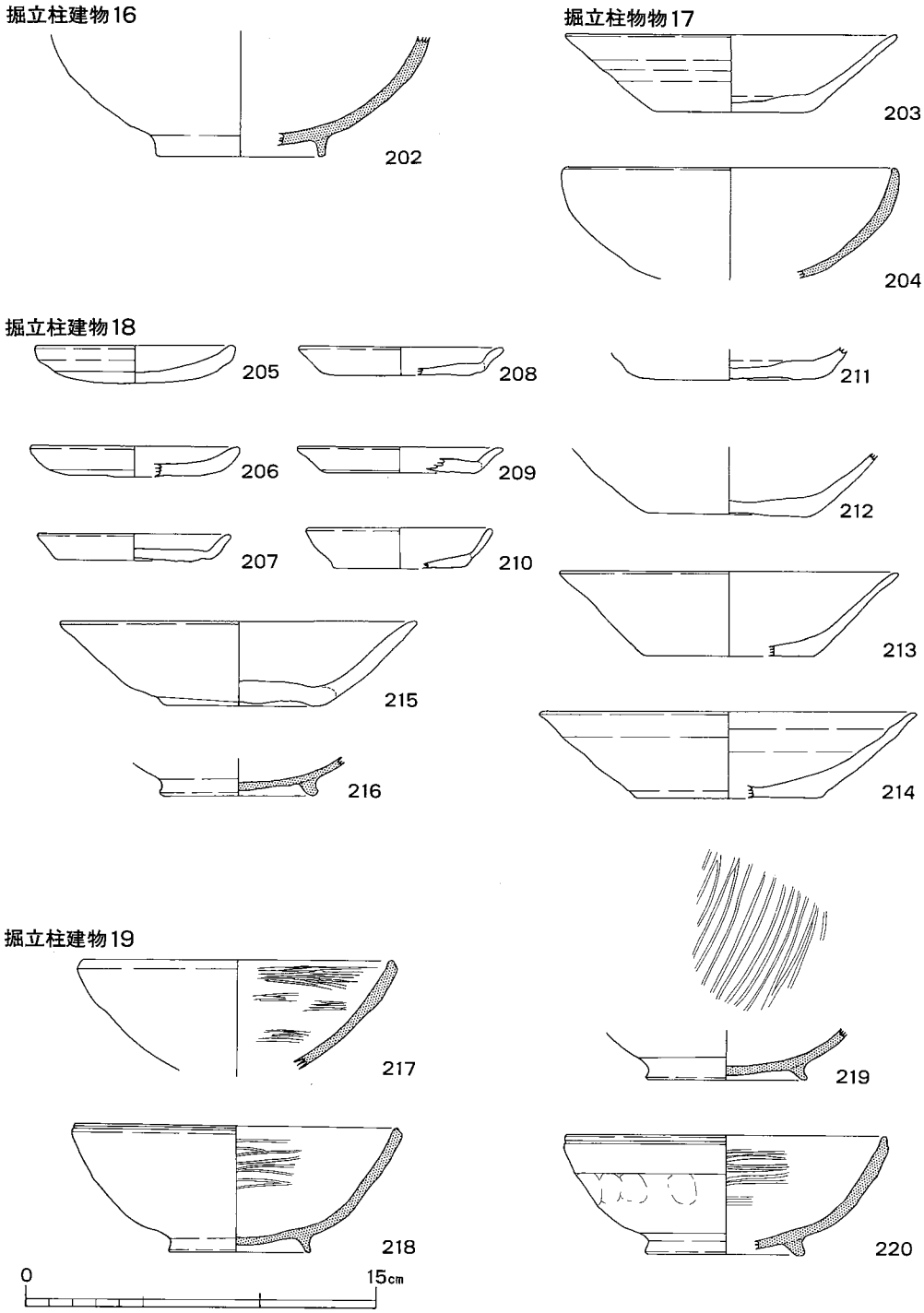




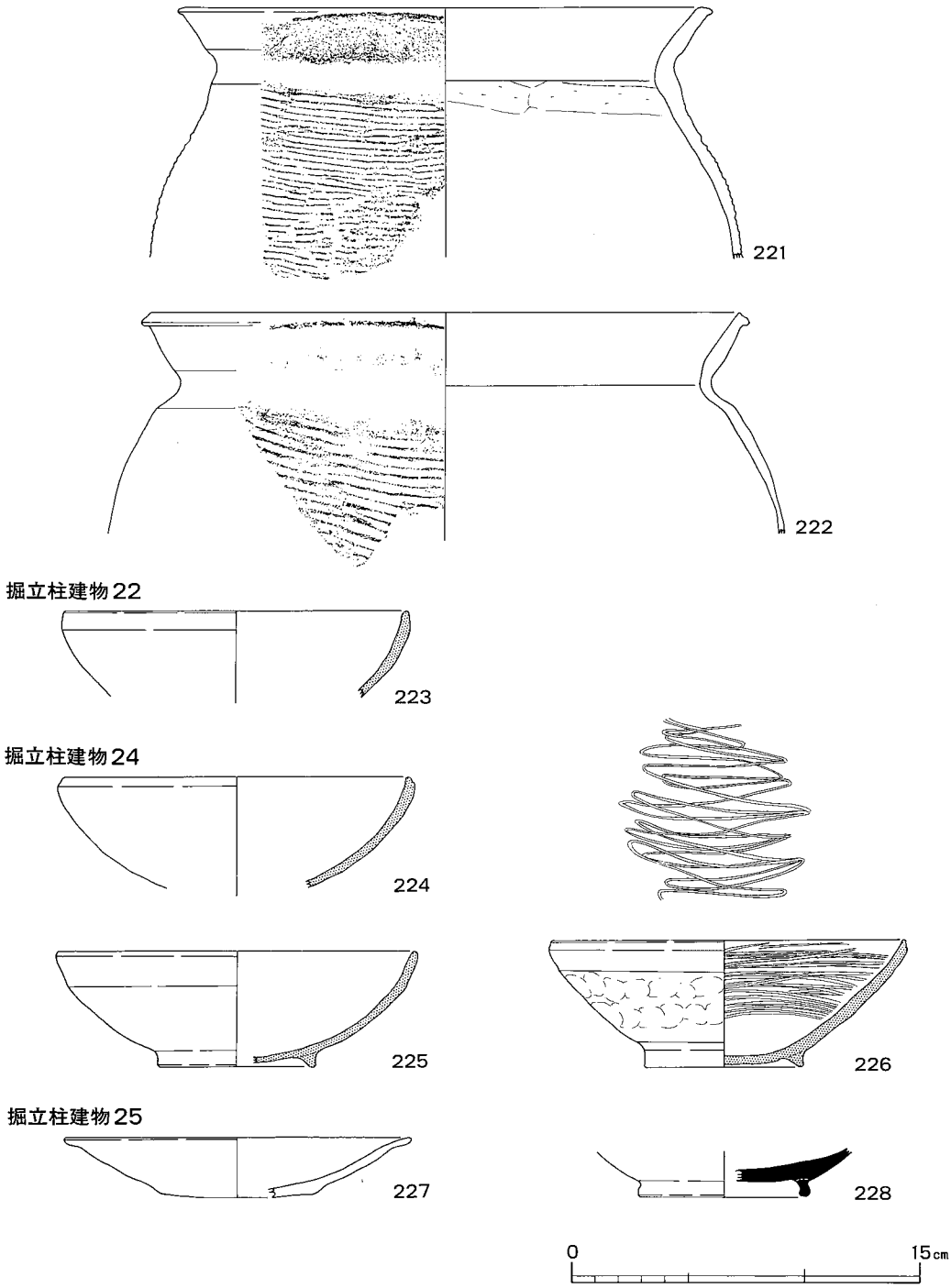
第78図　掘立柱建物出土土器（2）



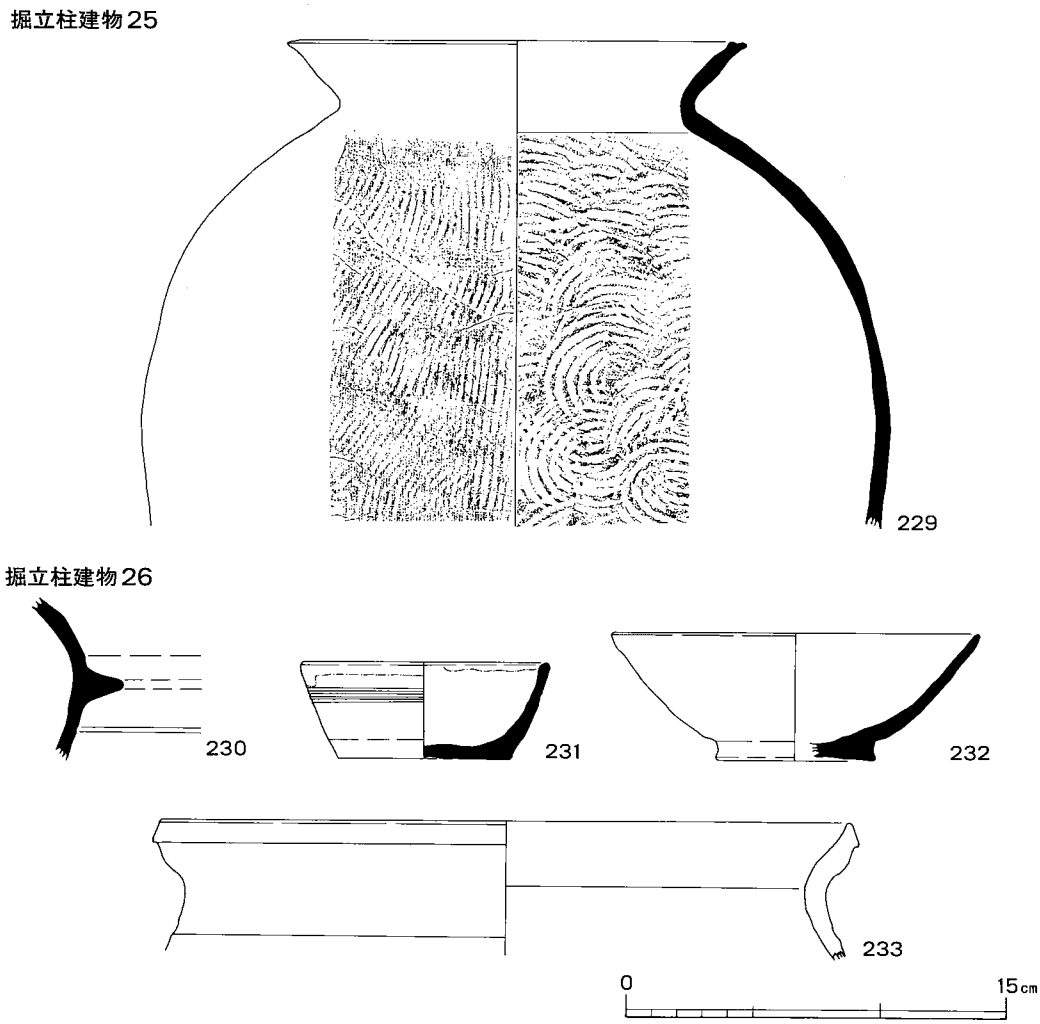
第79図　掘立柱建物出土土器（3）



第80図　掘立柱建物出土土器（4）



第81図　掘立柱建物出土土器（5）



第82図　掘立柱建物出土土器（6）

内面体部中央ナデ整形。口径8.2～9.5cm・器高1.5cm前後を測る。

Ⅳ類：口縁部が内彎して短く立ち上がる皿。内面体部上位から外面口縁部にかけて回転ナデ整形。内面体部中央ナデ整形。口径7.8～9.5cm・器高0.8～1.8cmを測る。

Ⅴ類：口縁部が短く立ち上がる皿。内外面口縁部回転ナデ整形。内面体部中央ナデ整形。口径6.4～8.3cm・器高1.0～1.4cmを測る。

杯

円盤状高台をもち、口縁部が外方向に浅く開く杯である。内外面とも回転ナデ整形を施し、底部の切り離しは、146 ・316 が回転糸切り手法、340 が静止糸切り手法を用いている。法量

は316が口径9.9cm・器高1.9cm、340 が口径9.8cm、器高2.3cmを測る。

鍋

221・222・233・296・317は鍋である。296は口縁部が外反して立ち上がる大型の鍋である。口縁部内外面はヨコナデ整形、外面体部には平行タタキを施し、内面はユビオサエ整形後、横位ナデ整形を施す。口径は推定で35.1cmを測る。221・222・233・317は口縁部が「く」の字状に屈曲する鍋である。233・317が外反気味に短く屈曲するのに対して、221・222は大きく直線的に屈曲し、口縁端部が外方向に突出する。口縁部は内外面ともにヨコナデ整形を施し、外面体部は平行タタキ、内面は横位のナデ整形を施す。法量は、221が推定で口径23.0cm、222が推定で口径26.2cm、296が推定で口径40.0cm、317が推定で口径19.2cmを測る。

羽釜

312は狭い鍔をもった釜である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は若干上方に拡張する。口縁部内外面はヨコナデ整形、内面体部は横位のナデ整形を施す。口径は推定で32.7cmを測る。

黒色土器

椀が出土している。円盤状高台をもつ150・319・320・321と輪高台をもつ318に分かれる。150・319・320の一群は内外面ともに斜位・横位のミガキが密に施され、内面底部は不定方向のミガキが施される。321は内外面とも磨滅が著しく整形は不明である。遺存状況の良好な椀はなく、法量は不明瞭である。復元し得た150の椀の口径は15.4cmである。318の黒色土器は完形で、高台部の断面形は逆台形状を呈し、口縁部は外反する。外面は口縁部が横位のヘラミガキ体部が斜位のヘラミガキ整形を施す。内面は、底部が一方向、体部が斜位、口縁部が横位のヘラミガキ整形を施す。口径13.5cm・器高4.8cmと小型の碗である。

瓦　器

瓦器は、椀と小皿が出土している。出土量は小皿に比べ、椀が多く出土している。

椀

椀は器形的特徴からⅠ～Ⅲ類の３つに大別した。

Ⅰ類：口縁端部を摘まみ上げ、端部外面に面をもつ椀。外面口縁部はヨコナデ整形・体部はユビオサエ整形を施す。器形によってさらに１～４類に細分した。

１類：体部が内彎して立ち上がり、口縁部は尖り気味に摘まみ上げ、口縁端部は丸くおさめる。内面口縁端部に一条の沈線が巡らすものもある。外面口縁部には狭い幅でヨコナデ調整を施す。暗文は、299を観察した限りでは外面体部の暗文の有無は不明で、内面体部に比較的密な暗文の痕跡を認める。口径15.8cm、器高5.6cmを測る。

表6．瓦器分類表

器種	分類	報告番号	器種	分類	報告番号
椀	Ⅰ			Ⅲ	
	1	198 299 333		1	147 189 277 311
	2	194 204 223 334		2	129 171 184 193 225
	3	217 224 226 257			263 270 308 322 343
	4	218 220 344		3	261
	Ⅱ		小	Ⅰ	170 191 251 331
	1	199 258 259		Ⅱ	168 253 254 255 256
	2	200 201 260 262 291			297 298
		342	Ⅲ	Ⅲ	169 186 252 332

2類：1類より体部の内彎化が著しく、口縁端部は尖り気味におさめている。外面口縁部には1類と同様、狭い幅でヨコナデを施す。外面体部には暗文はなく、内面体部には螺旋状の暗文が確認される。口径13.8～15.4cm・器高5.5cm前後である。

3類：直線的に開く体部をもつ。口縁端部の摘まみ上げも僅かで、端部外面には狭小な面をもつ。外面口縁部には幅広のヨコナデ調整を施す。外面体部には暗文を施さず、内面にはジグザグ文と螺旋状文の暗文が施される。口径15cm前後・器高5.0～5.5cmを測る。

4類：体部下位がいったん外方へ張出した後、直線的に立ち上がる。端部外面は3類と同様に狭く、沈線が巡る椀も認められる。外面口縁部には3類と同様、幅広のヨコナデ整形を施す。外面には暗文がなく、内面体部に比較的粗い螺旋状文が認められる。口径14cm前後・器高5.1～5.5cmと比較的小型の碗である。

Ⅱ類：口縁部が内彎して立ち上がる碗。高台部の造りは小さい。外面口縁部はヨコナデ整形・体部はユビオサエ整形を施す。2類に細分した。

1類：体部からそのまま口縁部に続き、口縁部と体部との境が明確ではない。口縁端部は丸くおさめる。遺存状況が悪く、外面の整形は不明であるが、体部から口縁部にかけて暗文の痕跡が認められ、内面体部には比較的密な螺旋状文が施される。口径14.5～15.2cm・器高5.5cm前後を測る。

2類：口縁部は肥厚して立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。外面口縁部は幅広のヨコナデ整形を施す。暗文は、外面には施さず、内面体部に比較的密に螺旋状文を施す。口径14.7～15.6cm・器高5.2cm前後を測る。

Ⅲ類：口縁部が外反する碗である。外面口縁部は幅広のヨコナデ整形、体部はユビオサエ整形を施す。３類に細分した。

１類：口縁部が大きく上方に外反し口縁端部を摘まみ上げた碗。外面口縁部には幅広のヨコナデ調整を施す。外面には暗文の痕跡を残す。口径14cm前後・器高は5.8cm前後の比較的小型の椀である。

２類：口縁部は外反の度合が小さく、端部は尖り気味である。遺存状況が悪く、外面の暗文の有無は不明であるが、内面体部には比較的密な螺旋状文を施す。口径14.6～15.5cm・器高5.0～5.6cmと幅をもつ。

３類：口縁部が大きく外方に外反し、端部は尖り気味である。遺存状況が悪く調整は不明である。口径14.5cm・器高4.7cmを測り、小型の椀である。

小　皿

Ⅰ類：浅い丸底の体部から口縁部が内彎気味に短く立ち上がる皿である。外面体部ユビオサエ整形ないしはユビオサエ整形の後ナデ整形。内面体部から外面口縁部にかけてヨコナデ整形。口径7.8～8.2cm・器高1.8cm前後を測る。

Ⅱ類：浅い丸底の体部から口縁部は短く直立、ないしは外方に直線的に立ち上がる。外面体部ユビオサエ整形、内面体部上位から外面口縁部にかけてヨコナデ整形。内面底部はナデ整形。口径7.8～9.0cm・器高1.8cm前後を測る。

Ⅲ類：平底状ないしは浅い丸底の体部から口縁部が短く肥厚しながら外反する皿。外面体部ユビオサエ整形、内面体部上位～外面口縁部にかけてヨコナデ整形。内面体部下位はナデ整形。口径7.6～8.1cm・器高1.7cm前後を測る。

須恵器

須恵器は椀・小皿・杯・鉢・甕・壺が出土している。遺構内出土の土器量からみても、須恵器の出土量は極めて少ない。時期的には奈良時代～鎌倉時代と幅があるが、平安時代の須恵器が主に出土している。以下、器種ごとに説明する。

表７．須恵器椀分類表

器種	分　類	報告番号
椀	Ⅰ	323　347
	Ⅱ	232
	Ⅲ	130　174
	Ⅳ	149　195　285

椀

椀は粘土紐巻き上げ成形・回転ナデ整形・円盤状高台・回転糸切り手法を用いるなど、技術的な共通点をもつ。

碗は器形・法量からⅠ～Ⅳ類に大別した。

Ⅰ類：突出した円盤状の高台部をもち、口縁部が外反する碗である。内外面体部にロクロの凹凸が顕著に残る。内面底部中央が凹み、段をなす。法量は口径13.6～14.8cm・器高

5.4～6.2cmと幅をもつ。椀のなかでは小振りである。

Ⅱ類：A類と同様、突出した円盤状の高台部をもつ。口縁部の外反は弱く、内面底部の凹みは顕著ではない。口径14.3cm・器高5cmを測り、A類よりも低い器高値を示す。

Ⅲ類：僅かに突出した円盤状高台をもち、体部と口縁部の境いが明確ではない。内面底部の凹みも顕著ではない。内外面体部下位には斜位のナデ整形が施される。口径15.5cm前後・器高5cm前後である。

Ⅳ類：体部が大きく外方向に開き、口縁部が外反する碗である。口径16cm前後・器高4.7cm前後と、碗のなかでは最大の口径値と最小の器高値をもつ。

杯

杯は輪高台をもつ杯（228・346）と底部の切り離しにヘラ切り手法を用いた杯（345）がある。345は口径11.7cm・器高3.4cmを測る。346は口径12.2cm・器高3.7cmの値を示す。

小皿

小皿は碗についで出土量の多い器種である。口径8cm前後・器高2cm前後の小型の皿（148・172）と口径8.5cm前後・器高2.3cm前後の大型の皿（151・173・301・335）がある。いずれも底部の切り離しには回転糸切り手法を用い、内外面には回転ナデ整形を施す。

鉢

266は口縁部が短く外反した鉢である。内外面は回転ナデ整形後、斜位のナデで仕上げている。口径は28.9cmを測る。

甕

229は口縁部が「く」の字状に屈曲する甕である。口縁端部は平坦で、中央部が凹む。外面には8本一単位の縦位のタタキ目、内面には青海波文を残す。口径は推定で19.5cmを測る。

264は口縁端部が上方に拡張し、端部外面に面をもつ甕である。口径は推定で27.6cmを測る。

265は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部が若干上方に拡張し、端部外面に狭小な面をもつ甕である。外面体部から頸部にかけて一単位9本以上の斜位のタタキ目が残る。口径は推定で28.3cmを測る。

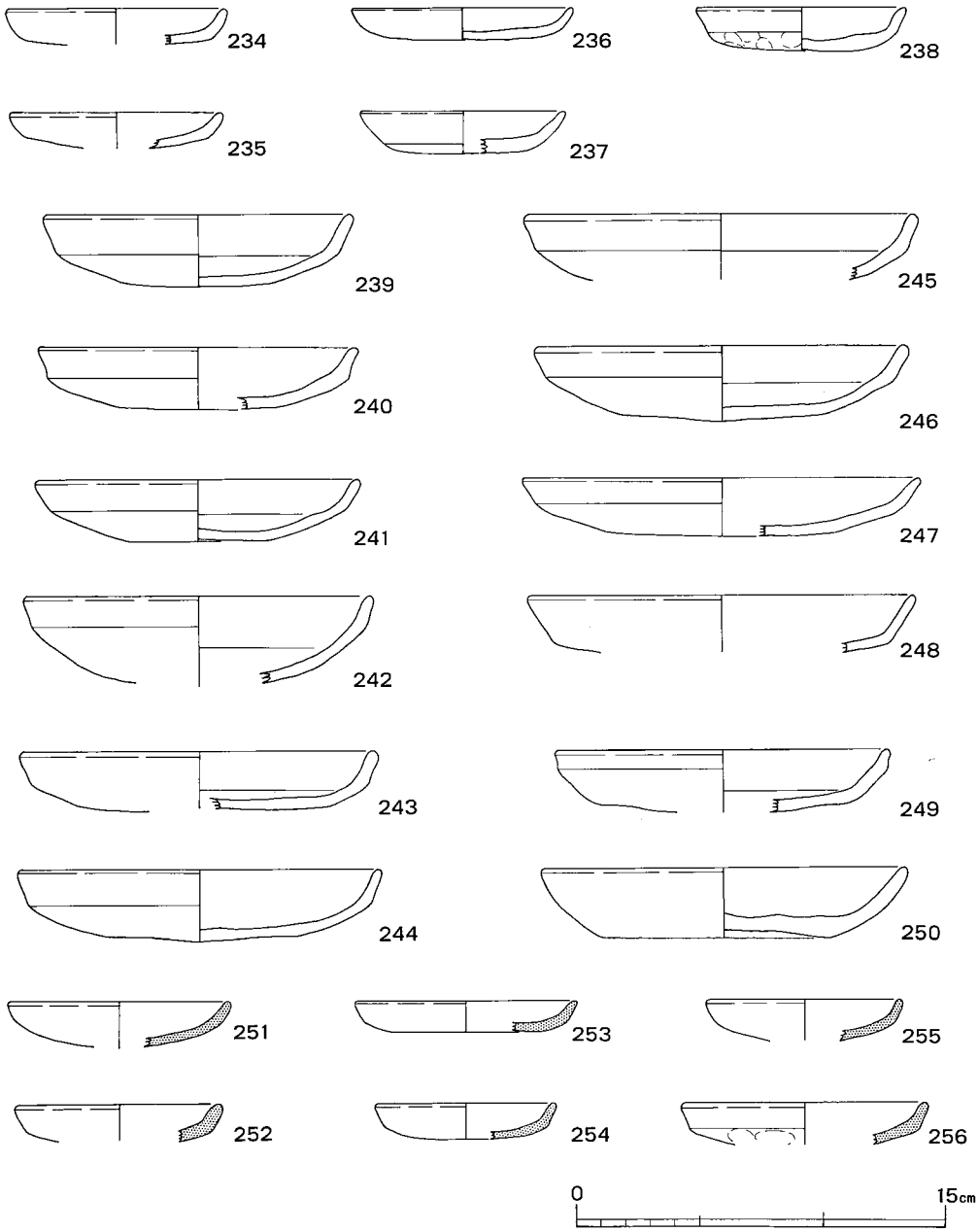
壺

230は肩部に突帯を巡らす壺の破片である。内外面とも回転ナデ整形を施す。

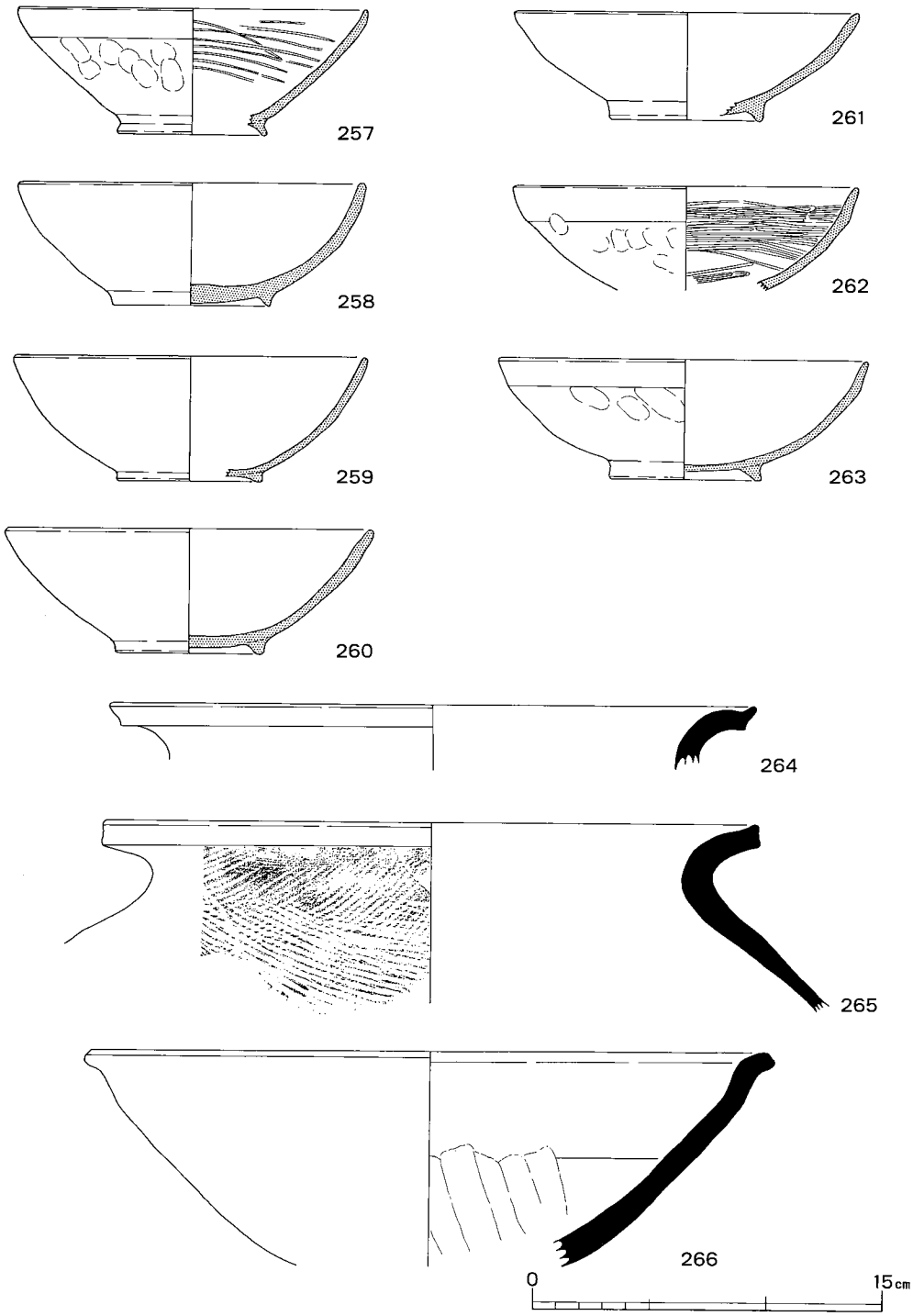
陶磁器

陶磁器は丹波焼小壺・常滑焼系甕・肥前焼陶器碗等の国産品と、龍泉窯系青磁碗の中国製品が出土している。これ以外に中国製の白磁碗・青磁皿の破片が出土しているが、量的にも極めて少なく、すべて細片で図化できなかった。

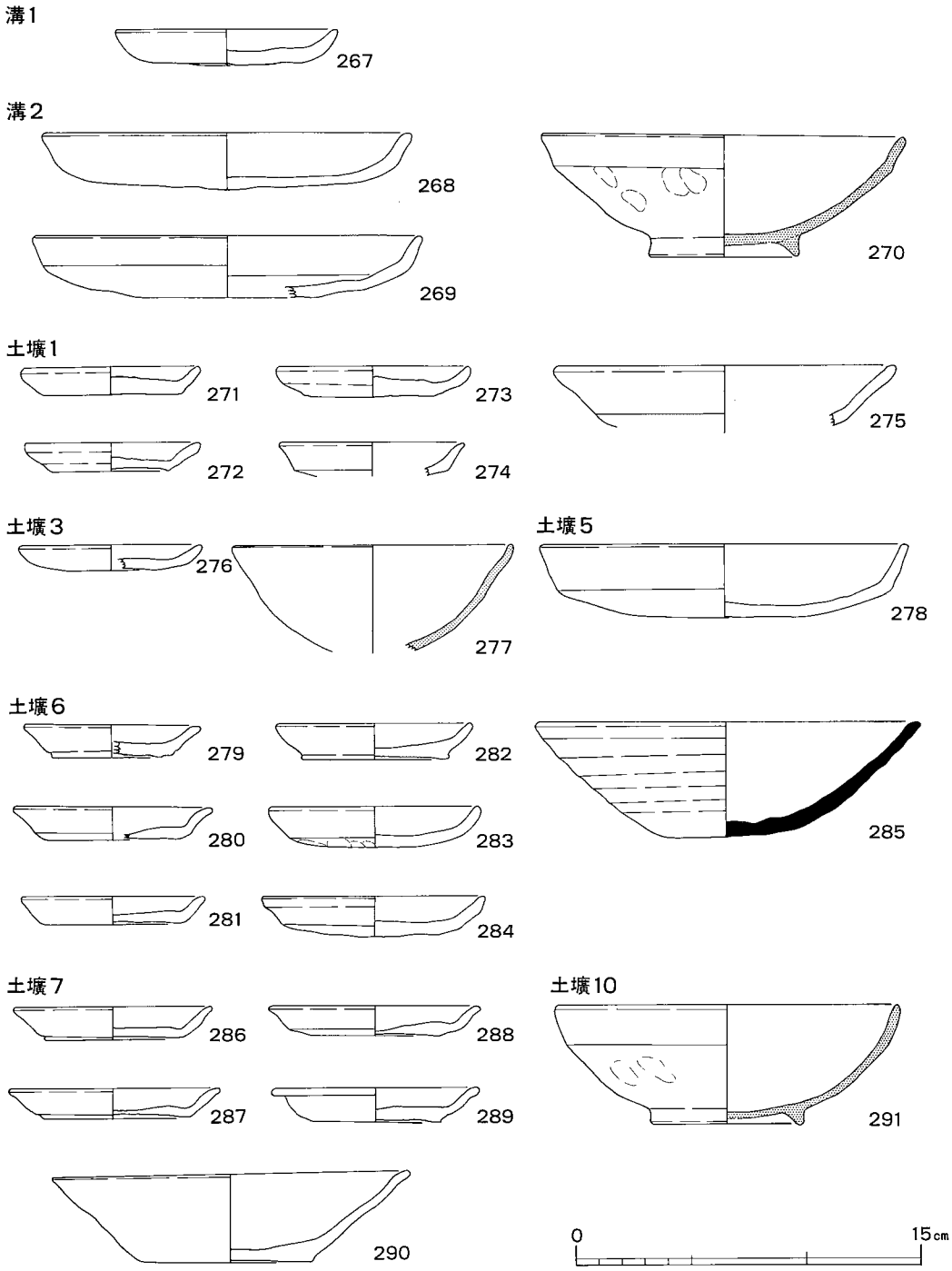
井戸1



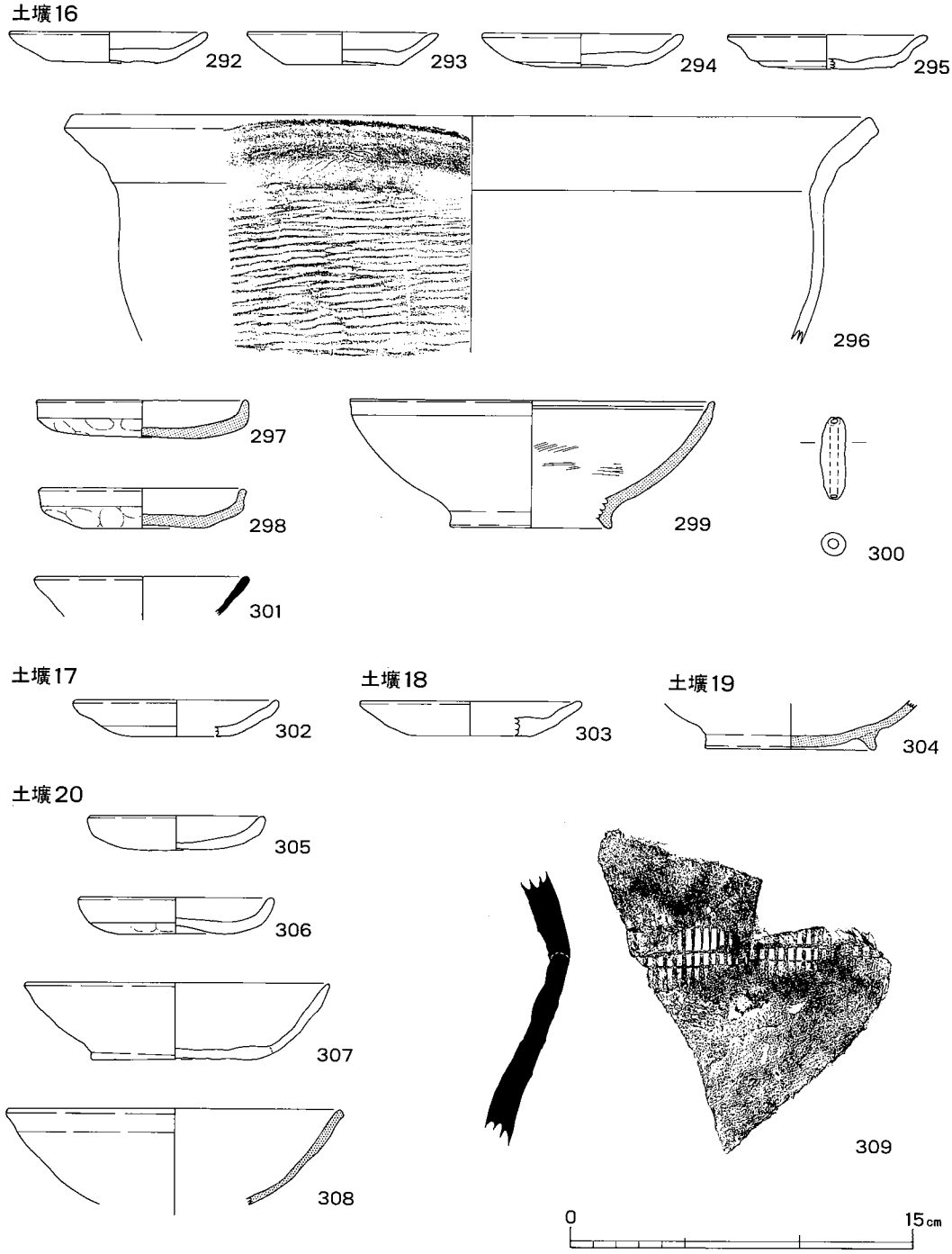
第83図　井戸1出土土器（1）



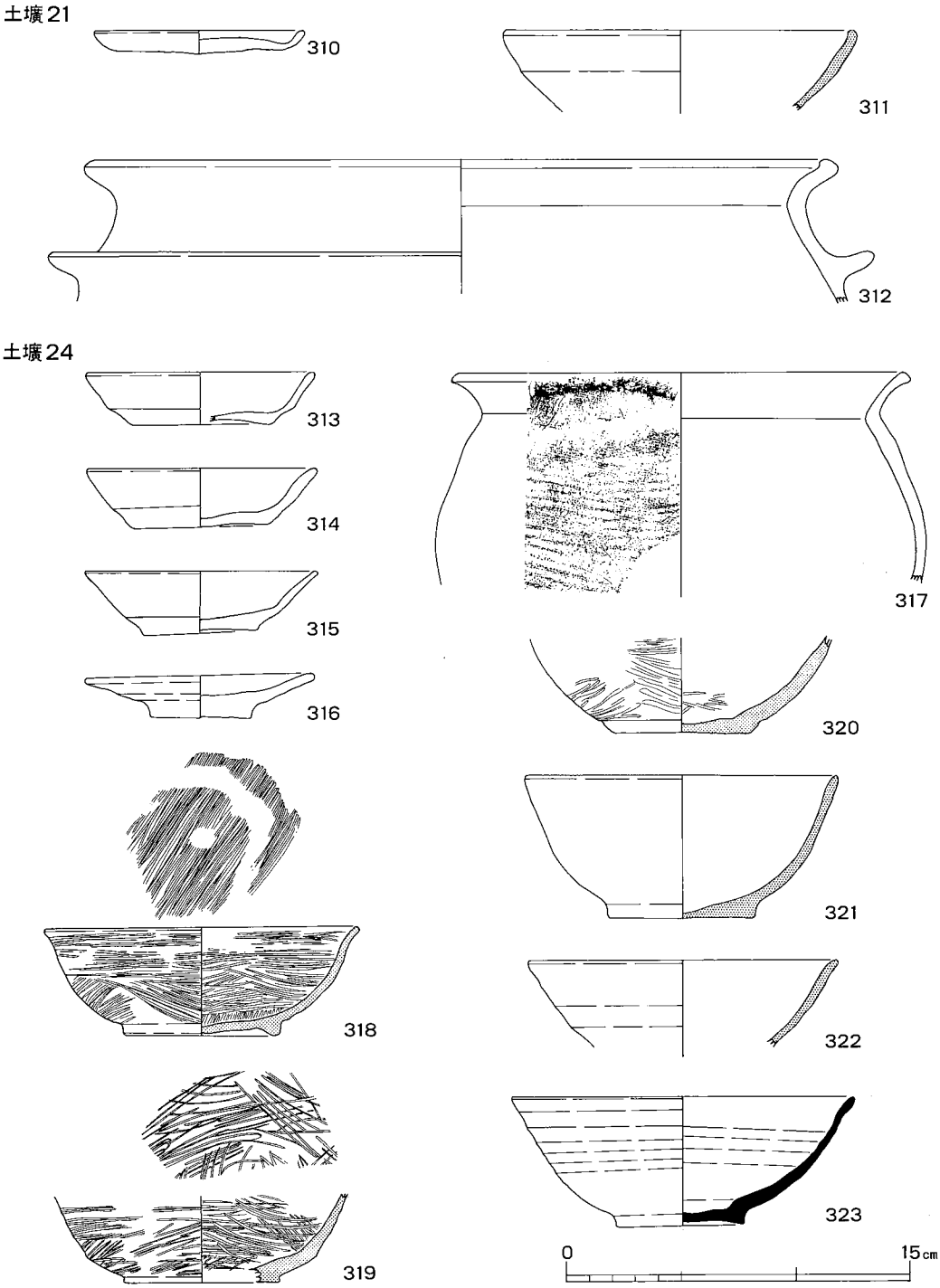
第84図　井戸１出土土器（２）



第85図　溝・土壙出土土器

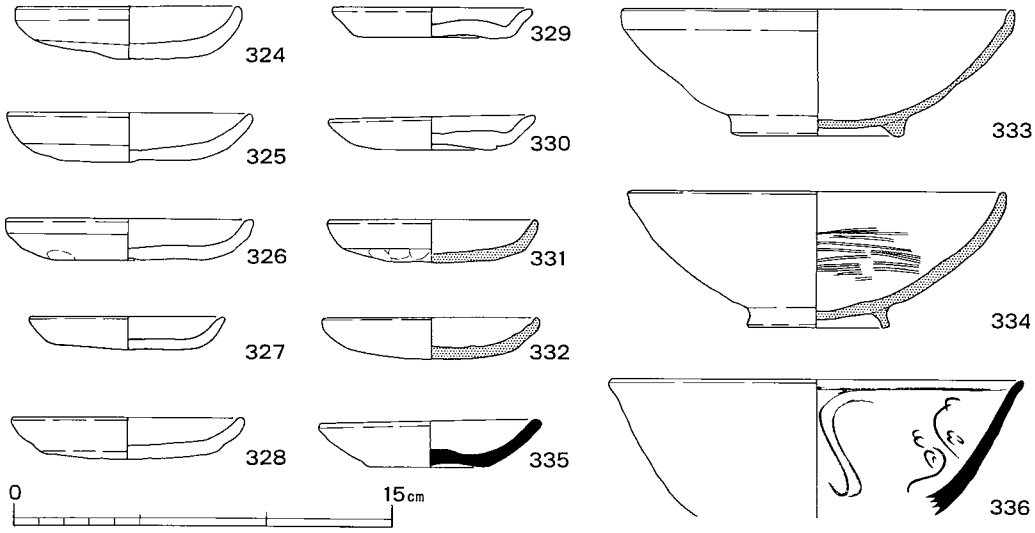


第86図　土壙出土土器（1）



第87図　土壙出土土器（2）

その他の柱穴



第88図　その他の柱穴出土土器

国産陶器

196は丹波焼小壺の底部破片である。外面体部は横位ナデ整形を施し、内面の底部と体部の境には、強いナデ整形が施されている。外面底部はナデで仕上げている。底径は推定で11.8cmを測る。231はロクロ成形の丹波焼小鉢である。外面口縁部にはオリーブグリーンの自然釉が付着する。外面体部上位には３条の沈線が施される。底部の切り離しは回転糸切り手法がもちいられてる。口径9.6cm・器高3.7cmを測る。

309は常滑焼系の甕の破片である。肩部付近にはスタンプ文が施されている。

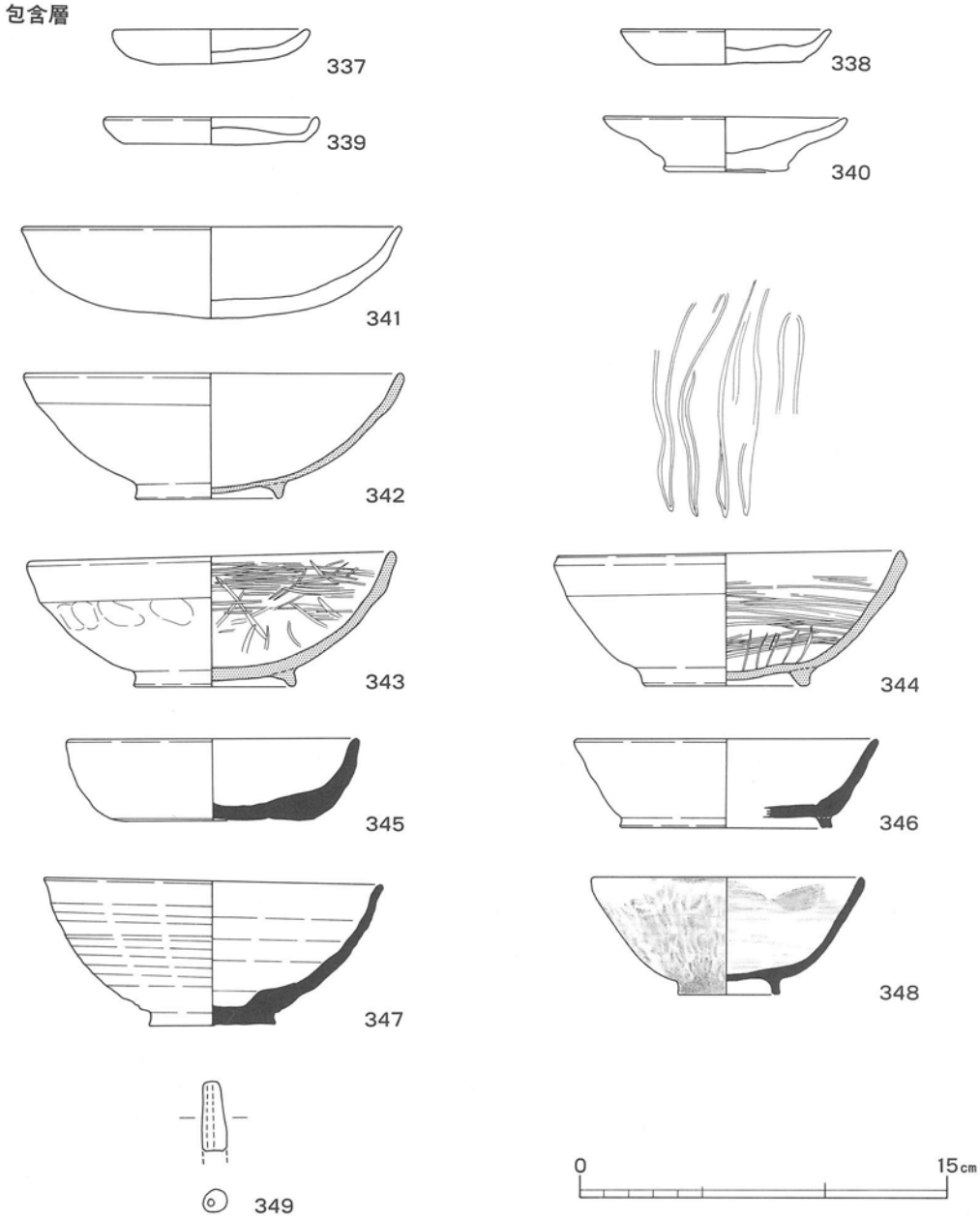
348は肥前焼陶器の碗である。外面体部は、打刷毛目文を施し、内面は刷毛目文をそれぞれ施した後、透明釉が施されている。高台畳付は露胎である。口径11.1cm・器高4.8cmを測る。近世の所産である。

中国製磁器

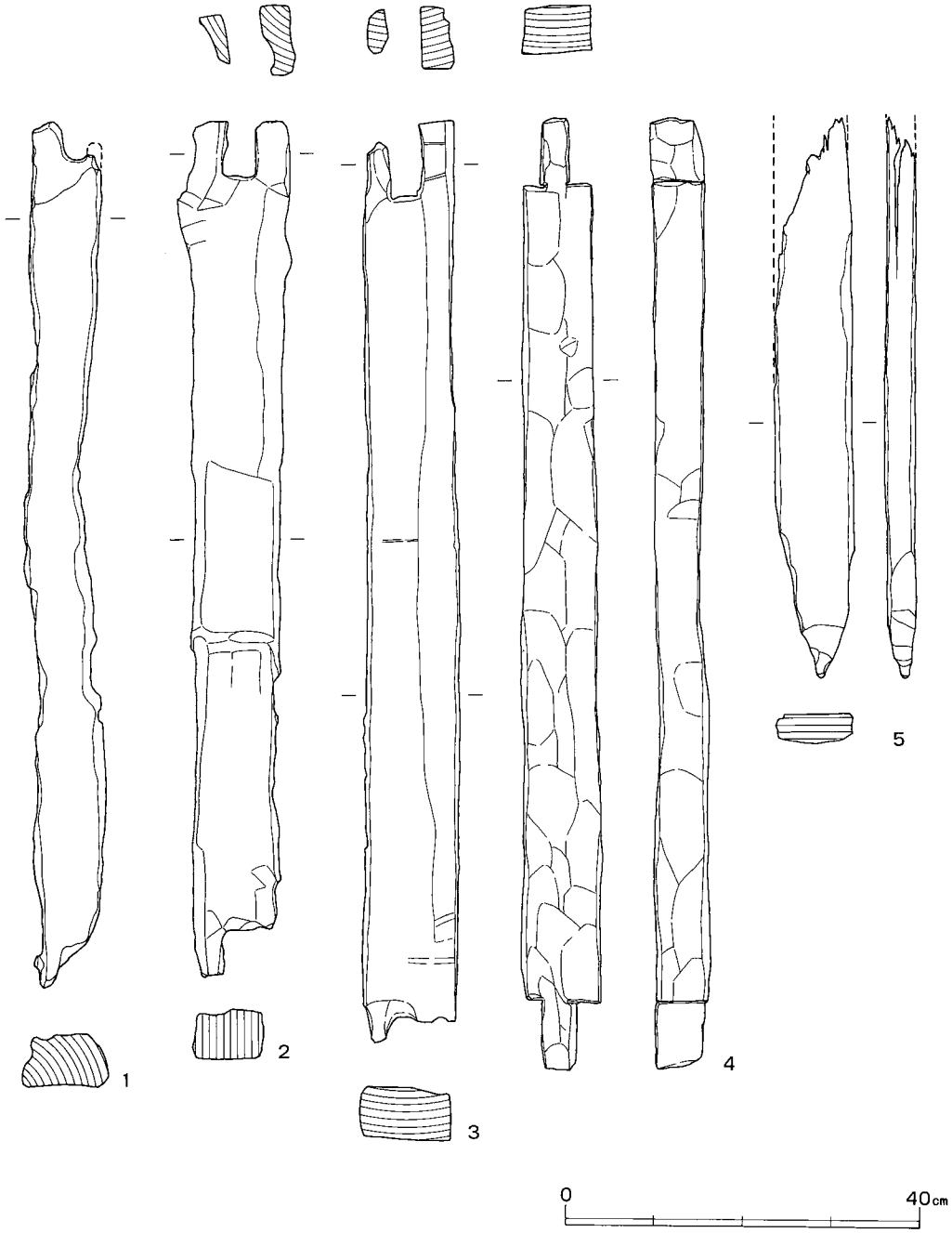
336は龍泉窯系青磁碗である。外面は無文で、内面は１本ないしは２本の沈線によって区画されたなかに飛雲文を片彫りする。口径は推定で16.2cmを測る。

２．土製品

土製品は300・349の土錘が出土している。300は全長3.6cm・幅1.1cm・穿孔径0.3cmを測る。349は包含層より出土した。身の半分が欠け、遺存状況は不良である。遺存する長さは2.9cm、幅は中央部付近で0.9cmを測る。穿孔径0.2cmである。



第89図　包含層出土土器



第90図　井　戸　材

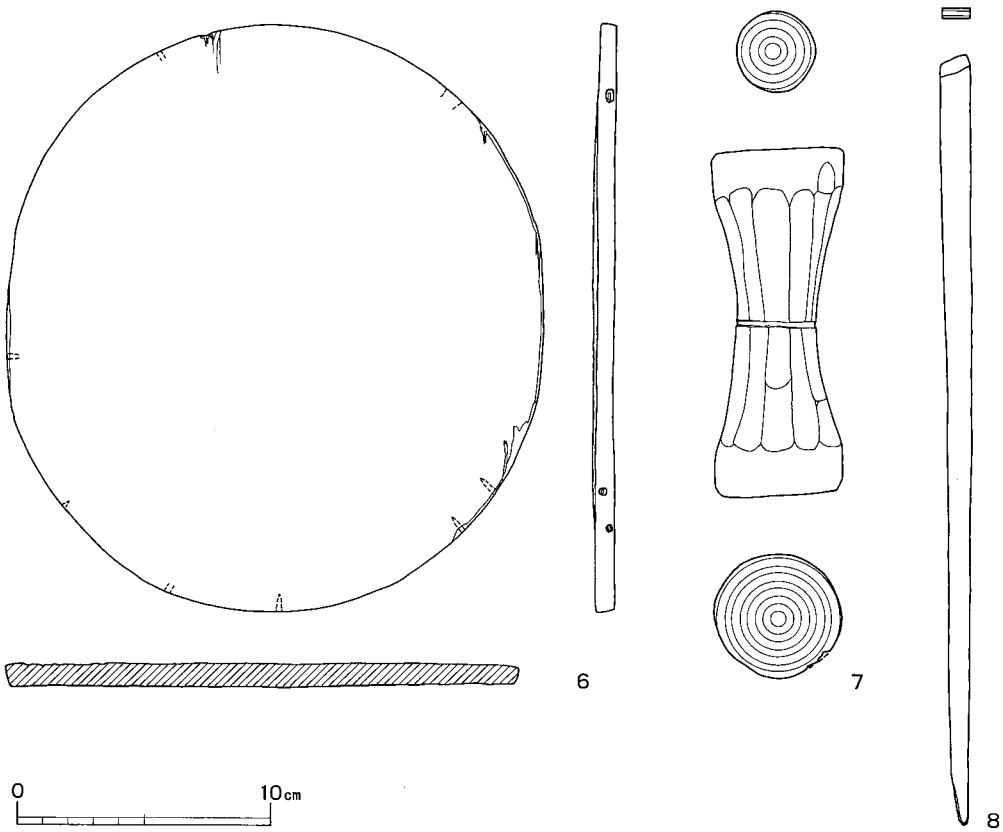
3．木製品

木製品は、井戸側材・曲物底板・槌子等が出土している。槌子を除き井戸枠内底面より出土している。

井戸材

井戸内基底部の枠材と井側材がある。井戸枠の材組み合わせは、1が北辺、2が東辺、3が西辺、4が南辺の枠材である。すべて広葉樹を加工している。井側材は7枚確認したが、遺存状の良好な板材一枚（5）のみ図化した。針葉樹を加工している。

1は両端部とも片側に枘が刻まれた枠材である。全長98.5cm、幅7.9cm、厚さ5.7cmを測る。2・3は下端の片側に枘が刻まれ、上端に枘穴をもつ枠材である。2が全長97.2cm、幅12.8cm、厚さ8.0cmを測り、3は全長104.4cm、幅10.8cm、厚さ7.0cmを測る。4は両端に枘が刻まれた枠材である。各面には手斧痕が明瞭に残っている。枘の付け根部分には鋸の使用痕跡が残る。全長107.8cm、幅8.9cm、厚さ5.4cmを測る。



第91図　井戸・その他出土木製品

5は縦板の井側材である。下端の表裏面および両側面を削り出し尖らせている。上端を欠き全長は不明であるが、残存する長さは63.8cm、幅8.8cm、厚さ3.3cmを測る。

曲物

6は曲物の底板である。規模は23.1×16.1cmと楕円形を呈し、厚さは0.9cmを測る。側面には7箇所の釘穴が確認でき、うち2箇所で竹釘が遺存していた。釘穴は径0.15cm前後、長さは0.75cm前後である。木取りは柾目取りである。針葉樹を加工している。

槌子

H－17区付近、耕土中より出土した。丸木の中央が窪んだ、鼓形の槌子である。中央部には幅0.2cmの1条の沈線が巡る。全長13.8cm、中央幅3.3cmを測る。

不明木製品

先端が尖った箸状の製品である。全長30.3cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmである。

4．金属製品

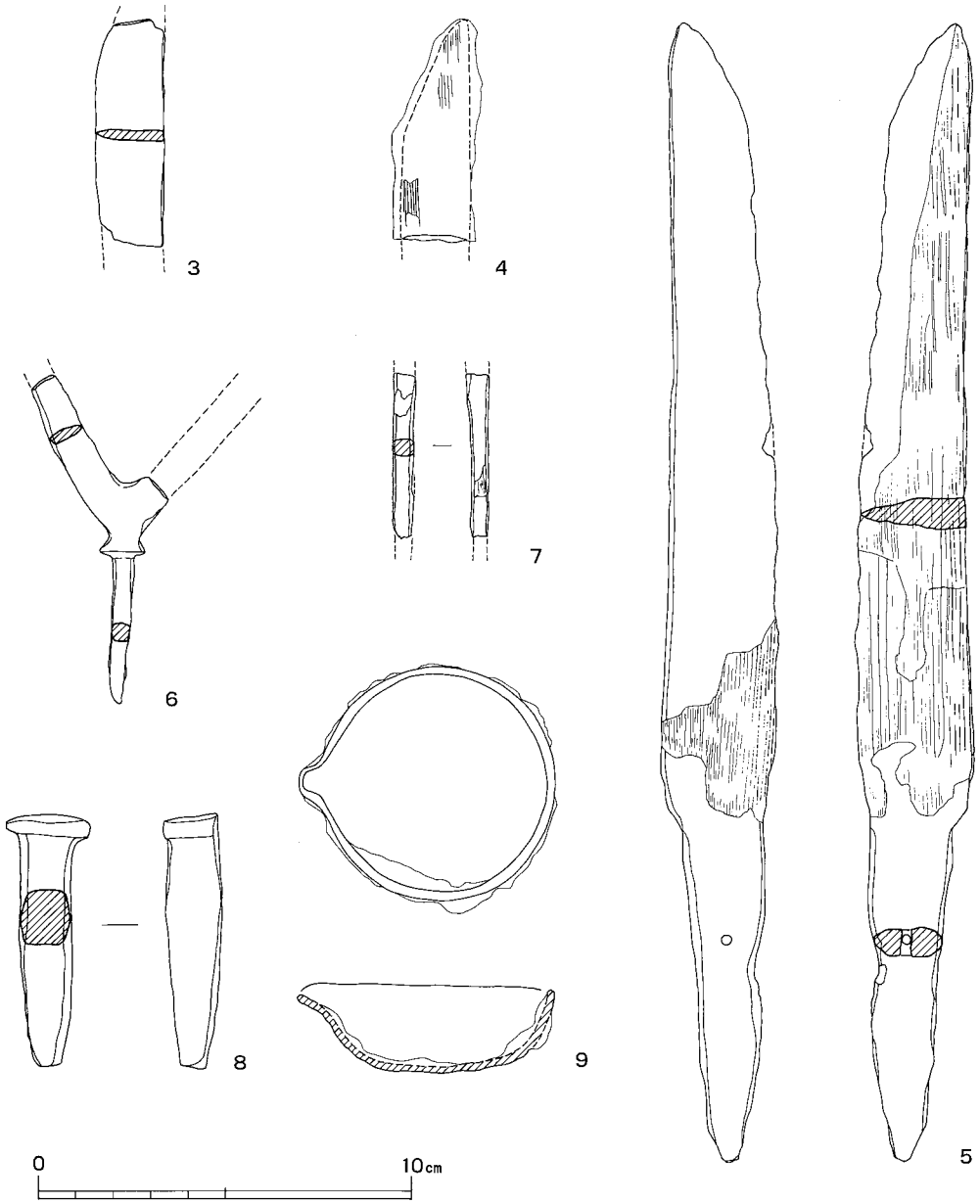
金属製品は、鉄製品と銅製品がある。なかでも鉄製品は、種類・量ともに豊富に出土している。その内訳は、刀子・小刀・鏃の武器をはじめ、鑿・坩堝・釘等の工具類が出土している。量的には釘が多く出土している。銅製品は煙管の吸口部が出土している。

3・4は刀子刃部および鋏の破片である。3は包含層、4は、柱穴530内より出土している。3は、両刃の刀子である。残存長6.1cm・刀身幅1.9cm・重さ8.8gを測る。4は、全面に銹化が著しく、全容は不明瞭である。残存長6.1cm・刀身幅2.1cm・重さ16.8gを測る。5は土壙10床面より出土した小刀である。刃部の銹化が著しく、刃先部分を一部欠くが、全体の遺存状況は良好である。関部は背部と刃部の両方に段をもつ両関である。茎部は先端が尖っており、茎部のほぼ中央には径2mmの目釘孔を穿っている。刀身部分には鞘の木質が残っている。刀身先端が曲がっており、実際に使用された可能性がある。全長30.9cm・刀身幅3.2cm・刀身長21.3cm・重さ125gを測る。6は柱穴887より出土した雁股式鏃である。身部の両端を折損し、全体に歪んでおり、実際に使用された可能性が高い。頚部には台形状の関部をもつ。残存長8.8cm・柄部長4.0cm・重さ7.5gを測る。7は包含層より出土している。鏃の柄部と考えられる。

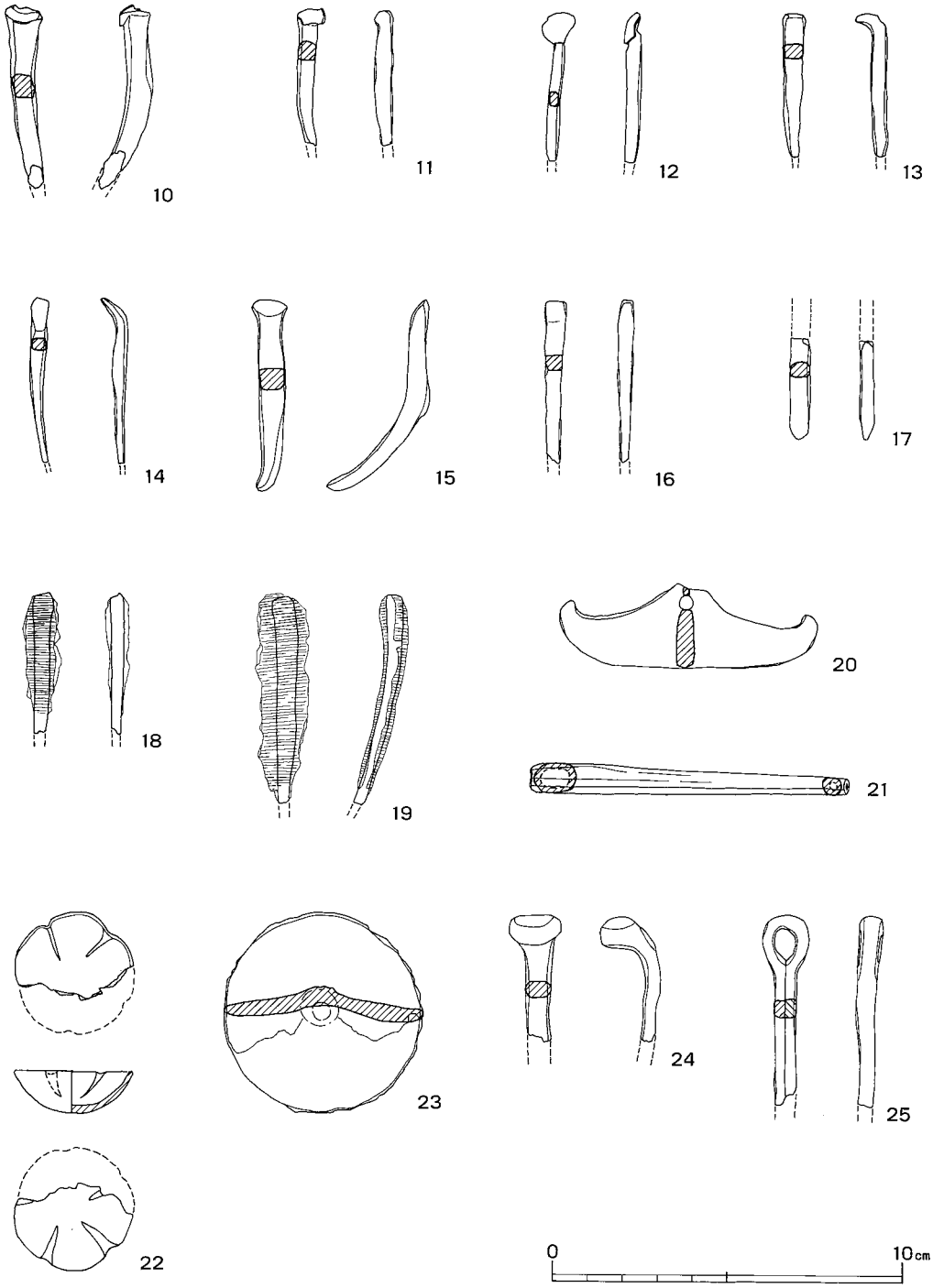
8は鑿である。身部の上端は潰れて平坦になっている。全長6.8cm・幅1.5cm・重さ44.7gを測る。

9は坩堝と考えられる。土壙20埋土中より出土した。片口部をもち、内面には皺状に盛り上がった金属の溶融物が付着し、溶融物の表面には炭化物が付着している。口径6.3cm・器高2.4cm・厚さ2mmを測る。

10～19は釘である。頭部は頭巻で、身部の断面形は四角形を呈する。頭巻き部が潰れ、また身部先端が曲がっているなど、使用された釘が多い。10は掘立柱建物7・P9掘方内より出土



第92図　金属製品（1）



第93図　金属製品（2）

した。身部先端は欠損している。残存長4.3cm・重さ1.7gを測る。

11は掘立柱建物７・Ｐ12掘方内より出土した。身部下半は折れ曲がっており、先端部を欠損する。頭巻部は潰れている。残存長5.3cm・重さ6.9gを測る。

12は11と同じく掘立柱建物址７・Ｐ９掘方内より出土した。身部先端を欠き、頭巻部は潰れている。残存長3.9cm・重さ1.8gを測る。

13は包含層より出土している。身部先端が欠損している。残存長4.2cm・重さ2.8gを測る。

14は柱穴187 柱痕内より出土した、頭巻の釘と考えられる。頭巻部は欠損し、身部下半は折れ曲がっている。全長4.8cm・重さ1.6gを測る。

15は掘立柱建物７・Ｐ９掘方内より出土している。身部下半は折れ曲がっている。全長5.5cm・重さ6.6gを測る。

16は土壙16内より出土した。身部先端が欠損している。残存長4.7cm・重さ2.8gを測る。

17は柱穴595柱痕内より出土した。身部上半と頭部を欠損する。残存長2.9cm・重さ1.7gを測る。

18は包含層より出土した。身部に木質が残り、先端は欠損している。残存長5.0cm・重さ3.4gを測る。

19は柱穴656柱痕内より出土した。18と同様身部に木質が付着し、身部下半は折れ曲がっている。身部先端は欠損している。残存長6.0cm・重さ9.4gを測る。

20は柱穴984 柱痕内より出土した燧鎌である。燧鎌の天井部は山形状に隆起し、その両端は反り返っている。反返った両端部の断面形は隅丸方形を呈する。山形状に隆起した中央には径４mmの孔が穿たれる。幅7.4cm・高さ2.3cmで、厚さは燧部で５mmを測る。重さは16.7gを測る。

21は包含層より出土した煙管吸口部である。内側には竹製の羅宇の痕跡が認められる。外面には継ぎ目痕跡が明瞭に認められる。全長9.1cm・重さ12.2gを測る。真鍮製であろうか。

22は包含層より出土した鉄製の飾り金具と考えられるが、取り付けの工夫が認められない所から、飾り金具と確定できない。形状は空洞の半球径で、周縁部には４箇所の括れ部分が認められ、上から見ると花弁様（五弁花）を呈する。口径3.55cm、高さ1.2cm・厚さ２mm前後を測る。重さは4.1gである。

23は包含層より出土した円盤状の鉄製品である。中央部は若干盛り上がり、径５mmの孔が穿たれている。法量は幅が5.8cm・高さ1.0cm・厚さ4.5mm・重さ29.7gを測る。形状から判断して紡錘車であろうか。

24は包含層より出土した鉄製品である。頭部は丸味を帯びて屈曲している。身部は下半を欠損するため全体の形状は不明である。残存長4.6cm、重さ7.1gを測る。

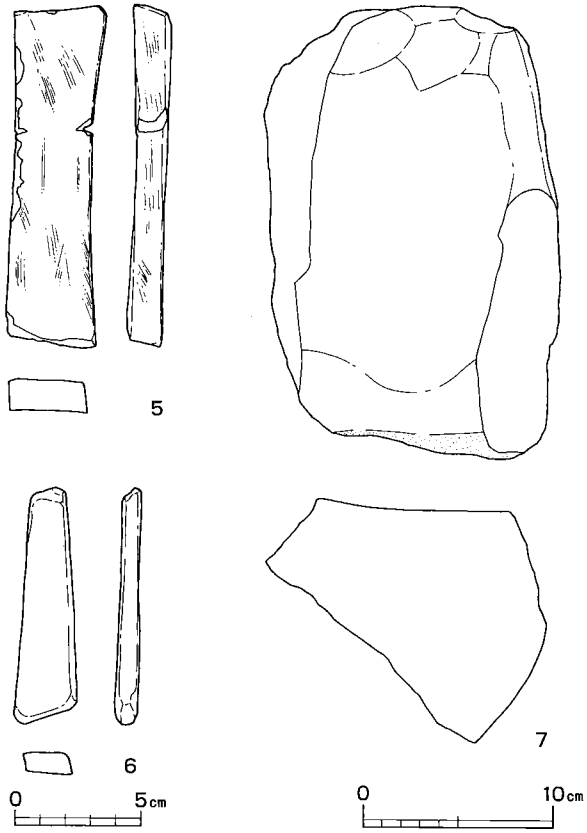
25は掘立柱建物址７・Ｐ25柱痕内より出土したヘアーピン状の鉄製品である。身部には接合痕跡が明瞭に残り、細い鉄棒を折り曲げて作られている。残存長5.4cm・重さ5.8gを測る。

5．石製品

砥石（5～7）・石斧（8）・小型部分加工石器（9）・燧石（10・11）・巡方（12）が出土している。砥石は携帯用と考えられる小型の砥石（5・6）と大型の砥石（7）が出土している。

すべての砥石・燧石（11）は中世の遺構に伴って出土しており、中世の所産と思われる。

5は土壙3埋土中より出土した。凝灰岩を用いている。一端（下）を欠損しており、この面を除く各面とも砥面として使用している。最大長18.3cm・最大幅5.1cm・最大厚1.9cmを測る。6は井戸内最下層より出土している。凝灰岩質砂岩を用いている。各面とも砥面として使用している。最大長9.3cm・最大幅2.5cm・最大厚1.0cmを測る。7は掘立柱建物址9・P6柱痕内に投棄された状態で出土した。一端（上）・側面（右）には粗い整形痕跡が認められる。片側面（左）・裏面は破砕面のままで整形痕跡は認められない。一端（下）は自然面を残す。砥面は1面のみで中央部が凹んでいる。最大長は24.1cm・最大幅16.0cm・最大厚12.5cmを測る。上端および右側面の整形痕跡から判断して加工石材を砥石に転用していると考えられる。

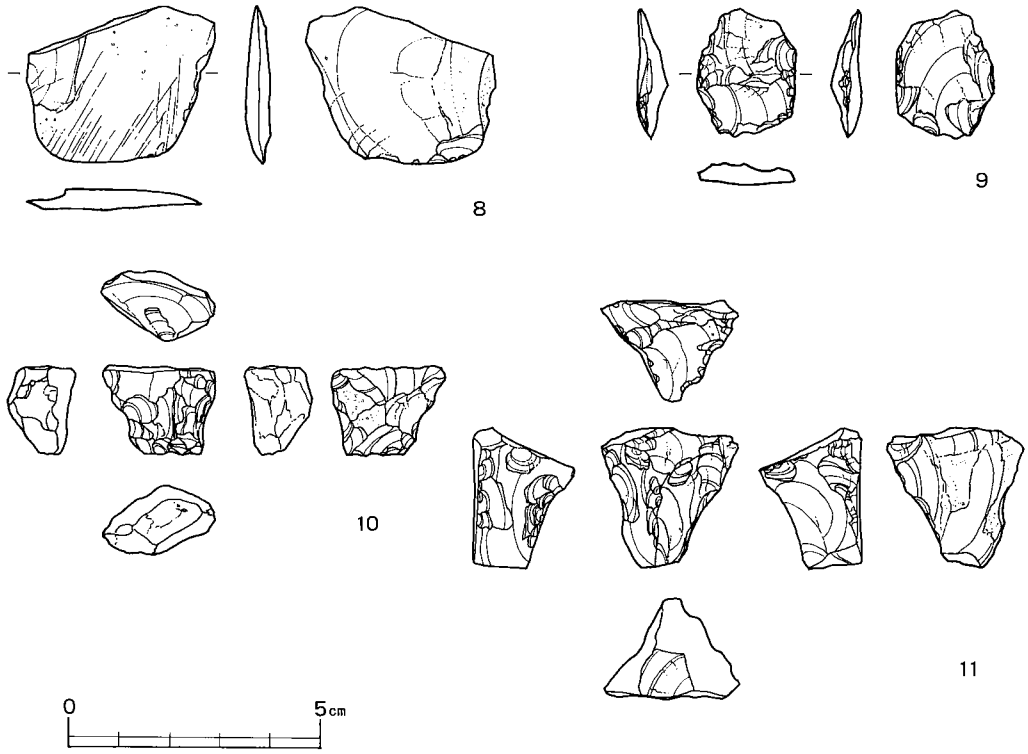


第94図　石製品（1）

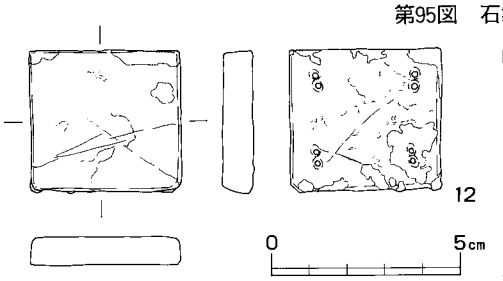
8は石斧刃部の破片と考えられる。6の砥石と同様に井戸内最下層より出土している。材質は安山岩と考えられる。中世の遺構から出土したためここで扱うが、時期的には縄文時代まで逆上るものである。

9はチャート製の小型部分加工石器である。包含層中より出土した。基部と一側縁（右）に二次加工を施し、基部の二次加工は急傾斜であるのに対し側縁のそれは平坦である。長さ2.5cm・幅1.9cm・厚さ0.6cmを測る。

10・11はチャート製の燧石である。両者ともに亜角礫のチャートを数方向に剥離し、その稜線を使用している。稜線には著しい潰れが認められる。10は包含層中より出土し、長さ1.7cm・



第95図　石製品（2）



第96図　石製品（3）

幅2.2cm・厚さ1.3cmを測る。

11は柱穴43柱痕内より出土し、長さ2.8 cm・幅2.7cm・厚さ2.0cmを測る。

12は表面に漆を塗布した巡方である。遺構からの出土ではなく、包含層より出土している。材質は不明であるが、軟質の石材を加工している。裏面の四隅には潜り穴が穿たれている。長さ3.9cm、幅3.6cm、厚さ8mmを測る。

第97図　蓮町Ⅲ地区遺構配置図

第４章　蓮町Ⅲ地区の調査

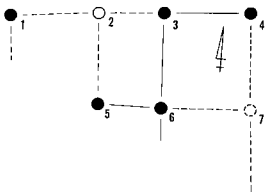
第１節　遺　構

国領遺跡蓮Ⅲ町地区は、中世（平安時代後期後葉～鎌倉時代）・近世（江戸時代）の二時期の遺構が確認された。とくに近世の遺構は江戸時代の冶金工房址と墓跡と思われる埋桶群とに分かれ、墓跡から工房址へ変遷し、さらに２時期に細分されることが判明した。調査区は近世の遺構およびその後の水田開発によって著しく削平を受けているため、各時期の遺構を同一面で確認する結果になった。平安時代後期後葉から鎌倉時代にかけての遺構は、比較的削平を受けていない調査区南半部から北西隅で確認された。江戸時代の遺構は、それまでの地形を削平し、調査区の北側を著しく改変して構築されている。このため、江戸時代の遺構は、Ｄラインより以北に集中して確認する結果となった。各時期の遺構の説明にあたっては、中世、近世Ⅰ期（墓地）、近世Ⅱ期（工房址）の３時期に分けて行う。

１．中世の遺構

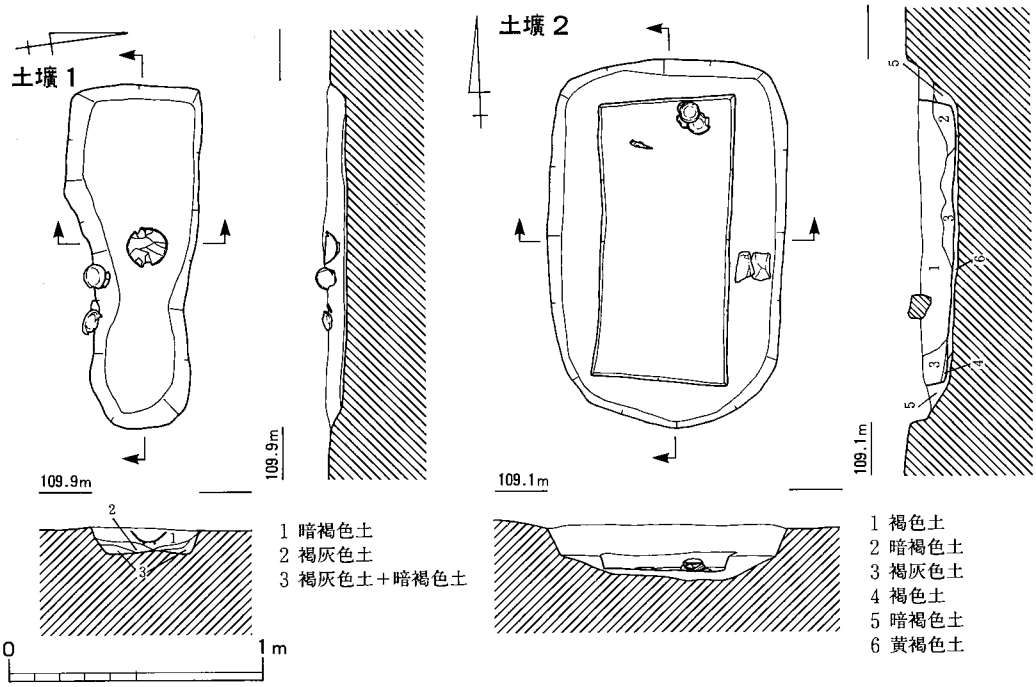
中世の遺構は、柱穴、土壙４基がある。確実に中世に帰属する柱穴は、64穴を数える。その分布は調査区の南側（Ｄラインより以南）に集中して存在する傾向がある。これ以外に、調査区北半部でも、中世の土器を包蔵する柱があるが、確実に中世に帰属するかは不明である。中世の柱穴のうち、建物を復元できたのは、掘立柱建物１の１棟のみである。また４基の土壙のうち土壙墓１基、木棺墓が２基確認され、それぞれ調査区の南西隅と北東隅に偏在する。

掘立柱建物１



調査区の南西隅、Ａ・Ｂ－６～８区に位置する。身舎の南側は調査区外に延び、建物址の全容は不明である。建物址の北西約2.5ｍの所には土壙４が近接している。調査区内で確認できた建物址に帰属する柱穴は５穴で、後世の攪乱によって消失した柱穴（Ｐ２・７）を含めると７穴以上の柱穴で構成されていたと推察される。建物址の規模は、南北方向7.4ｍ以上（２間以上）、東西方向9.5ｍ（３間）で、南北方向の柱間が長い傾向があり、南北方向に棟軸をもつ構造と考えている。南北方向の柱間は3.70ｍ前後と長く、東西方向は2.52～3.40ｍと幅をもち、建物址中央のＰ２・５柱筋とＰ３・６柱筋の間が2.5ｍ前後と短い。柱穴掘方は円形・楕円形を呈し、規模は平均で38×33㎝を測る。確認した柱痕は平均で15㎝である。南北方向を棟軸とした方位はＮ３°30′Ｗである。

遺物は、各柱穴内より土師器・瓦器の細片が出土したが、図化できる土器はなかった。



第98図　土壙１・２

土壙１（第98図）

調査区の南東隅、Ｂ－14区に位置する土壙墓である。周辺には中世の遺構はなく単独で存在する。土壙は東半部が狭く、東西方向に長い歪な隅丸長方形を呈する。規模は長軸が1.36ｍ、短軸0.40ｍ、深さは最深部で11㎝と浅い。壙底の東端と西端では２㎝の比高差で東が高い。墓壙の主軸方位はＮ54°Ｗである。土壙内の埋土は粗砂混じりシルトが主体で、土壙内より出土した瓦器椀（３）は第１層と２層の層理面より出土している。

遺物は、土壙内より瓦器椀（３）、土壙の南辺肩部より土師器小壺（１）が半分に割れた状態で出土した他、小壺の下より白磁皿（２）が出土した。

土壙２（第98図）

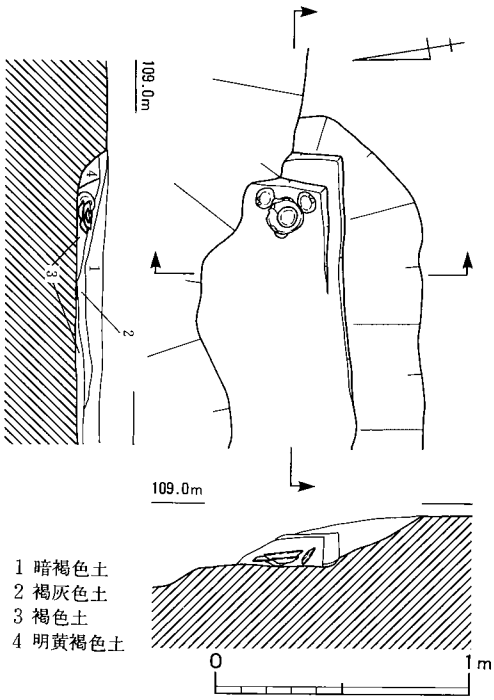
調査区の北東隅、Ｈ14・15区に位置する木棺墓である。土壙の西側約２ｍの所には、土壙３の木棺墓が近接する。墓壙は、南北方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は、長軸1.46ｍ、短軸0.93ｍを測り最深部の深さは20㎝である。木棺は墓壙のほぼ中央に埋置され、規模は全長1.10ｍで、南北両小口はともに53㎝を測る。棺底の北端と南端では、３㎝の比高差で南端が高くなっている。木棺の主軸方位はＮ２°30′Ｅである。

遺物は、棺底北東隅より土師器小皿２枚（４・５）が出土した他、棺底北西隅より小刀の茎部分が出土した。小刀の鋩方向は北西方向を向く。

土壙３（第99図）

調査区の北東隅、Ｈ－14区に位置する木棺墓である。土壙の東側約２ｍの所には土壙２の木棺墓が近接する。墓壙・棺身の北半および東端部を近世の溝で切られ、僅かに墓壙の西端部に木棺の痕跡が残る。土壙の形態および規模は、遺存状況が悪く不明である。木棺の主軸方位は推定でＮ80°Ｗ前後である。

遺物は、棺底北東隅より土師器小皿４枚（６～９）・大皿１枚（10）が重ねられた状態で置かれていた。



第99図　土壙３

土壙４（第100図）

調査区の南西側の、Ｃ－８区に位置する。西側約2.5ｍの所には掘立柱建物１が近接する。

土壙は隅丸方形を呈し、規模は、長軸3.52ｍ、短軸3.4ｍを測り、深さは最深部で34㎝である。断面形は、皿状を呈する。土壙埋土は、中砂混じりシルトが主体で、炭片を多量に含み、とくに下層は多量の炭片を含んでいる。土壙内底面からは20×15㎝大の河原石が多量に確認された。

遺物は、河原石に混じって土師器小皿（11・12）、瓦質摺鉢（13）が出土している。

２．近世Ⅰ期

この時期の遺構は、座棺と考えられる埋桶17基で構成される。埋桶遺構は、調査区の東半部の北寄りに集中している。ただ埋桶１が単独で調査区の西端に位置している。

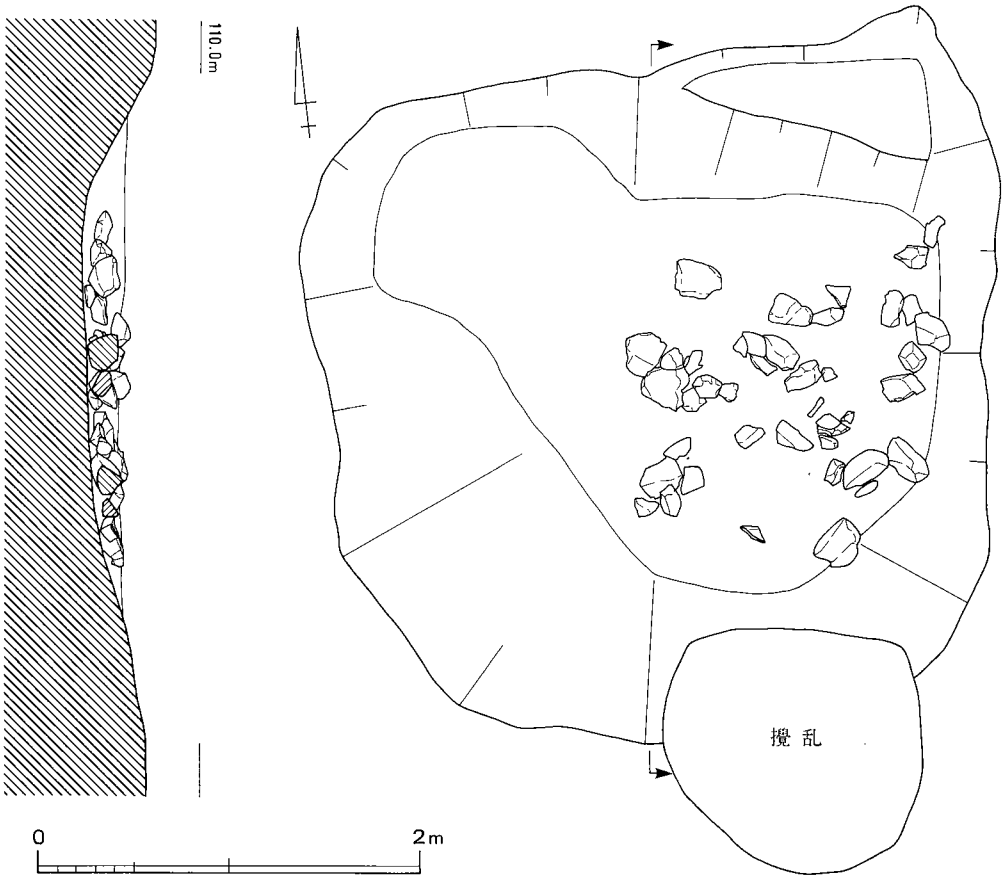
埋桶１（第101図）

調査区の南西端、Ｂ－１・２区に位置する。掘方は歪な円形を呈し、規模は長軸1.67ｍ、短軸1.6ｍを測る。深さは最深部で37.5㎝である。桶は確認できなかったが、掘方底面の周縁には幅７㎝、深さ５㎝の溝が巡る。また桶底にあたる溝の内側には３㎝の厚みで貼り土が施されている。桶底の規模は、内径で1.05ｍ前後と推察される。掘方底面からは20×10㎝大の河原石が多量に出土している。

遺物は、出土しなかった。

埋桶２（第101図）

調査区の中央、Ｄ・Ｅ－10区に位置する。近世Ⅱ期の土壙11に埋桶の上部は破壊されている。



第100図　土壙４

桶はなく、掘方のみ確認した。掘方は歪な円形を呈し、規模は長軸1.67m、短軸1.47mを測り、確認面からの深さは45cmを測る。掘方底面には20×10cm大の河原石が出土し、河原石のなかには火を受け赤化した石が含まれる。

遺物は出土しなかった。

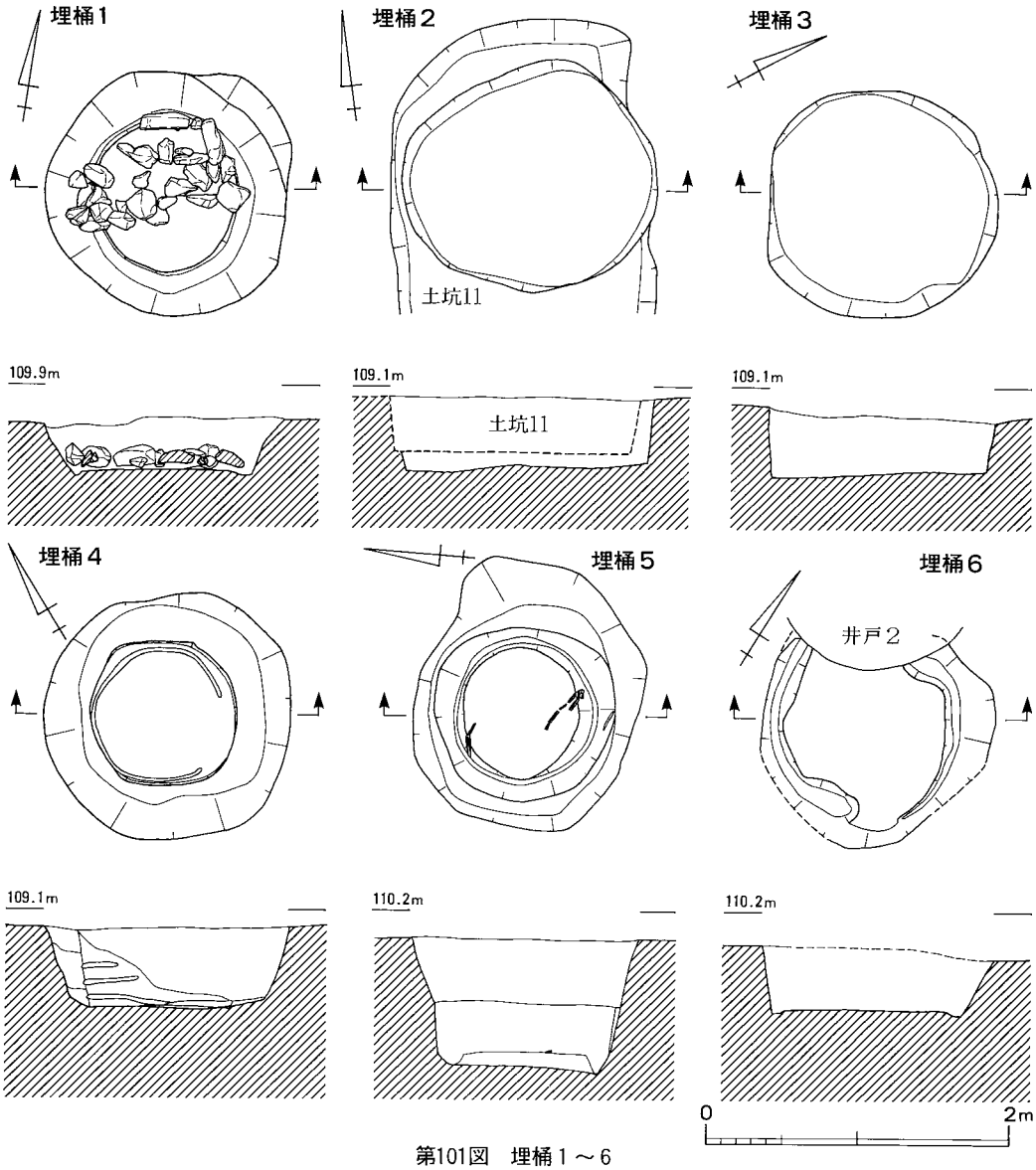
埋桶３（第101図）

調査区の中央部北寄り、G・H－９区に位置する。埋桶の北側約2.5～４mの所には埋桶４・５が近接する。桶はなく、掘方のみ確認した。掘方は南側に直線的な辺をもつ歪な円形を呈し、規模は長軸1.50m、短軸1.45mを測り、深さは最深部で40cmである。埋土は、炭・焼土を多量に含み、少量ではあるが15×10cm大の河原石を含む。

遺物は、染付椀の破片などが出土したが、図化できるものはなかった。

埋桶４（第101図）

調査区の中央部北寄り、H・１－９区に位置し、東側約３mの所には埋桶５、南側約2.5m



第101図　埋桶1～6

の所には埋桶3が近接する。桶は東半部が破壊され、遺存状況は悪い。掘方は多少歪な円形を呈し、規模は長軸が1.70m、短軸1.60mを測り、深さは最深部で52cmを測る。桶は掘方のほぼ中央に埋置され、規模は桶底で長軸92cm、短軸82cmを測る。桶側には3段のタガの痕跡が確認された。桶内上層には30×15cm大の大型の河原石が投棄された状況で出土し、河原石のなかには、火を受け赤化した石が含まれる。

遺物は、河原石に混じって、丹波焼スリ鉢（17）、染付猪口（18・19）が出土した。

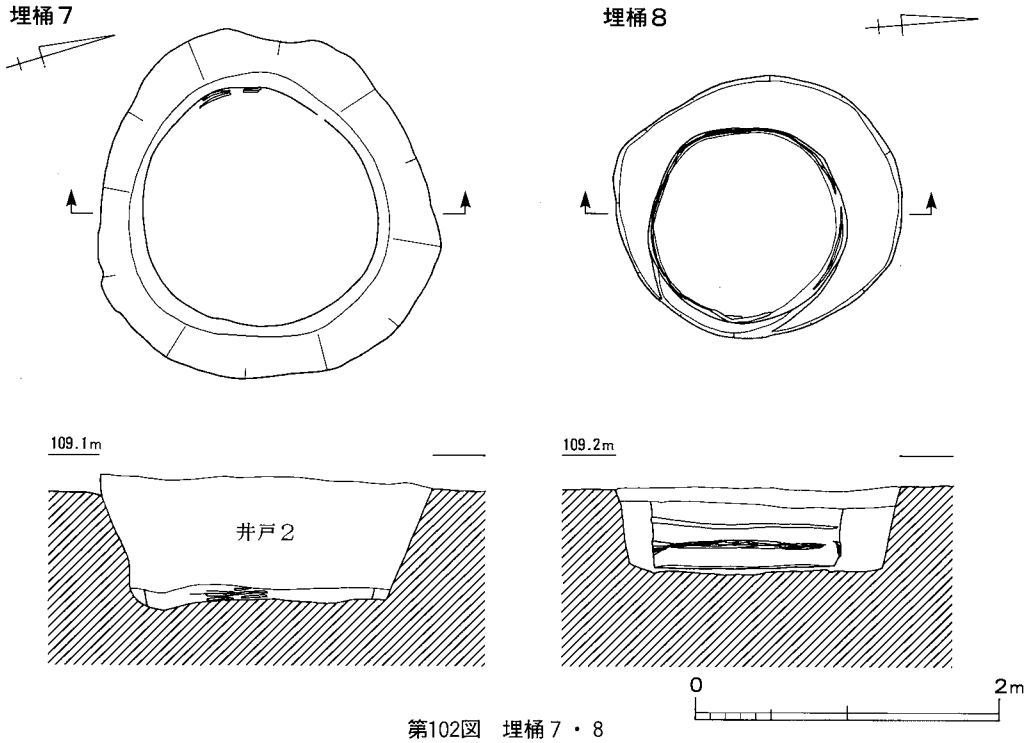
埋桶５（第101図）

調査区の中央部北寄り、Ｉ－10区に位置する。西側約３ｍの所には埋桶４が、南西側約４ｍの所には埋桶３が、北東側約3.5ｍの所には埋桶７がそれぞれ近接する。掘方は東側が膨らんだ歪な円形を呈し、掘方底面周縁には幅15㎝、深さ11㎝の溝が巡る。また桶底にあたる溝の内側、掘方中央部には10㎝前後の厚みで貼土を施している。規模は上端で長軸1.76ｍ、短軸1.49ｍを測り、深さは最深部で88㎝である。桶は多少西寄りに埋置され、規模は桶上端で長軸1.21ｍ、短軸1.15ｍを測る。桶底面から竹製のタガと側板の部材が出土した。

遺物は、埋土上層より土師質小皿（20～23）、施釉陶器深皿（24）・椀（25～28）、染付小杯（29）・椀（30～34）が出土した他、砥石（４）、鉄製包丁（４）・刀子片（５）、銅製の煙管（12）等の金属製品が出土した。また桶底面から寛永通寶をはじめとする銅銭（15～18）と銅銭の破片が６点が出土した他、栓状木製品（15）が出土した。

埋桶６（第101図）

調査区の中央部北寄り、Ｈ－12区に位置する。西北側約10ｍのところには埋桶３～５・７の一群が、南東側約７ｍの所には埋桶８・９の一群がある。埋桶の北端は近世Ⅱ期の井戸１に切られ、桶はなく掘方のみ確認した。掘方は歪な円形を呈し、規模は上端で長軸1.5ｍ、短軸1.45



第102図　埋桶７・８

mを測る。最深部の深さは40cmである。

掘方の底面周縁には幅10cm前後、深さ5cmの溝が巡る。

遺物は出土していない。

埋桶7（第102図）

調査区の中央部北寄り、I・J－11区に位置する。南西側4mの所には埋桶5が、南側9mの所には埋桶6がそれぞれ位置する。

埋桶の上部は、埋桶とほぼ重なる形で近世II期の井戸1が築かれているため、埋桶の上部は破壊され底部のみ確認した。

確認した桶の規模は長軸63cm、短軸60cmを測る。桶底までの深さは83cmである。桶側には、タガの痕跡および側板の残片が残っていた。

遺物は、桶底より漆器椀（7・8）、漆塗りの櫛（2）が出土した。

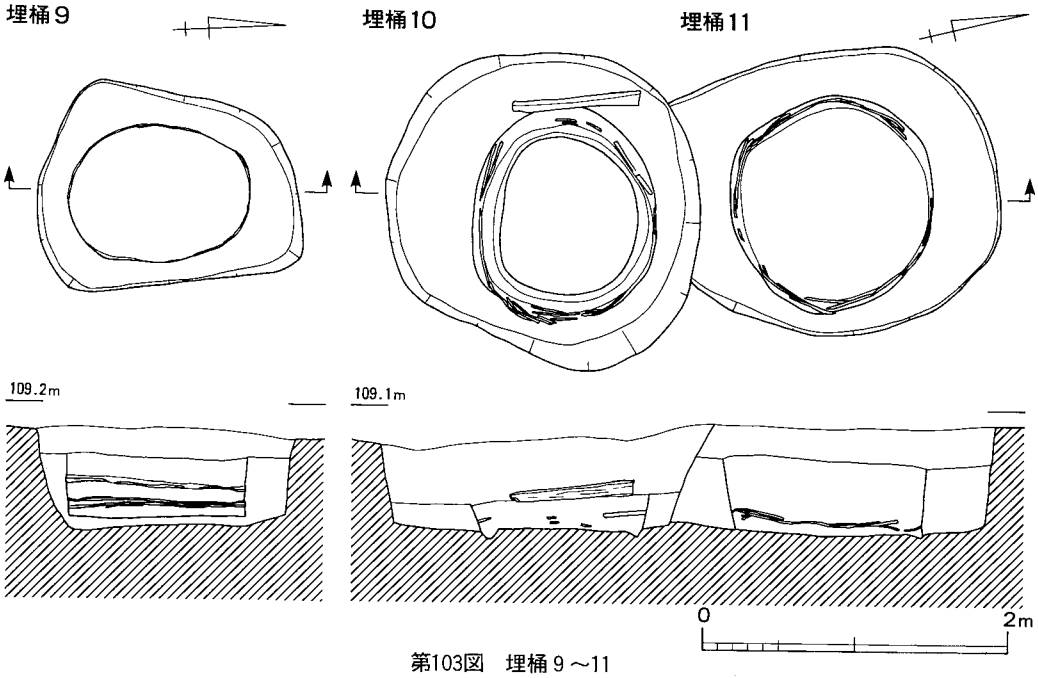
埋桶8（第102図）

調査区東半部北寄り、G・H－14区位置する。南側約30cmの所には埋桶9が近接する。

埋桶は桶の痕跡を残し、遺存状況は良好である。掘方は多少南北方向に楕円形を呈し、規模は上端で長軸1.85m、短軸1.67mを測る。深さは最深部で57cmである。

桶の規模は上端で、長軸1.28m、短軸1.20mを測る。桶側には2段の竹製のタガを確認した

遺物は桶内埋土上層より土師質小皿（35）が出土した。



第103図　埋桶9～11

埋桶９（第103図）

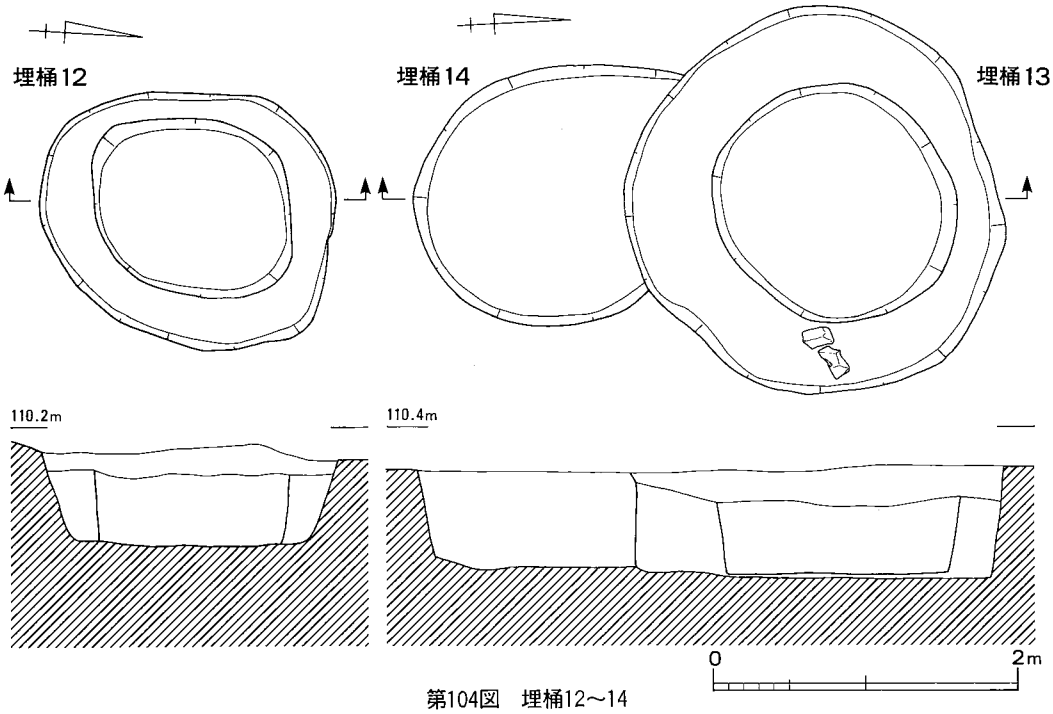
調査区東半部北寄り、Ｇ－14区に位置する。北側約30cmの所には埋桶８が近接する。埋桶は桶の痕跡を残し、遺存状況は良好である。掘方は南西隅が膨らんだ南北方向に長い楕円形を呈する。規模は上端で、長軸1.71ｍ、短軸1.26ｍを測り、深さは最深部で65cmを測る。桶の平面形は土圧で歪んでおり、南北方向に長い楕円形を呈する。規模は、長軸1.19ｍ、短軸0.91ｍを測る。桶側には竹製の２段のタガが残っていた。

遺物は出土しなかった。

埋桶10（第103図）

調査区の東半部北寄り、Ｇ・Ｈ－15区に位置する。埋桶の北側で埋桶11と重複し、埋桶11より新しいことが判明した。桶部の痕跡を残し遺存状況は良好である。埋桶掘方は歪な円形を呈し、規模は上端で長軸2.01ｍ、短軸1.91ｍを測り、深さは最深部で60cmを測る。掘方内底部周縁には幅10cm、深さ５cm前後の溝が巡る。桶は土圧で多少歪んでおり、規模は上端で長軸1.40ｍ、短軸1.2ｍを測る。桶側には竹製のタガを２段確認した。

遺物は、掘方内より板材が出土した他、桶内埋土中より青磁染付蓋（36）、染付椀（37）、軒丸瓦（39）・軒平瓦（38）、寛永通寶の破片が1 枚出土した。また桶埋底面より桶底板（10）、曲物底板（11）、櫛がそれぞれ出土した。



第104図　埋桶12～14

埋桶11（第103図）

調査区の東半部北寄り、H－15区に位置する。埋桶の南側は埋桶10と重複し、埋桶10よりも古いことが判明した。桶部の痕跡を残し遺存状況は良好である。埋桶掘方は南半部が狭まる歪な楕円形を呈し、規模は上端で長軸1.95m以上、短軸1.86mを測る、深さは最深部で70cmである。掘方底面周縁には幅10cm、深さ5cmの浅い溝が巡る。桶の規模は上端で長軸1.43m、短軸1.33mを測る。桶側下位には1段の竹製のタガが確認された。

遺物は棺内下層より白磁小杯（40）、染付小杯（41）・仏飯具（42）・皿（43）が出土した。

埋桶12（第104図）

調査区の東半部、G－15・16区に位置する。埋桶の北側約3mの所には埋桶10・11が、南側約4.5mの所には埋桶13・14が、東側約3.5mの所には埋桶15がそれぞれ近接する。桶部の痕跡を残し遺存状況は良好である。埋桶掘方は歪な楕円形を呈し、規模は上端で長軸1.95m、短軸1.67mを測り、深さは最深部で65cmである。桶は土圧で多少歪んでおり、規模は上端で長軸1.30m、短軸1.17mを測る。

遺物は掘方内より土師質小皿（44）が出土した。

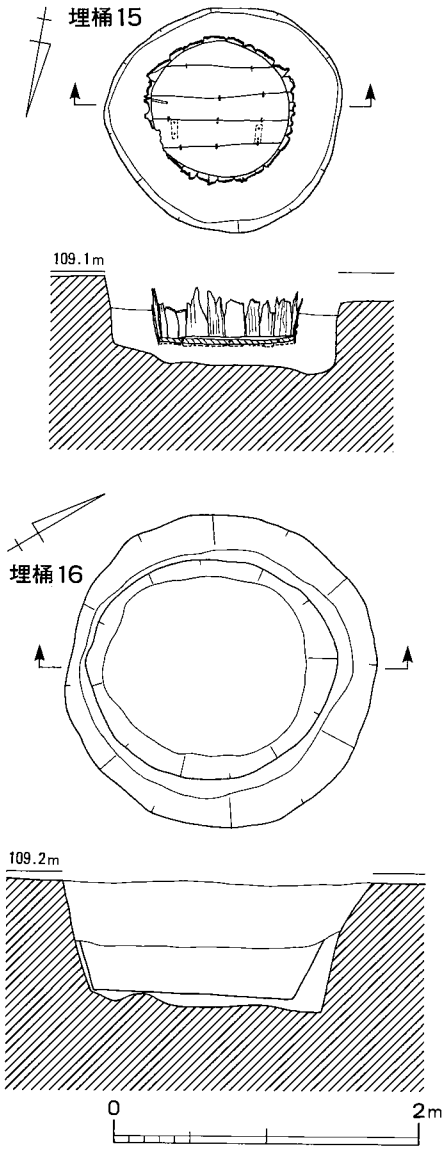
埋桶13（第104図）

調査区東半部、E・F－15・16区に位置する。桶の南側で埋桶14と重複し、埋桶14より新しいことが判明した。埋桶は桶の痕跡を残し遺存状況は良好である。埋桶掘方は歪な円形を呈し、規模は上端で2.56m、短軸2.38mを測る。深さは最深部で74cmである。桶の規模は上端で長軸1.6m、短軸1.50mを測る。

遺物は出土しなかった。

埋桶14（第104図）

調査区東半部、E－15・16区に位置する。桶の北側で埋桶13と重複し、埋桶13より古いことが判明した。埋桶は、桶部がなく、掘方のみ確認した。掘方は、歪な楕円形を呈し、規模は長軸1.40m以上、短軸1.69mを測り、深さは最深部で62cmである。



第105図　埋桶15・16

遺物は、掘方内埋土中層より土師質小皿（45）、施釉陶器蓋（49）、染付小杯（50～53）・猪口（54）・椀（55）が出土した他、下層から土師質小皿（46）、無釉陶器小鉢（47）、施釉陶器椀（48）が出土した。また染付猪口（54）は埋桶15の染付猪口（54）と接合した。

埋桶15（第105回）

調査区東半部、G・H－16区に位置する。東側約2.6mの所には埋桶16が、西側約3.5mの所には埋桶10～11が近接する。埋桶は桶底板および側板が残っており、遺存状況は良好である。埋桶掘方は円形を呈し、規模は上端で長軸1.49m、短軸1.45mを測る。深さは最深部で57cmである。底板は幅15～20cm・厚さ2cmの板材を5枚組み合わせて作られ、各板の接合には竹釘が用いられている。底板の規模は直径92cmを測る。側板は15cm前後・厚さ1cmの板材を組み合わせ、竹を縒ったタガで締めている。桶は多少上げ底の構造である。

遺物は、桶内埋土中層から土師質小皿（57）、施釉陶器椀（58）・深皿（59）、染付小杯（60）・猪口（54）・椀（62～64）、無釉陶器盤（66）、軒平瓦（65）・炮烙（67）が出土した以外に、下層より土師質小皿（56）と青磁染付(61)が出土した。の染付猪口は埋桶14の染付猪口（54）と接合した。

埋桶16（第105図）

調査区東端部、H－17区に位置する。埋桶の西側約2.6mの所には埋桶15が近接する。埋桶は桶の痕跡を残し遺存状況は良好である。埋桶掘方は円形を呈し、規模は上端で長軸 2.06m、短軸2.0mを測り、深さは最深部で82cmである。桶は土圧によって南北方向に長い楕円形を呈し、規模は上端で長軸1.65m、短軸1.50mを測る。

遺物は埋土中より寛永通寶が1枚出土した。

3．近世Ⅱ期

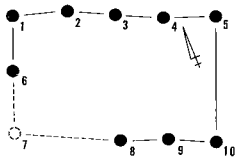
近世Ⅱ期の遺構は、上屋構造をもつ炉を中心に掘立柱建物群、石組井戸、池、廃棄土壙群、地割溝、埋甕、畝状遺構、石列の遺構群より成り立っている。その遺構群の性格は、炉1および井戸1内より出土したガラス化が著しい焼壁片・流滴状の滓・砥石の遺物から判断して冶金工房址の可能性が高い。ただ鉄冶金・銅冶金のいずれの工房址であるかについてガラス化した焼壁および滴状滓の化学分析を試みたが、分析結果からは判断できる成果は得られなかった。

近世Ⅱ期の遺構の内訳は、炉2基、掘立柱建物5棟、井戸2基、池1基、溝3条、土壙9基、埋甕1基で構成され、これらの遺構に、同時期に存在したかは不明であるが、Ⅱ期あるいはⅡ期以降の遺構として畝状遺構および畑を区切る石列群（石列1・2）が加わる。

この時期の主たる遺構群は調査区の北東側に集中する。ただ屋外炉と理解している炉2は、これらの遺構群から離れて単独で存在する。

掘立柱建物２

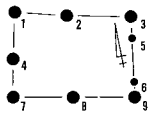
調査区中央部北端、Ｈ～Ｊ－９～11区に位置する。建物址の東側身舎内には炉１が位置する他、建物址北辺に接して土壙12があり、建物址の東側約1.5ｍの所には井戸２が近接する。建物址は、10穴の柱穴で構成されている。規模は東西方向が8.18ｍ（４間）、南北方向５ｍ（２間）を測り東西方向に長い建物址である。柱間は東西方向が1.78～2.30ｍと幅をもつ。南北方向は2.32～2.50ｍと比較的均一である。柱穴掘方は円形・楕円形が主体で１例隅丸方形を呈する。規模は平均で45×32㎝を測り、確認した柱痕は平均で径17㎝である。東西方向を棟軸とした方位はＮ66°30′Ｗである。



遺物は、Ｐ５・６掘方内より焼壁片が出土した。

掘立柱建物３

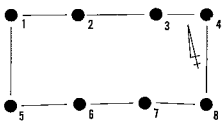
調査区中央部、Ｆ・Ｇ－10・11区に位置する。建物址の南側約50㎝の所には掘立柱建物址４が桁行方向を同一方向にもち、北側約1.2ｍの所には土壙５が近接する。建物址は９穴の柱穴で構成されている。規模は東西方向が4.62ｍ（２間）、南北方向3.25ｍ（２間）を測り東西方向に長い建物址である。柱間は東西方向が2.1～2.52ｍと多少幅をもつ。南北方向梁行で1.45～1.80ｍと一定ではない。柱穴掘方は楕円形・円形を呈し、楕円形が多い。規模は平均で25×22㎝を測り、確認した柱痕は平均で径12㎝を測る。東西方向を棟軸とした方位はＮ81°30′Ｗである。



遺物は出土しなかった。

掘立柱建物４

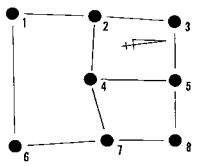
調査区中央部、Ｅ・Ｆ－10～11区に位置する。建物址の北側には約50㎝の間隔で掘立柱建物３が隣接する他、南側には池・土壙10・11がそれぞれ近接する。建物址は８穴で構成され、各梁行間に柱穴を持たない構造である。建物址の規模は東西方向が7.65ｍ（３間）、南北方向が3.60ｍ（１間）を測り、東西方向に長い建物址である。東西方向の柱間は2.00～2.95ｍと幅をもち、建物址西側の柱穴Ｐ１・５柱筋とＰ２・６柱筋間が2.7ｍと一定である。柱穴掘方は平均で32×30㎝を測り、確認した柱痕は平均で径16㎝である。東西方向を棟軸とした方位はＮ77°Ｗである。



遺物は出土しなかった。

掘立柱建物５

調査区東端、Ｈ・Ｉ—16・17区に位置する。建物址身舎内の南西隅で、掘立柱建物６と身舎が重なるが、柱穴の切り合いはない。建物址の北・西側を柵２が囲むように位置する。建物址は南辺の梁行間に柱穴をもたない構造で、８穴の柱穴で構成される。規模は南北方向が6.40ｍ（３間）、東西方向が5.1

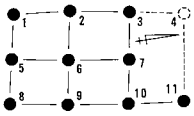


5m（2間）を測り、南北方向に長い建物址である。柱間は、南北方向が2.70～3.60mと幅をもつが、西側の桁行柱間は3.20mと均一である。東西方向の柱間は2.45～3.20mと幅をもつ。柱穴掘方は楕円形・円形を呈し、規模は平均で45×37cmを測る。確認した柱痕は平均で径21cmを測る。南北方向を主軸とした方位は、N4°30′Eである。

遺物は、出土しなかった。

掘立柱建物6

調査区の東端、F～H－16・17区に位置する。身舎の北東隅で掘立柱建物5と身舎が重なるが、柱穴の切り合いはない。建物址の北・西側を柵2が囲むように位置する。建物址は北辺の梁行間に柱穴を持たない構造で、埋桶15の埋土と識別できず未確認の柱穴P4を含めると11穴の柱穴で構成されていたと考えられる。規模は、南北方向が6.92m（3間）、東西方向が3.64m（2間）を測り南北方向に長い建物址である。柱間は、南北方向が2.22～2.40mとほぼ均一である。東西方向は1.80～1.91と南北方向と同様均一である。柱穴の掘方は円形・楕円形を呈し、規模は平均で35×29cmを測り、確認した柱痕は平均で径16cmを測る。南北方向を棟軸とした方位は、N6°Eである。



遺物は、P9柱痕内より染付小杯（68）が出土している。

柵1

調査区中央部、F・G12・－13区に位置する。西側約5mの所には掘立柱建物3・4が位置し、東側約6mの所には、溝3が平行してはしる。柵1は7穴の柱穴で構成され、N2°Eの方向で南北方向に並ぶ。各柱間は0.90～1.90mと幅があり、P3～P5の各柱間が1m前後と短い。柱穴の掘方は楕円形と円形があり、規模は平均で34×25cmを測り、確認した柱痕は平均で径12cmを測る。

遺物は出土しなかった。

柵2

調査区の西端、G～J－15・16区に位置する。柵は6穴の柱穴で構成され、掘立柱建物5・6の北・西側を「L」字状に囲むように巡る。各柱穴柱間は2.15～4.40mと幅があり不均一である。柱穴掘方は円形・楕円形を呈し、規模は平均で38×30cmを測る。確認した柱痕は平均で12cmである。

遺物は出土しなかった。

井戸1（第106図）

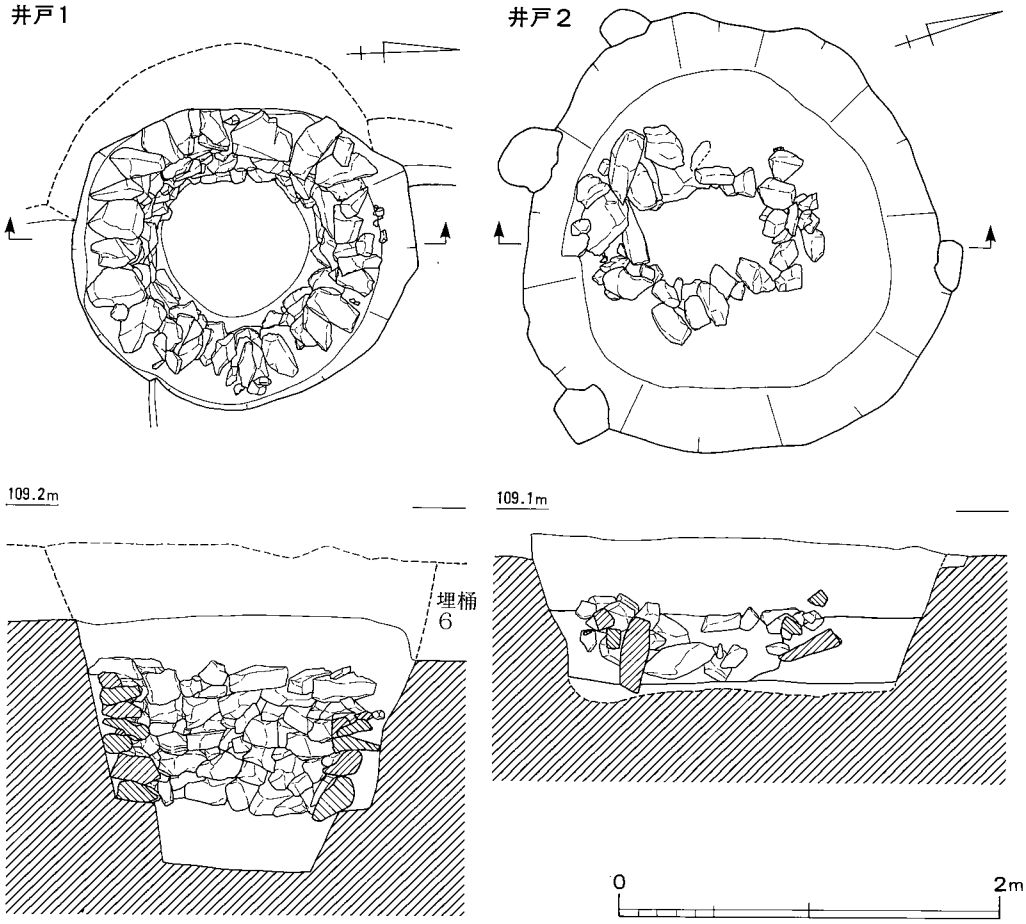
調査区中央部、H－12区に跨がって位置する石組円筒形井戸である。井戸の北側は後世の攪乱により破壊を受けている。また井戸内上部が破壊され、井側に使用されていた河原石は井戸内に投棄されている。井戸の北西側約6.5mの所には掘立柱建物1が、南西側約6mの所には掘立柱建物3・4が隣接する。井戸の掘方は円形を呈する。規模は長軸1.95m、短軸1.80mを

測り、確認面からの深さは最深部で1.72mを測る。井戸掘方は、2段に掘削され、確認面下約1.40mの所でいったん20cmの幅で平坦に掘削され、さらに内傾して掘削し水溜としている。平坦部には30×20cm大の河原石を、6段以上積み上げ、井側としている。石組井側の規模は上端部の内径が長軸1.05m、短軸0.93mを測る。

遺物は井戸内埋土上層より多量のガラス化した焼壁片（炉壁）が出土した他、焼壁片に混じって染付椀（69）が1点出土した。井戸内中層より刀柄（4）・不明木製品（13・14）・挽物木皿（5・6）・曲物の底板（9）の木製品が出土した。

井戸2（第106回）

調査区中央部北寄り、I・J－11区に位置する石組みの井戸である。井戸の上部石組は破壊され、井側に使用されていた河原石は井戸内に投棄されていた。井戸の西側には、掘立柱建物



第106図　井戸1・2

2・炉1が近接する。井戸は近世Ⅰ期の遺構、埋桶5を切って構築されている。井戸掘方は、歪な円形を呈し、規模は長軸2.25m、短軸2.16mを測り、深さは井戸底で76cmである。上記したように石組の遺存状況は悪く、掘方の東寄りに、石組基底部の痕跡を確認した。石組は1段ないしは2段残っており、石組井側の規模は、内径で長軸70cm前後、短軸55cm前後である。

遺物は井戸掘方内より土師質小皿（70）、無釉陶器摺鉢（71・72）、染付椀（75）が出土した他、青銅製の匙（14）が出土した。井側内からは無釉陶器甕（73）、染付椀（74）が出土した他、曲物底板（11）の木製品が出土した。これら以外に、井側埋土中より河原石に混じって砥石（1～6）・燧石（12）が出土した。

第107図　池

池（第107回）

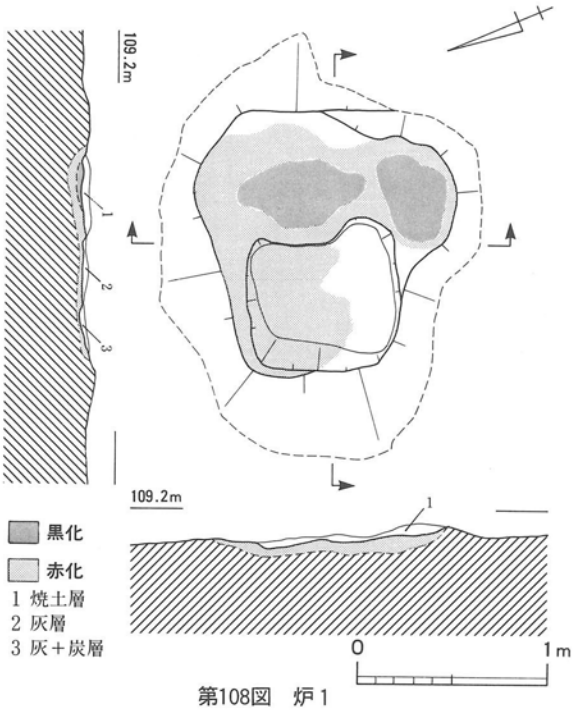
調査区中央部、D・E－11～13区に位置し、池の北側約2.5mの所には掘立柱建物4が、東側約1mの所には土壙6～9が、西側約2.5mの所に土壙10・11がそれぞれ近接する。池の南端は未調査のため、池の全容は不明瞭であるが、池の形状は東西方向に長い楕円形を呈すると推察される。規模は東西方向が5.2m、南北方向は2.0m前後と思われる。深さは、20cm前後と浅い。池内からは大小の河原石が多量に出土し、池の東端には径6cm前後の丸材が南北方向に並べてあった。調査した範囲内では、取水・排水施設は確認できなかった。

遺物は、池内より施釉陶器香

炉（76）、無釉陶器摺鉢（77～79）・甕口縁部片（80）、染付小杯（81）・椀（82・83）、硯（7）が出土した。

炉址1（第108回）

調査区の中央部北寄り、Ｉ－10区に位置し、冶金炉と思われる炉址である。炉址の西側は掘立柱建物２の身舎内にあり、炉址の東側、約50㎝の所には井戸２が近接する。炉の上部構造は後世の削平により破壊され、炉の基底部を確認した。炉の基底部は、基底面を削り出して構築されており、周囲より５㎝前後高くなっている。炉の基底部は1.3×1.2ｍの範囲で、熱を受け赤化しており、赤化した範囲の内東半部は、部分的に黒化している。炉の基底部の中央は凹んでおり、中には灰および炭層が確認された。炉の上部構造は明らかではないが１面が著しくガラス化した焼壁が井戸１および掘立柱建物２に帰属する柱穴（Ｐ６）、身舎内にある柱穴より出土している。これらの焼壁の接合を試みたが、細片のため炉体を復元するには至らなかった。



第108図　炉１

遺物は炉址南西隅、基底面直上より流滴状の滓が出土した。

炉址2（第109回）

調査区の南東隅、Ｃ・Ｄ－15区に位置する地下式の炉である。炉は、後世の水田開発による削平のため、前庭部の一部が破壊されている。

炉は焚口部と燃焼部とからなり、煙道部はない。規模は全長2.7ｍを測る。燃焼部内には多量の石が投棄された状態で確認された。焚口部は、地山を燃焼部に向かって深く溝状に掘った後、溝の天井部は粘土を貼って構築され、焚口部付近は、26×12㎝大の河原石で補強している。燃焼部は円形を呈し、規模は上端で48×42㎝、下端で37×34㎝を測り、深さは最深部で39㎝である。燃焼部の断面形は、下部がフラスコ状を呈し、上部は外方に開く形状である。燃焼部内壁は火を受け赤化しているが、燃焼部下位は赤化していない。前庭部は基底面を掘削して作られており、幅１ｍ以上、長さ1.3ｍを測る。前庭部の北側は１段高くなっている。焚口付近の前庭部床面は黒化している。

遺物は出土しなかった。

溝１

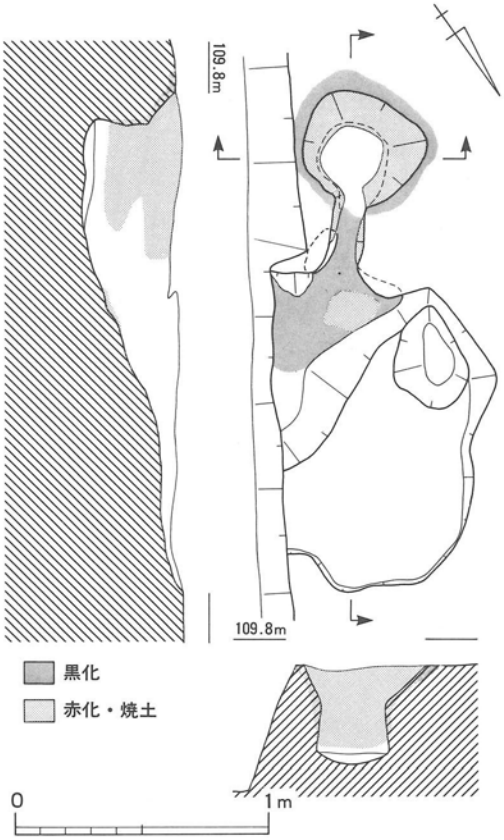
調査区東側で南北に走る溝である。溝の南端はＦライン付近で消滅し、溝の北端は溝２と接続する。溝２とは重複関係はなく、同時期に存続している。溝の規模は、幅0.7～1.2mを測り、南に行くに従い幅を減じる。深さは30～50cmを測り、北が深くなる。断面形状は深い皿状を呈する。

遺物は、溝内より炮烙（84）、無釉陶器摺鉢（85・86）・盤（87）、染付椀（88）が出土した他、木下駄（３）が出土した。

溝２

調査区中央から西側北寄りにかけて、「Ｌ」字状に屈曲して流れる溝である。溝の東端は調査区外に延び、南端はＦ－14区付近で消滅する。溝の幅は1.0～1.70mを測り、深さは20～50cmを測る。溝の断面形状は深い皿状を呈する。

遺物は、溝内埋土中より土師質小皿（89）、施釉陶器椀（90）、染付皿（91）が出土した。



第109図　炉２

溝３

調査区の中央部南寄りに位置し、南北方向に走る溝である。溝の南端は調査区外に延び、北端は、後世の水田開発による削平を受け消滅している。溝の幅は１ｍ前後、深さは25cm前後と浅い。溝の断面形は浅い皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

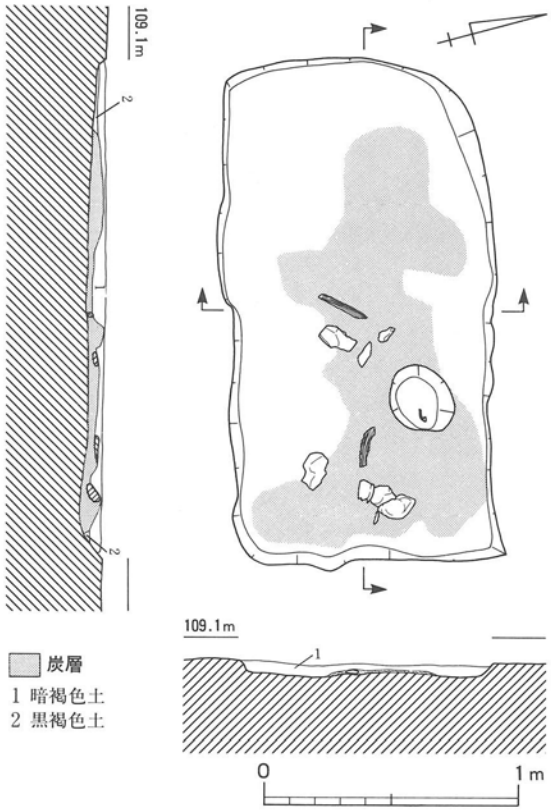
土壙５（第110回）

調査区の中央部、Ｇ－10区に位置する。土壙の南側約70cmのところには掘立柱建物３が近接する。土壙は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.84ｍ・短軸1.36ｍを測る。深さは最深部で10cmと浅い。土壙底面には３cm前後の厚さで炭層が厚く堆積している。長軸方向を主軸とした方位はN75°Wである。

遺物は、土壙内北東隅、炭層直上より煙管（11）・鉄釘（７）が出土した。

土壙６～９（第111回）

調査区の中央部東寄り、Ｅ・Ｆ－13区に位置する。土壙群の西側は池が近接し、東側約3.5ｍの所には溝２がある。各土壙は重複しており、新旧関係は土壙９→８→７→６の順である。



第110図　土壙５

土壙６は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.08m・短軸1.24m、深さ25cm前後である。断面形は皿状を呈する。土壙７は北側を土壙６で切られ、形状は不明瞭であるが、土壙６と同じく南北方向に長い隅丸長方形を呈すると推察される。規模は長軸2.3m前後・短軸1.32m、深さ17cmである。断面形は皿状を呈する。土壙８は中央部を土壙３に切られており、形状・規模が不明瞭である。形状は東西に長い隅丸長方形を呈すると推察される。規模は長軸2.42m・短軸0.8m前後、深さは10cm前後と浅い。断面形は浅い皿状を呈する。土壙９は土壙の東端と北東隅を土壙７・８にそれぞれ切られ、形状・規模は不明瞭である。形状は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長軸1.92m・短軸1.4m前後深さ10cmを測る。断面形は皿状を呈する。

遺物は、土壙９内より無釉陶器甕（92）が出土した。

土壙10（第112回）

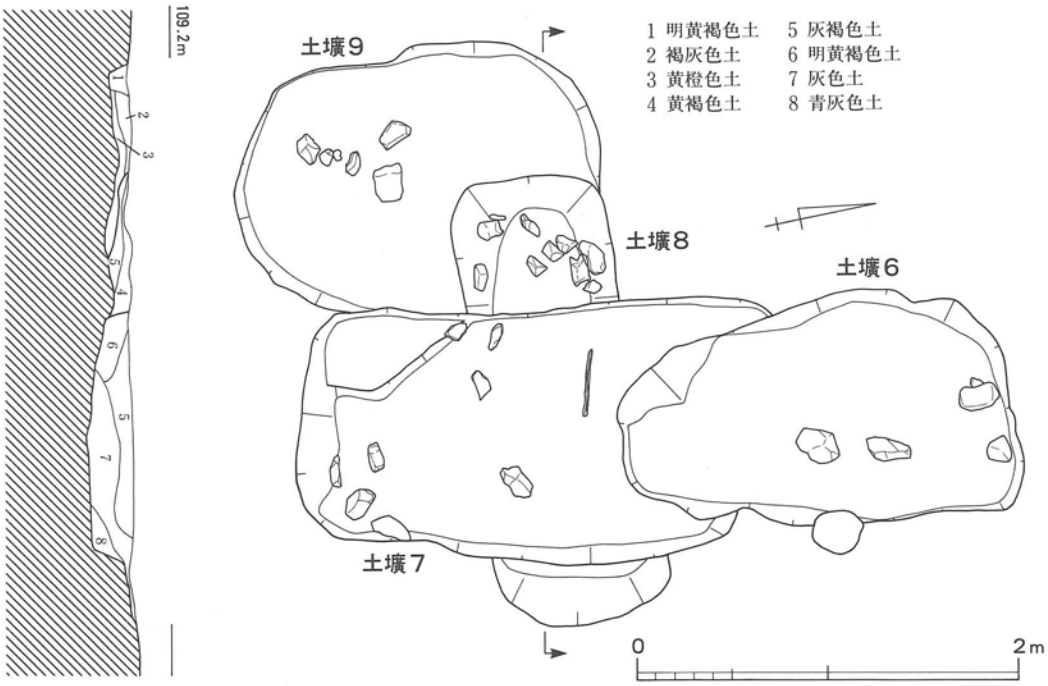
調査区の中央部、Ｄ・Ｅ－10区に位置する。東側には土壙11が、北側には掘立柱建物４がそれぞれ近接する。土壙は北半部が狭くなった歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸4.38m、短軸1.1m、深さは最深部で22cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。土壙内の南北両端には20×10cm大の河原石が集中して出土した。

遺物は河原石に混ざって施釉陶器椀（93）、白磁椀（94）、染付椀（95）が出土した。

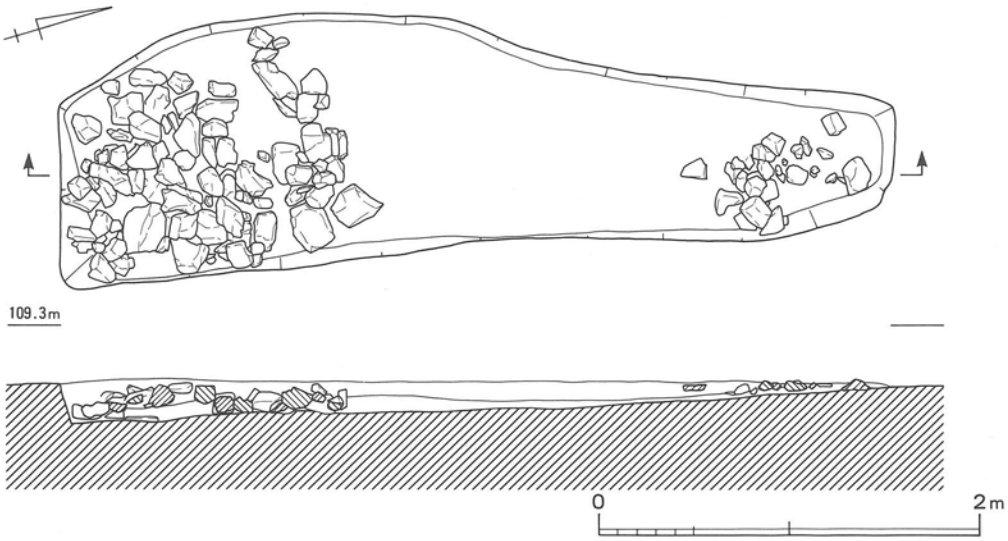
土壙11第113回）

調査区の中央部、Ｄ・Ｅ－10区に位置する。西側は土壙10が位置し、北側には掘立柱建物４が、東側には池がそれぞれ近接する。土壙は北東隅が歪な南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長軸が3.30m・短軸1.70m、深さは50cm前後を測る。断面形は鍋底状を呈する。土壙内北半部には20×10cm大の河原石が集中して出土した。

遺物は、土壙内埋土中より無釉陶器盤（96）が出土した。



第111図　土壙６～９

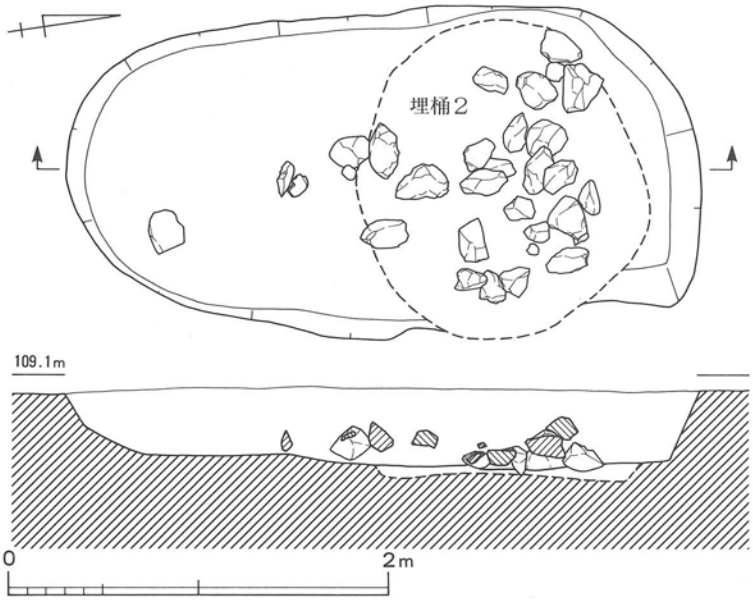


第112図　土壙10

土壙12（第114回）

調査区の中央部北寄り、Ｊ－10区に位置する。南側には掘立柱建物２が身舎と重なるように接している。土壙は円形を呈し、規模は長軸1.21ｍ・短軸1.14ｍ、深さは最深部で17㎝を測る。断面形は、浅い皿状を呈する。土壙内には20×15㎝大の河原石が出土した。出土した河原石のなかには火を受け赤化したものがある。

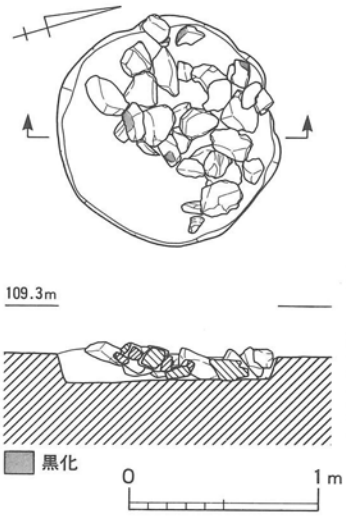
遺物は、出土しなかった。



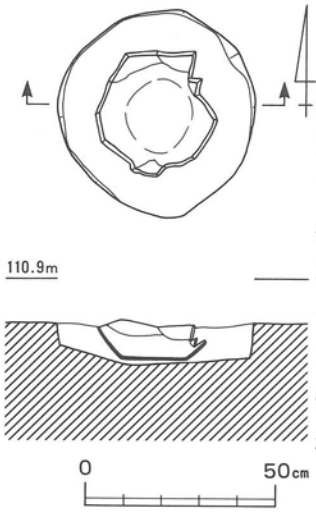
第113図　土壙11

土壙13（第116回）

調査区の中央部、Ｈ－９区に位置する。土壙の北側約３ｍの所には掘立柱建物２が隣接する。土壙は歪な円形を呈し、規模は長軸68㎝、短軸58㎝、深さは最深部で25㎝を測る。土壙内からは多量の河原石が出土した。遺物は出土しなかった。



第114図　土壙12



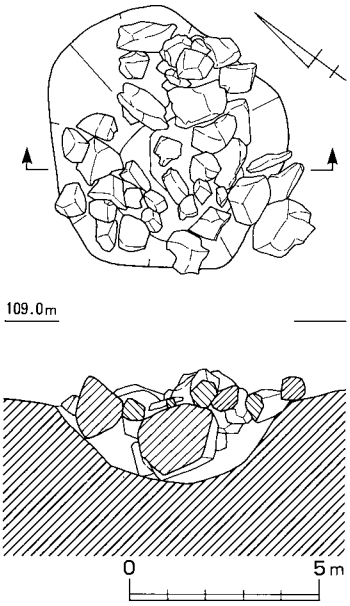
第115図　埋甕

埋甕（第115回）

調査区の東半部北寄り、Ｉ・Ｊ－14区に位置する。南側約３ｍの所には、溝２が隣接し、西側約１ｍの所には石列２が近接する。埋甕掘方はほぼ円形を呈し、規模は長軸55㎝、短軸51㎝、深さは最深部で11㎝と浅い。断面形状は、皿状を呈する。掘方のほぼ中央には胴部上半を欠いた丹波焼甕（97）が埋置されている。

石列１

調査区の東半部北寄り、Ｉ・Ｊ



第116図　土壙13

14区に位置する。石列の南端は溝１に切られている。石列は20×10cm～40×30cm大の河原石を南北方向に配列し、延長は5.05mを測る。遺物は出土しなかった。

石列２

調査区東端部、G・H－５・６区に位置する。石列の南端は、後世の水田開発による削平を受け消滅している。石列は20×15cm大の河原石を西側に膨らんだ状態で南北方向に配列している。石列のほぼ中央には40×32cm大の大型の石を据えている。

遺物は出土しなかった。

畝状遺構

調査区の西半部に位置する。東側は後世の水田開発による削平を受け破壊されている。また畝状遺構の北西端は調査区外に延びている。畝状遺構の南側は掘立柱建物１を主体にした中世遺構群が展開し、確認面は中世遺構群と同一面である。西側は約30cmの比高で一段高くなり、北側は約20cmの比高差で低くなっているほか、畝状遺構の北西端は調査区外に延び、全容は不明瞭である。確認した畝状隆起は８条を数え、幅は40cm～70cmと狭い。畑の畝を想定すると幅が狭く、畝状遺構の覆土が砂層であったことを考慮すると、洪水等の要因で、畝が押し流された可能性が高い。畝の高さは15～30cmを測る。

遺物は出土しなかった。

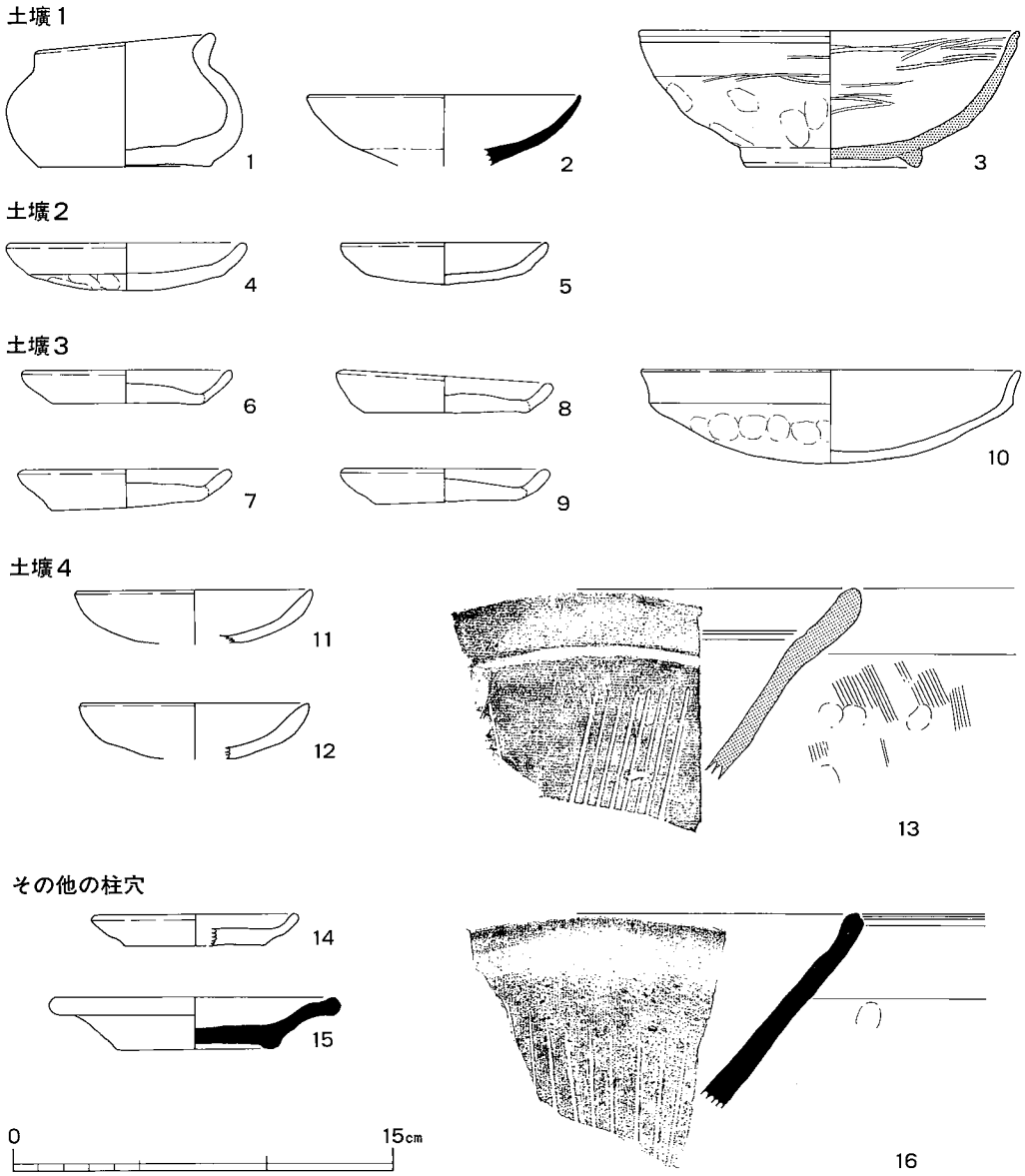
第２節　遺　　物

遺物は中世と近世に属する遺物が出土している。

中世の遺物は、土師器・瓦器・瓦質土器・国産陶磁器・中国製磁器が出土している。この内土師器小壺（１）・白磁皿（２）・瓦器碗（３）は土壙１（土壙墓）の床面より出土し、また、４・５の土師器皿は土壙２（木棺墓）棺底より出土し、６～10の土師器皿の一群は土壙３（木棺墓）棺底より出土し、それぞれ一括性の高い出土状況を示す。

11・12の土師器皿、および13の瓦質擂鉢は土壙４埋土中より出土している。また14の土師器皿は柱穴97の柱痕内、15の瀬戸・美濃系小皿と16の丹波焼擂鉢は柱穴66の柱痕内より出土している。

近世の遺物は、土師質土器・無釉陶器・施釉陶器・磁器をはじめ銅器・鉄器等の金属器、木器など、中世の遺物に比べ、多種多彩な遺物が出土している。



第117図　中世遺構出土の土器

以下各時代ごとに遺物を説明する。

1．中世の土器

土師器

土師器は皿・小壺が出土している。

皿（4～12・14）

4・5の小皿は丸底で短く外反する口縁部をもつ皿である。外面体部はユビオサエ整形、外面口縁部から内面体部上位にかけてヨコナデ整形を施す。内面底部は不定方向のナデ整形を施す。口径は復元値で8.5cm前後・器高1.8cmを測る。

6～9・14は口縁部が短く内彎して立ち上がり、外面底部には回転糸切り痕跡が認められる。内外面ともに回転ナデ整形を施している。口径8.0～8.5cm・器高1.3～1.7cmを測る。

11・12の小皿は口縁部は肥厚して立ち上がり、端部は尖っている。内外面とも磨滅が著しく整形技法は不明である。口径は復元値で9.5cm前後を測る。

8の大皿は、丸底の底部から口縁部が外反して立ち上がる皿である。外面口縁部直下にはユビオサエ整形の痕跡が明瞭に残り、口縁部はヨコナデ整形を施す。口径は復元値で15.0cm・器高3.5cmを測る。

小壺（1）

底部に回転糸切り痕跡を残す壺である。胴部は大きく張出し、中位に最大径をもつ。口縁部は、肥厚して短く外反する。内外面ともに磨滅が著しく整形は不明瞭である。ただ外面胴部に横位のヘラケズリ痕跡、内面胴部には指ナデの痕跡が見られる。口径6.9cm・器高5.0cmを測る。

瓦器・瓦質土器（3・13）

瓦器は椀（3）がある。口縁端部外面に一条の沈線が巡り、堅固な造りの高台をもつ碗である。外面口縁部はヨコナデ整形、体部はユビオサエ整形を施す。暗文は、外面口縁部付近と内面体部にその痕跡を認める。口径14.9cm・器高5.4cmを測る。

瓦質土器は擂鉢（13）がある。口縁部付近の破片であるため、全容は明らかではないが、内彎気味に開く口縁部をもつ擂鉢である。内面体部と口縁部の境に一条の沈線が巡り、内外面体部には8本一単位の卸目が施されている。口縁部は内外面ともヨコナデ整形、外面体部はユビオサエ整形の後、7本／cmのハケメが施される。

国産陶器（15・16）

国産陶器は15の瀬戸・美濃焼系の小皿と16の丹波焼擂鉢がある。

15の瀬戸・美濃系の小皿は、口縁部が外反し、端部を丸くおさめた小皿である。高台端部および、内面底部は露胎で、釉色は濃いオリーブグリーンを呈する。高台内には輪状に目跡が残る。口径は復元値で11.5cm・器高2.1cmを測る。

16の丹波焼擂鉢は、口縁部が内彎気味に立ち上がり端部に一条の沈線が巡る。口縁部は内外面ともに回転ナデ整形、外面体部にはユビオサエの圧痕が認められる。内面体部には一回一条描きの卸目が施される。

中国製磁器（2）

2は白磁皿である。外面体部下半は釉を掻き取り露胎である。釉は灰白色を呈する。口径は復元値で10.7cmを測る。

2．近世の陶磁器

土師質土器

土師質土器は皿と炮烙が出土している。近世陶磁器のなかでは、出土量が極めて少ない。

皿

皿は全て底部の切り離しに回転糸切り手法を採用し、内外面の整形も回転ナデ整形が施されている。とくに内面の回転ナデ整形は、底部中央まで及ぶ。皿はその器形からⅠ～Ⅳ類の4つに大別できる。

Ⅰ類（20～22・70・89）

口縁部が大きく外方に開く皿である。他の類の皿に比べ、口径に比べ底径の比率が小さいのが特徴ある。口径7.8～9.4cm・器高2.5cm前後を測る。

Ⅱ類（23・35・44）

内面の底部と口縁部の境に屈曲部をもち、口縁部が直線的に外傾する皿である。口径9cm前後・器高1.8cm前後を測る。

Ⅲ類（45）

口縁部が内彎して立ち上がる皿である。口径8.0cm・器高1.7cmを測る。

Ⅳ類（46・56・57）

内面の底部と口縁部の境は明瞭ではなく、滑らかに移行する。口径7.7～10.3cmと幅があるが器高は1.8cm前後におさまる。

炮烙（67・84）

67は内彎する口縁部をもつ炮烙である。口縁部の破片であるため全容は不明である。口縁部は内外面ともに回転ナデ整形が施される。口径は復元値で31.2cmを測る。

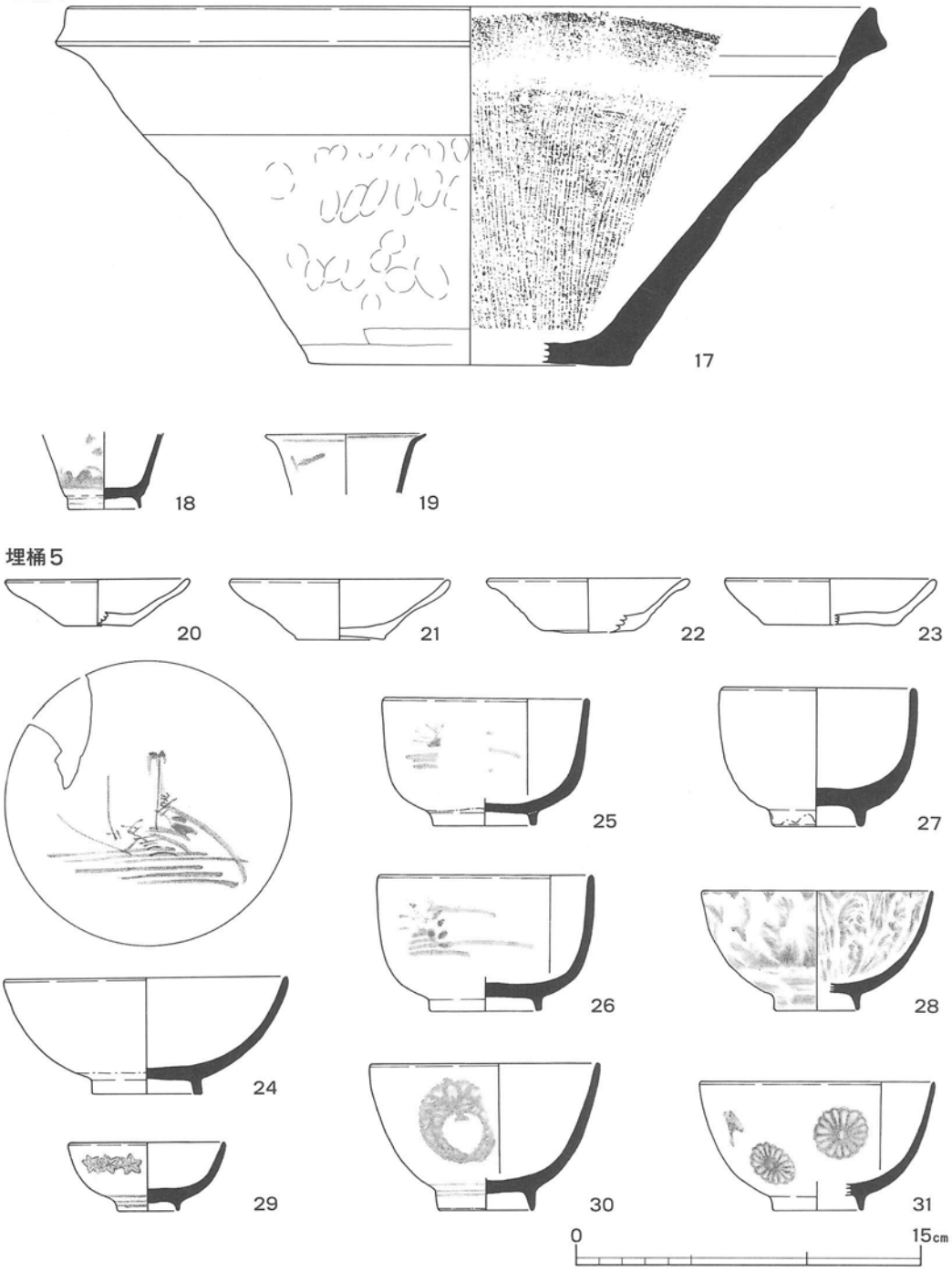
84は直立して立ち上がる口縁部をもつ炮烙である。口縁部外面から内面底部上位にかけて回転ナデ整形が施される。外面底部には煤が付着し、整形技法は不明である。口径は復元値で26.6cmを測る。

無釉陶器

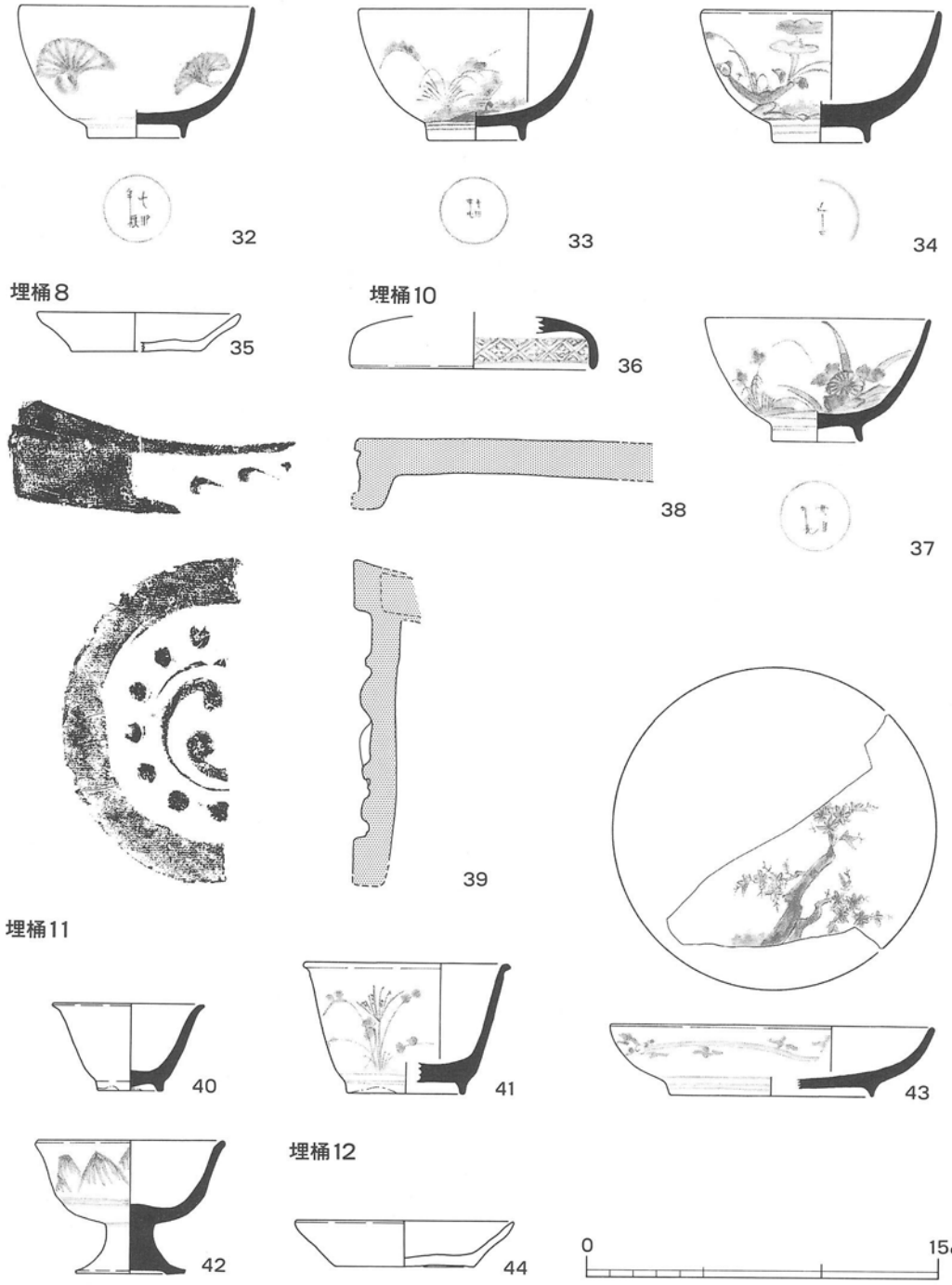
無釉陶器は盤・擂鉢・甕がある。出土した無釉陶器は、多くが丹波焼ないしは丹波焼系の製品であるが、86・99の擂鉢は丹波焼以外の製品の可能性がある。

遺構外から出土した98・99の擂鉢は後世の攪乱土壙より出土し、出土位置は不明である。

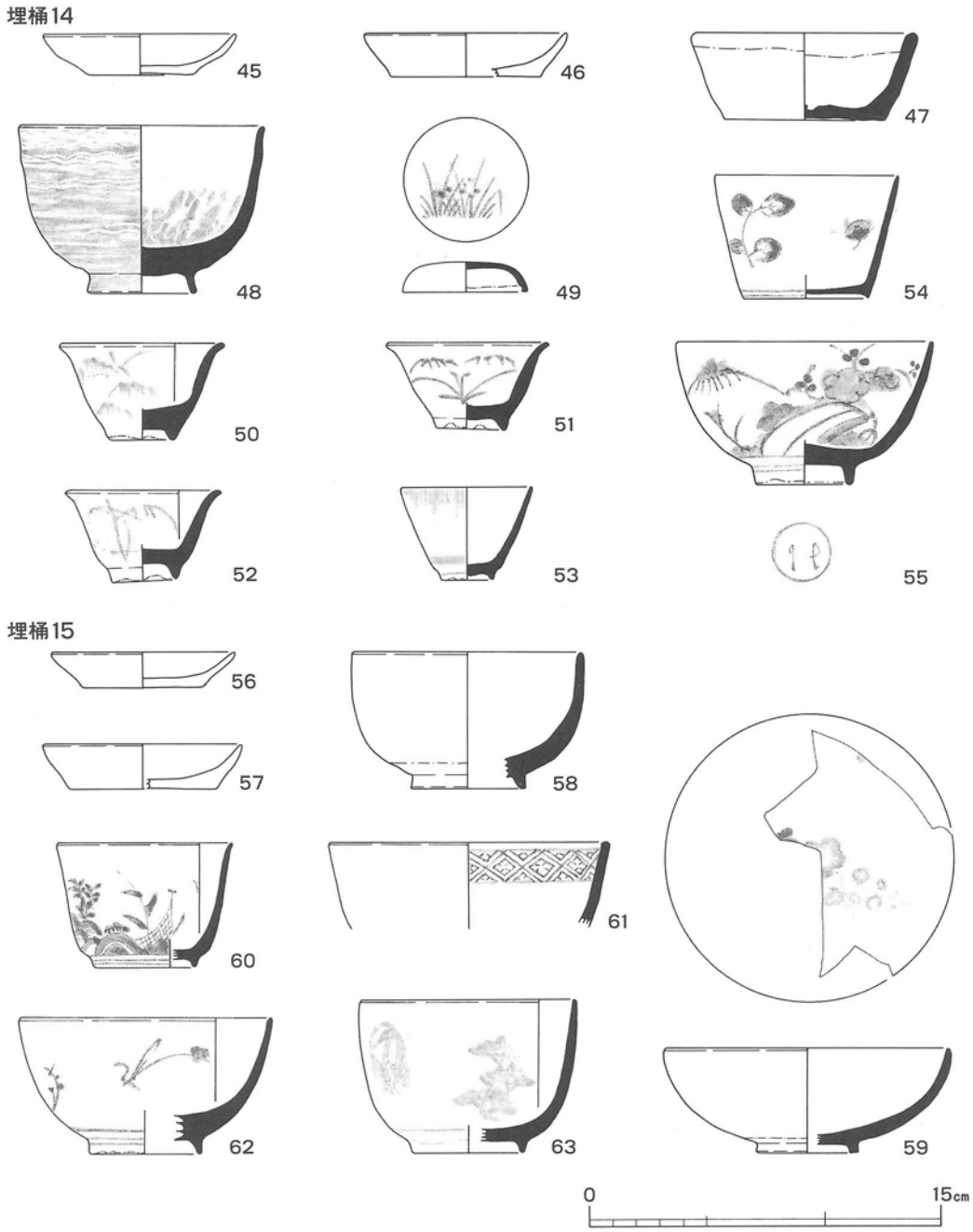
埋桶４



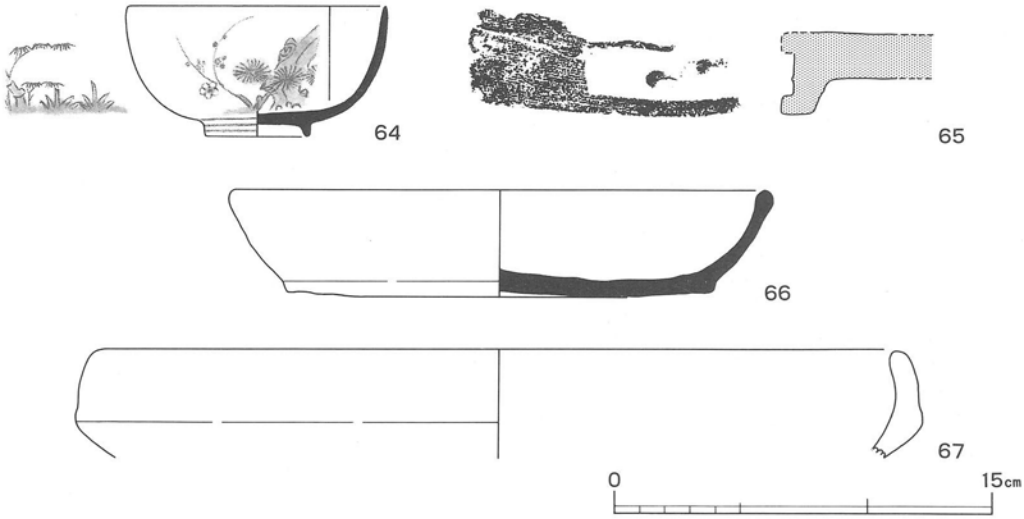
第118図　近世Ⅰ期遺構出土土器（１）



第119図　近世Ⅰ期遺構出土土器（2）



第120図　近世Ⅰ期遺構出土土器（3）



第121図　近世Ⅰ期遺構出土土器（4）

盤（87・96）

87は片口部をもつ盤である。外面底部には灰が付着し、底部の整形は不明である。口縁部から体部には内外面ともに回転ナデ整形が施され、外面体部下位、底部付近にはヘラケズリ整形が施される。内面体部から底部にかけて、部分的に自然釉が認められる。口径は復元値で20.0㎝・器高5.0㎝を測る。

96は盤の破片である。口縁部は内彎して短く立ち上がり、87の盤よりは器高が低い。口縁部～体部の内外面および外面底部に回転ナデ整形を施した後、外面体部下位、底部周縁に沿ってヘラケズリ整形を施す。外面口縁部から体部の一部に自然釉が認められる。

擂鉢（17・71・72・77～79・85・86・98・99）

17・71は口縁端部が上下方向に若干拡張し、断面形が三角形を呈する擂鉢である。内面の口縁部と体部の境は幅広の凹みが巡り、両部位を画している。外面体部はユビオサエ整形の後、体部上位から口縁部にかけて回転ナデ整形を施す。体部下位、底部周縁に沿ってヘラケズリが施されている。内面口縁部は回転ナデ整形を施し、体部には17が８本一単位、71が７本一単位の櫛描きによる卸目が施される。17の底部には、同心円・一方向の卸目が確認できる。遺存情況の良好な17は口径34.8㎝・器高15.6㎝を測る。

72・77・78・79・85・98・99の一群は、口縁端部が大きく上方へ拡張し、端部外面に幅広の面をもつ擂鉢である。端部外面に幅広の凹線が巡る85・99と１条ないしは２条の沈線が巡る72・77・79がある。

85は外面体部から内面口縁部にかけて回転ナデ整形を施し、外面体部下位、底部周縁に沿って横位の強いナデを施している。外面底部には灰が付着している。

99は外面体部上位から内面口縁部にかけて回転ナデ整形、外面体部は横位のナデ整形が施される。

内面の卸目は72・99が7本一単位、77～79・85が8本一単位の櫛描きによる卸目を施す。

底部中央の卸目は、85が一方向、99が同心円状の卸目に一方向の卸目を施す。85は口径が復元値で25.8cm、器高は10.3cmを測る。99は口径31cm・器高13.8cmを測る。

86は高台をもつ擂鉢である。外面体部は回転ナデ整形、高台内はヘラケズリ整形を施す。内面には6本一単位の櫛描きによる卸目が施される。

98は内面に陶片を目として用いた痕跡が明瞭に残る。外面体部はユビオサエ整形、体部下位は回転ナデ整形後、底部周縁に強い横位のナデが施される。外面底部は不定方向のナデ整形が丁寧に施される。内面体部には6本一単位の櫛描きによる卸目と底部中央には同心円状の卸目が施される。

甕（73・80・92）

73・80・92は、口縁端部が内外方に拡張し、広い平坦面をもつ甕である。平坦面には4条の凹線が巡る。73・92は胴部上半に凹線が認められる。遺存状況の良好な92は胴部上半に16条の凹線が巡り、胴部上位には貼り付けの輪耳が認められる。口径32.9cmを測る。

施釉陶器

施釉陶器は丹波焼・京焼系・瀬戸美濃系・肥前焼系の製品がある。器種は小鉢・香炉・合子・盤・皿・碗・甕と多様である。

丹波焼（47・66・76）

丹波焼の製品は小鉢・香炉・盤・甕が出土している。

47は小鉢である。口縁端部に暗褐色釉が施されている。内外面とも回転ナデ整形を施し、外面底部は未整形である。内面には自然釉が付着する。口径は復元値で9.2cm・器高5.7cmを測る。76はロクロ引き成形の香炉と考えられる。内外面ともに口縁部～体部にかけて暗オリーブ色の釉が施されている。外面体部下位には面取り様の強いナデ整形を施すが、体部上位から口縁部にかけては回転ナデ整形、内面にはロクロによる凹凸が顕著に認められる。外面底部周縁には2箇所以上の目跡が残る。口径は復元値で9.7cm・器高6cmを測る。66の盤は内外面とも体部から口縁部にかけてオリーブ色の釉が施され、外面底部は露胎である。内面底部には4箇所以上、外面底部には中央部に1箇所、周辺部に4箇所以上の目跡がそれぞれ残っている。口径は復元値で21.0cm・器高4.2cmを測る。97は甕の底部である。外面底部を除く内外面に鉄泥奬が刷毛塗りされ、その後、外面胴部に黒褐色の釉が施されている。外面底部周縁にそって3cmの幅で離れ砂が残っている。底径は20cmを測る。

瀬戸美濃焼系（58）

58は瀬戸美濃系の碗と考えられる。内面および外面口縁部から体部にかけて緑がかった透明釉が施され、外面体部下位から高台部は露胎である。胎土は砂が混じり、灰白色を呈する。口径は復元値で9.6cm・器高5.8cmを測る。

京焼系（24・49・59）

49は完形の合子蓋である。内面受口部は露胎である。外面には、葉の部分には鉄彩、花の部分には呉須を用い菖蒲を描いた後、透明釉を施す。胎土は精良で、灰白色を呈する。口径5.3cm・器高1.3cmを測る。24は完形の平碗である。外面体部下位から高台部にかけて露胎である。内面底部中央には楼閣山水文を呉須描きした後、器面に透明釉を施す。高台内には刻印が施されるが、判読できない。胎土は精良で灰白色を呈する。口径12.2cm・器高5.1cmを測る。59は皿である。外面体部下位から高台部にかけて露胎である。器面に灰白色の釉を施した後、内面底部に赤・緑・白彩を用いて、梅を描いている。胎土は灰白色を呈する。口径は復元値で12.0cm・器高4.5cmを測る。

肥前焼系（25・26・28・48・93・100）

肥前焼系の製品は、いわゆる「京焼写し」ないしは「京風陶器」と呼ばれる軟質の製品（25・26・93）と、刷毛目を施した硬質の製品（28・48・100）の両者がある。

25・26・93の「京焼写し」ないしは「京風陶器」と呼ばれる一群は、呉器手と呼ばれる93の碗と25・26の丸碗がある。93の呉器手碗は高台部端部が露胎で、内面底部には輪状に砂目の跡が残る。底径3.8cmを測る。25・26の丸碗は外面体部下位から高台部にかけて露胎で、高台部内には25が「木下弥」、26が「新」の刻印銘が確認できる。外面体部には楼閣山水文を呉須描きした後、器面に透明釉を施す。胎土はいずれも精良で、黄色味の強いクリーム色を呈する。25は口径8.8cm・器高5.4cm、26は口径9.2cm・器高5.9cmをそれぞれ測る。

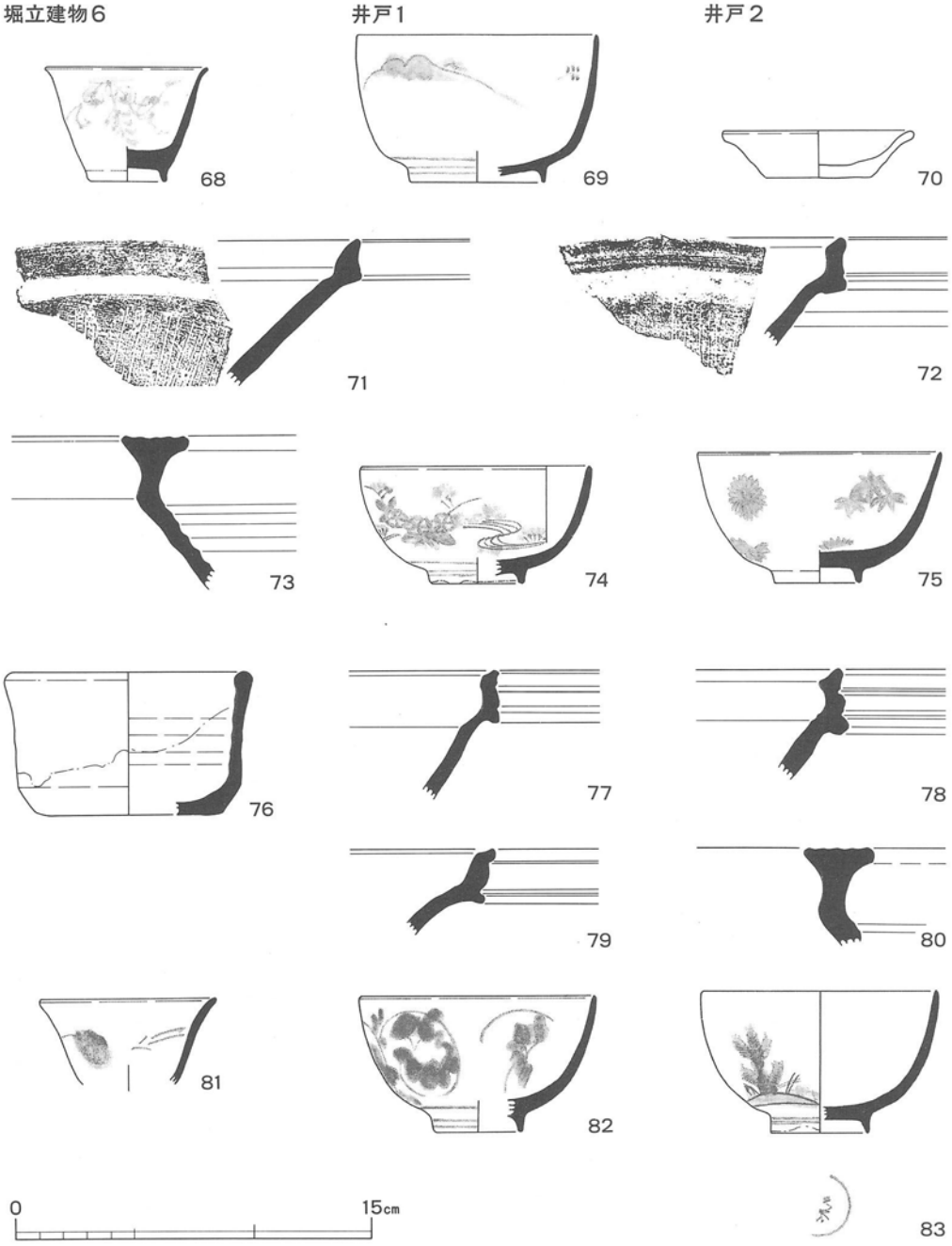
28・48・100の刷毛目碗は、28の内外面とも打刷毛目の碗と、48の外面櫛刷毛目・内面打刷毛目の碗、内外とも櫛刷毛目の碗に分かれる。いずれも高台端部は露胎で、露胎部分には砂が付着している。100の碗は内面底部に蛇ノ目釉ハギが認められる。28は口径が復元値で10.2cm・器高7.2cm、28は口径10.9cm・器高5.3cmと小振りであるのに対し、48は口径10.2cm・器高7.2cmと比較的大型の碗である。

産地不明（27）

27は産地不明の製品である。高台端部を除く全面に黒色の釉が施される。外面体部下半には回転ヘラケズリ整形の痕跡が認められる。口径8.3cm・器高6.1cmを測る。

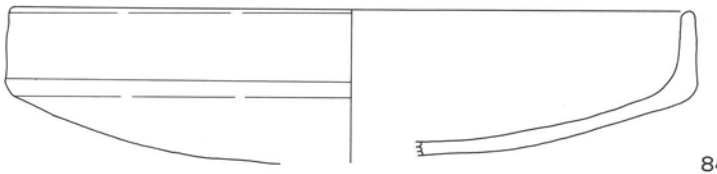
磁　器

磁器は、白磁・染付・青磁染付がある。いずれも肥前ないしは肥前系の製品と考えられる。

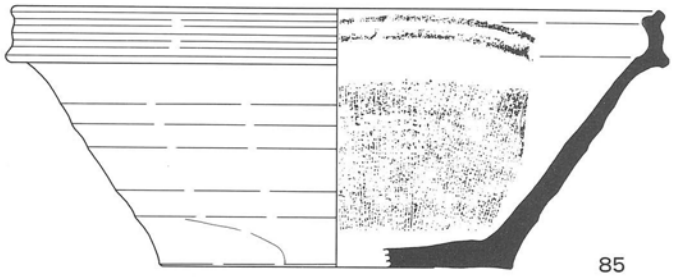


第122図　近世Ⅱ期遺構出土土器（1）

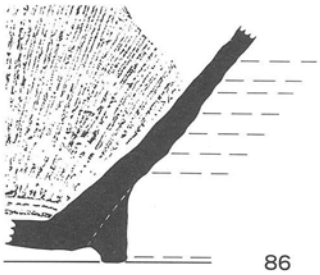
溝1



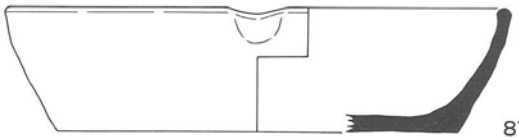
84



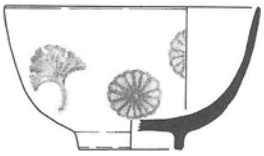
85



86



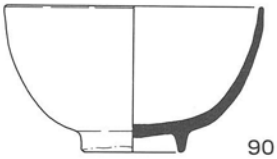
87



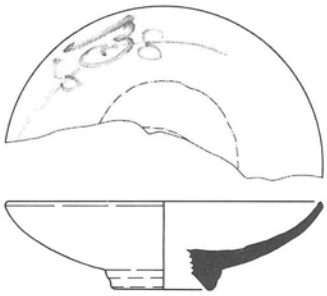
88

溝2

89



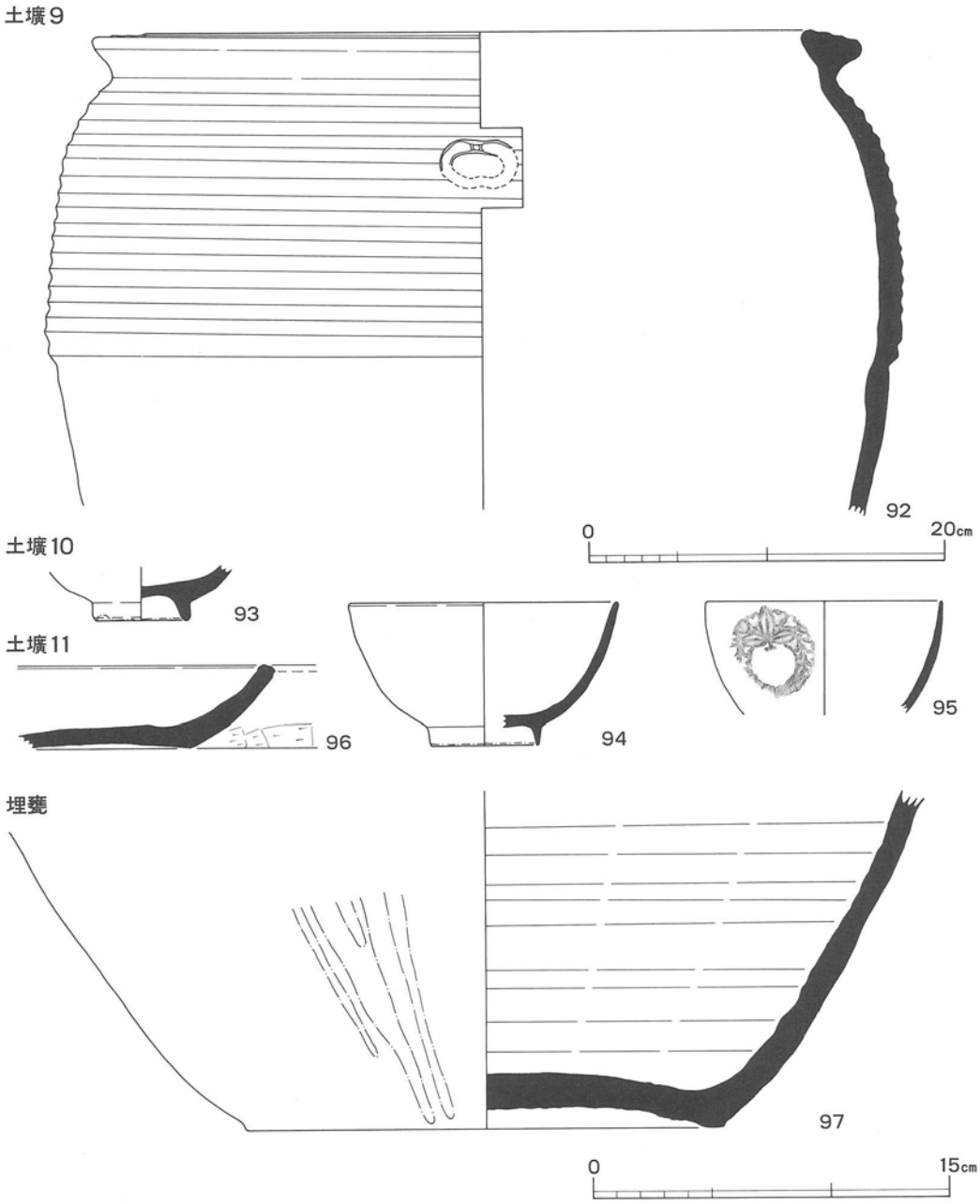
90



91

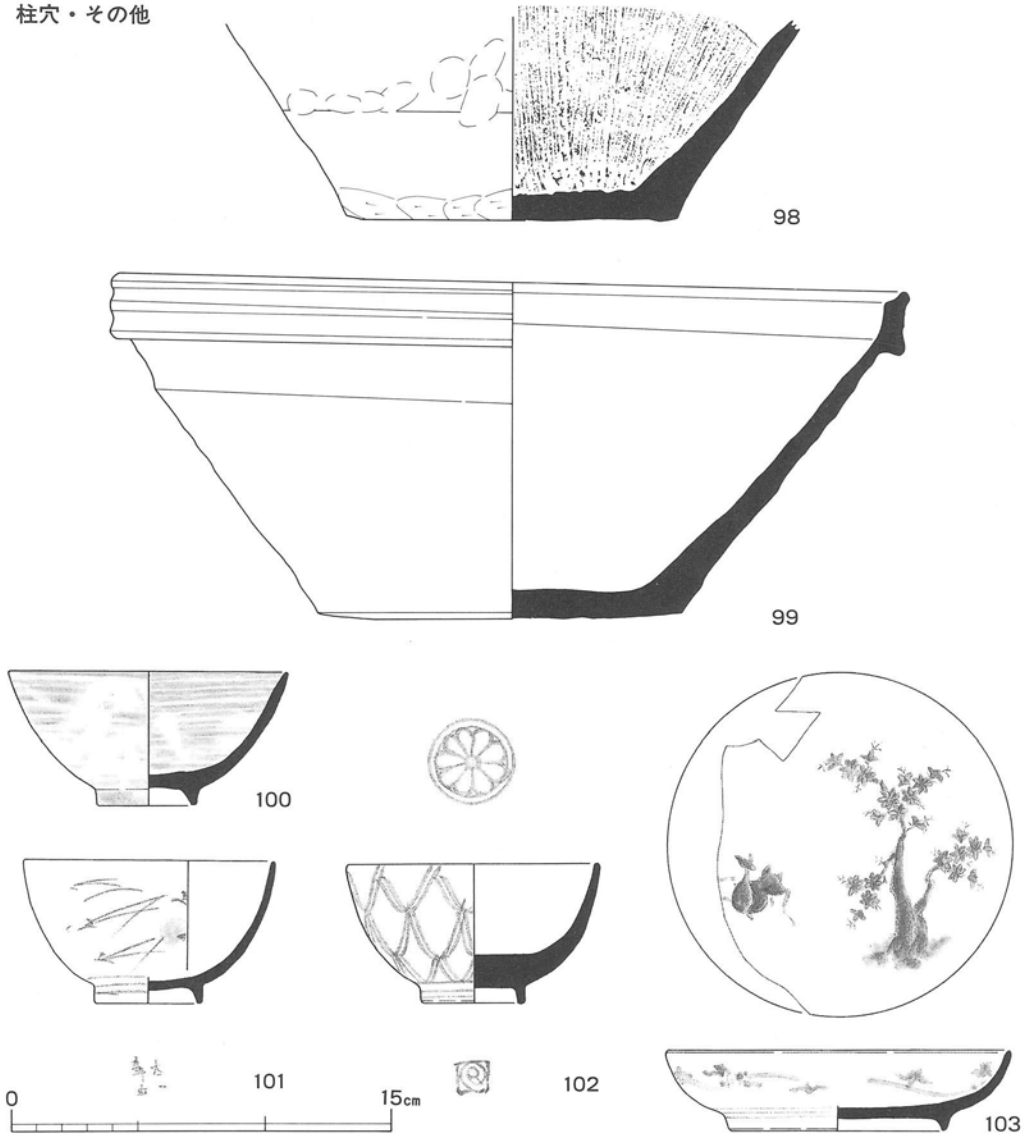
0 15cm

第123図　近世Ⅱ期遺構出土土器（2）



第124図　近世Ⅱ期遺構出土土器（3）

柱穴・その他



第125図　近世Ⅱ期遺構その他出土土器

器種は碗・小坏および向付・皿・蓋がある。出土量は碗が最も多い。

白磁（90・94）

丸碗と小坏が出土している。90・94は丸碗である。90は体部から口縁部が内彎して立ち上がるのに対し、94はやや開き気味に立ち上がる。いずれも高台端部は露胎である。90は完形で口径10.2cm・器高5.8cmを測る。94は復元値で口径11.2cm・器高6.0cmと90に比べ大型である。

40は端反形の小坏である。高台端部は露胎で粗砂が熔着している。ほぼ完形で、口径6.4cm・器高3.7cmを測る。

染 付

染付は碗・小坏・猪口・皿がある。

椀

丸碗は技術的特徴として高台部端部が露胎である点で共通しているが、器形的にはⅠ～Ⅲの3つに大別できる。

Ⅰ類：高台部から体部への移行部が張出し気味で、口縁部が直線的に開くもの。37・55・62・75・82・88・102が該当する。

Ⅱ類：体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がるもの。30～34・83・95・101が該当する。

Ⅲ類：体部下位が大きく張出したもの。64・74が該当する。

Ⅰ類の碗は、口径9.8cm前後・器高5.5cm前後の37・75・82・88・102の一群と、口径10.5cm前後・器高6 cm前後の55・62の2群に細別できる。

前者の一群には、外面体部に染付を施す37・82・102と、いわゆる「コンニャク印判」による染付が施される75・88がある。37は外面に草花文、高台部内には「大明年製」が、82は外面に花唐草文が施されるほか、102は外面が二重網目文・高台内一重枠渦「福」文、内面底部中央には菊花文が施される。75は笹・菊花文、88は銀杏・菊花が外面にそれぞれ印文される。後者の一群は55が橋・梅・竹文、62が外面に草花文がそれぞれ染付が施される。62の高台部内には銘が描かれているが、詳細は不明である。

Ⅱ類は、口径10.0cm前後・器高5.6cm前後の法量をもつ。外面体部に染付を施す33・34・83・101と、「コンニャク印判」による染付が施される30～32・95がある。33は外面に草花・蝶文、高台部内には「大明年製」が描かれるほか、34は草花文・高台部内に銘、83は若杉文・高台部内に銘、101は松葉文・高台内に「太明年製」の銘がそれぞれ施される。後者は30・95が下がり藤文、31が銀杏・菊花文、32が銀杏文・高台内「大明年製」の銘がそれぞれ施されている。

Ⅲ類は口径10cm前後・器高5 cm前後の法量をもち、64は松・竹・梅文、74が草花・流水文を施す。

小坏・向付け・猪口

丸形の29・53・54・60と、端反り形の19・41・50～52・68・81がある。いずれも高台部をもつ構造で、端部は露胎である。

丸形の29は器高が小さく皿に近い器形である。外面には紅葉文の「コンニャク印判」を施す。口径6.7cm・器高3.0cmである。53は高台部脇の膨らみが少なく、直線的に口縁部がひらく。外面には雨降り文の染付を施す。口径は復元値で5.5cm・器高4 cmを測る。60は53と同様、高台部脇の脹らみが少なく、外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。外面には網・波文の染付が施さ

れる。54は高台部の作りが小さく、直線的に開く口縁部をもつ。口径は、復元値で7.7cm・器高5.3cmを測る。いわゆる猪口に該当する。

端反り形の19は口縁端部が屈曲して外方向に開く。外面には染付を施し、口径は、復元値で7.0cmを測る。41は口縁端部が短く外反する。外面には草花文の染付を施す。口径は、復元値で8.6cm・器高5.6cmと大型で、器種は向付けと考えられる。50～52は厚手の小坏である。口縁端部の露胎部分には粗砂が熔着している。外面には笹文の染付が施される。口径6.5cm前後・器高4 cm前後を測る。68・81は50～52の一群に比べて薄手の小坏である。68は藤花文、81は外面に松葉文の染付が施される。口径は7cm前後、器高は5cm前後を測る。18は遺存状況が悪く、丸形か端反り形かは不明である。外面には染付を施すが、意匠は不明である。

皿（43・91・103）

43・103は断面三角形の高台部をもち口縁部が内彎して立ち上がる皿である。高台部端部は露胎である。内面には紅葉樹・鹿文の染付を施し、外面には唐草文を配置する。高台部内にはハリ支えの目跡が残る。口径は復元値で13.6cm・器高3.0cmを測る。

91は堅固な高台部をもつ皿である。内面底部周縁にはいわゆる「蛇ノ目状釉ハギ」が施され外面は体部下位から高台部にかけて露胎である。内面には意匠不明の染付が施されている。口径は復元値で12.3cm・器高3.5cmを測る。

仏飯具（42）

42は端反り形の仏飯具である。高台部は幅広の面をもつ蛇ノ目状高台である。外面には笹文ないしは蕉葉文の染付を施す。口径は復元値で7.6cm・器高5.7cmを測る。

青磁染付（36・61）

36は外面に青磁釉を施す椀蓋である。内面には花菱文の染付を施す。口径は復元値で10.1cmを測る。61は外面に青磁釉を施す碗である。内面には花菱文の染付を施す。口径は、復元値で10.0cmを測る。

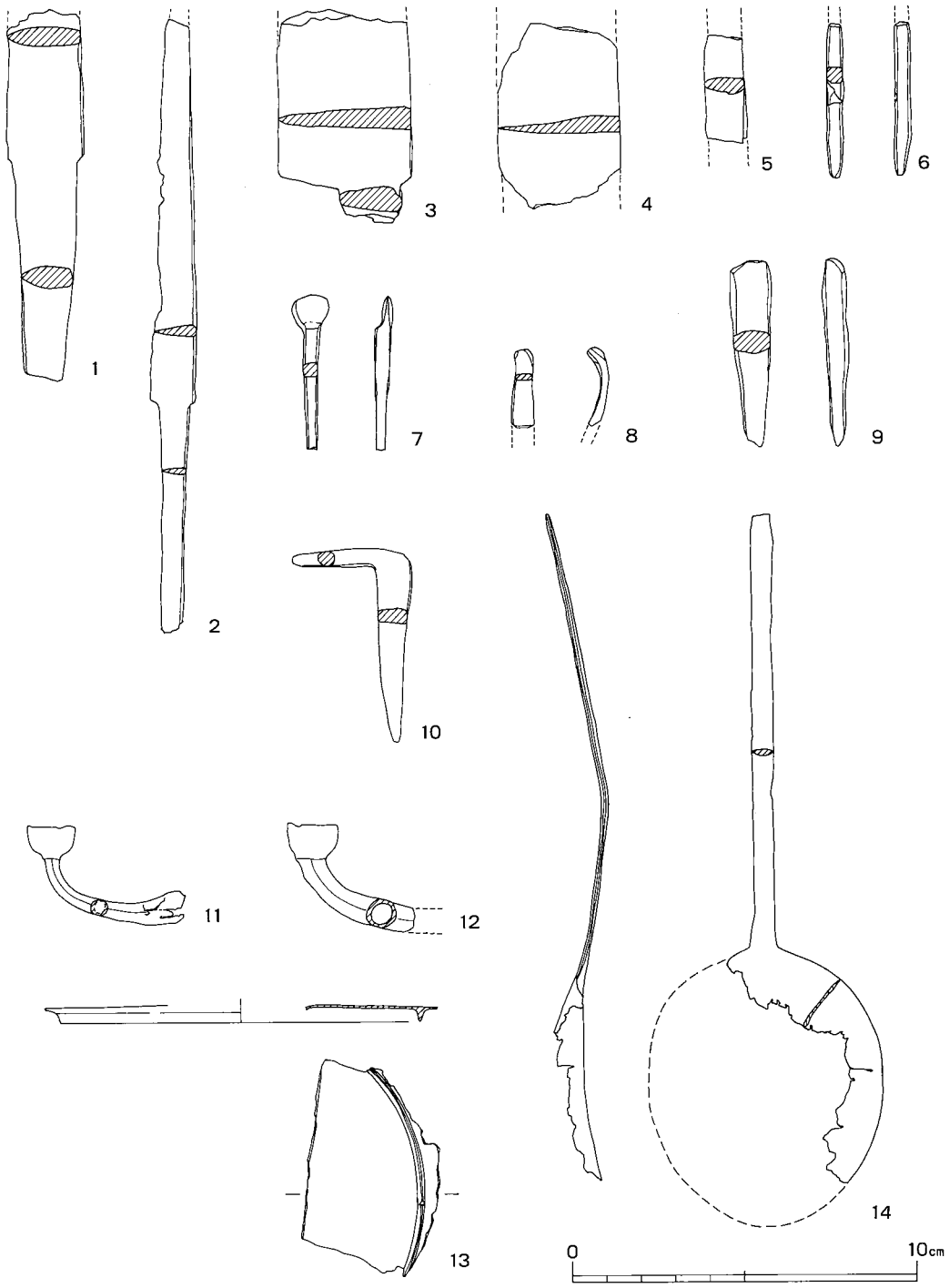
瓦（38・39・65）

瓦は軒丸瓦と軒平瓦が出土している。

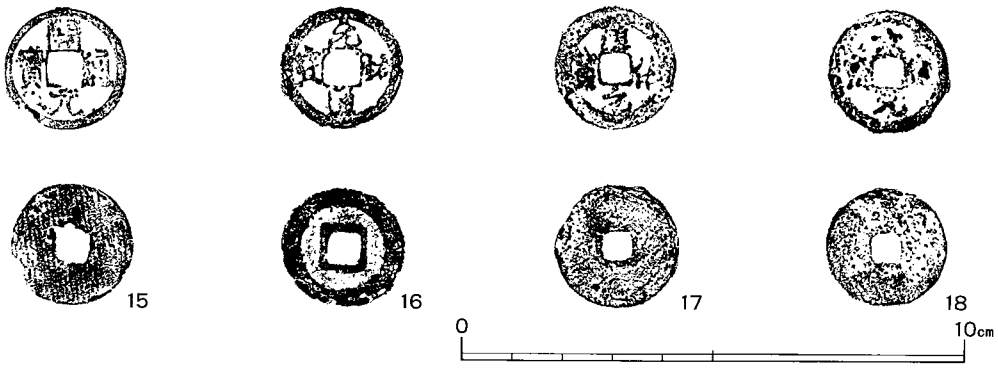
39は左巴の軒丸瓦である。瓦当径は推定で13.8cmを測る。38・65は幅広の脇部をもつ軒平瓦である。瓦当文様は不明であるが、同文と推察される。

3．金属器

金属器は鉄製品と銅製品がある。鉄製品は刀子・包丁・釘・鏨等（1～10）がある。銅製品は煙管・蓋・匙・銅銭（11～18）が出土している。遺構外から出土した金属器は6・8・9・10の釘と13の銅製の蓋がある。いずれも包含層より出土した。時期的には1を除き、すべて近世の所産である。



第126図　金属製品



第127図　銅銭

1は、刀子である。背部と刃部の両方に関をもつ両関造りの刀子である。茎部の断面形は多少歪な三角形を呈する。茎部長6.4cm、身部幅2.2cm・背部の厚みは0.4mmを測る。2は1と同様両関造りの刀子である。1に比べ細身の造りである。茎・身部ともに断面形は2等辺三角形を呈する。身部幅1.2cm・背部の厚みは0.3cmを測る。3は包丁の破片である。茎部と身部の先端を欠損する。身部幅は4.0cmで、背部の厚さは、茎部付近で0.7cmを測り、先端に行くに従い薄くなる。4は刀子の身部片と思われるが、銹化が著しく断定はできない。身部幅1.3cmを測る。6・7は釘である。6は頭部が欠損し、頭部の状況は不明である。身部の断面形は一辺4mmの四角形を呈する。残存長は4.5cmを測る。7は頭巻きの釘である。頭部は潰れておらず、未使用である。身部の断面形は一辺4mmの四角形を呈する。8は釘と思われる。残存長2.3cmを測る。9は小型の鏨と考えられる。全長5.4cm・幅1.3cm・厚さ0.6cmを測る。10は釘の一種と考えられる。全長5.7cm・幅3.4cmを測り、厚さは0.4cm前後である。

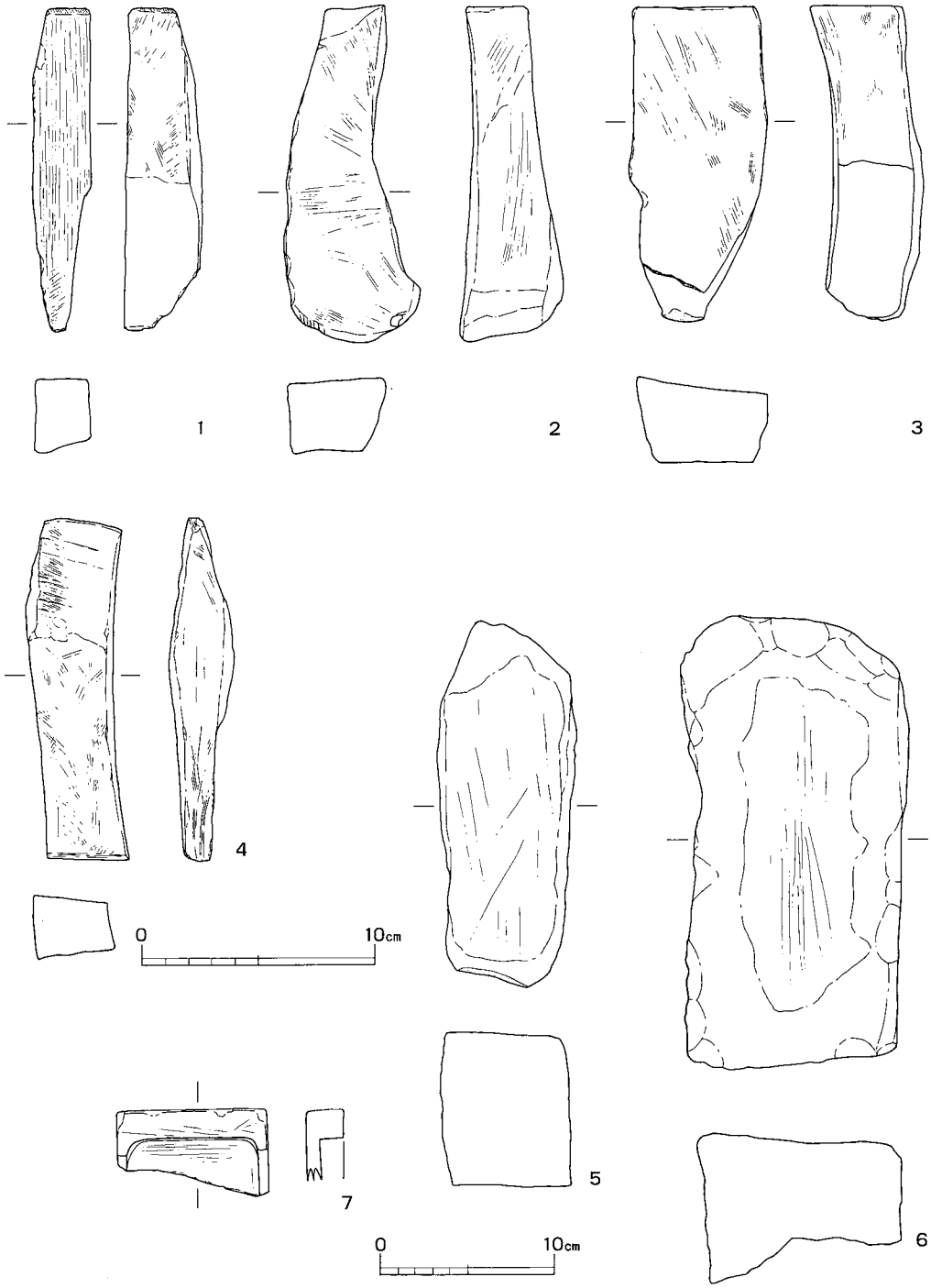
11・12は煙管の雁首である。11は12と比べ首部が細く、受皿も小さい。11は全長4.5cm、受皿径1.4cm、羅宇接続部径は1.0cmを測る。12は残存長3.7cm・受皿径1.6cmを測る。13は非常に薄い造りの蓋である。復元口径10.6cmを測る。14は匙である。把手部の断面形はレンズ状を呈し、厚さは0.2cmを測る。残存長さは19.5cmを測る。

銅銭

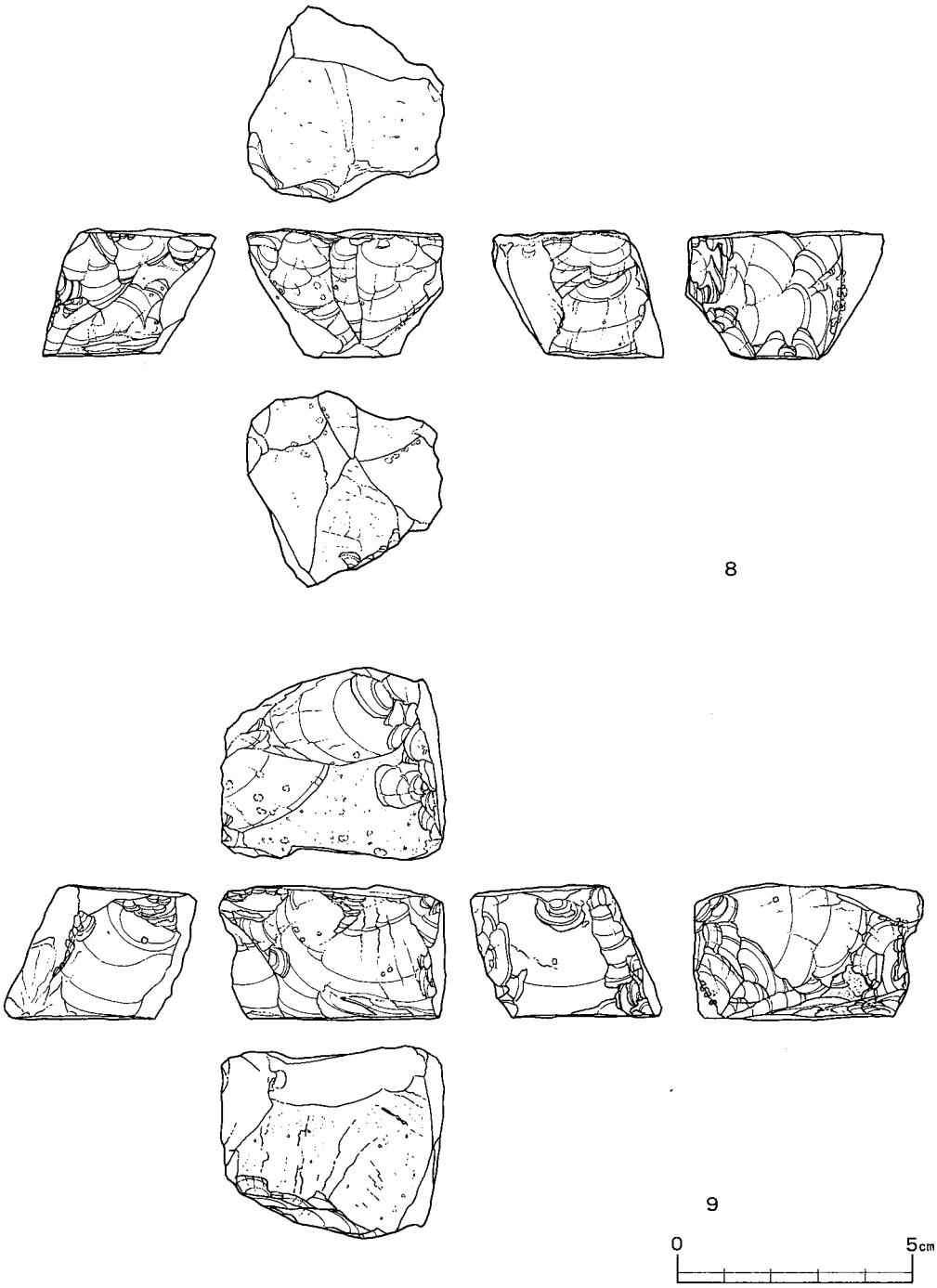
銅銭は埋桶5、桶内下層よりまとまって出土した。いずれも銭種が異なっている。15は「開元通寶」で外径2.3cmである。16は「元祐通寶」で外径2.4cmである。17は「淳化元寶」で外径2.5cmである。18は「景徳元寶」で外径2.4cmである。

4．石製品

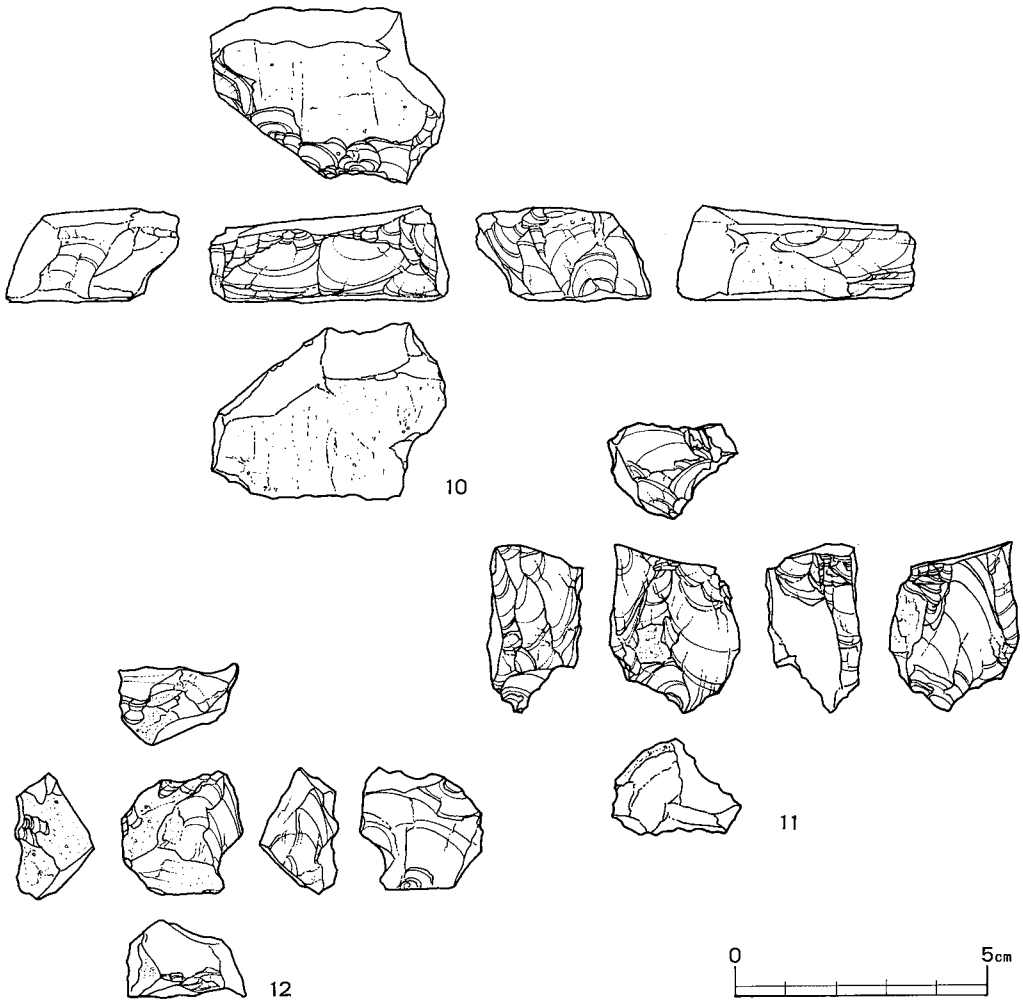
石製品は砥石（1～6）硯（7）・燧石（8～12）が出土している。すべて近世の所産であ



第128図　石製品（1）



第129図　石製品（2）

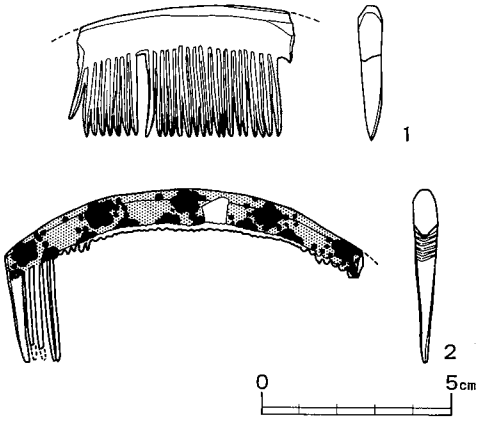


第130図　石製品（3）

る。出土状況が特異なものとしては、8～10の燧石がある。これらは建物として復元できなかった柱穴115内より一括で出土した。遺構外から出土したものは、11の燧石があり、包含層より出土している。

1は凝灰岩質泥岩系の砥石である。一端（下）を欠損している。この折損面を除くすべての面が砥面として使用されている。最大長19.0cm・最大幅3.3cm・最大厚2.4cmである。2は泥岩系の砥石である。上端面と下面を除く各面を砥面として使用している。最大長19.5cm・最大幅5.9cm・最大厚4.5cmである。3は凝灰岩質泥岩系の砥石である。一端（下）に自然面を残している。この下端面を除く各面を砥面として使用されている。一端面（左）には太い条痕が1条

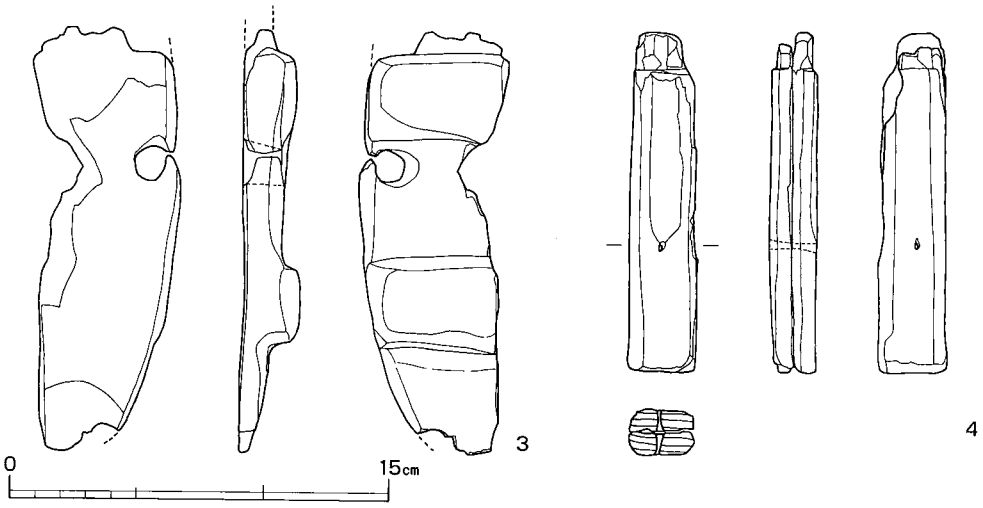
認められる。この条線の断面が半円形をしているところから、棒状の工具を研いだものと判断される。最大長13.6cm・最大幅5.8cm・最大厚4.1cmである。4は泥岩系の砥石である。2の砥石と接合し、もとは同一の砥石で、破損した後、別使用したものである。この破損面を除いた各面を砥面として使用している。最大長19.8cm・最大幅3.8cm・最大厚2.8cmである。5は泥質砂岩系の大型の砥石である。下端に自然面を残し、砥面は一面のみ使用している。最大長21.1cm・最大幅8.0cm・最大厚10.5cmである。6は凝灰岩質砂岩系の大型の砥石である。右端面には一次加工痕が残り、上端面と左端面は切断されたのち2次加工を施している。砥面は一面のみで、砥面は火を受け部分的に剥離している。最大長26.6cm・最大幅12.0・最大厚8.7cmである。



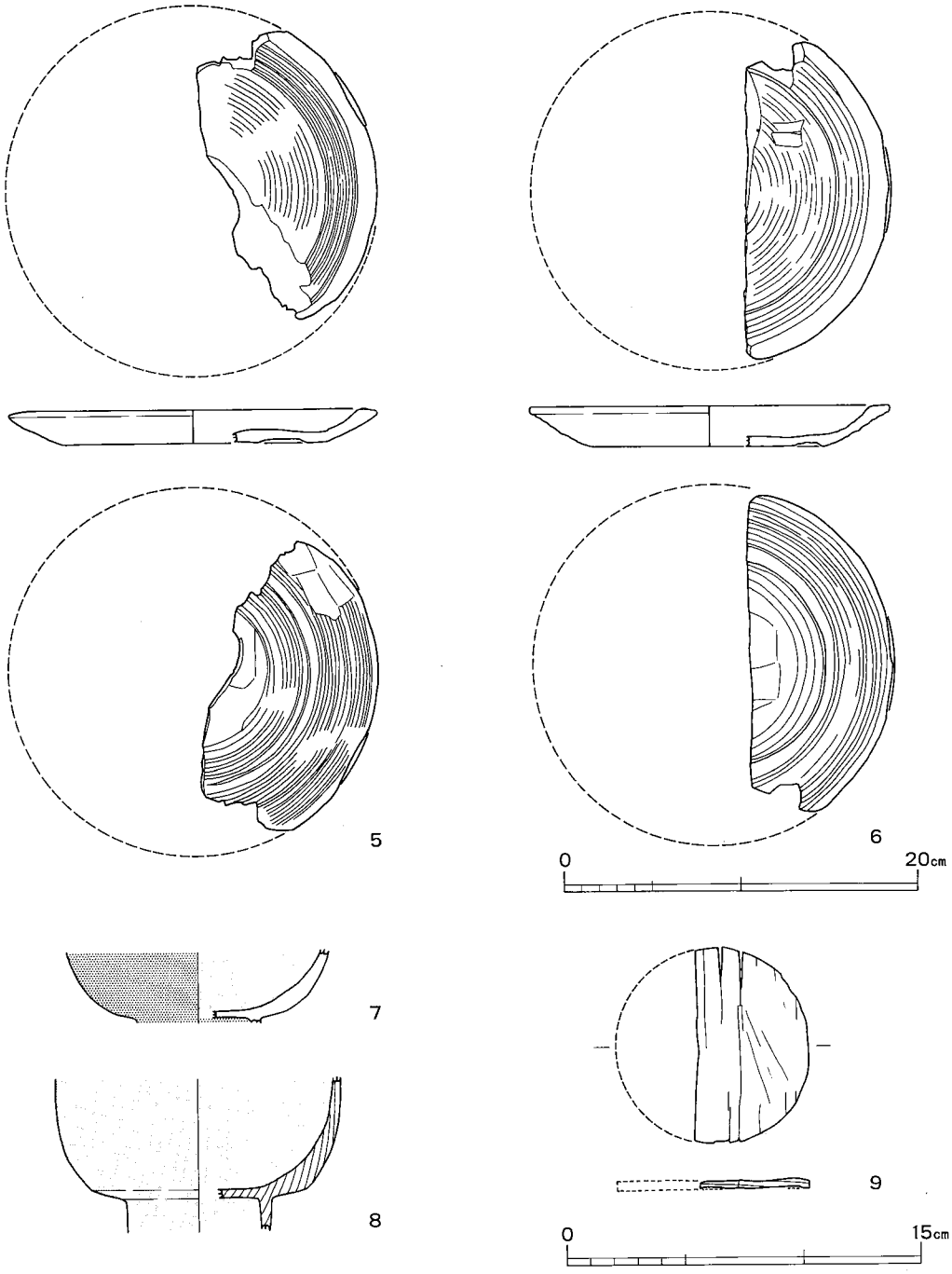
第131図　木製品（1）

7は黒色粘板岩系の硯である。幅6cmである

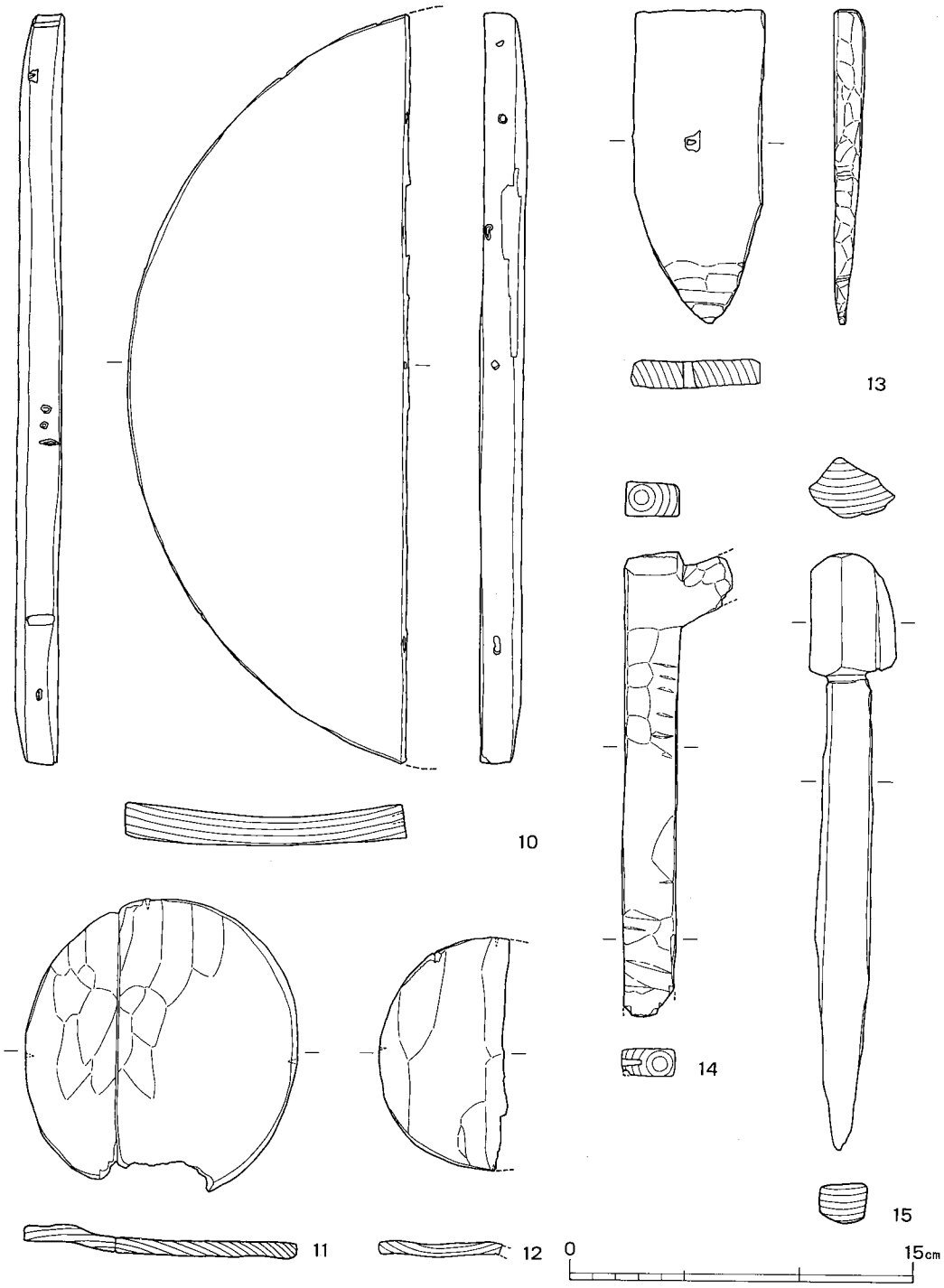
8～12はチャート製の燧石である。原材のチャートを数方向に剥離し、稜線部分を燧石に使用している。各稜線には著しい潰れが認められる。各燧石の大きさは、8が最大長2.8cm、最大幅2.6cm・最大厚1.8cm、9が最大長3.3cm・最大幅2.7cm・最大厚1.9cm、10が最大長3.1cm、最大幅2.2cm・最大厚1.2cm、11が最大長2.3cm・最大幅1.6cm・最大厚2.2cm・12が最大長1.6cm・最大幅1.6cm・最大厚1.0cmである。



第132図　木製品（2）



第133図　木製品（3）



第134図　木製品（4）

5．木製品

木製品は櫛・下駄・柄・盤・碗・曲物（底板）が出土している。この内、櫛と碗は漆塗りの製品である。これら以外にその用途が不明な木器（13～15）がある。以下個々の概要を述べるにあたり、樹種同定を行っていない点をお断りしておく。

1・2は刻歯式横櫛である。1は5本／cmの歯をもち、棟は弧を描いている。2は黒漆塗りの櫛で歯の付け根部と棟部の間には朱漆で梅花文が描かれている。歯は4本／cmで刻まれている。1・2とも遺存状況は悪く、大きさは1が最大高3.5cmを測る。2は残存幅9.5cm・最大高4.6cmである。

3は一木造りの下駄である。台部の半分が折損しているため全容は明らかではない。台部は先端が狭まっている。前後の鼻緒を通す「眼」の有無は確定できない。残存長16.6cm・最大厚2.2cmである。

4は柄である。2枚の柄板で茎部を挟む構造である。柄のほぼ中央には目釘孔が穿たれている。全長13.4cm・幅2.6cmを測る。

5・6は盤である。外面底部の周縁部は凹み疑高台風の作りである。内外面ともロクロ挽きの条痕跡が明瞭に残る。5は復元口径30.0cm・器高1.99cm、6が復元口径20.8cm・器高1.9cmである。

7・8は漆塗り椀である。7は外面黒漆・内面朱漆塗りの椀である。8は内外面とも朱漆塗りの椀である。両者とも高台部と口縁部を欠き遺存状況は悪い。残存する高さは、7が3.0cm、8が5.4cmである。

9・11・12は曲物の蓋ないしは底板である。木取りは板目取りである。9は縁が真っ直ぐに加工され、縁辺に釘孔が認められない点から、曲物の蓋と推察される。径8.3cm・厚さ0.4cmを測る。11・12は縁辺に底板を固定する釘孔が確認できる点から底板と考えられる。11は縁を真っ直ぐに加工するのに対し、12は斜めに加工している。両底板ともに幅広の加工痕が顕著に認められる。11は径12.6cm・厚さ0.8cm、12は径10.2cm・厚さ0.6cmをそれぞれ測る。

10は桶の組み合わせ式底板の一部である。縁は斜めに加工し、縁辺および接合部には釘孔が認められる。長さ32.8cm・厚さ1.5cmである。木取りは板目取りである。

13は木札状木製品である。先端を加工し尖らせ、中央には径3mmの孔が穿たれる。長さ13.6cm・幅5.7cm・厚さ1.3cmである。木取りは柾目取りである。

14は用途不明木製品である。上端は二股に分かれている。残存長20.4cm・幅4.7cm・厚さ1.9cmを測る。

15は栓状木製品である。頭部と身部の堺には刻み痕が認められ、身部の先端は尖っている。全長26.1cm・身部の厚さ2.6cmを測る。

第５章　自然科学的分析

第１節　国領遺跡の考古地磁気学的推定年代

富山大学理学部地球科学教室　　広岡公夫・岡田　宗

１．はじめに

登山やハイキング、オリエンテーリングでは、なくてはならない〝磁石〟の針、磁気コンパスは北を示す。コンパスの磁針が北を指すのは、地球自体が一つのおおきな磁石になっていて、この地球磁石と磁気コンパスの針の間に磁力が働き、引き合うためである。しかし、この磁針が指す北（磁北）は、地理学上の北、即ち、真北から少しずれている。、地球磁石の磁極が地球の北極と一致していないためである。真北と磁北のずれの角度を偏角という。地球磁石が造る磁場を地球磁場というが、この磁場の方向は地球上の場所によってすこしずつ異なっている。赤道では水平で磁北を向いているが、北半球では緯度が高くなるにつれて、北のほうが下に傾き、北極では真下に向く。水平からのこの傾きの角度を伏角という。ある地点の地球磁場、即ち、地磁気の方向は偏角と伏角で表すことができる。

地磁気の偏角・伏角は少しずつではあるが年々変化しており、永年の間には結構大きな変化となる。過去2,000 年間をみると、平均して大体100 年間で7.5 °程の変化をする。無論、変化の大きい時代と殆ど変化のない時期があり、最近は動きの少ない時期に当たっている。この100 年間でわずか３°程度の変化しかなく、その変化も明治時代には比較的大きかったが、最近の30年間は殆ど変わっていない。このような数十年以上かかって少しずつ変わっていくものを地磁気永年変化という。

窯跡や炉跡を造っている土中には、磁鉄鉱や赤鉄鉱などの磁性鉱物が含まれていて、それらは磁石になる性質を有している。磁石の磁化は高温になるとだんだん弱くなり、ある温度を超えると消滅してまう。この温度をキューリー点という。しかし、逆に、これより高い温度から磁場中で冷却するとキューリー点の温度を通過した瞬間に再び磁石になる性質がよみがえる。この時、磁場が作用していると、その磁場の方向の磁化を持つようになり、常温まで温度が下がると磁石となっている。このような磁化を熱残留磁化と呼ぶ。窯跡や炉跡の焼土は地磁気のなかで冷えているので、冷却時に作用している地球磁場の方向と同じ向きの熱残留磁化を獲得することになる。この熱残留磁化は常温では非常に安定で、何万年たっても変化しない。即ち焼土は焼成時の地磁気の方向を記憶しているのである。

地磁気観測が始まる以前の時代の地磁気の永年変化も、年代のよく分かった遺跡に残されている焼土の熱残留磁化を測定することによって知ることができる。このような考古学が扱う時

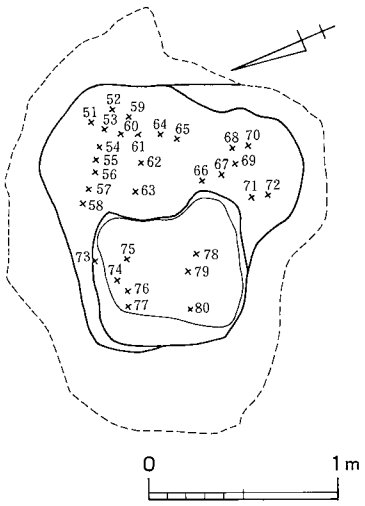
代の地磁気の変動の様子を調べる研究を考古地磁気学という。先に述べたように、日本では西南日本各地の遺跡の研究によって、過去2,000年間の永年変化が明らかにされている(Hirooka 1971; 広岡, 1977)。

時代がよく分からない遺跡でも、焼土の熱残留磁化方向を測定し、それを地磁気永年変化の標準曲線と比較することによって年代を推定することができる。これを考古地磁気年代推定方という。

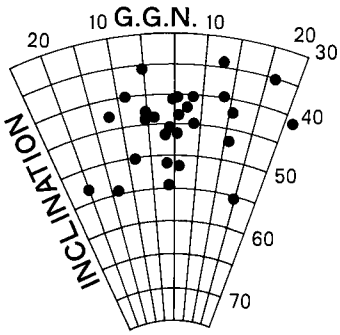
土や泥などのような堆積物の中にも磁性鉱物が含まれているが、岩石が風化や浸食によって細かい粒子になって運ばれ、堆積したものである。これらの粒子は堆積する前の母岩中にあった時に、すでに残留磁化を獲得しており磁石になっている。石英や長石など他の粒子とともに、磁性鉱物が水ではこばれて堆積するときには、細かい磁石になったこれらの粒は、その時に作用している地磁気の方向に磁化の向きをそろえてたまるものが多くなる。そのために、堆積物は全体として地磁気の方向の磁化をもつようになる。これを堆積残留磁化という。向きがそろっていない磁性粒子も沢山あるので、熱残留磁化に比べると磁化は強度が小さく、方向のばらつきも大きい。水のなかで泥が混ぜ返され沈澱した水田の土も堆積残留磁化を獲得している可能性が高い。畑のなかでも雨が降って水がしみこみ、土のなかの粒子が水に囲まれて回転できるような状態ができれば、その時に磁性粒子が地磁気の方向に向きを換える場合がおこることも考えられる。したがって、畑の土も耕して作物を栽培していた当時の地磁気の方向を記録しているのかも知れない。

2. 地磁気永年変化

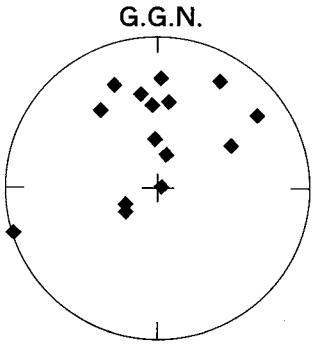
日本における偏角の実測は、セーリス司令官の率いるイギリス東インド会社の商戦艦隊が、西暦1613年に九州の平戸で羅針盤と天測によって行った観測が最初である。このときの観測結果は東偏2度50分であった(Imamiti, 1956)。1643年にはオランダ人ゲリツオーネン・フリースが日本の太平洋岸を小笠原諸島から関東・東北および北海道東南沖にかけて偏角観測を行っている。この観測では、房総沖で7.0度東偏の偏角となっており、平戸の結果とは4度以上も異なっている。この違いは30年間の間に起きた地磁気永年変化とするには少し大きすぎる。多分、当時(17世紀前半)は偏角が西と東で大きく違っていたためであったと思われる。その後、いくつかの観測記録が関東地域に残されており、東偏の偏角は徐々に小さくなり、伊能忠敬が1802



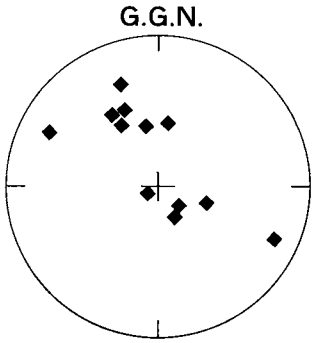
第135図　炉1試料採集位置



第136図　蓮町Ⅲ地区の磁化方向
G.G.N.:Geographic North　真北
INCLINATION：伏角



第137図　畑覆土の磁化方向
G.G.N.:Geographic North　真北



第138図　畑面の磁化方向
G.G.N.:Geographic North　真北

年に江戸の日本橋で観測を行ったときには、殆ど磁北は真北に一致していた（偏角０度19分東）。このように、17世紀中頃以降の関東地域の偏角の永年変化は地磁気の実測記録が残っているので比較的よく分かっている。これに対して伏角は、明治18年に東京で近代的な地磁気の継続観測が開始される以前の時代については全く記録がない。

３．試料の採取と測定

考古地磁気測定のための試料は窯のなかで焼土がどのような磁化方向を以ているかを調べるものであるから、その試料が窯体内でどのような方位をとっていたかがわかる定方位サンプルでなければならない。

定方位サンプルの採集方法には次の二通りがある。一つは石膏を用いて焼土を固めて採る方法であり、もう一つはプラスティックのケース（プラスティック・キューブという）を打ち込んで焼土試料を採集する方法である。

石膏で固める場合は次のような手順で行う。先ず、遺跡現場で試料とする焼土の部分を残して、そのまわりに深さ数cmの溝をつくり、残した部分に水を多めにしてうすくといた石膏をかけ固定する。次に、石膏をかけた部分の上面に今度はこくといた石膏をのせ、それにアルミ板を押しつけて平面をつくる。石膏が固定してからアルミ板をはがし、石膏平面の最大傾斜線の方位とその水平面からの傾斜角を、考古地磁気試料採集用に改造した特製クリノメーターで測定する。石膏平面に方位を示すマークをマジック・インキで記したのち試料として石膏で固めた焼土を遺構から切り離す。試料の裏側にも石膏をつけて補強し、研究室に持ち帰る。

プラスティック・キューブによるサンプリングでは、最初に焼土の表面を平な平面にして、その面の方位を石膏の場合と同じ方法で測る。そして、専門のピストンを用いて22mm×22mm×22mmの立方体のプラスティックのキューブを焼土に打ち込み、試料として焼土を採集する。

こうして得られた試料のうち、石膏のものは、マークをつ

けた平面を基準にしてダイヤモンド・カッターを用いて一辺34㎜の立方体に整形し、くずれないようにカッターで切った面にも石膏をつけて補強する。キューブ・サンプルは、焼土が乾燥して縮まないように接着剤で裏ぶたをつけて密封する。

熱残留磁化方向の測定は、石膏で固めた試料は無定位磁力計を、キューブのサンプルはスピナー磁力計を用いて行う。

試料の方位測定にはクリノメーターの磁針を用いているので、遺跡現場の磁北と真北のずれ、即ち、現在の偏角の分だけ測定方位がずれていることになる。そのために、今回は遺跡のある現場でトランシットによる太陽の方位測定を行い、現在の偏角を求めた。太陽の方位は、その地点の緯度、経度と時刻が与えられると計算によって求めることができる。ここで得られた方位は真北を基準にした地理学的な方位である。一方、遺跡現場でトランシットの磁針の北を基準にして測った太陽の方位は磁北からの角度を与える。したがって、計算値と観測値の差から遺跡現場の現在の偏角を求めることができる。こうして西偏7.47°の値を得た。この値を用いて試料の方位を真北を基準にした方位に補正している。今回の国領遺では蓮町Ⅲ地区で見つかった炉跡（炉１）から30個の石膏試料（ＥＨ51～80)、炉跡の近くで発見された畑跡（畝状遺構）の覆土から15個のキューブ試料（ＥＨ81～95)、畑跡の畝と畝の間の面から、13個キューブ試料（ＥＨ101～113）が採集され、総計58個の考古地磁気測定試料が得られた。

畑覆土と畑面の土には小石が沢山含まれており、打ち込んだキューブの端に当たってキューブがかたむいたりしたものも多かったので、磁化測定の結果がばらつくであろうことが予想された。

４．測定結果

炉1、畑覆土、畑面の磁化測定結果は、第８、９、10表および第136、137、138図に示されている。熱残留磁化を獲得していると考えられる炉１の試料は、堆積残留磁化の畑覆土や畑面のキューブ試料にくらべると磁化方向のまとまりが良く、磁化強度も大きい。しかし、おなじ炉跡のなかでも良く焼けた部分とそうでない部分では磁化強度に大きな違いが見られる。特にＥＨ－79の試料は他のものと非常に離れた磁化方向を示しており、充分に温度が上がらなかったか、磁化後になんらかの理由で焼土が動いたかなどの原因でこのようになったと考えられ、正確な過去の地磁気の方向を示しているとは思われない。したがって、ＥＨ－79の測定値は炉1 の平均磁化方向の統計計算の際には除外した。表中に※印がついているのがこの平均磁化方向の統計計算から除外された試料であることを示している。畑覆土および畑面の測定結果は、第２、３図のように磁化方向のばらつきが大きく、年代を推定するには至らなかった。特に畑面の磁化方向には、ばらばらではなく特定の方向が見られるので、鋤で耕作した際に土がかたまりで動いて一部が裏返しになった部分を試料として採集したのではないかと思わせる結果を示してい

表８．蓮町Ⅲ地区炉１の磁化測定結果

試料番号	偏角(°E)	伏角(°)	磁化強度(×10⁻⁶emu/g)
EH 51	14.8	55.4	1.28
52	−20.3	52.9	1.21
53	−1.6	51.0	1.12
54	11.1	46.9	0.70
55	0.8	51.4	2.13
56	3.9	44.6	5.79
57	−13.6	54.4	0.82
58	−8.7	40.0	0.47
59	10.7	42.3	0.82
60	−12.1	42.8	1.70
61	3.6	44.7	11.7
62	3.3	40.5	34.7
63	2.9	34.3	12.9
64	−5.3	35.7	15.5
65	0.52	40.5	14.8
66	2.3	42.1	2.97
67	−0.5	40.8	1.75
68	−3.9	43.6	10.1
69	−5.4	42.7	10.2
70	−5.2	43.9	26.1
71	0.5	46.3	18.4
72	0.8	43.3	16.1
73	−1.4	54.4	0.21
74	−1.9	46.6	0.29
75	16.2	35.4	0.17
76	−8.5	50.0	0.51
77	−1.1	45.4	0.97
78	21.5	41.3	0.19
* 79	188.9	−20.0	0.11
80	8.8	40.0	0.71

表９．畑覆土の磁化測定結果

試料番号	偏角(°E)	伏角(°)	磁化強度(×10⁻⁶emu/g)
EH 81	7.2	41.9	8.71
82	−36.4	36.5	2.26
83	53.4	20.3	2.77
84	252.3	1.6	10.9
85	−22.6	26.2	1.83
86	30.3	19.7	2.31
87	232.3	68.6	2.54
88	59.4	42.6	2.34
89	−3.2	45.0	1.82
90	−3.4	63.9	1.91
91	240.3	70.9	3.41
92	1.8	27.7	3.29
93	−9.3	37.1	1.59
94	14.7	71.9	1.30
95	69.8	87.8	1.16

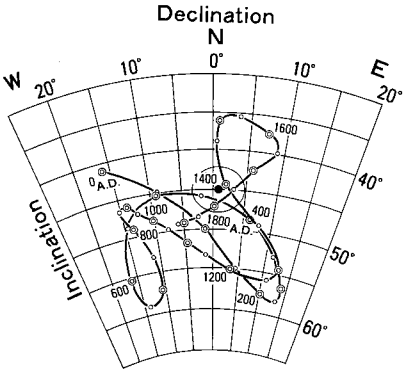
表10．畑面の磁化測定結果

試料番号	偏角(°E)	伏角(°)	磁化強度(×10⁻⁶emu/g)
EH101	149.9	72.3	34.5
102	−20.5	29.2	1.07
103	−23.7	44.1	1.27
104	133.0	74.7	15.9
105	109.6	62.7	2.59
106	114.1	−16.8	4.14
107	−32.1	50.2	1.52
108	−32.8	43.9	1.29
109	228.5	82.8	1.13
110	−63.2	22.0	1.10
111	7.6	55.8	1.28
112	−30.9	50.3	1.29
113	−11.8	57.8	1.61

表11．国領遺跡の考古地磁気測定結果

遺構名	試料個数(個)	平均偏角(°E)	平均伏角(°)	平均磁化強度(emu/g)	α_{95}(°)	K
炉 2	29	0.85	44.93	6.87×10	2.84	89.6
畑覆土	15	−3.97	56.21	3.21×10	21.80	4.1
畑面	13	−14.89	67.45	5.29×10	25.31	3.6

る。表11はそれぞれの遺構の平均磁化方向とそのばらつきの大きさが表されている。平均偏角、平均伏角、フィシャーの統計法（Fisher, 1953）による95パーセントの信頼角（α_{95}）、精度パラメーター（K）がそれである。α_{95}は小さい程測定誤差の小さいことを意味しており、Kは大きい値を示す程その遺構の磁化方向のまとまりの良いことを表す。通常の良く焼かれた窯跡ではα_{95}は1～3°、Kは数百の値となる。今回の測定結果の磁化方向のまとまりは炉跡では良いが、畑覆土や畑面では非常にばらつきの大きいことがα_{95}やKの値によってわかる。



国領遺跡蓮町Ⅲ地区炉1の考古地磁気測定結果と過去2000年の西南日本地磁気永年変化

第139図　地磁気永年変化曲線

5．考古地磁気推定年代

西南日本の過去2,000年間の地磁気永年変化曲線（広岡、1977）に今回の測定結果を記入したのが第139図である。曲線上の二重丸が100年毎の、一重丸がその間の50年毎の地磁気の方向をあらわしている。黒丸が今回の炉1の考古地磁気測定結果を示しており、それを囲む円はフィシャーの信頼角（α_{95}）の範囲を示す。

考古地磁気推定年代は黒丸に最も近い永年変化曲線の部分の年代によって与えられる。α_{95}の円内に含まれる永年変化曲線の長さが推定年代の年代幅を与える。

この第1図から得られる炉1の考古地磁気推定年代は、

A．D．1,400±20年　又は　A．D．1,770年±40年

となろう。考古地磁気学的には上記のこの二つの年代のどちらがより本当の年代に近いものであるかの判定はできないが、考古学的知見から考えると、後者の年代を採用したほうがより良いのではないかと思われる。

明治になって色々な近代的な観測が始まる以前の江戸時代は、現在と年代差は小さいが、観測記録が殆どないので、過去に起きた地球の諸現象から地球のたどってきた歴史を明らかにしようとする地球科学的な立場からみると、江戸時代のように近い過去の地球科学的現象を知ることは、より古い過去の姿を明らかにする上で非常に重要である。

引用文献

R. A. Fisher (1953) Disparsion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305
K. Hirooka (1971) Archaeomgnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38,167-207.
広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203
S. Imamiti (1956) Secular variation of the magnetic declination in Japan, Mem. Kakioka Observatory, vol. 7, 49-55.

第6章　ま　と　め

第1節　弥生時代の遺構と遺物

A．遺構

1．住居址および住居群の変遷

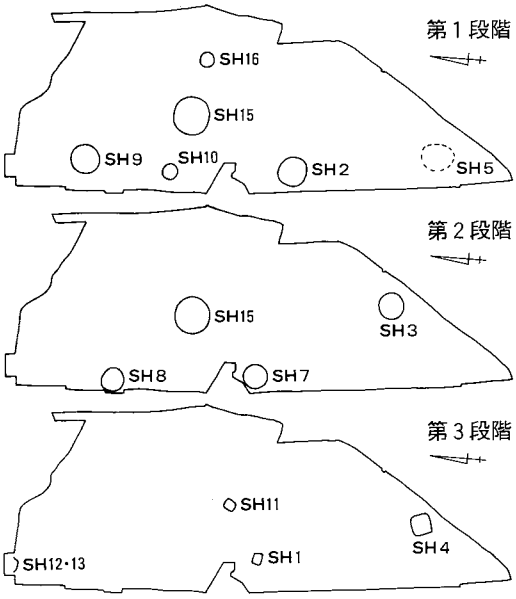
検出された住居址は円形住居11棟、方形住居5棟の16棟であるが、時期決定に重要な資料となる床面に密着した状態の土器が出土したのは竪穴住居2・3・7・10・11・12・13であり、これらの住居についての時期決定は比較的容易である。しかし竪穴住居4・8・9・15は床面上や埋土から出土した二次的な資料であり、時期決定資料として正確さに欠け、さらに残りの竪穴住居1・5・6・16・17は出土遺物が小片で、数少なく、遺物から帰属時期を決定することは困難である。このように検出された住居址の内、半数以上の住居の時期ついては正確さにかける可能性があることを前提に、個別の住居の時期決定をし、住居・住居群の変遷について概観して行く。なお第1段階は七日市Ⅴ期（畿内第Ⅴ様式前半）に、第2段階・第3段階は七日市Ⅵ期（畿内第Ⅴ様式後半～庄内並行期）に相当するものと考えている。

第1段階

弥生時代後期前半に属する段階で、この段階より遡る遺構・遺物は全く出土していないことから、本遺跡に集落が営まれ始めた段階と捉えられる。竪穴住居2・8・10・16・15－Aの5棟が該当するが、これ以外に竪穴住居5－Aが該当する可能性がある。全て平面形が円形のⅠ類の住居のみで構成され、規模的には床面積が100㎡を越す大型の住居1棟（15－A）、50～70㎡で中規模の住居2～3棟（2・8・5－A？）、30㎡以下で小型の住居2棟（10・16）で構成されている。小型の竪穴住居10は柱穴がなく、高床部を持つなど特殊な要素を持つ。中規模の住居址はすべて、後の中規模の住居址と比較すると床面積が広い。

また5棟の住居の内、竪穴住居2・8・10・15－A・16が北群を構成し、竪穴住居5－Aは南群に入る1棟である。北群は4棟以外にも、時期の確定ができない小型の竪穴住居16・17を含めても、群内は大型住居15－Aを中心に、大型住居の側に小型の住居、やや離れて中型規模の住居という配置構成になっている。南群では遺物が少ないため確定できないが、竪穴住居5－Aがこの段階に属する可能性が高く、中型規模の竪穴住居1棟だけが存在する配置となっている。

このように、この段階は集落が形成され始める段階にもかかわらず、南北2つの住居群によって集落が構成され、住居群は、大型の住居・中規模の住居・小型の住居で構成される。これは本遺跡の集落がその形成当初から、集落構造が整っていたことを物語るものであろう。



第140図　弥生時代遺構変遷図

第2段階

北群の竪穴住居7・8、南群の竪穴住居3がこの段階に属し、平面形が円形の住居のみが存在する。規模的には中規模の住居のみで構成されているが、前段階の住居と比較すると規模は縮小傾向にある。また竪穴住居7・8は前段階の竪穴住居2・9との位置関係から、竪穴住居2が竪穴住居7に、竪穴住居9が竪穴住居8に移築された可能性が高く、この段階は前段階の住居が移築・改築された段階と考えられる。仮りにこの理解が正しいとすると大幅に改築された竪穴住居5－B・15－Bがこの段階にも存在していた可能性が高い。とすれば南群に2棟、北群に3棟以上が存在しており、群構成を北群でみると、大型の住居を中心に小型の住居、中規模の住居という構成であり、前段階と変化は無い。この段階の集落は前段階の集落がそのまま引き継がれる段階と言えよう。

第3段階

竪穴住居1・4・11～13が属するが、竪穴住居12・13は切り合い関係にあり、同時に存在したのは4棟と思われる。5棟とも方形の住居址で、この段階に住居の平面形が円形から方形に変化する。規模的にも中規模1棟（4）、小型2棟（1・11）で、50㎡を越す住居は見られなくなる。また竪穴住居1・4・11では床面上で炭化材・炭化物が多く検出されたが、床面上に残る遺物類がほとんど無いことから、集落の廃棄に伴う住居の焼却が行われた可能性が高い。

群構成の点では南群に1棟、北群に3棟で前段階と群を構成する棟数に大差は無いものの、前段階までは大型住居を中心とした配置であったが、大型住居の廃絶したこの段階は、前段階の住居の周辺に小規模な住居が営まれるようになる。また竪穴住居1・11は、それぞれ竪穴住居7・16に隣接して築かれており、前段階の住居が移築された可能性が考えられる。南群は1棟のみであるが、竪穴住居4が前段階の竪穴住居3の南に隣接して営まれており、これも移築された可能性が高い。このように大型住居が廃絶したこの段階に住居配置が散在的になるが、大略的にはこの段階の集落構造・群構成もまた、前段階から引き継がれるものであろう。

3．まとめ

以上が遺構及び遺構群の変遷の概略であるが、集落は南北2群で構成される点で各段階を通じ変化は無い。ただ住居群を構成する各住居は第1段階から第2段階にかけて住居プランに変

化は無いものの、円形中規模住居に規模の縮小が起こるのに対し、大型住居はさらに大規模になる。大型住居を家長的存在を示す住居と位置づけるならば、この大規模化は家長的存在の成長を示すものと捉えられるであろう。このように第1段階から第2段階への変化は集団内部の変化を示すものであろう。第2段階から第3段階にかけては円形から方形へという住居構造上の大きな画期であるとともに、大型住居の消失という集団内部の大きな変質がある。住居形態上からはこの第2段階から第3段階に本遺跡の画期が求められ、その変化が起因して本遺跡が終焉を向かえるといったことも考えられる。

B．土器

住居址から出土した123個体を掲載したが、ここでは住居址の変遷を踏まえて、住居址の床面に遺存していた土器を中心に、それらを3段階に細分することを試みる。ただ各住居址の切り合い関係が見られるのは1例のみであるため、遺構の前後関係から、遺構単位の土器の並行関係を求めることは困難である。また遺構単位の土器も全器種が揃う資料がほとんどなく、各器種の共時性については形式的な編年観に頼らざるを得ない。

以下、各段階の概要について記すが、第1段階は七日市遺跡のⅤ期（畿内第Ⅴ様式前半）に相当し、第2・3段階は七日市Ⅵ期（畿内第Ⅴ様式後半～庄内並行期）に相当するものと考えている。

第1段階

竪穴住居2・9・12・15出土の遺物が該当する。器種には壺・甕・高杯・鉢・器台があり、基本的な器種は一応揃っている。壺には広口壺・長頸壺・短頸壺・無頸壺・台付き壺がある。出土点数が少なく、多くを述べ得ないが、無頸壺のように中期的な色彩を残すものと、そうしたものを払拭したものが存在するようである。甕は単純にくの字に外反した口縁を持つ甕Aも見られるが僅かであり、主流は口縁部を拡張して擬凹線文を施した甕B・Cとなる。内面の調整は頸部まで篦削りするものが多いが、体部下半篦削り・上半刷毛調整のものも1例存在する。高杯はA・Bが存在するが、高杯Aには（119）のように瀬戸内地方の影響と見られるものもある。鉢はA・Bがあるが、鉢Aが内外面を丁寧に篦磨きするのに対し、小形の鉢Bは刷毛調整によるものである。器台は筒部から受部と脚部が大きく外反するものであるが、口縁部の拡張は短いものである。器形的には丹後地方のものと類似するが、調整が異なる。

第2段階

竪穴住居3・7・11出土の土器が該当する。器種には壺・甕・高杯・鉢・器台・蓋があるが、壺類が少なく、鉢類がバラエティーに富む。壺には広口壺・長頸壺の他、二重口縁壺が新たに出現する。出土点数が少なく、全体像を把握することはできないが、3個体見られる長頸壺は口縁部が内彎した形状となっている。甕はA・Bが存在し、新たに甕Cが出現する。擬凹線文を施す甕Bは口縁部端部を上方へ拡張したものになる。また甕Cだけでなく、甕Bの中にも叩

き手法を取り入れたものが見られるようになる。高杯はＡ・Ｂが存在する。高杯Ａは杯部が直線的なＡ１と、杯部が内彎するＡ２があるが、ともに脚部は内面のえぐりが浅くなり、杯部と接合部で窄まって柱部が細くなる。鉢は台付き鉢が出現するほか、各器種が出揃いバラエティーに富んだものとなっている。その中には近江地方の影響がみられるものも存在している。器台は脚部が受部との接合部で窄まり、大きく外反したものとなる。口縁部は上方への拡張が大きくなるが、擬凹線文を施すものと、無文のものとが存在する。

第３段階

竪穴住居４出土の遺物が該当する他、竪穴住居の埋土から出土したものも含めたが、全体として出土量は減少する。器種でも甕・鉢のみとなる。甕Ａ・Ｂがあり、甕Ａは庄内式の影響が観取できる。甕Ｂは全容を知りえるものはないが、口縁部の拡張が小さくなって、体部は丸くなるようである。口縁部に擬凹線文を施すものと施さないものが存在する。甕はＢ・Ｃがあるが、鉢Ｂは底部の作りが粗雑になり、鉢Ｃは脚部が短くなる。

３．まとめ

以上が今回出土した土器の変遷であるが、各段階を通じて畿内地方や近江地方の影響が認められるものの、擬凹線文の使用、甕・壺等の内面篦削り等、基本的には丹後・丹波地方との関係が強く窺える土器群である。

第141図　弥生土器変遷図

第２節　中世の川畑地区

国領遺跡からは川畑地区以外に蓮町Ⅲ地区より平安時代後期後半から鎌倉時代（中世）・近世の遺構が確認されたが、蓮町Ⅲ地区については紙面の都合でこの章では触れない。

１．出土土器について

川畑地区からは、コンテナに換算して70箱の土器が出土した。その内訳は、土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・国産陶器・中国製磁器である。これらの土器のうち、報告書に掲載したのは223点と土器出土量から見ると少なく、遺跡全体の土器様相を検討するには問題がある。そこで比較的遺存状況の良好な土器を再度選別した。固体数の識別にあたっては約1／5以上残存する土器を１固体として換算した。以上の作業を経て783点の土器を抽出した。

788点のうち土師器は432個を数え、全体の55.2％を占める。この次に多いのは瓦器で229点を数え、全体の29.1％を占める。中国製磁器は42点を数え、全体の5.3％を占める。須恵器は64固体を数え、8.1％を占める。黒色土器は13個を数え、全体の1.6％を占め、国産陶器は３点と少なく、全体の0.4％を占める。各土器の時期的な区別を除外して土器の種別構成で見る限り、土器の主体は土師器・瓦器である。ついで須恵器、中国製磁器が続くが、両者の出土量にあまり差がない点は興味を引く。次に各種別毎に見てゆく。

土師器：土師器は432点確認した。土師器は大皿・小皿・杯・鍋・羽釜の器種がある。このうち小皿が最も多く、土師器全体の約75％を占めている。ついで大皿が約20％を占め、両者で土師器全体の95％近くを占める。大皿は、手捏ね成形によるＡ類とロクロ使用のＢ類に分かれる。Ａ類の大皿はⅢ－１類が最も多く、ついでⅡ類の順となる。Ｂ類は、24点を数えＡ類の約⅓と量的には少ない。Ｂ類のなかではⅡ類が圧倒的に多い。小皿も大皿と同様、Ａ・Ｂ両類に分かれる。Ａ類が247点と土師器全体の57.1％を占め、土師器のなかでも中心的な器種である。Ａ類のなかではⅣ類が最も出土量が多く、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅳ類→Ⅲ類→Ⅴ類の順となる。Ｂ類の小皿は土師器全体の17.8％を占め、小皿Ａ類の次に多い。Ｂ類のなかではⅡ－２類が多く、次にⅣ・Ⅴ類がほぼ同数で並ぶ。皿以外の器種では鍋が16点出土し、土師器全体の3.7％を占める。土師器は皿類が中心的な器種で、皿類のなかでも大皿のＡ－Ⅲ－１類、小皿ではＡ－Ⅳ類

表12．中世土器組成表

| 種別 | 土師器　総固体数432個（55.2%） | | |

が量的に多く、土師器全体の20％を占める。仮に両者を数量的に比較した場合、大皿Ａ－Ⅲ－１類を１とすると小皿Ａ－Ⅳ類は2.6の比率を示す。皿類以外では杯があるが、土師器全体の１％以下で、普遍的に供膳形態に組み込まれていたと言いがたい。調理器としては鍋・羽釜があるが、量的には少なく、羽釜にいたっては１％以下の占有率である。この現象は、屋敷跡と言う遺跡の性格を反映しているのであろうか。

瓦器：瓦器は土師器についで出土量が多い。器種も椀が圧倒的に多く、瓦器椀の土器総固体数に占める割合は21％にも及び、瓦器椀が供膳形態の一翼を担っていたことは疑いのないところであろう。瓦器椀は器形的特徴からⅠ類からⅢ類の３つに分けたが、これらのなかでもⅠ－２類・Ⅲ－３類が量的に多く、両者を合わせると、黒色土器を除く瓦器全体の約28.5％を占める。小皿は黒色土器・瓦器全体の26.4％を占める。量的には小皿にⅡ類が突出して多い。

須恵器：須恵器は、全体の8.1％と量的に少ない。器種は椀が圧倒的に多く、須恵器全体の半分近くを占める。須恵器は器形からⅠ類からⅣ類の４つに分類したが、Ⅳ類の椀が量的に多く、須恵器全体の30％近くを占める。小皿は遺存状況が悪く、あえて今回は分類をしなかったが、器形的にみても幾つかに分類できる可能性がある。これらの器種以外に調理器としての鉢と貯蔵具としての壺・甕があるが、鉢が須恵器全体の17％を占める以外、壺・甕の貯蔵器の占める割合は少ない。

中国製磁器：中国製磁器は白磁の椀・皿・壺、青磁の椀・皿で構成されている。表12は森田・横田両氏の太宰府分類に従って整理した。白磁では白磁椀Ⅷ類が多く、中国製磁器全体の30％近くまで及ぶ。皿は全体的に出土量も少ない。特殊な器種としては、破片のみの出土のため器形は不明であるが壺がある。青磁は白磁に比べ出土量も少なく、器種でみても皿と椀の出土量に差がない。椀は龍泉窯系Ⅰ類に限定される。皿については底部のみの破片が多く、分類できなかった。

国産陶器：国産陶器は丹波焼の小壺・小鉢・常滑焼系の甕がある。いずれも出土量が少なく、国産陶器の占める割合は全体の0.5％以下である。器種も小壺・小鉢といった特殊な器形で構成されている。また常滑焼系の甕は、丹波地方への搬入資料として興味深い資料である。

以上、川畑地区の土器組成について述べた。供膳形態を構成する器種としては、椀・皿がある。川畑地区では椀・皿と土師器・瓦器・須恵器・中国製磁器なかに認められる。供膳形態を構成するものは主に土師器と瓦器である。土師器は大皿・小皿・杯に採用され、椀は瓦器が主に採用されていたと推察される。これら以外に須恵器にも椀・皿の器種があるが、全体的に出土量が少ない。出土した土器が一時期に存在していないことは言うまでもないが、このことを考慮したとしても、須恵器の椀・皿は、一時期の供膳形態の主役であったと考えるには量的に少ない。視点を変えれば、中国製磁器も含めてこの量の少なさは、遺跡内の階層性を示すものと判断するのが妥当と考える。個々の土器の詳細な時期についてはここでは省略するが、おお

まかに、今回出土した土器の上限は、土壙24の一括性を認め、土師器小Ⅲ B－Ⅱ－1類・須恵器椀Ⅰ類・黒色土器を11世紀後半と捉え、下限は須恵器椀Ⅳ類・瓦器椀Ⅰ－3類・Ⅱ－2類を13世紀中頃と理解したい。

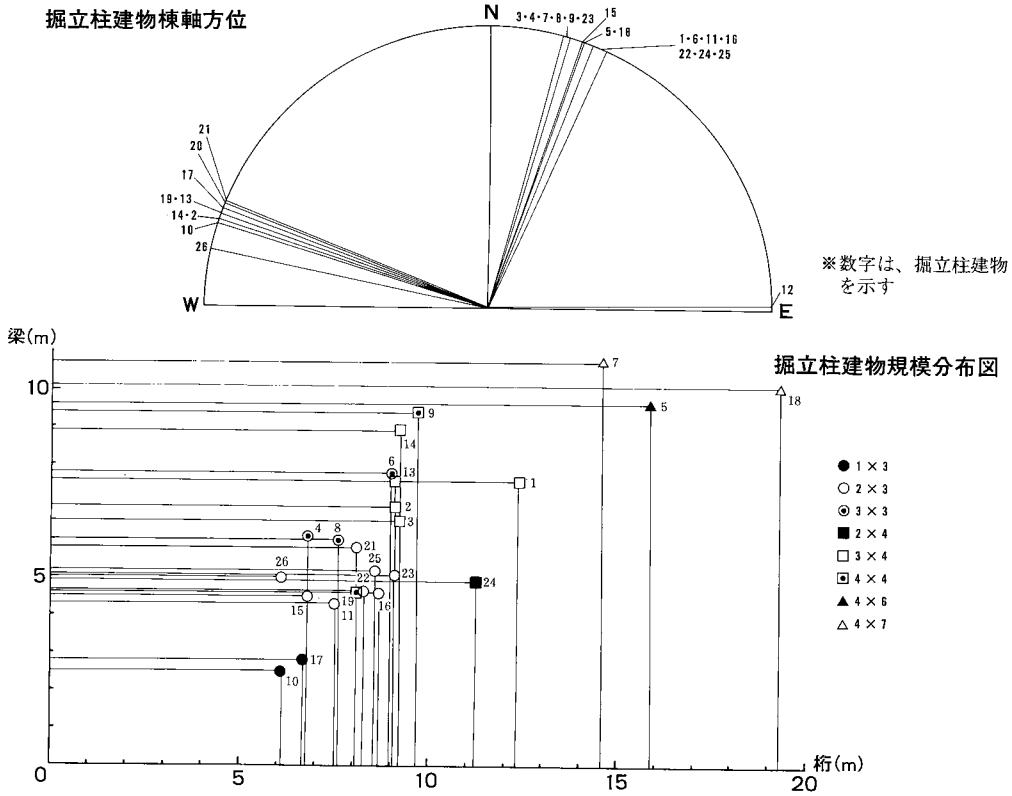
2．遺構について

川畑地区からは平安時代後期後半から鎌倉時代の屋敷跡が確認された。屋敷は掘立柱建物址26棟・井戸をはじめ木棺墓・土壙墓群などの土壙群、雨落溝等で構成され、屋敷跡の西端は、溝が走り屋敷地を限っている。

掘立柱建物址は26棟確認できた。建物址として識別できない柱穴も多く残されており、全ての掘立柱建物が復元できた訳ではない。復元できた26棟の建物址のうち、調査区外に範囲が伸びる掘立柱建物12・20を除いて、建物の構造・規模が明らかになっている。第142図はこの24棟の掘立柱建物について規模と構造を表したものである。この図からみると掘立柱建物址群はその規模から表14のように分類できる。

A類は極小型の建物で1×3間の構造である。位置的に建物5・建物18といった極めて大型の建物址に近接して位置する特徴があり、その機能としては収納ないしは馬等の家畜小屋とし

表13. 掘立柱建物群の棟軸方位と規模・構造



ての機能をもつと推察される。B類は殆どが2×3間の構造をもつ小型の建物である。ただB2類の建物4・8は平面形が正方形に近くなり3×3間の総柱構造である。C類は総じて3×4間の構造をもつ中型の建物で総柱建物が多い。D類は大型の建物で、建物9・14のように平面形が方形を呈する建物と建物1のように長方形を呈するものに分かれ、3×4間・4×4間の両者がある。E類は極大型の建物で、4×6間・4×7間の構造である。とくにE類の建物は規模・構造の点で他の建物を凌駕しており、中核的な建物と理解できる。

表14. 掘立柱建物床面積一覧

分類	規　模	該当掘立柱建物
A　類	20㎡未満	建物10・17
B1類	30～38㎡	建物11・15・16・19・22・26・(12)
B2類	40～47㎡	建物4・8・21・23・25・(20)
C　類	60～70㎡	建物2・3・6・13
D　類	80～90㎡	建物1・9・14
E　類	150㎡以上	建物5・7・18

次にこれらの建物址群の並びについて、方位を中心に述べる。本報告書で使用した方位は、棟軸方位で、棟軸方位の測定は建物の梁行きを構成する柱が奇数のばあいは、両梁行きの中心になる柱を結んだ線、偶数のばあいは両梁行きの中央に位置する柱間の中心を結んだ線を棟軸方位とした。表13は、この棟軸方位を表したものである。棟軸方位を南北方向にもつ建物はN15°～16°E・N18°30′～19°E・N23°30′～24°Eの4グループに大別できる。これに対し東西方向に棟軸方位をもつ建物は、N67°～68°30′W・N70°～71°W・N72°～73°W・N78°～90°Wの南北方向と同様4グループに分かれる。南北方向に棟軸をもつ建物が多く、26棟の建物のうち16棟が該当し、川畑地区の主体であることが理解できる。また中核的な建物であるE類建物が全てこの方位を示すことからも裏付けられる。

これまでは掘立柱建物の構造と棟軸方位について述べた。この項では、下記の基準で遺構の変遷を考える。

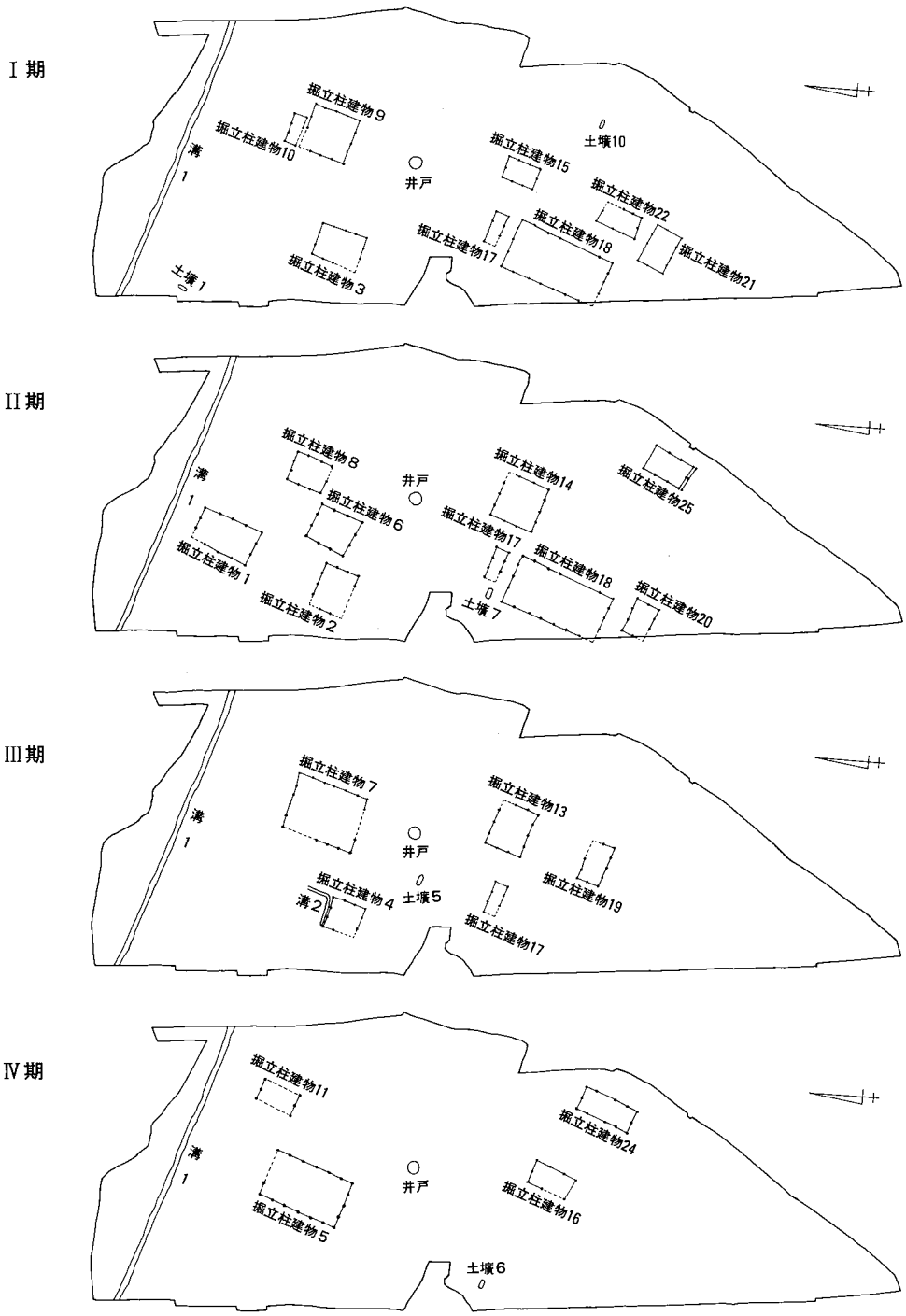
1．溝1・井戸1は各期共通の施設として考える。

2．各期とも極大型建物（E類）を中心とした建物の配置を考える。

3．各建物の同時性は、各建物間の重複関係、各建物間の桁行き・梁行きの並び、棟軸方位、出土土器を判断材料とした。

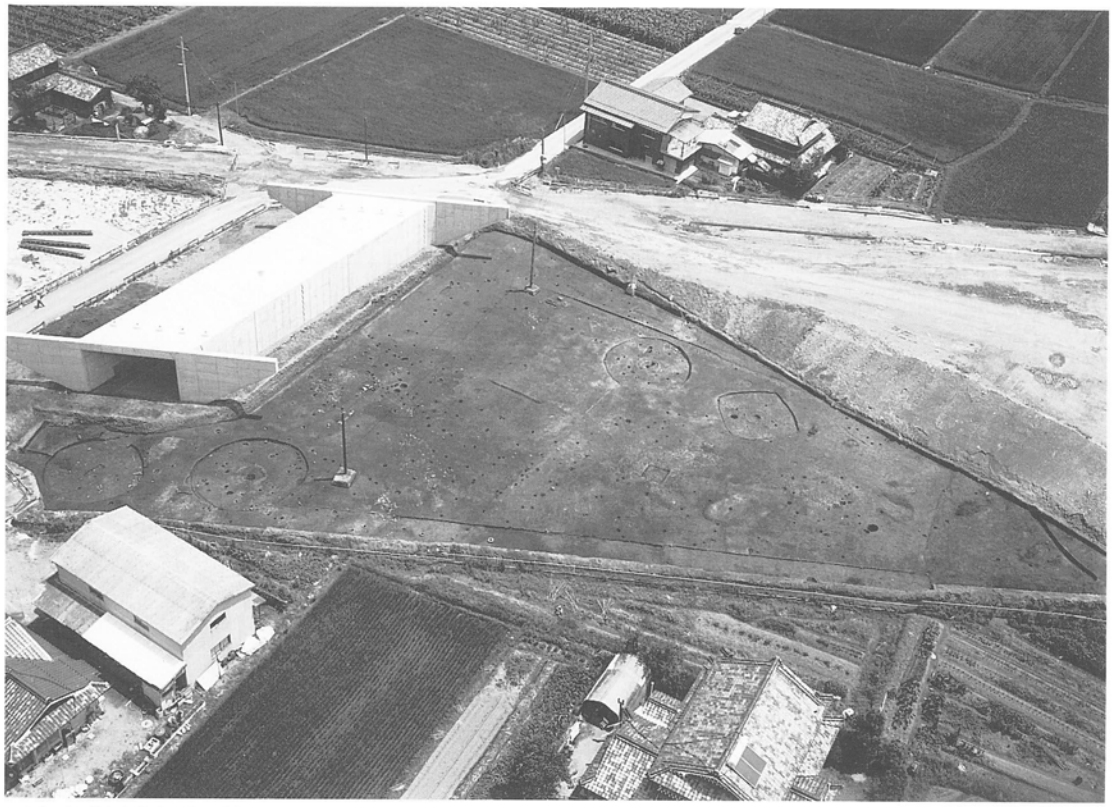
以上の観点からⅠ～Ⅳ期の遺構の変遷を想定した。ただし棟軸方位が著しく異なる建物12・26および所属時期が不明瞭な建物23は除外した。その結果は第142図に示したが、各期の詳細は、ここでは述べず、別の機会に論考したい。建物の変遷の時期についても、各期の詳細な時期は不明瞭で確定できないが、出土した土器の年代からおおよそ11世紀後半から13世紀中頃までの時間幅で存続したと理解している。

春日部庄は鎌倉時代前半には、新日吉社領に比定されている。川畑地区で発見された150㎡を超える大型の建物址を中心とした建物址群は、その規模から春日部荘のなかでも中核的存在であったことは疑いのないところであろう。



第142図　川畑地区中世遺構変遷図案

1）調査区中央部遺構検出状況（東から）



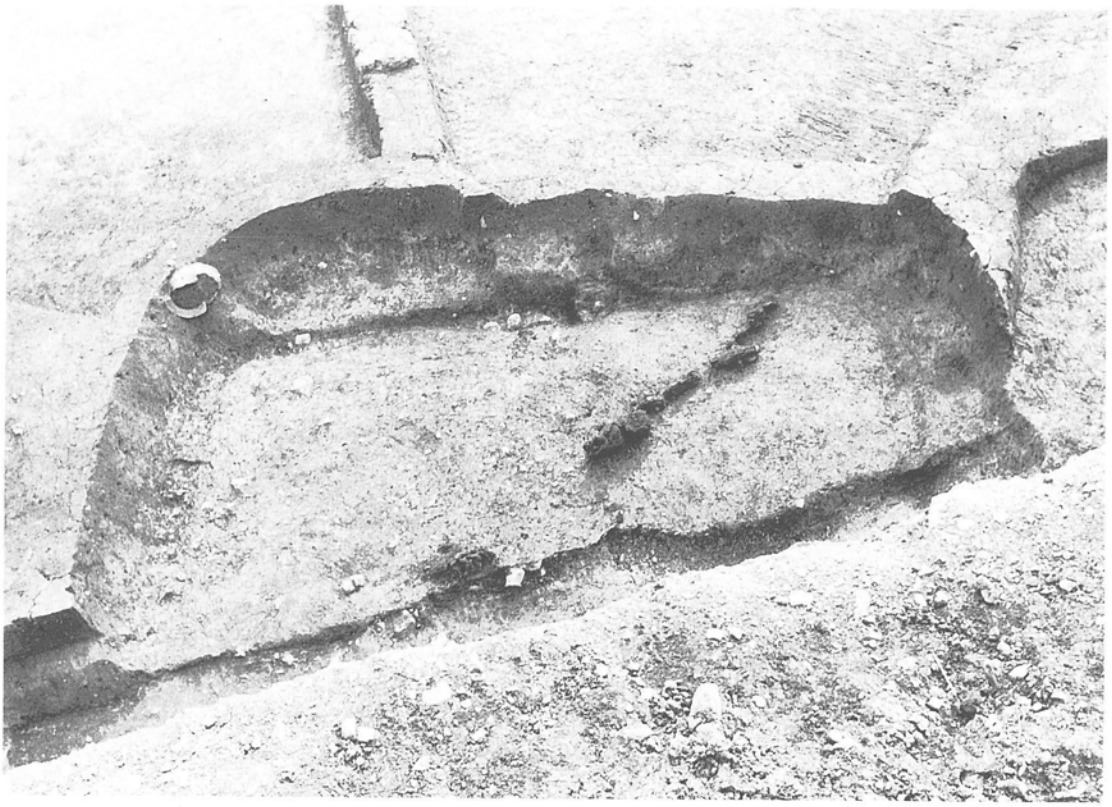
2）調査区南部遺構検出状況（西から）

図版二　川畑地区遺構

1）調査区北部遺構検出状況（西から）

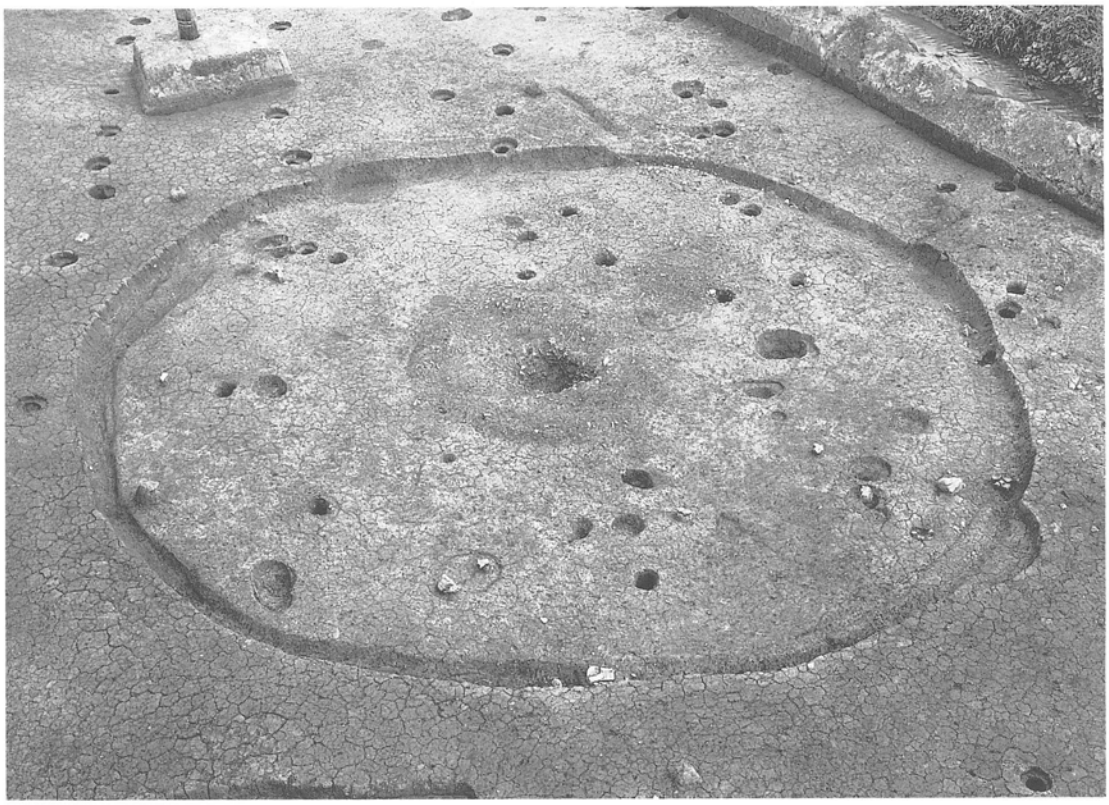
2）M-2～15区トレンチ遺構検出状況（南から）

1）竪穴住居１　東半（東から）



2）竪穴住居１　西半（東から）

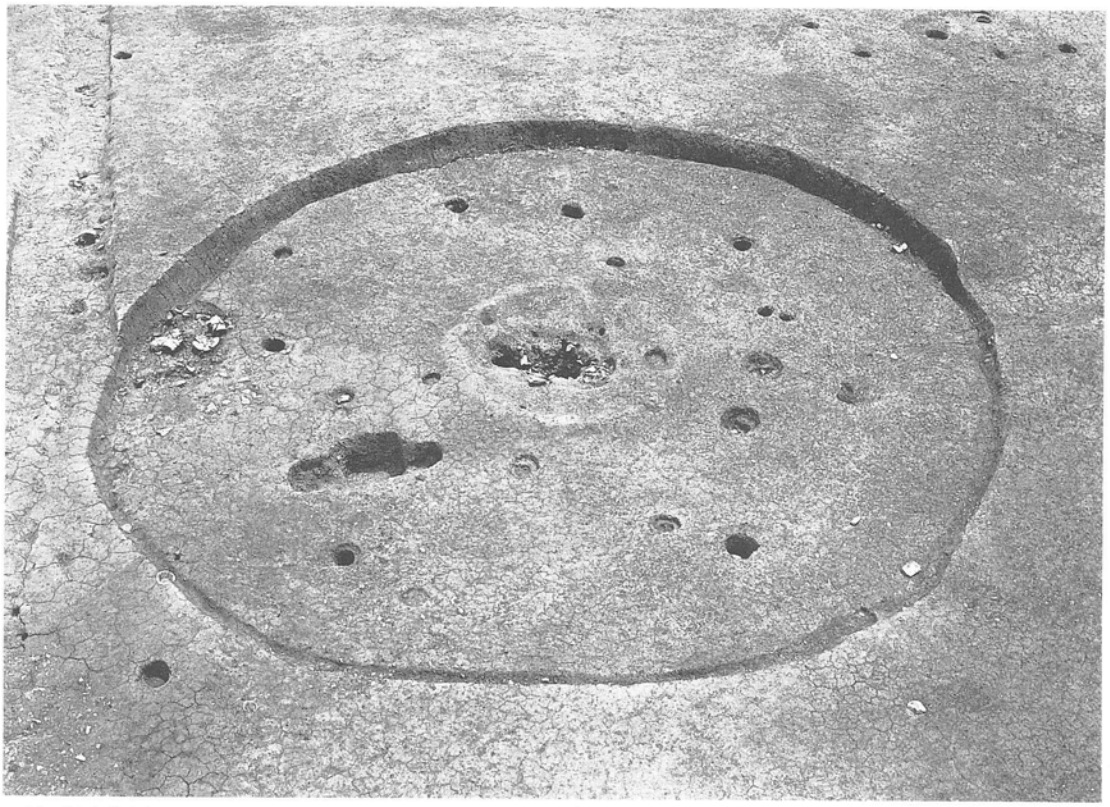
図版四　川畑地区遺構



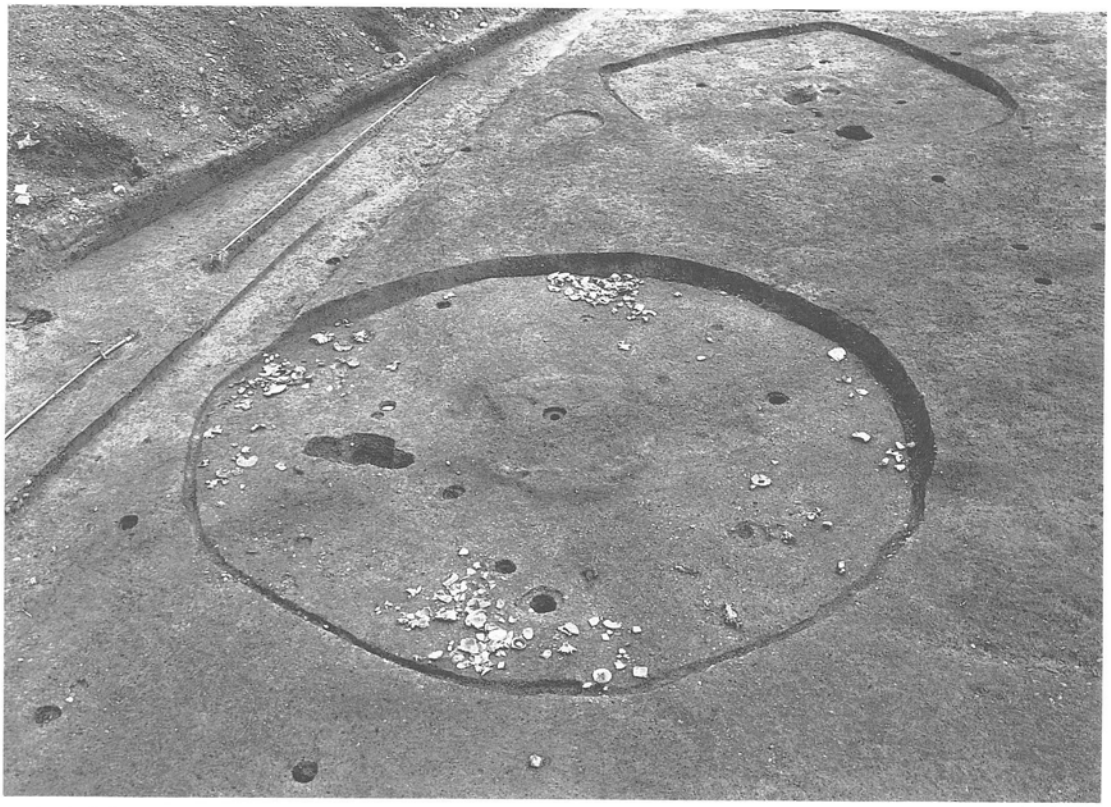
1）竪穴住居２（東から）

2）ガラス小玉出土状況

3）土器出土状況



1）竪穴住居３（北西から）



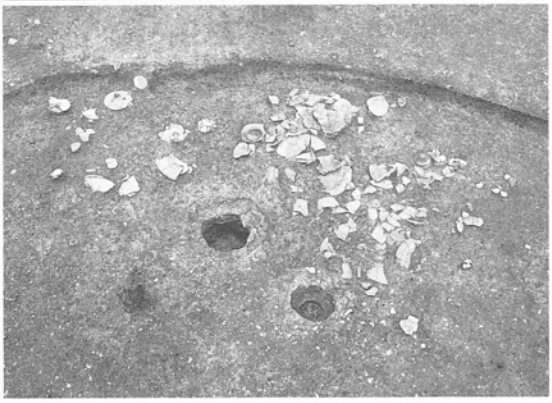
2）竪穴住居３　土器出土状況（北西から）

図版六　川畑地区遺構

1）

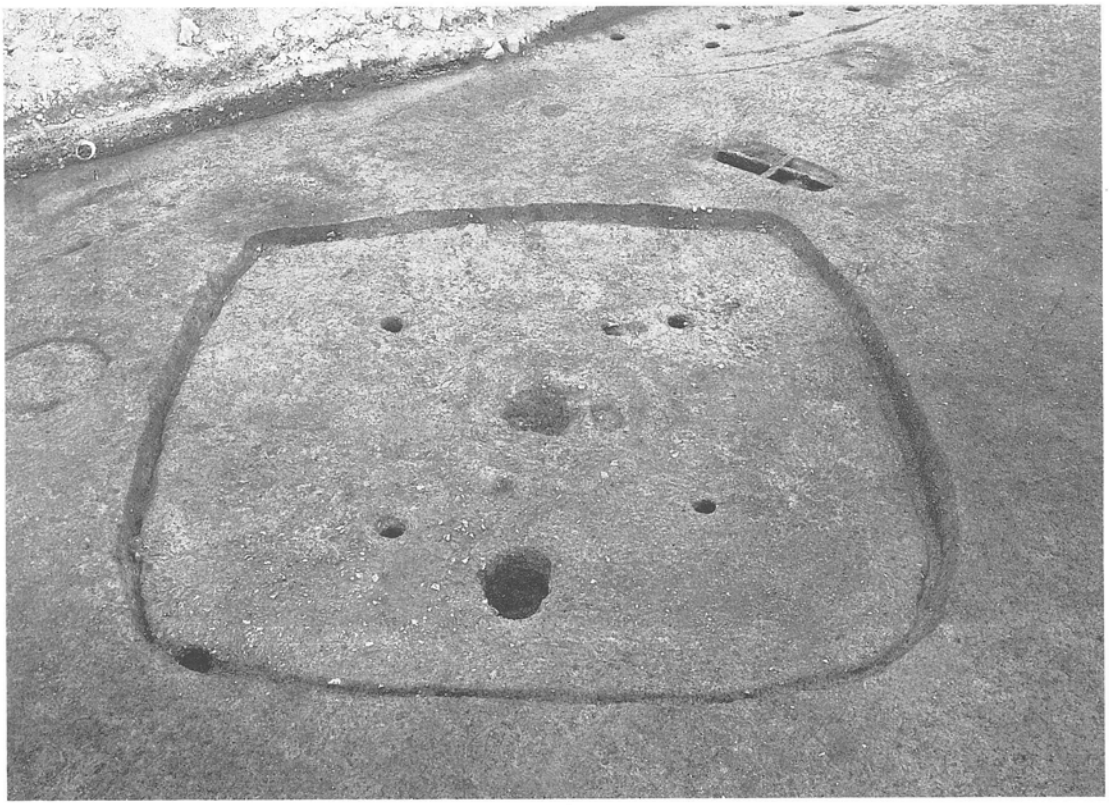
2）

3）



4）

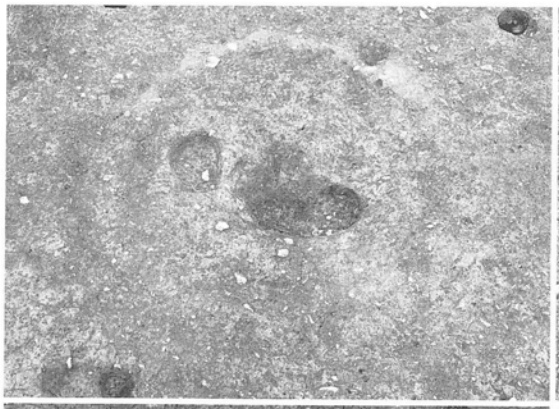
1）中央土壙（北東から）　2）第１土器群出土状況（西から）
3）第２土器群出土状況（北から）　4）第３土器群出土状況（南から）



5）竪穴住居４（北西から）

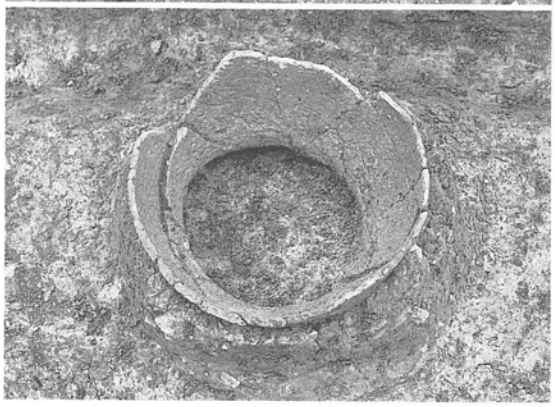
1）竪穴住居４　炭化材検出状況（北西から）

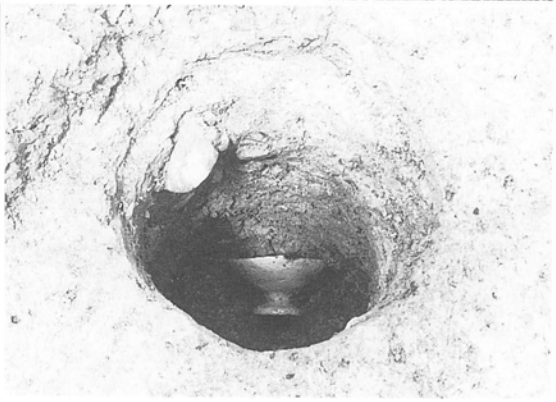
2）



3）

4）



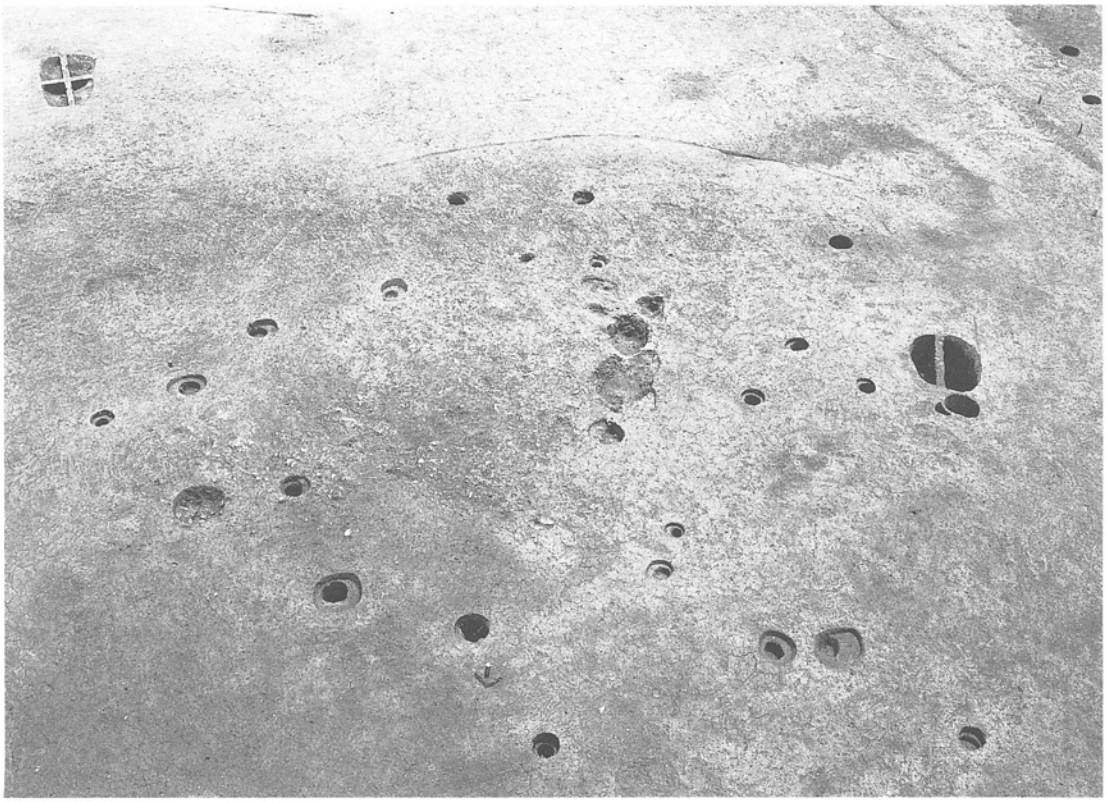


5）

2）中央土壙（南東から）
4）土器出土状況（北から）

3）土壙検出状況（西から）
5）柱穴内土器出土状況

1）竪穴住居５（東から）



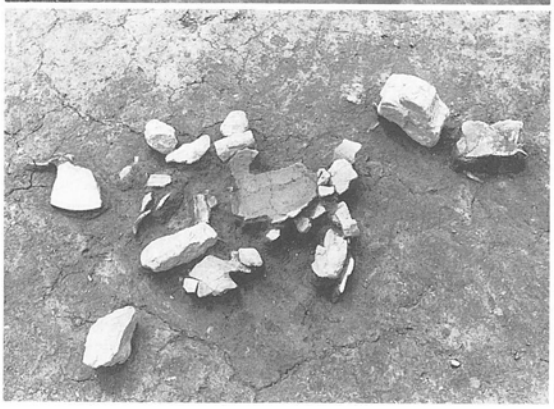
2）竪穴住居６（西から）

1）竪穴住居７（西から）

2）

3）

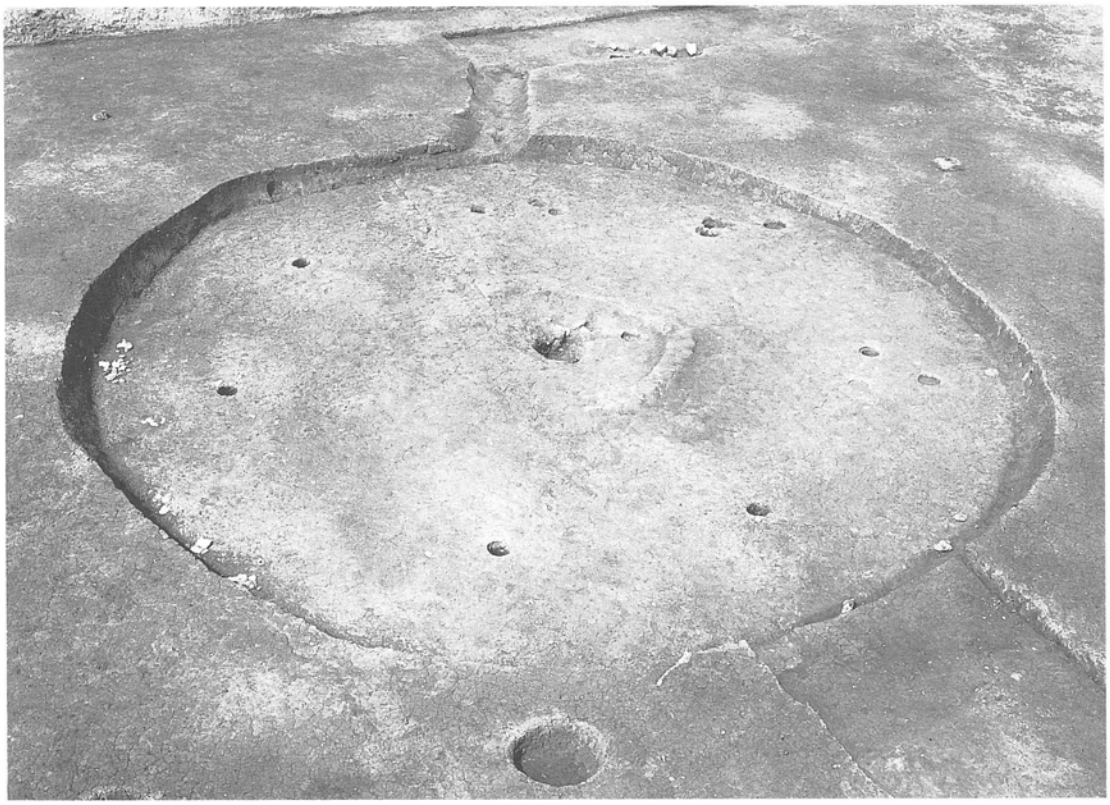
4）



5）

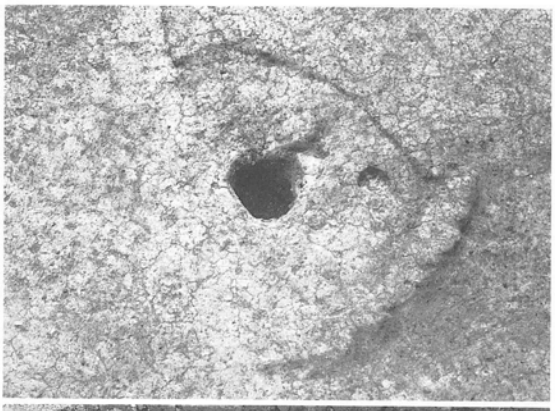
2～5）土器出土状況

1）竪穴住居８（南東から）



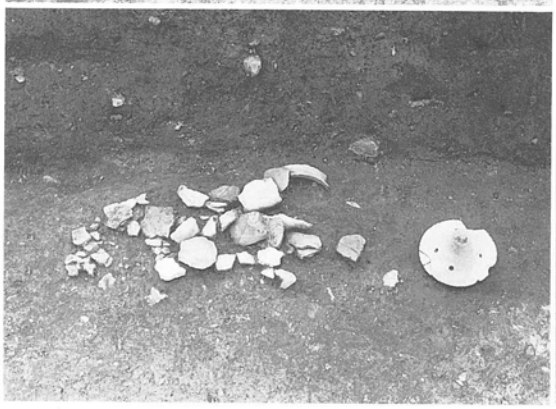
2）竪穴住居９（東から）

1）



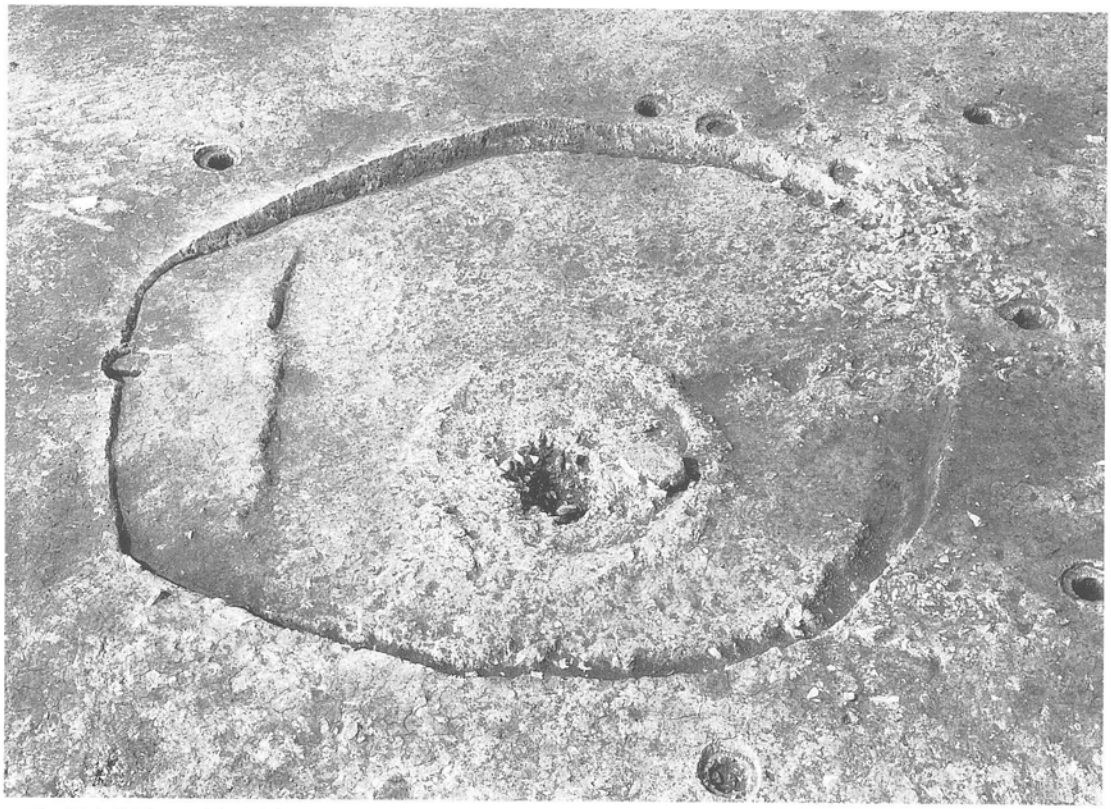
2）

3）



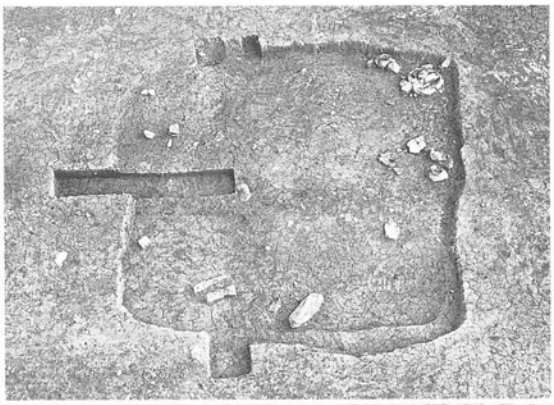
4）

1）竪穴住居８　中央土壙（東から）
2）竪穴住居９　中央土壙（北東から）
3・4）竪穴住居９　土器出土状況（北から）



5）竪穴住居10（南から）

1）

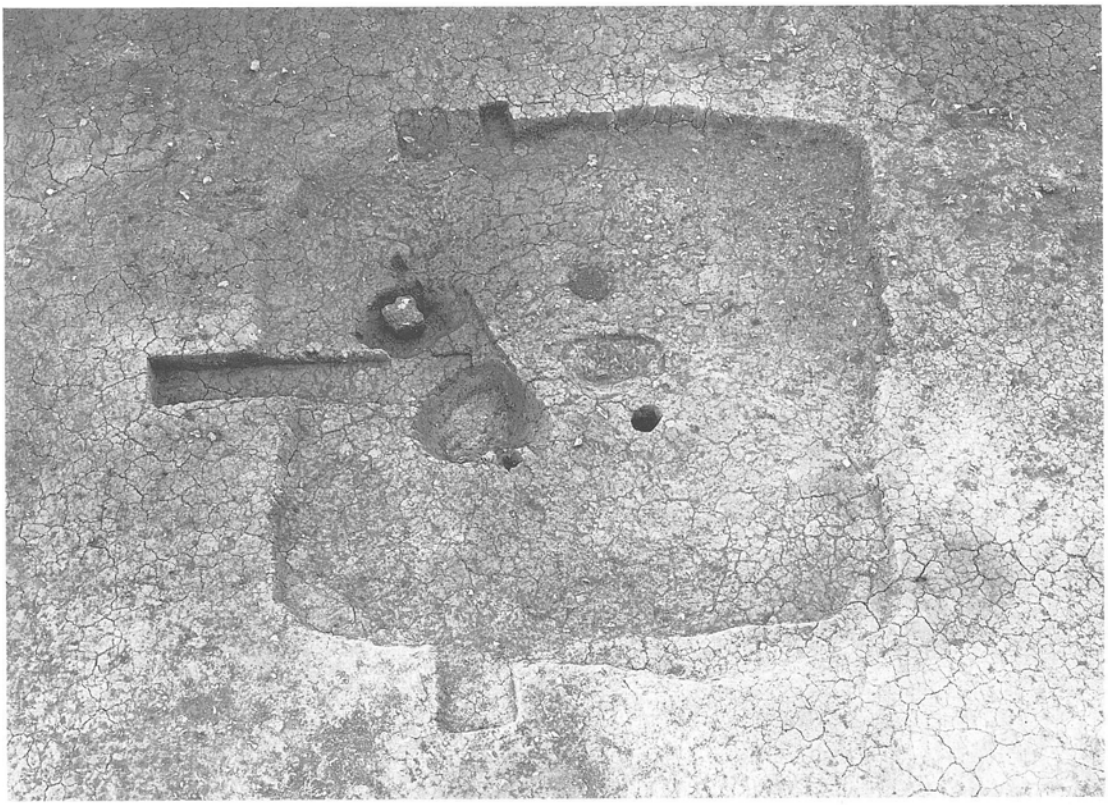


2）

3）

4）

1）竪穴住居10　中央土壙（東から）　2）竪穴住居11　土器出土状況（南から）
3・4）竪穴住居11　土器出土状況



5）竪穴住居11（南から）

1）竪穴住居12・13（南東から）

2）

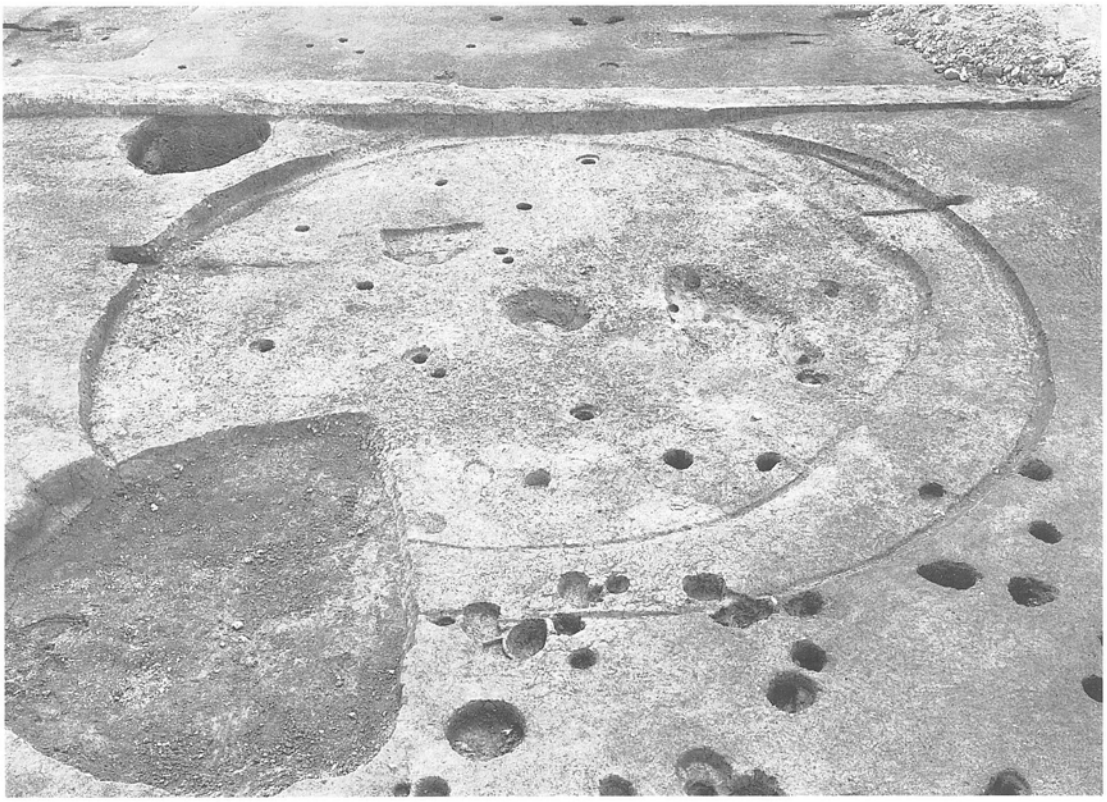
3）

4）

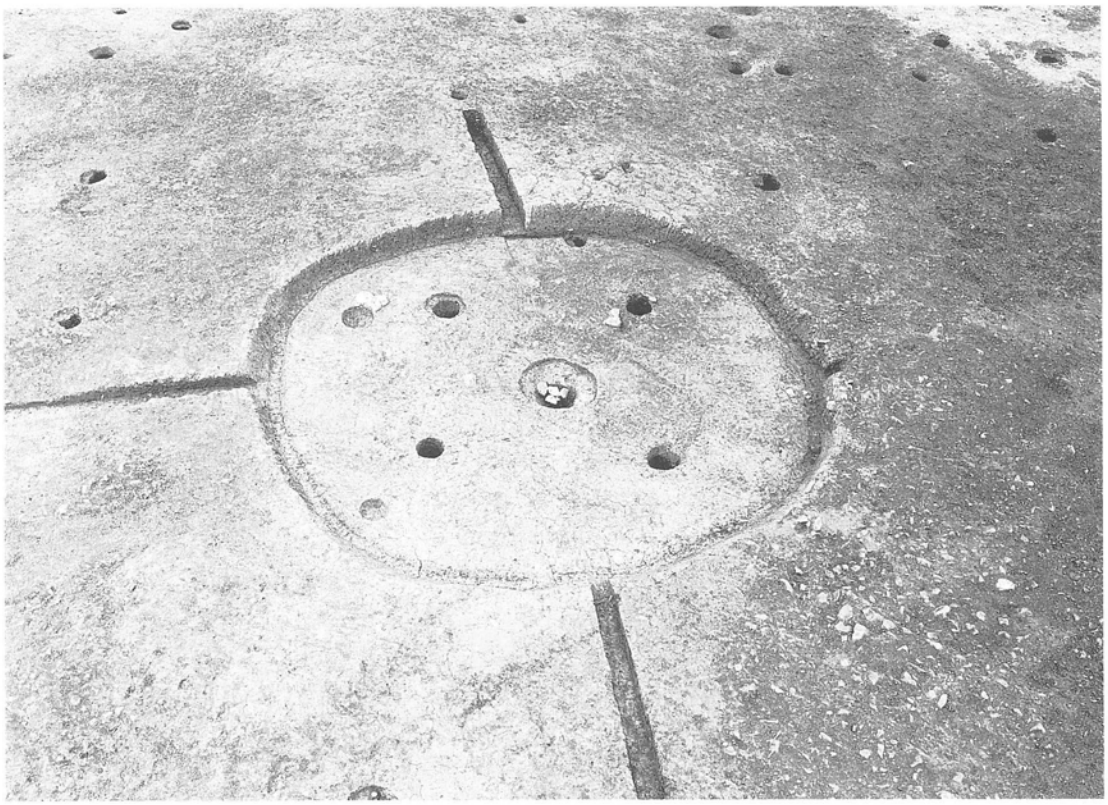
5）

2）中央土壙（西から）
4）竪穴住居12　土器出土状況（東から）

3）土器出土状況（南東から）
5）竪穴住居13　土器出土状況（東から）

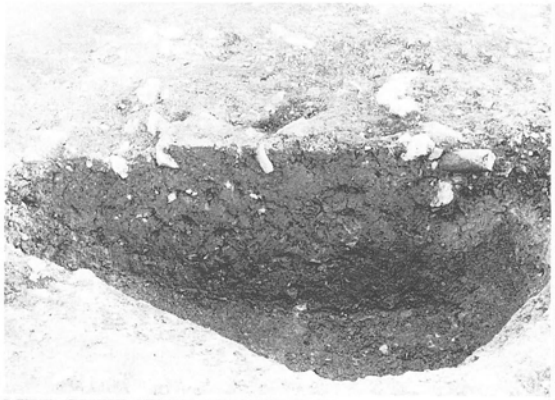


1）竪穴住居15（北から）



2）竪穴住居16（東から）

1）



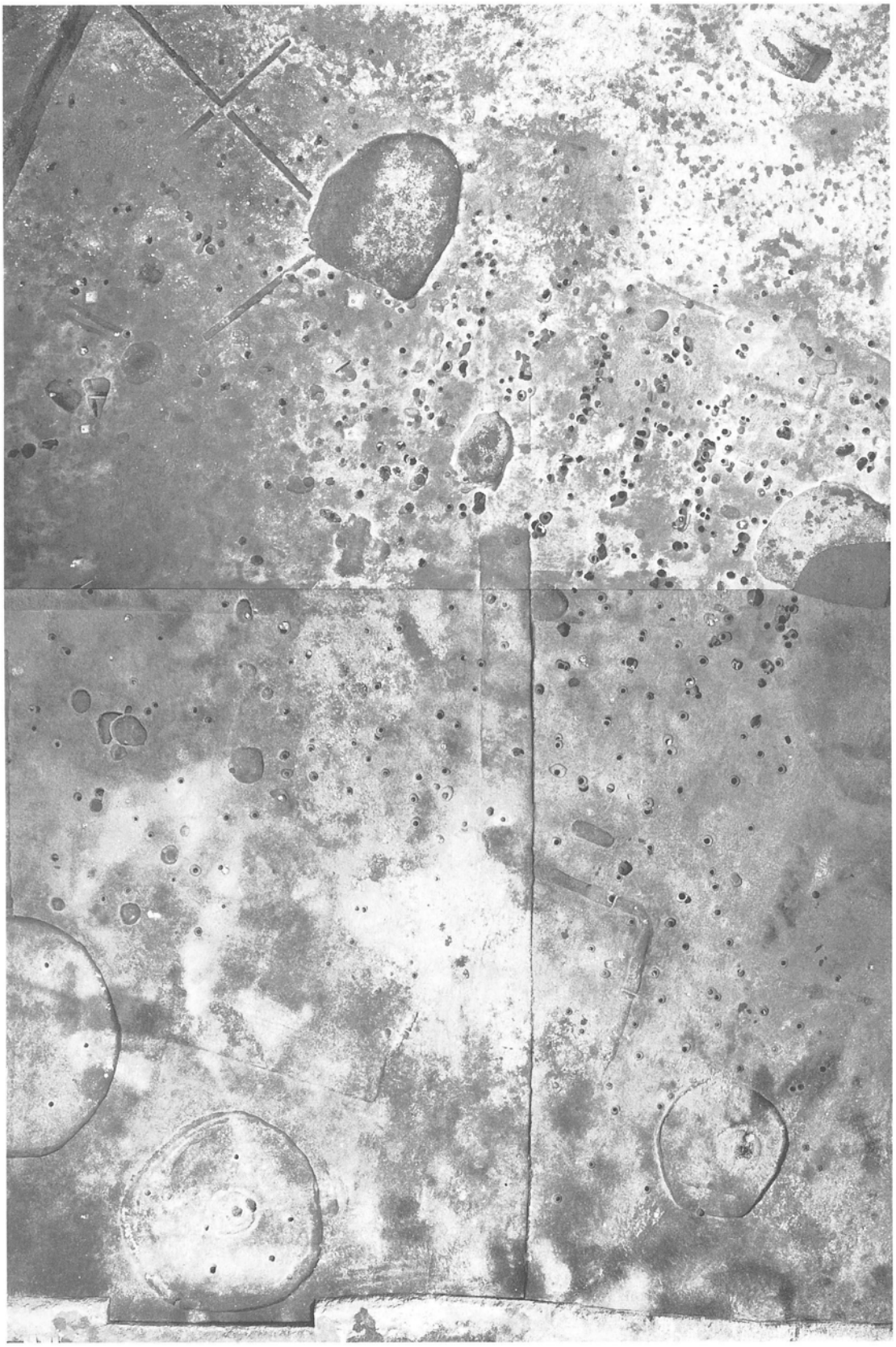
2）

3）

4）

1）竪穴住居15　中央土壙（南東から）
2）竪穴住居16　中央土壙（南東から）
3）竪穴住居16　柱穴内土器出土状況
4）竪穴住居17　土器出土状況

5）竪穴住居17（北から）



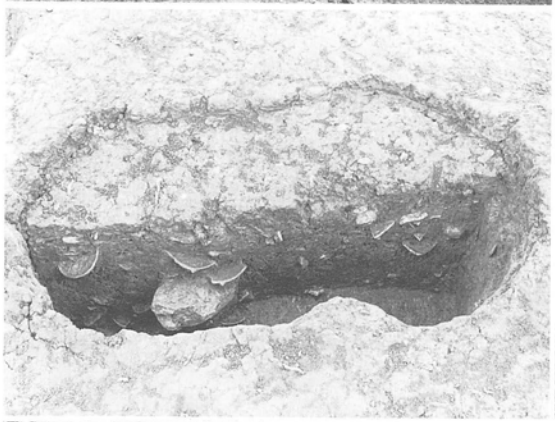
1）掘立柱建物1～11（B～K-3～10区付近）

1)

2)

3)

4)


5)

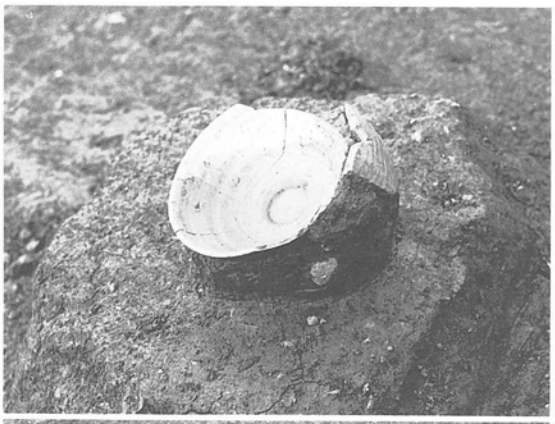
6)

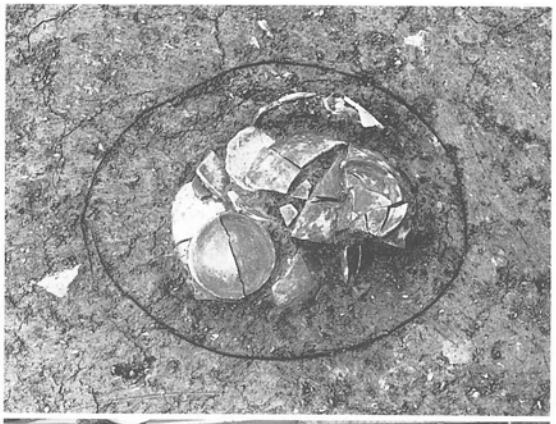
7)

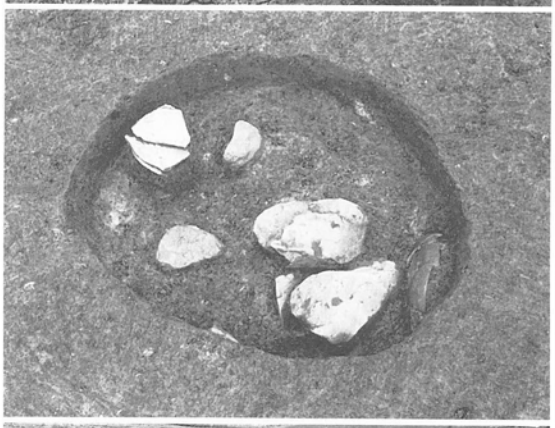
8)

1）建物1（北から）　2）建物2～4・6（北から）　3）建物5・6（西から）
4）建物7～9（西から）　5）建物7：P34，建物8：P14（西から）　6）建物9：P24（西から）
7）建物12（西から）　8）建物13～15（東から）

1）掘立柱建物18～22・24・25（M～J-15～23区）

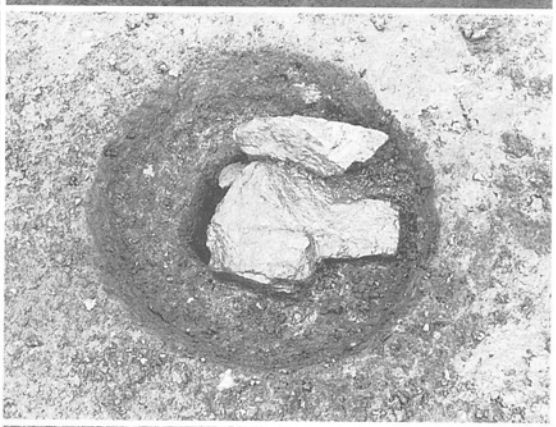

1)


2)

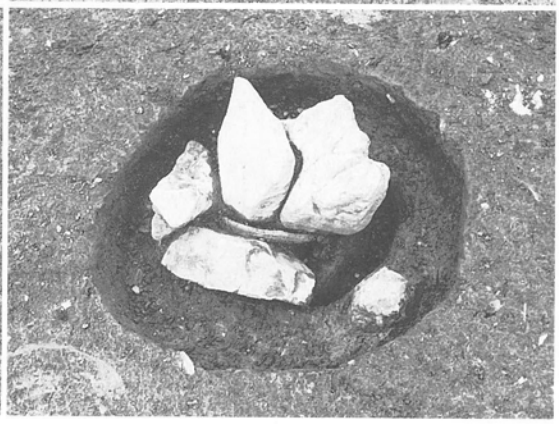

3)

4)

5)

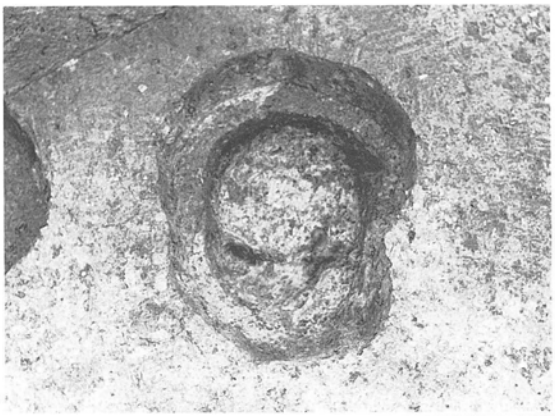

6)

7)

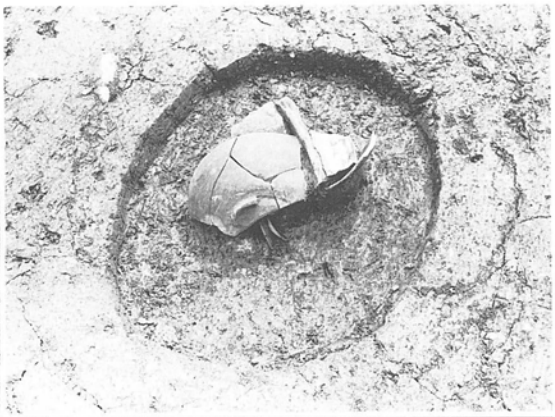

8)

1）建物13：P7（北から）　2）建物15：P4（北から）　3）建物17：P4（南から）
4）建物20～22（南東から）　5）建物18～22（北東から）　6）建物18：P18（北から）
7）建物18：P17（南から）　8）建物18：P34（南から）

図版二〇　川畑地区遺構

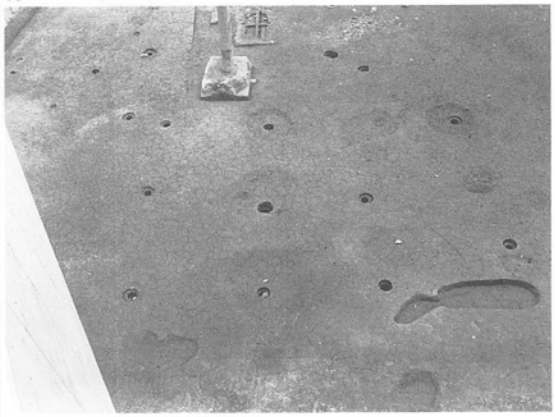


1）



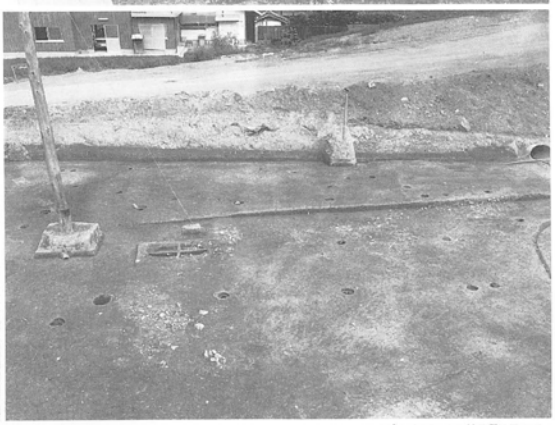
2）

3）

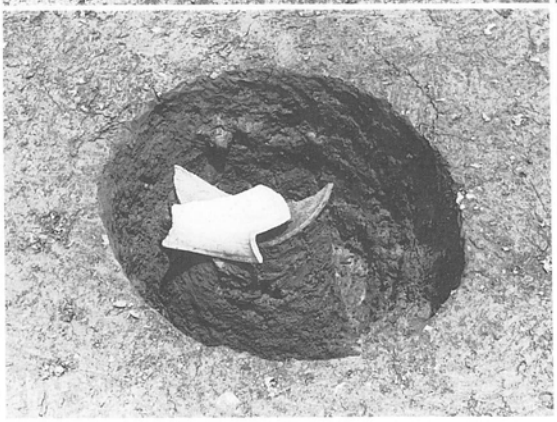


4）

5）



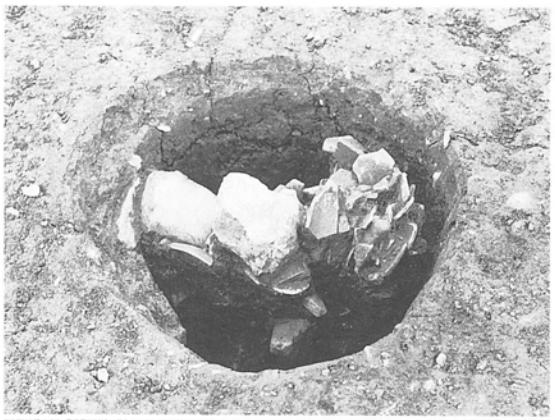
6）



7）

8）

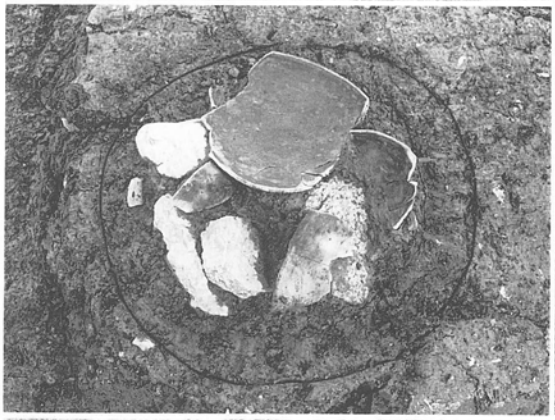
1）建物18：P37（北から）　2）建物19：P5（北から）　3）建物24～26（北西から）
4）建物24（北から）　5）建物24：P7（東から）　6）建物25（西から）
7）建物25：P9（南から）　8）その他柱穴P920（南から）


1)

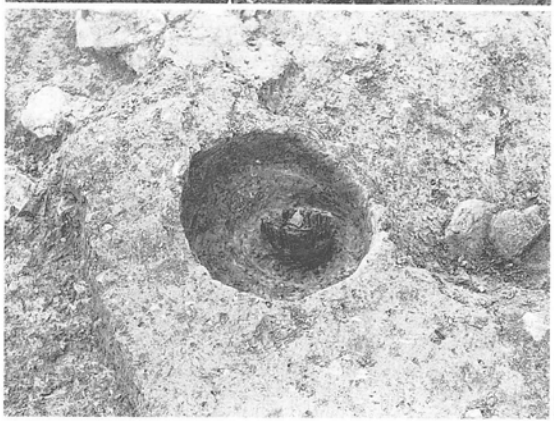
2)

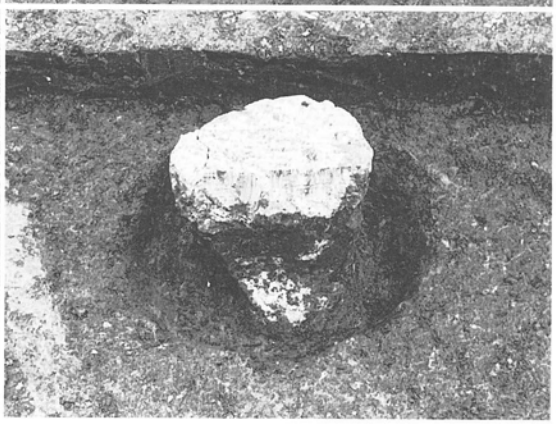
3)

4)


5)

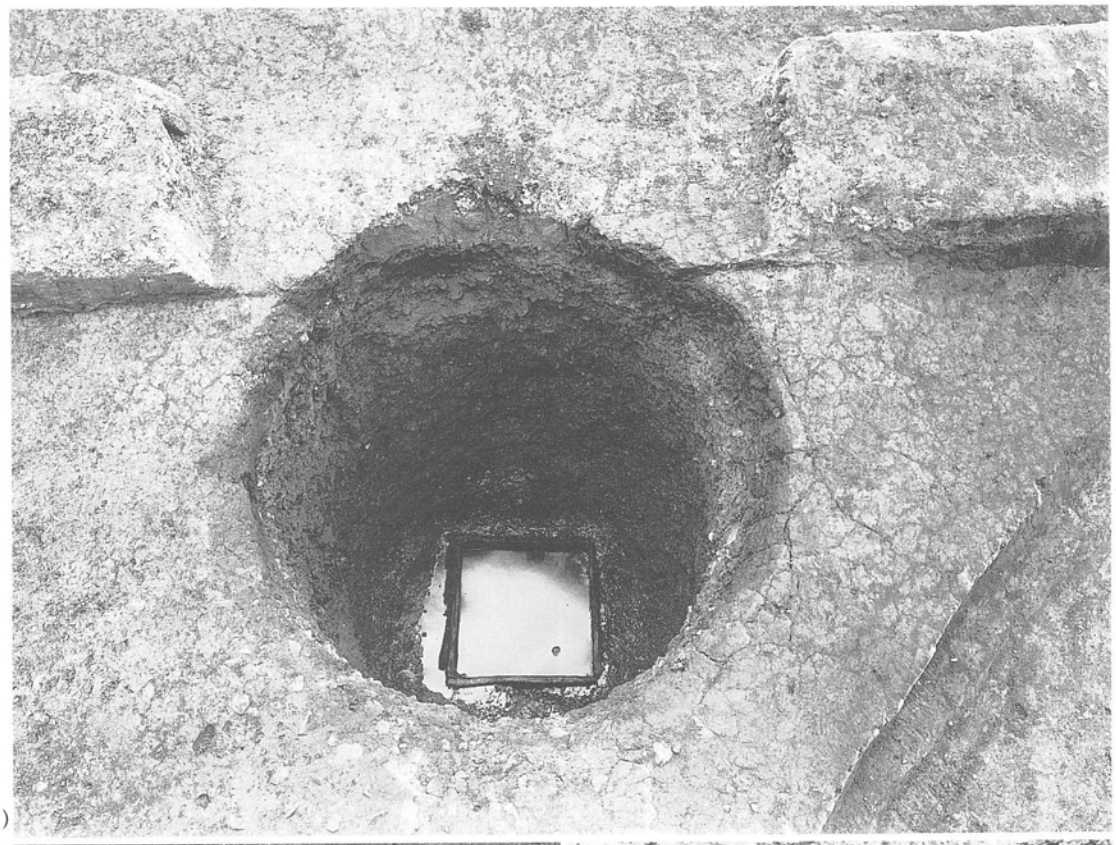
6)


7)

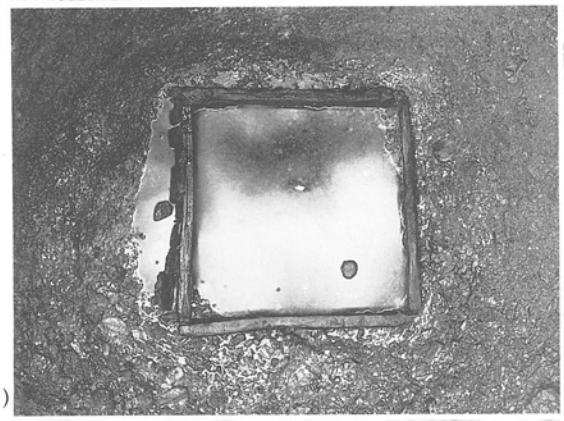

8)

1～8）その他の柱穴内土器出土状況

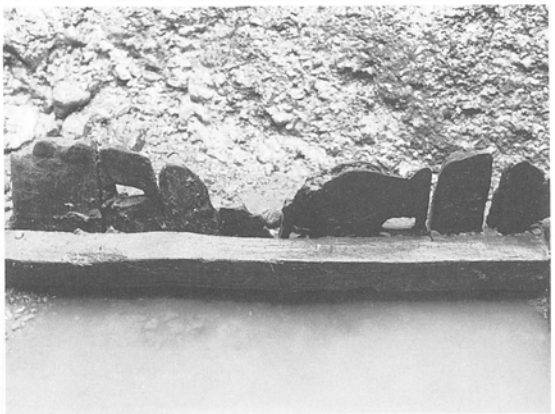
図版二二　川畑地区遺構



1）



2）

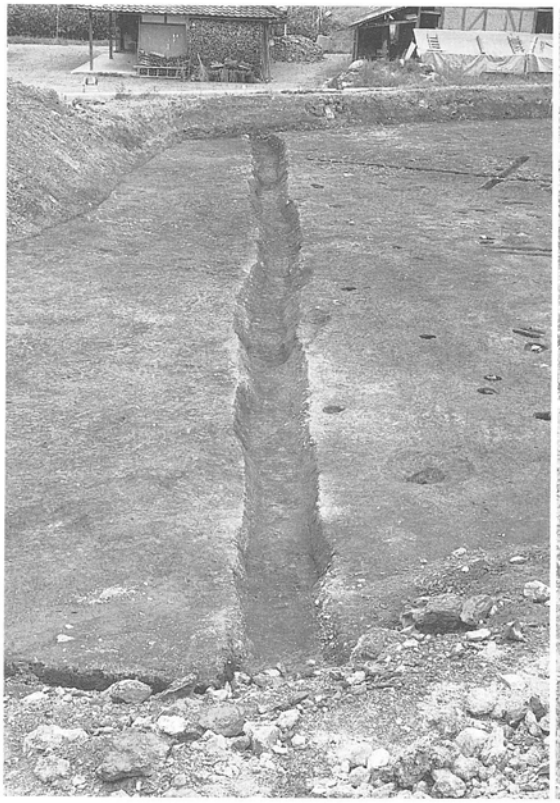


3）

4）

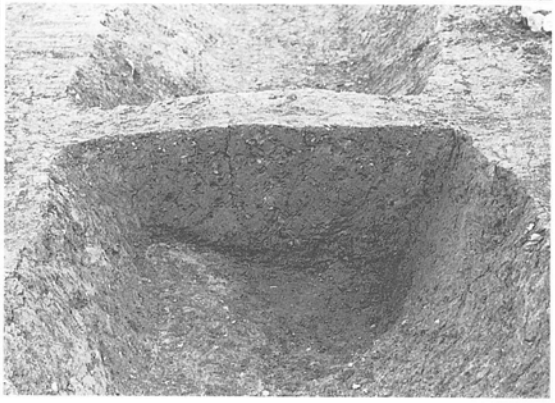
5）

1）井戸１（北から）　2）井戸枠　3）井戸枠西面縦板（東から）
4）井戸枠北東隅組み合せ状況（南西から）　5）井戸枠南西隅組み合せ状況（北東から）



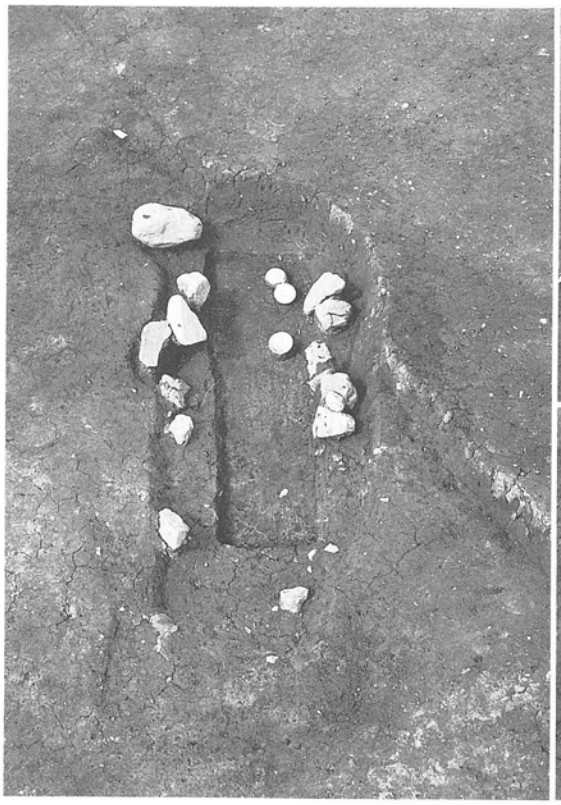
1）

2）



3）

1）溝１（西から）　2）E-E′土層断面（西から）　3）D-D′土層断面（西から）

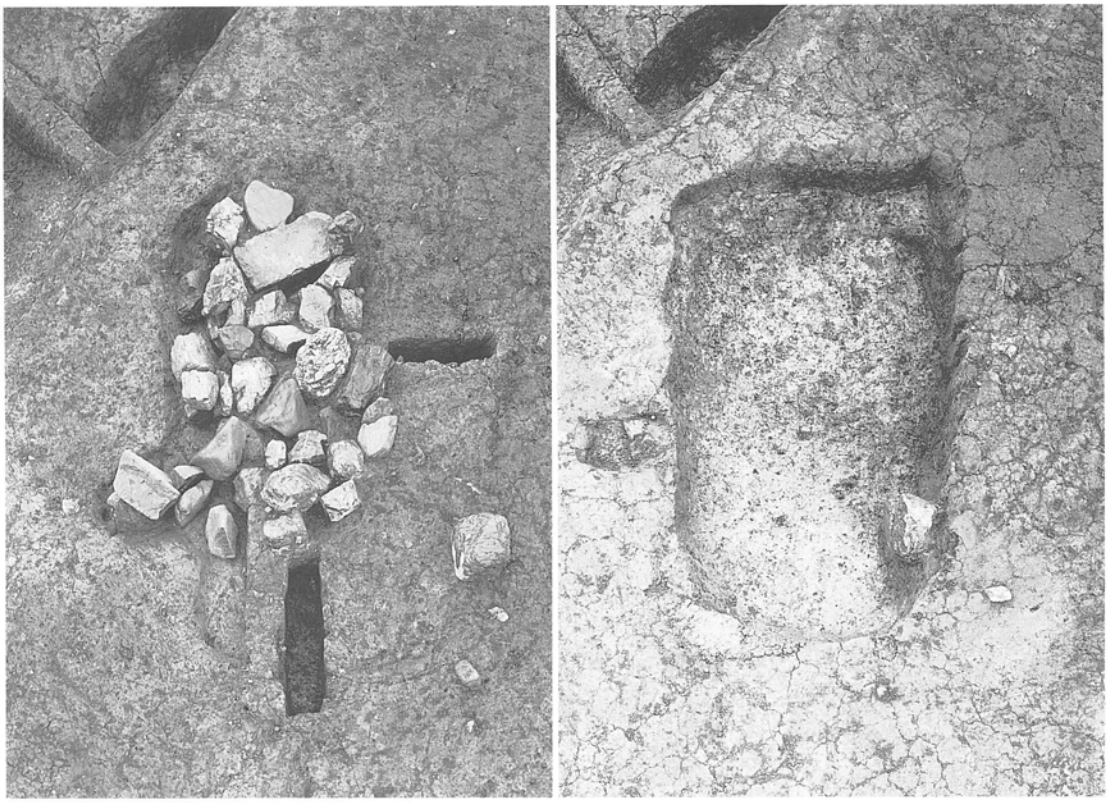


4）

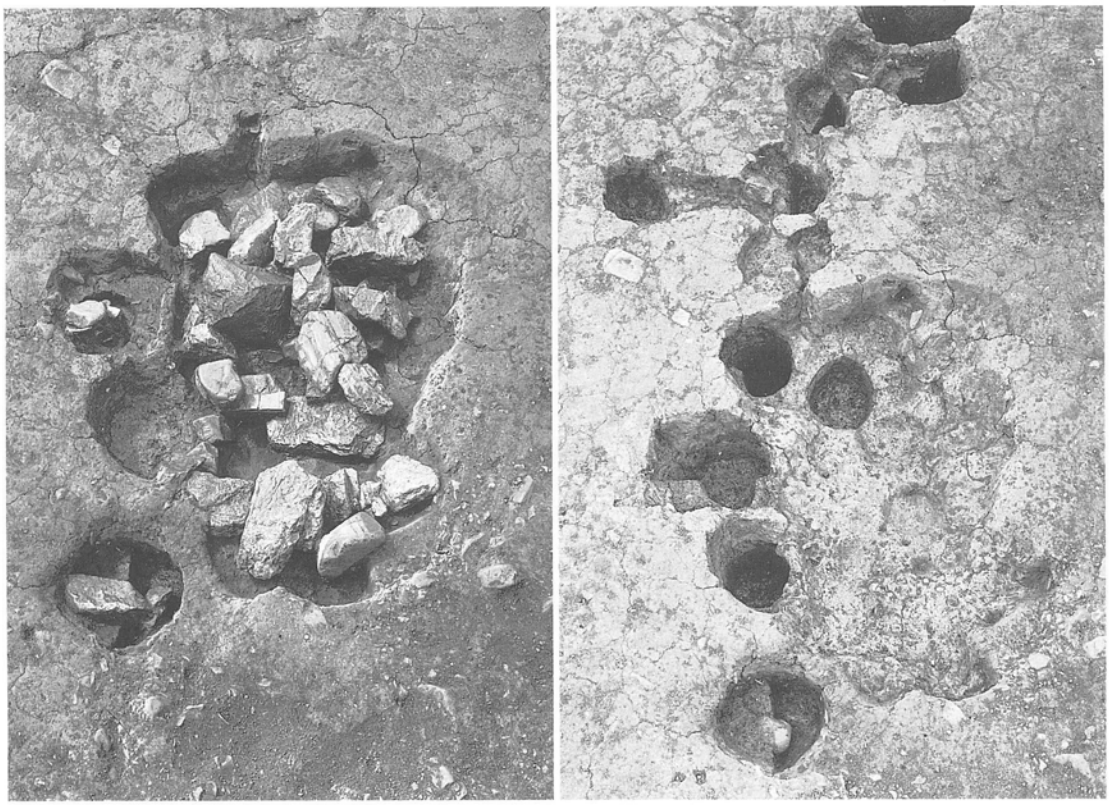
5）

6）

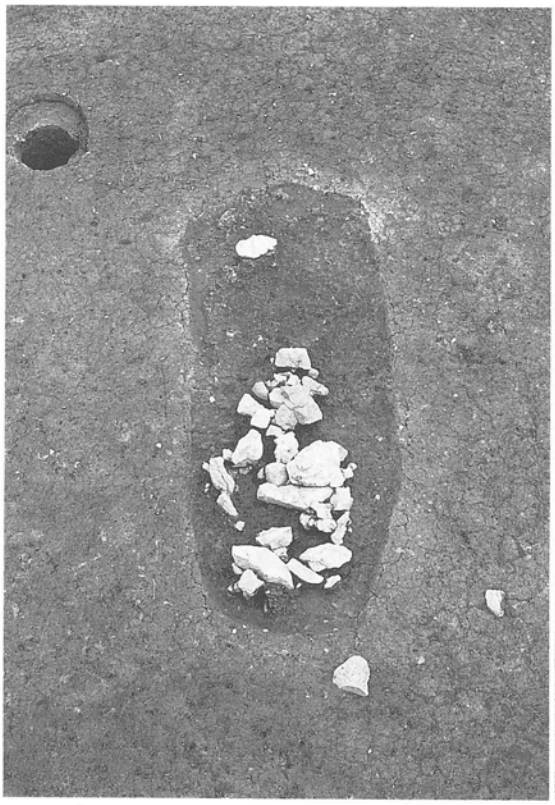
4）土壙１（南西から）　5）土器出土状況（西から）　6）棺底土器出土状況（南西から）



1）土壙２（北東から）

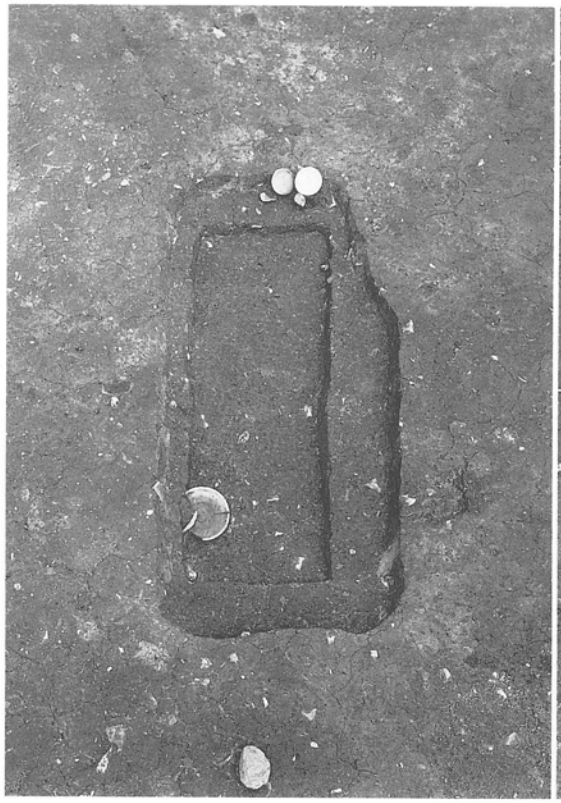


2）土壙３（東から）

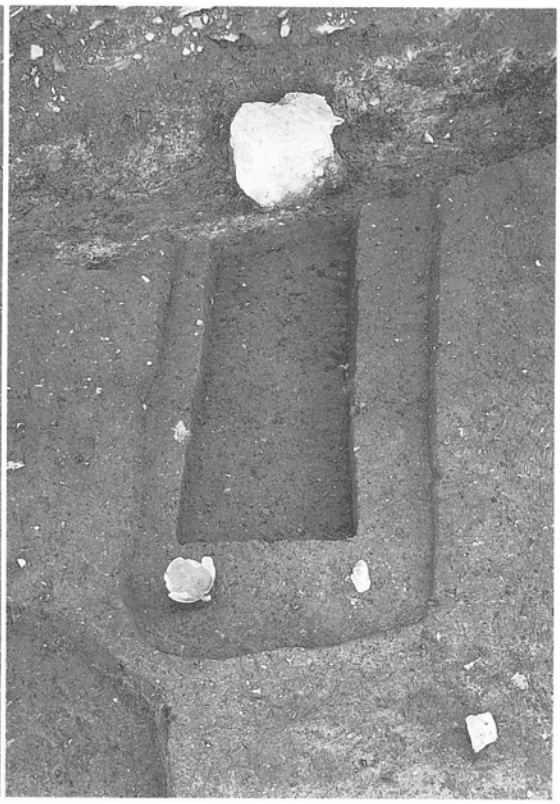


1）土壙４（南から）

2）土壙５（西から）



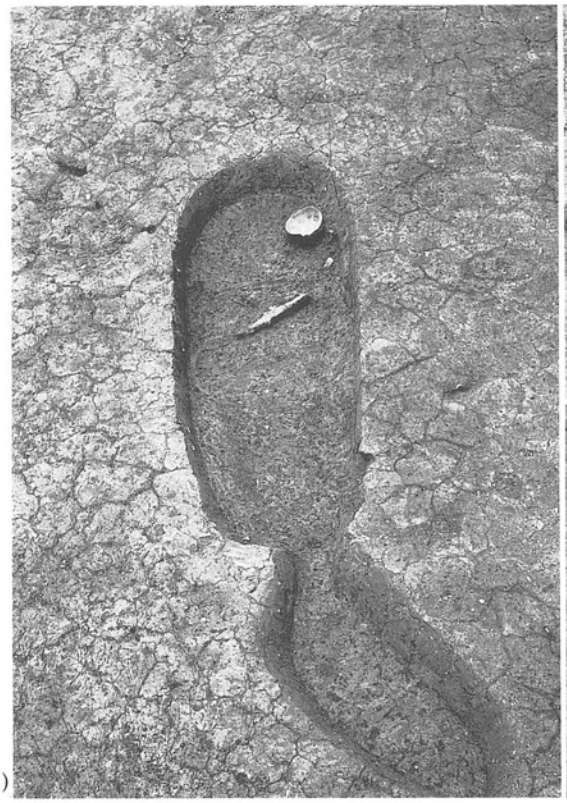
3）土壙６（西から）



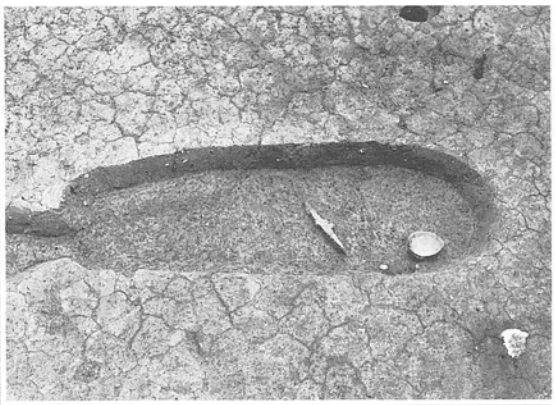
4）土壙７（西から）

1）土壙８（北から）

2）土壙９（東から）



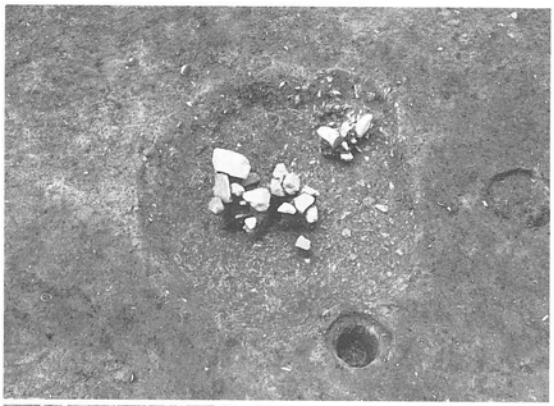
3）



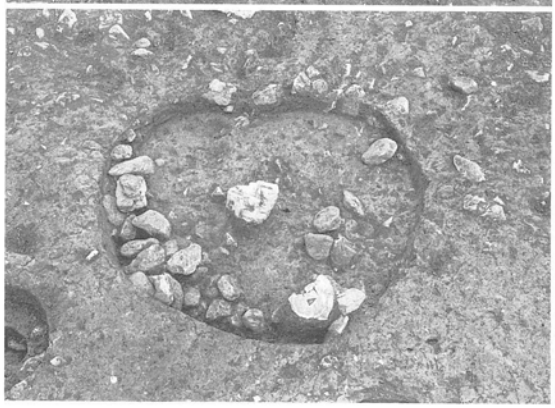
4）

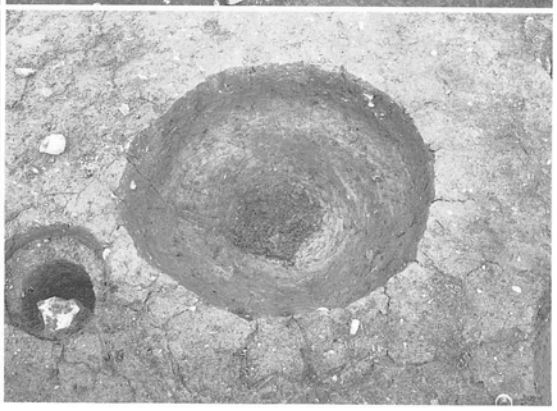
5）

3）土壙10（南東から）　4）土器・小刀出土状況（北から）　5）土器・小刀出土状況（南から）

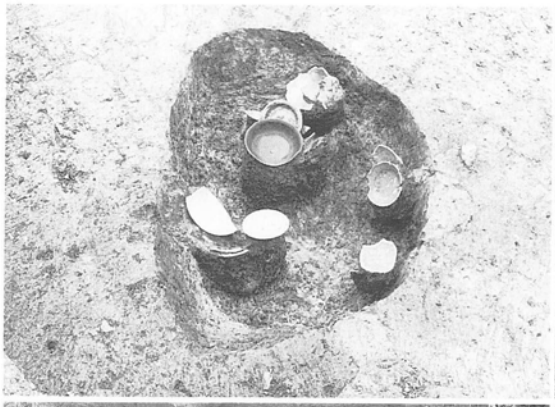

1）

2）

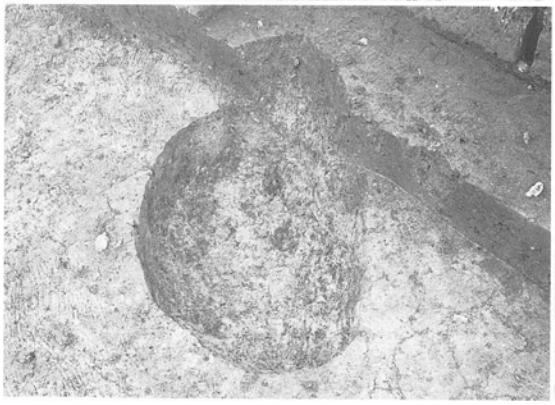

3）

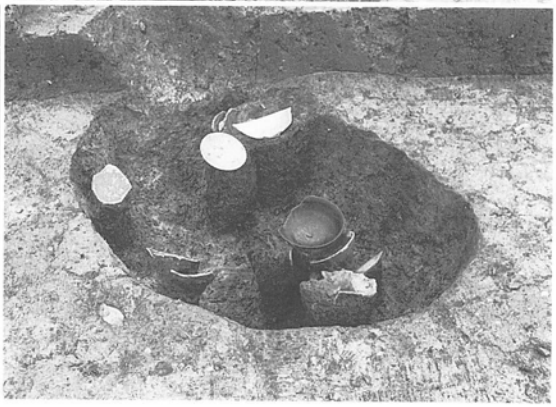

4）

1）土壙15（南東から）　2）土壙16（西から）　3）土壙19（南東から）　4）土壙23（南から）


5）

6）


7）


8）

5）土壙24　土器出土状況（南西から）　6）土器出土状況（北東から）　7）調査後（北東から）
8）黒色土器出土状況（北東から）

図版二八　川畑地区遺物（弥生土器）

4

5

6

14

71

15

73

図版 二九　川畑地区遺物（弥生土器）

20

27

26

23

29

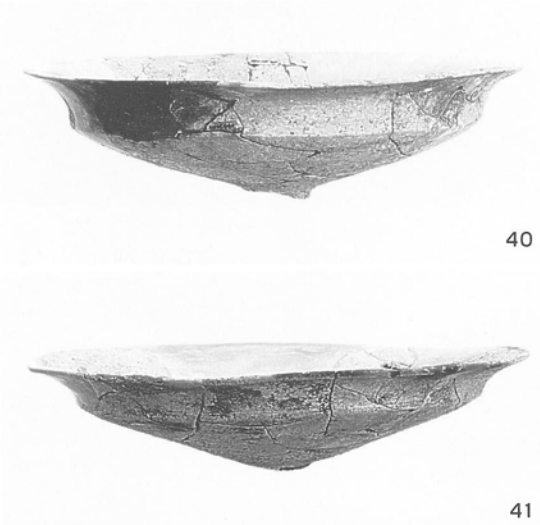
30

図版三〇　川畑地区遺物（弥生土器）

31

33

34

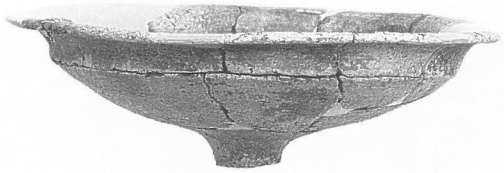

40

41

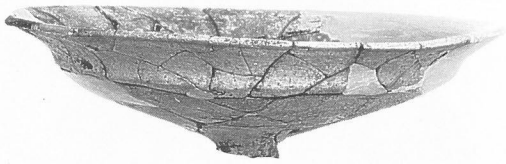
43

42

図版三一　川畑地区遺物（弥生土器）



38



39

36

37

45

44

48

47

図版三二　川畑地区遺物（弥生土器）

49

50

53

54

66

55

56

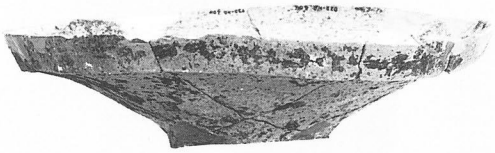
67

46

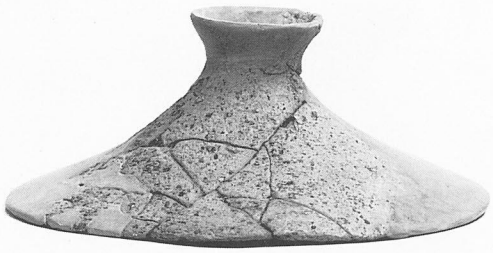
65

68

図版三三　川畑地区遺物（弥生土器）



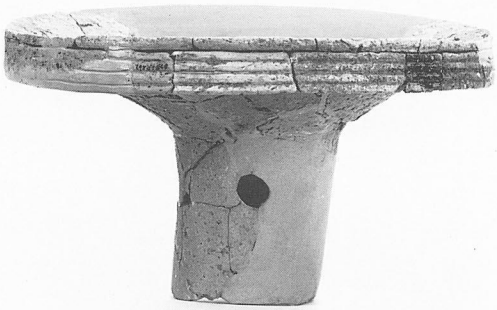
60



64

57

62



58

59

61

図版 三四　川畑地区遺物（弥生土器）

76

77

79

83

88

85

図版三五　川畑地区遺物（弥生土器）

87

97

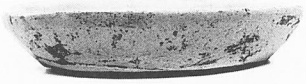
109

104

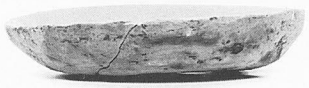
114

115

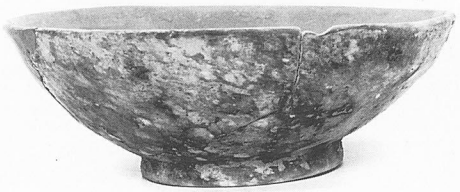
図版 三六　川畑地区遺物（中世土器）

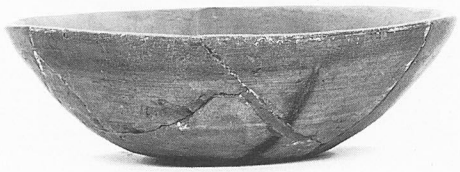

125

126


127

128


129


130

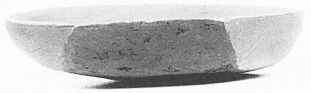
133

138

139

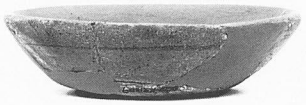
140

141

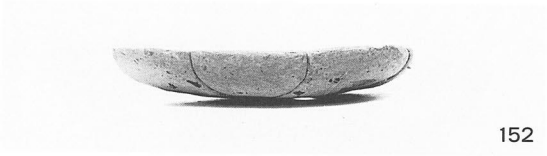

143

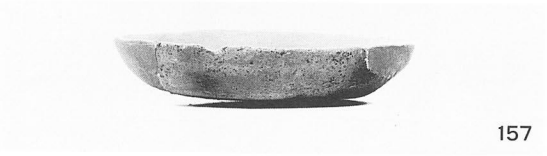
146

148


151

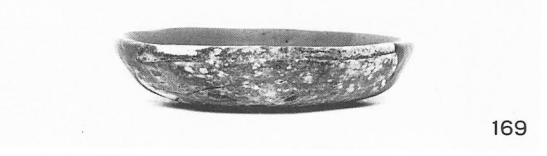
図版 三七　川畑地区遺物（中世土器）


152


157

159

163


169

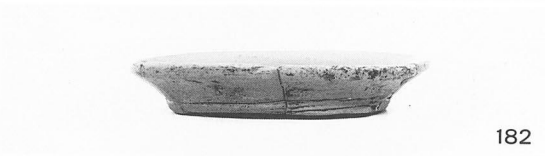
173

171

174

176

181

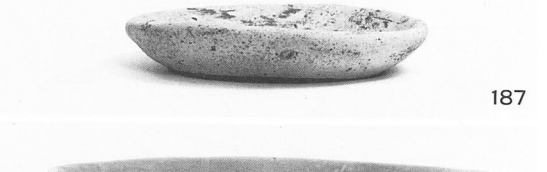

182

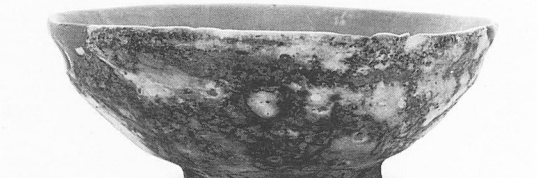
183

186

185

187

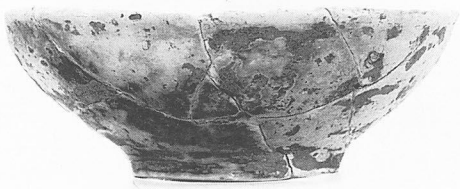

189


188

図版 三八　川畑地区遺物（中世土器）

192

191


193

195

198

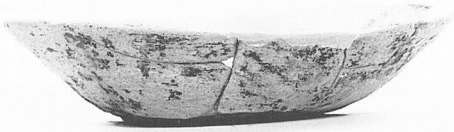
197

199

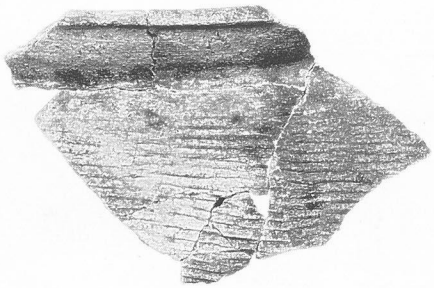
203

207

208


215

221


222

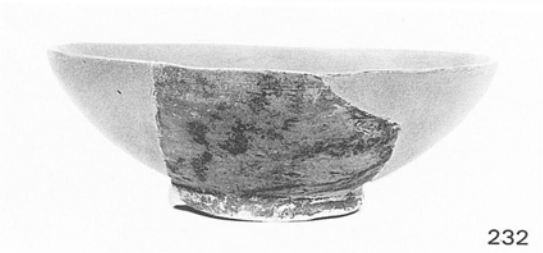
図版 三九　川畑地区遺物（中世土器）

225

226

229

231


232

239

257

243

246

258

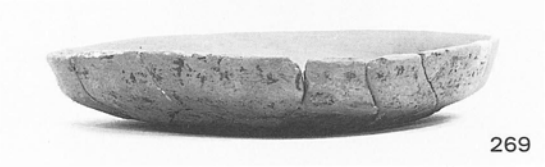
247

250

263

図版 四〇　川畑地区遺物（中世土器）

268


269

270

271

278

272

283

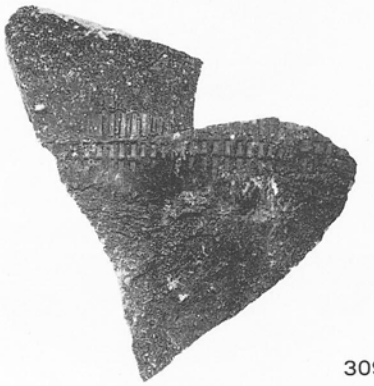
273

294

305

306

308


309

図版 四一　川畑地区遺物（中世土器）

313

314

315

316

317

318

319

321

320

323

324

327

326

329

331

330

図版 四二　川畑地区遺物（中世・近世土器）

332

335

334

337

338

339

340

345

341

343

336

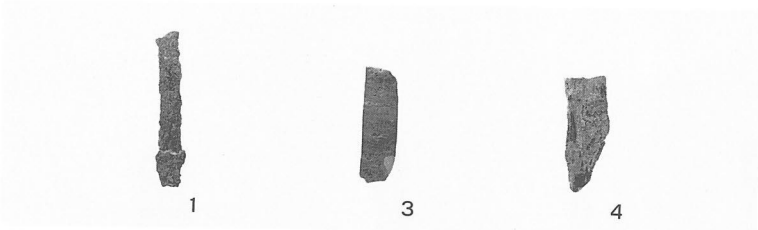
342

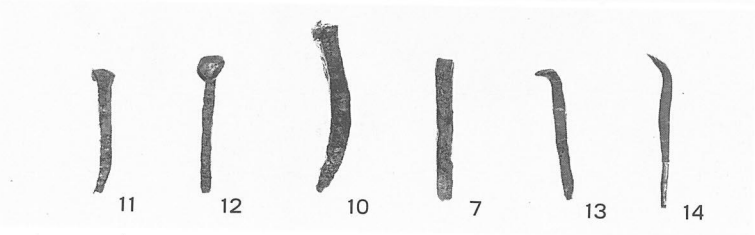
346

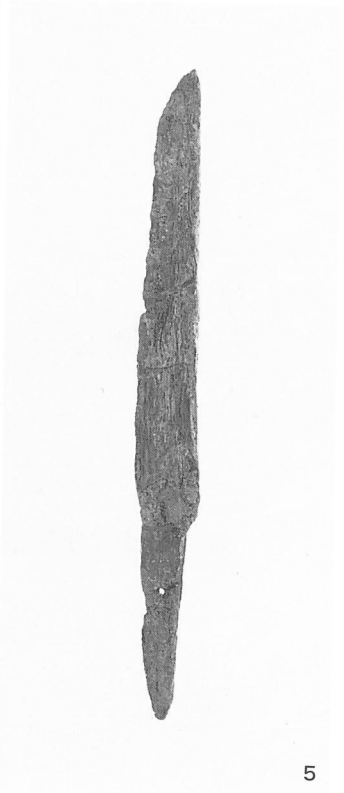
347

348

図版 四三　川畑地区遺物（木製品・金属器）







図版 四四　川畑地区遺物（金属器）

9

22

20

15

16

17

18

19

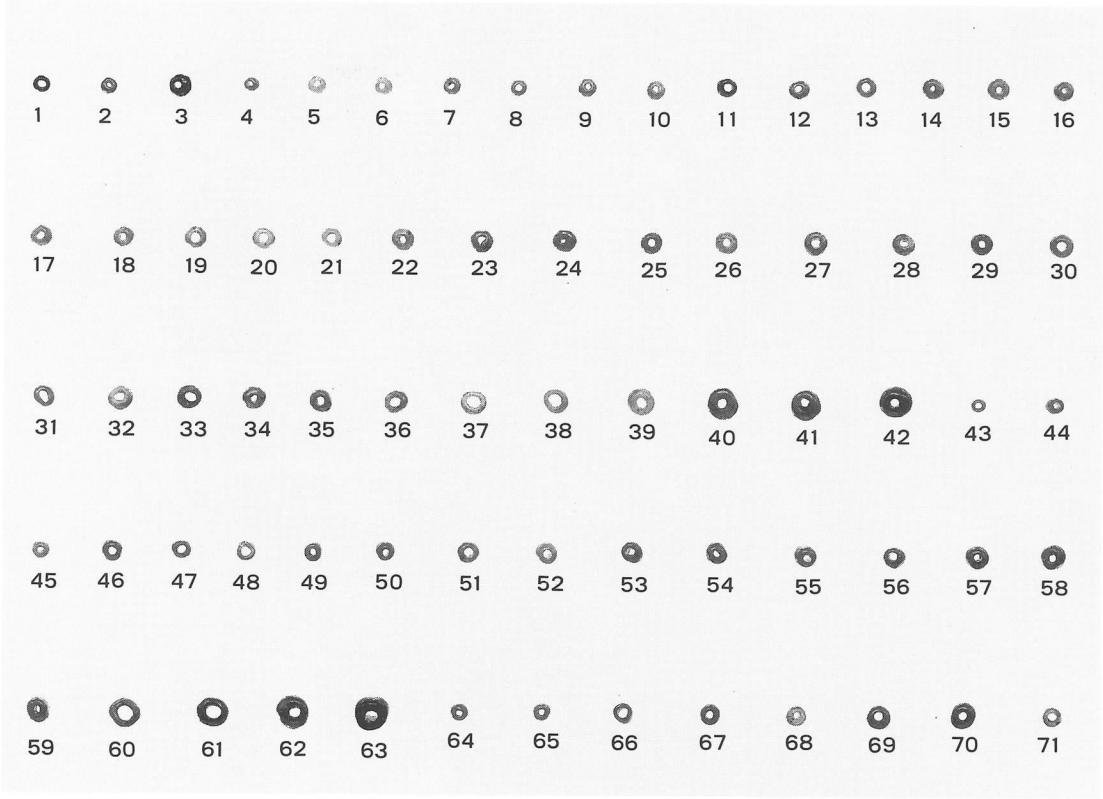
21

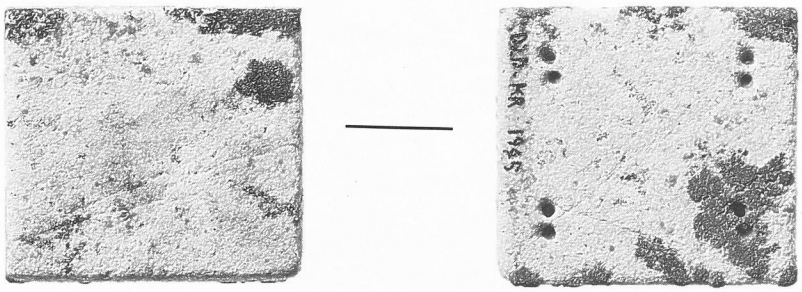
23

24

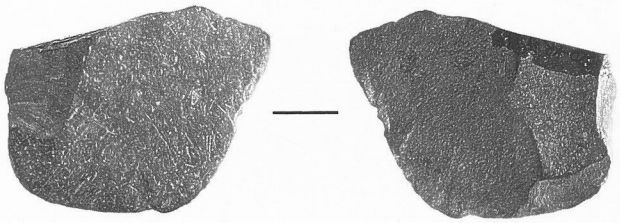
25

図版 四五　川畑地区遺物（ガラス小玉・石製品）

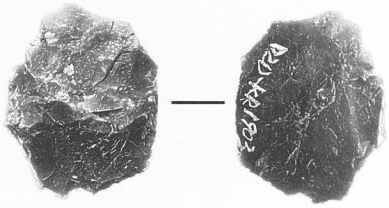




12



8



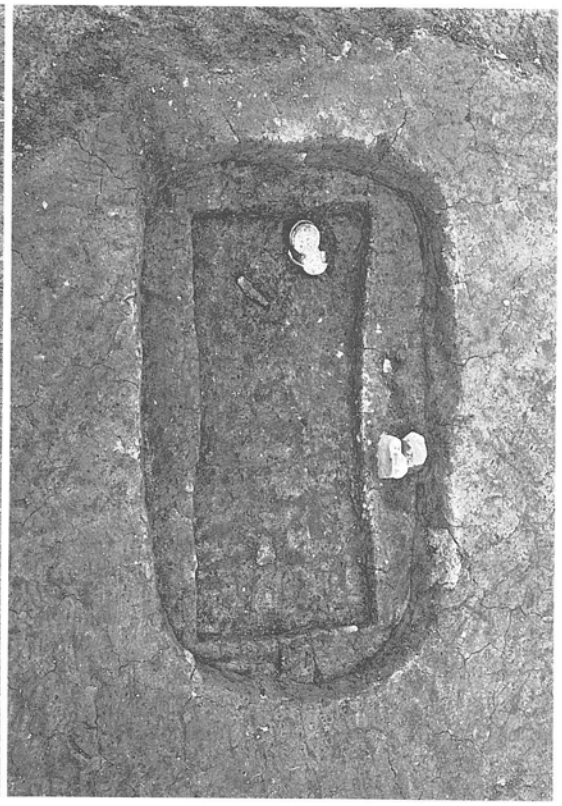
9

図版 四六　蓮町Ⅲ地区遺構

1）調査区西半部全景（東から）

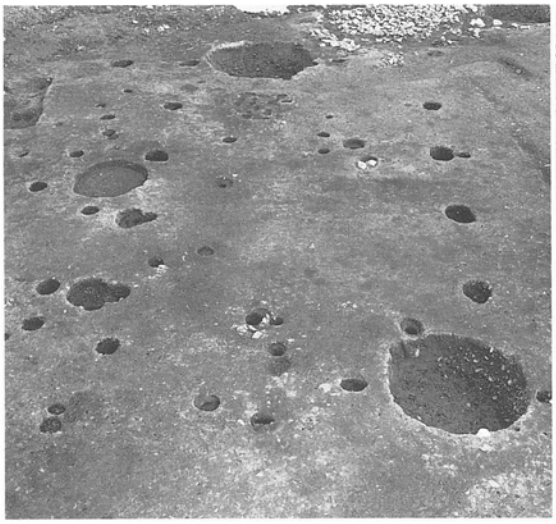
2）調査区東半部全景（北から）

1）土壙１（東から）

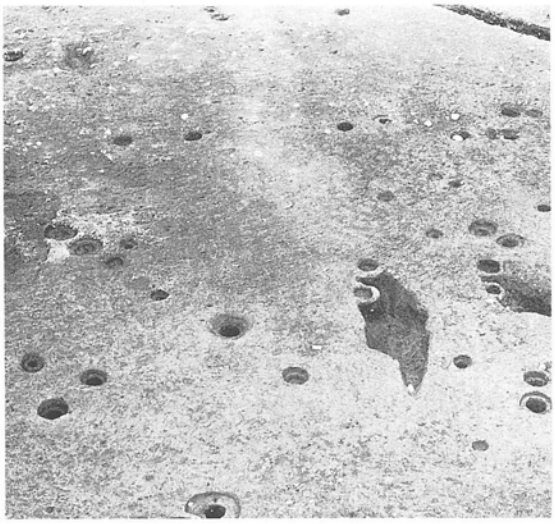


2）土壙２（南から）

3）土壙３（北から）

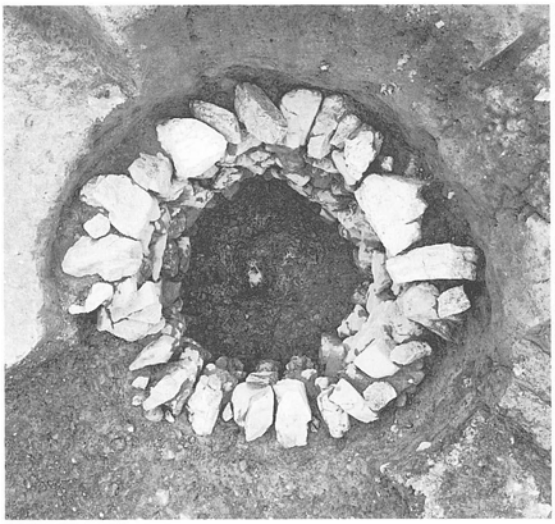


1）掘立柱建物２（西から）



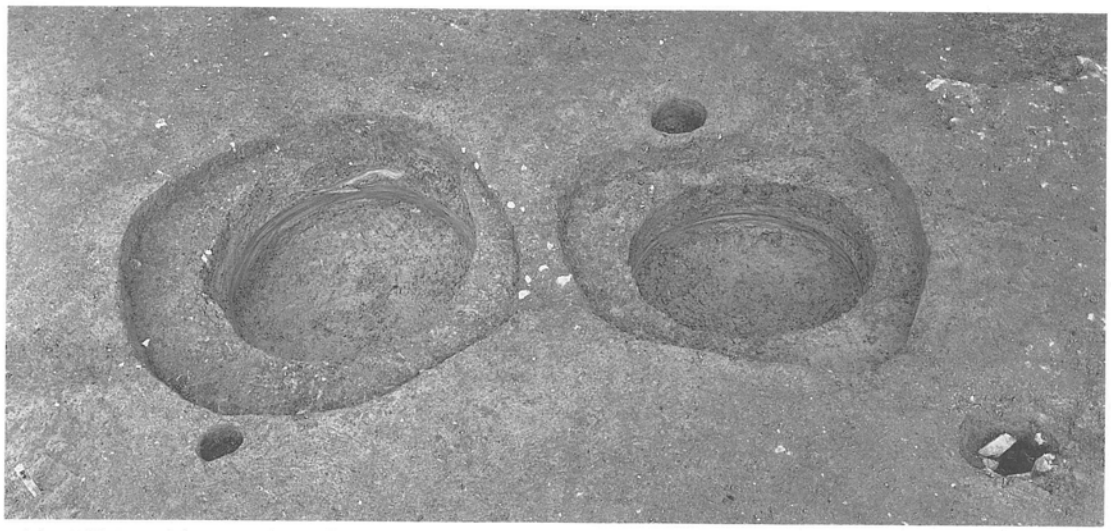
2）掘立柱建物３（西から）

3）掘立柱建物５・６，柵２（北東から）

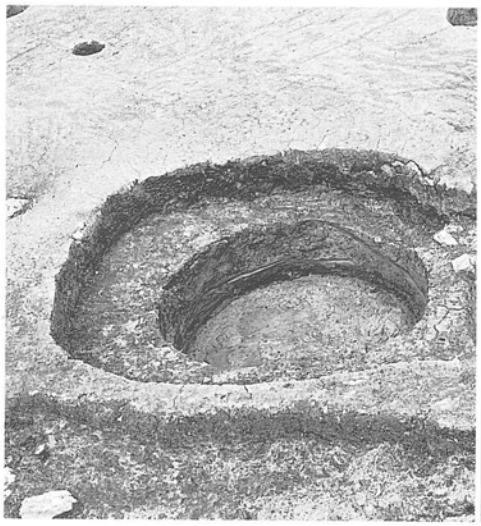


4）井戸１

5）井戸１ 断面（東から）

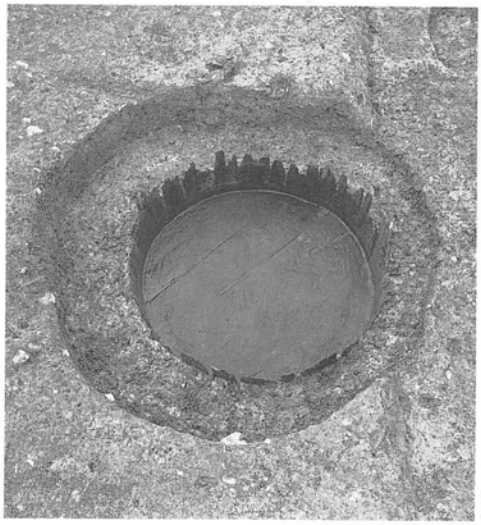


1）埋桶8・9〔右：8，左：9〕（東から）

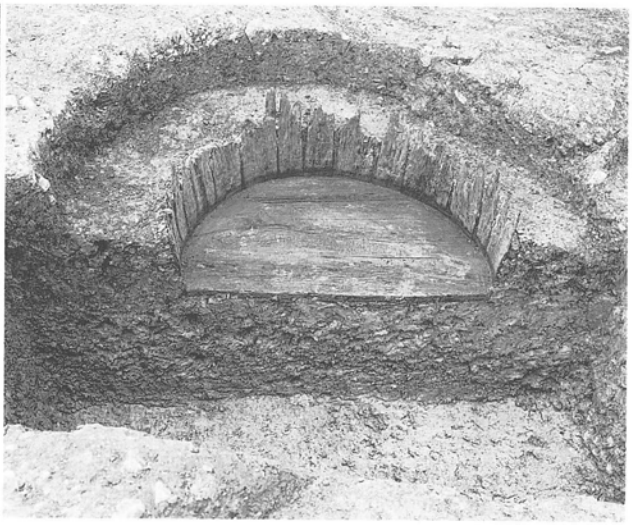


2）埋桶11（西から）

3）埋桶10 断割り断面（東から）



4）埋桶15（南から）

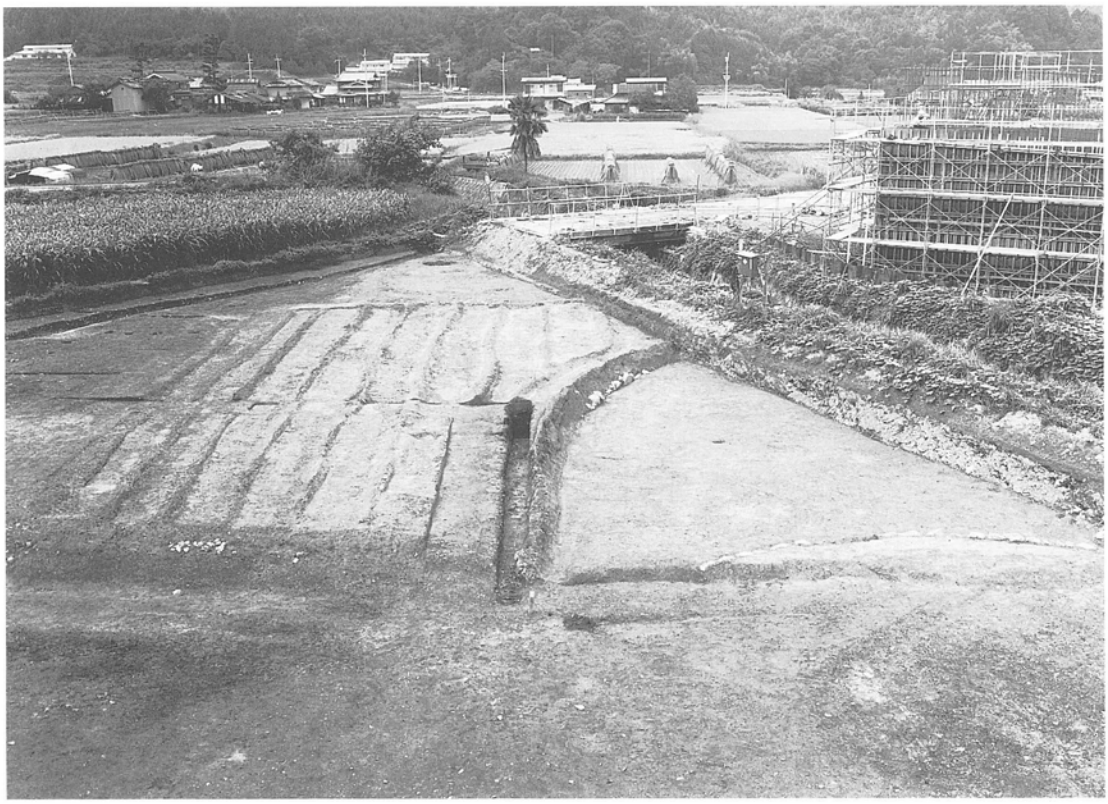


5）埋桶15 断割り断面（南から）

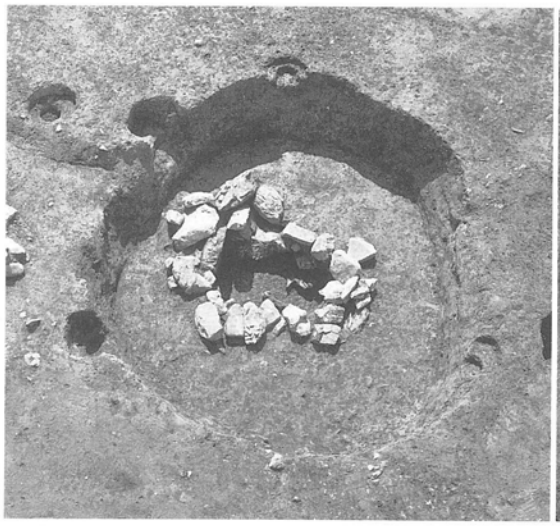
図版五〇　蓮町Ⅲ地区遺構

1）炉2（東から）

2）炉2 焚口（北から）

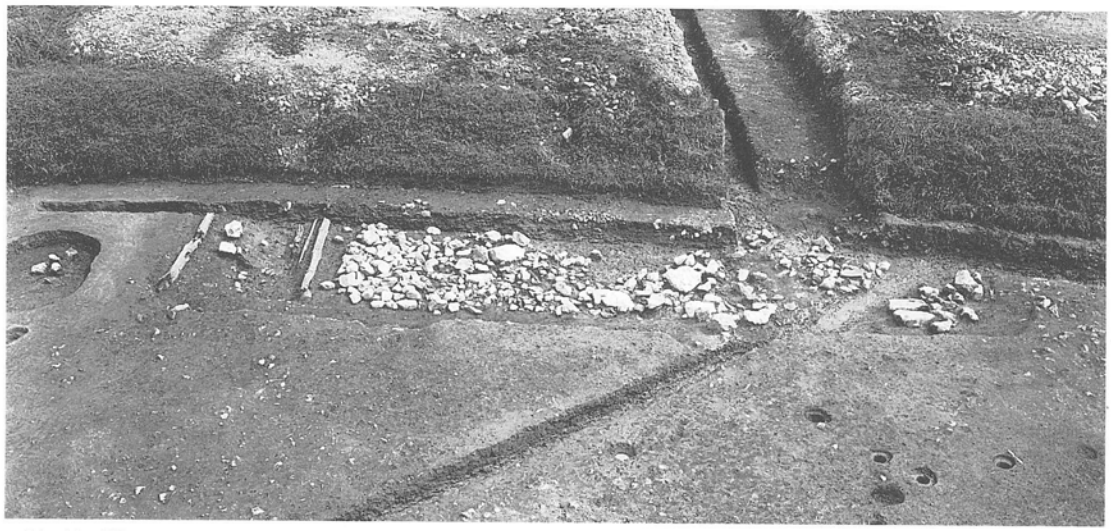


3）畝状遺構（東から）

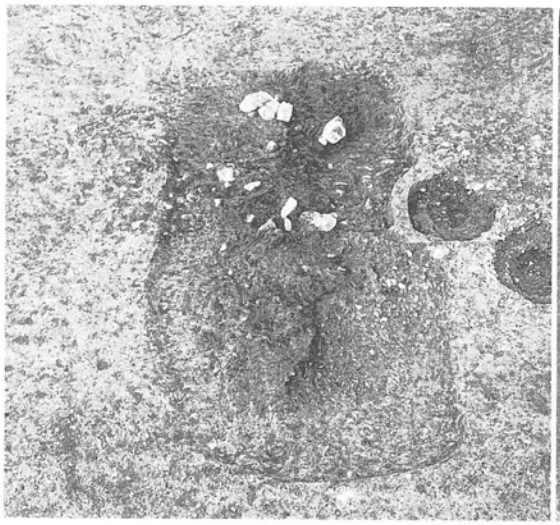


1）井戸２（東から）

2）井戸２ 石積み状況（東から）



3）池（北から）



4）土壙５（西から）

5）土壙10・11〔右：土壙10，左：土壙11〕（北から）

図版五二　蓮町Ⅲ地区遺物（中世・近世Ⅰ期）

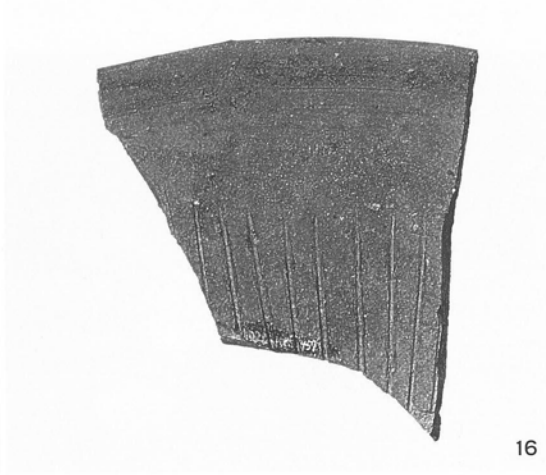
1

3

5

10

15


16

26

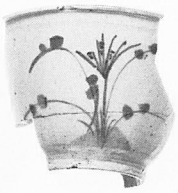
32

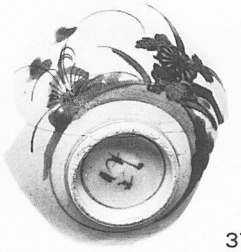
28

35

図版五三　蓮町Ⅲ地区遺物（近世Ⅰ期）

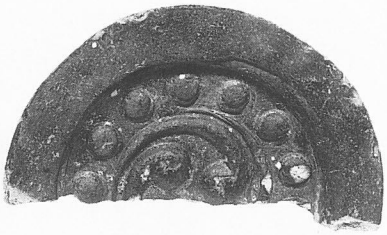
42

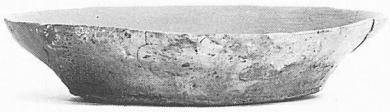

41


37

40

43

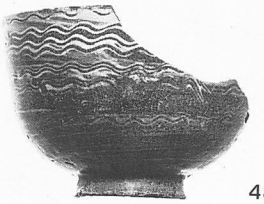

39

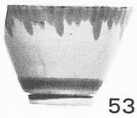

44

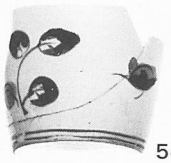
55

45

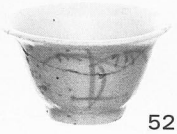
49


48


53


54

50

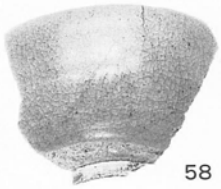

52

51

図版五四　蓮町Ⅲ地区遺物（近世Ⅰ・Ⅱ期）

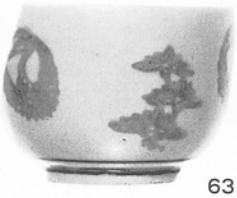
67

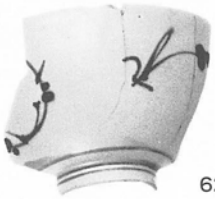
59


58

60

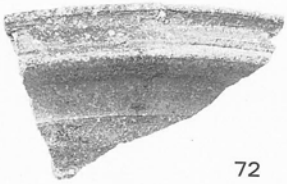
64


63


62

70

71


72

73

74

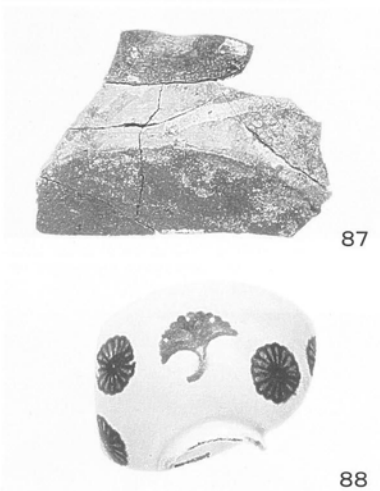
図版五五　蓮町Ⅲ地区遺物（近世Ⅱ期）

84

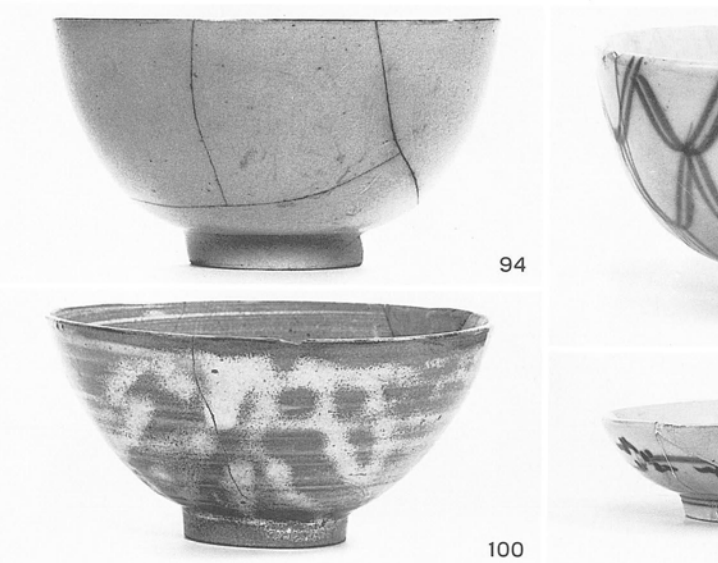
85

86

92


87

88

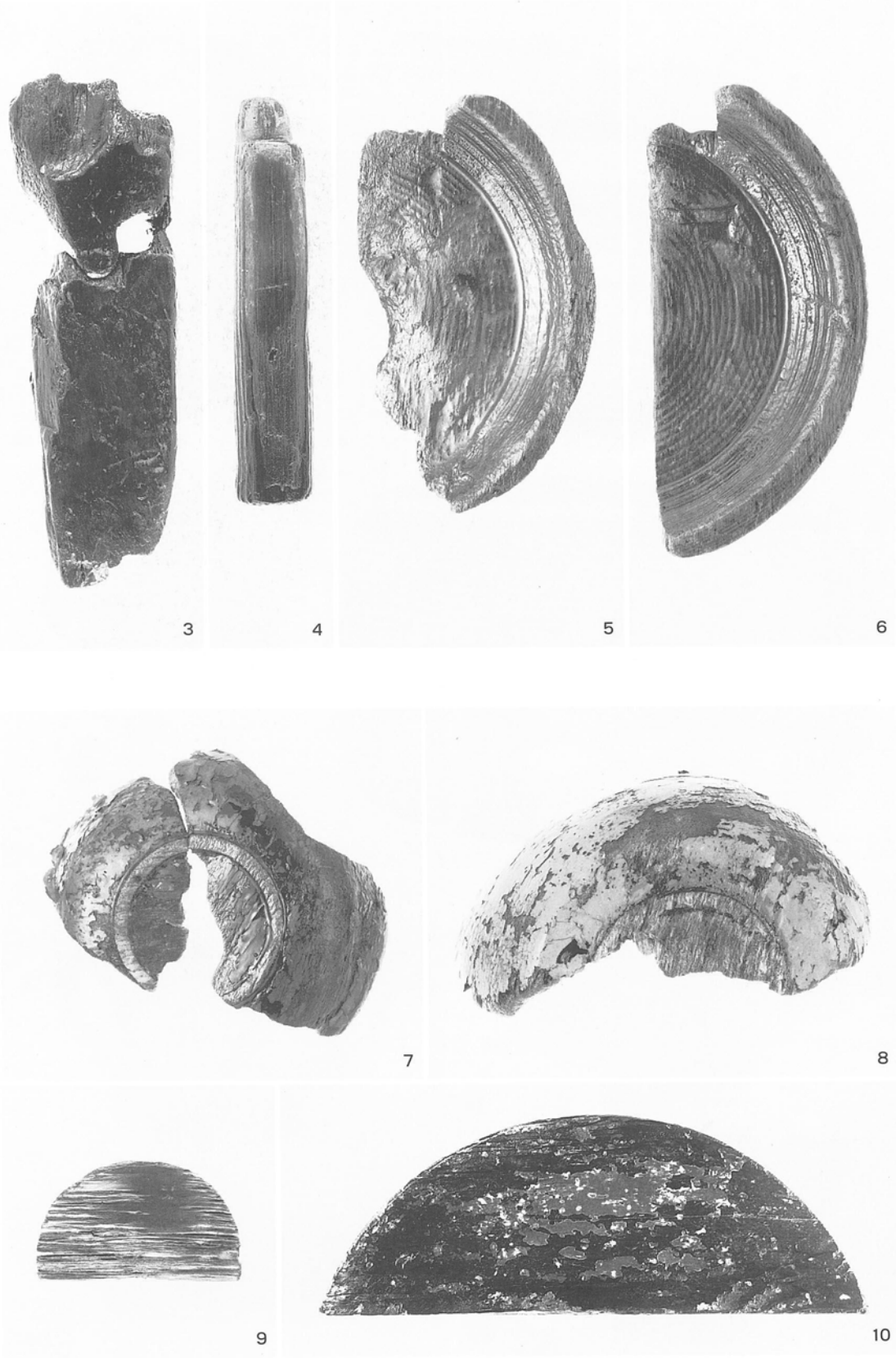

94

100

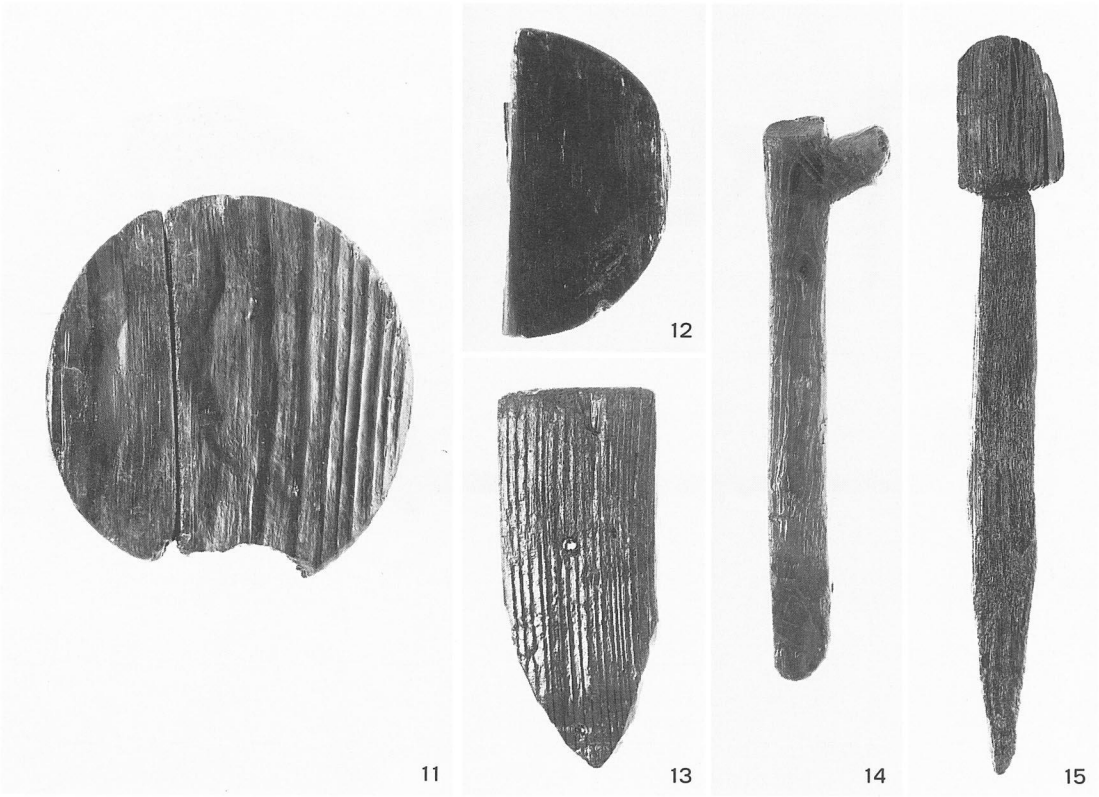
102

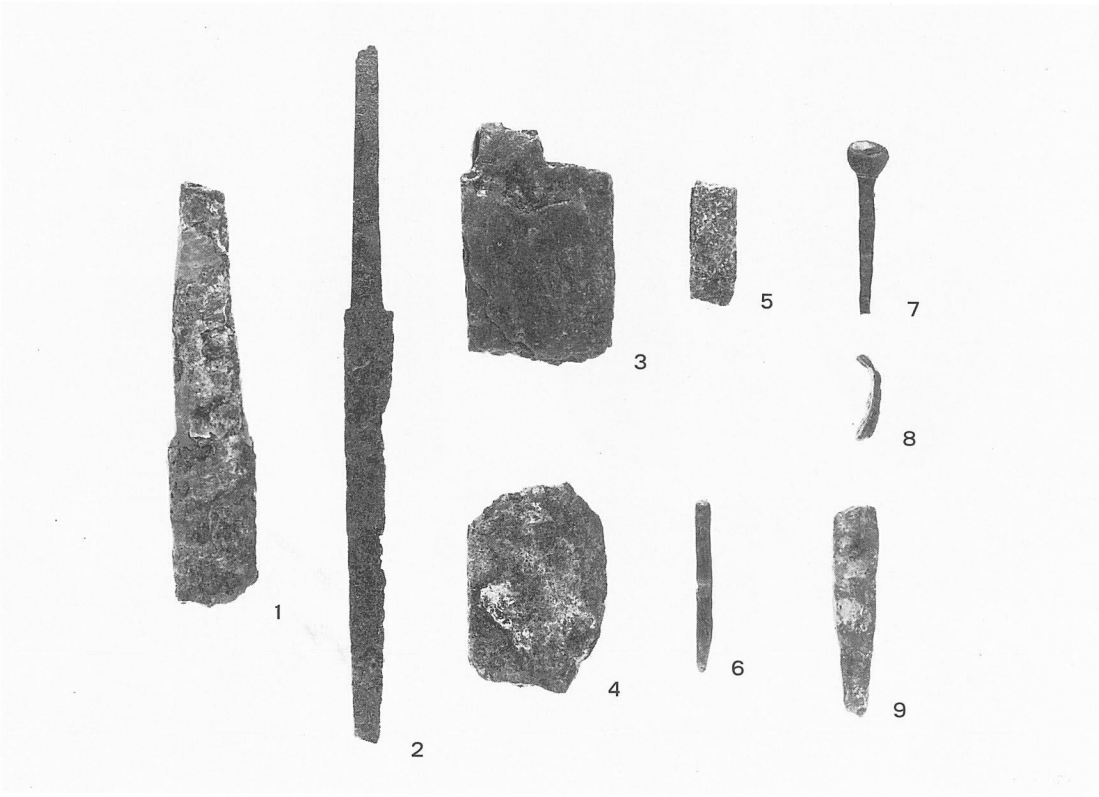
103

図版五六　蓮町Ⅲ地区遺物（木製品）

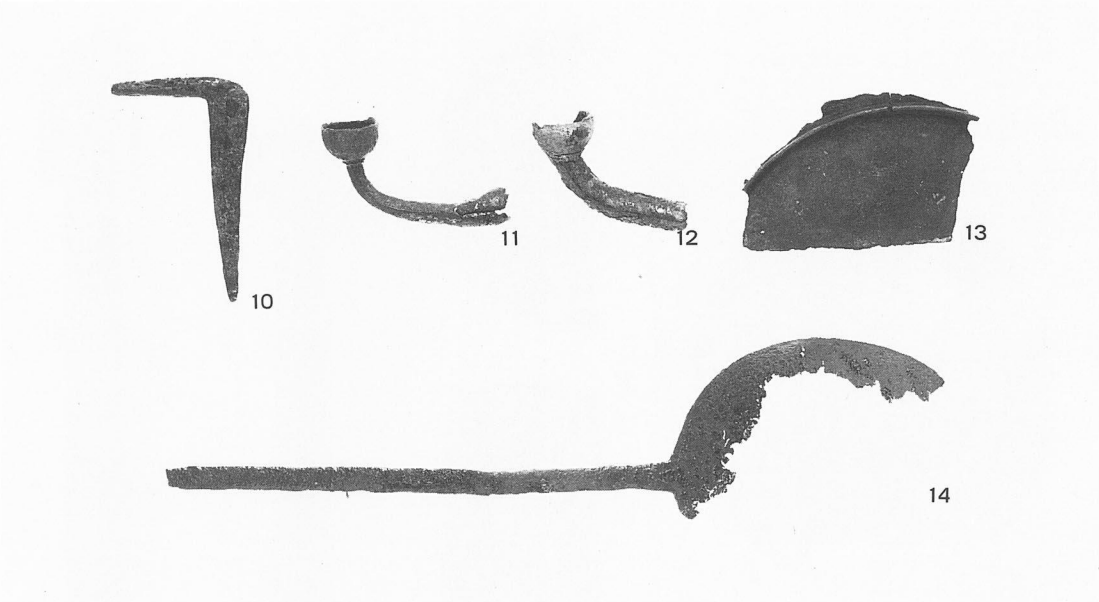


図版 五七　蓮町Ⅲ地区遺物（木製品・金属器）





図版 五八　蓮町Ⅲ地区遺物（金属器・石製品）



兵庫県文化財調査報告書　第122冊

国　領　遺　跡（Ⅱ）

（川畑・蓮町Ⅲ地区の調査）

—近畿自動車道舞鶴線関係

埋蔵文化財調査報告書ⅩⅪ—

平成５年３月　発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2-1-5

発行　兵　庫　県　教　育　委　員　会

〒652 神戸市中央区下山手通5-10-1

印刷　野　崎　印　刷　紙　業　株　式　会　社

〒603 京都市北区下総町54-5